

連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 2 No. 3

第七号

December 2011

対人援助学会

目次		002
執筆者@短信	執筆者全員	003-009
知的障害者の労働現場 007	千葉 晃央	010-013
社会臨床の視界 (7) -男親と父親の「あいだ」にある父性の酒養-	中村 正	014-026
ケアマネの会った家族たち (7) -夫婦-	木村 晃子	027-030
街場の就活論 vol.7 -新卒採用に今、何が起きているのか-	団 遊	031-034
心理療法が始まるまで (7)	藤 信子	035-037
第7回 誌上ひとりワークショップ (後編) -家族援助は街のアパレル-	岡田 隆介	038-043
映画の中の子どもたち 7 「ラビット・ホール」	川崎 二三彦	044-045
子どもと家族と学校と ⑦ (開業カウンセラー日記)	中島 弘美	046-050
蠅螂の斧 社会システム変化への介入 第7回 (20年前の現相)	団 士郎	051-058
学校臨床の新展開 ⑦	浦田 雅夫	059-061
学びの森の住人達 (2) 学校でもない、塾でもない、森・・・	北村 真也	062-080
幼稚園の現場から VII -園での怪我(事故)とその対応-	鶴谷 圭一	081-086
福祉系対人援助職養成の現場から ⑦	西川 友理	087-093
我流子育て支援論 (7)	河岸 由里子	094-100
不妊治療現場の過去・現在・未来 7	荒木 晃子	101-108
対人援助学&心理学の縦横無尽 (4)	サトウ タツヤ	109-114
小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー (6) -アンズちゃんの成長-	尾上 明代	115-124
家族造形法の深度 (7)	早瀬 一男	125-127
旅は道連れ、世は情け 7 (女性LC研究所20年)	村本 邦子	128-131
きもちは言葉をさがしている 「紅茶の時間」とその周辺 第6話	水野 スウ	132-138
やくしまに暮らして 第六章	大野 睦	139-142
お寺の社会性(五) 一生奥坊主のつぶやきー	竹中 尚文	143-146
こころ日記 ぼちぼち (3) (中学生日記)	脇野 千恵	147-150
これからの男性援助を考える 第五回-セックスレスの男性援助-	松本 健輔	151-155
ノーサイド 第三回 被害と被害を超えた論理の構築	中村 周平	156-160
それでも「遍照金剛言う」ことにします (2) (精神障害者福祉)	三野 宏治	161-171
「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い (2)	山本 菜穂子	172-181
新連載 男は痛い! (1)	國友 万裕	182-191
編集後記	編集長&編集員	192-193
目次		



◆ 國友万裕 ◆ 新連載



『マッチョになりたい!? 世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』(彩流社)という本を7月に出しました。初の単著です。おかげさまで、京都新聞、朝日新聞、北海道新聞、西日本新聞にとりあげられて、この種の本としては成功の部類だと言われました。次は何をしようかと考えていたところ、中村先生から、「今度は日本映画をやってみたら」とアドバイスされました。で、日本映画をモチーフにした、ぼくの自叙伝的映画エッセイということでスタートさせることにします。ぼくの人生は、研究材料になりそうな変な人生ですが、ぼくは有名人じゃないので、自伝では誰も読みたがりません。映画とミックスさせれば、多少は読んでくれるかなと思った次第です。どんどん映画とジェンダーについてのことを書きつづっていきたいと思っていますので、FACEBOOK に感想をお知らせください。

◆ 鶴谷圭一 ◆

昭和35年生まれ。両親が幼稚園をやっていたため生まれて50年幼稚園に携わってきております。あ、幼児の時は園児としてね。

マガジン執筆者でもある団遊君に手伝ってもらって、沼津市の幼稚園園長達と「おやこんぼ」という親子の絆を愉快地、強くするプロジェクトを進めている。毎月15日にテレビを消して、親子で何か楽しいことをして楽しみましょうよ!という簡単なプロジェクトだ。子どもがテレビのスイッチを消したくなるストーリーを考え、沼津市内の23幼稚園で4年間続けてきた。

その成果も少し実って、来年4月からは静岡県私立幼稚園振興協会も加わって静岡県下の各私立幼稚園でも「おやこんぼ」が始まる。沼津市約3,400人の園児から一挙に62,000人に広がる!といいんだけど、なかなかやってくれない園もあるんだよね。おやこんぼが全国に広がるのが夢です。ぜひ一度のそいてみてください。

〜い! ♪ おやこんぼ ♪

<http://www.oyacombo.net/>

◆ 河岸由里子 ◆ (臨床心理士)

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰
先日、対人援助学会で京都に行った。その折、二人の友人と会う予定でいた。一人は学生時代から35年以上の付き合い、もう一人は5年くらいの付き合いで4か月前に結婚して京都に行ったばかりだった。行く前に連絡をと思って、まず、新婚の彼女に電話をした。中々つながらないと思っていたら、彼女はもう北海道に戻っていた。何があったのか? 「夫が豹変する。怒ると乱暴になって、酷いことを言ったり、腕を強く掴んだり。でも翌日には土下座して泣いて謝る。だんだん耐えられなくなって帰ってきた。」とのこと。典型的DVタイプ。まだ殴ってはいないが時間の問題。せっかく新しい家族になったのにたった4か月で壊れてしまった。

さて、もう一人の友人は最近やっと離婚が成立したところ。結婚して30年以上の

夫婦だが、夫の浮気等が原因。二人の子どもは結婚したので、親権云々は問題なかったが、金銭面では揉めに揉めた。やっとスッキリしたと言っていた彼女だった。30年くらい前に訪ねて以来、久しぶりに家を訪ねた。昔話や、子どもたちの事、離婚の話など、一通り語った後で、彼女がポツンと言。「一人で居る事は楽やけど、東北の震災以来、テレビで家族の絆の話が度々流れるようになり、それを見るときに辛い。」

震災で無理に家族を壊された人々。家族は無事だったが仮設住宅の薄い壁では夫婦喧嘩も出来ず鬱積した結果、離婚に至ることも多いと聞く。

壊れる家族、壊れた家族、壊された家族、何の落ち度があったのか? 家族を作り、家族を続けることの難しさを改めて感じた。

◆ 中村周平 ◆

先日、立命館大学でおこなわれた対人援助学会に行ってきた。『理事会企画ワークショップ「対人援助学」マガジンの可能性』にも参加させていただき、他の執筆者の方々と濃密なお話をさせていただきました。在学中に日々感じていたことでもありましたが、いろんな方々との出会いは、経験不足の自身にとって「他者の視点・考え」を学ばせていただく貴重な機会になります。自分だけでは絶対に見えて来なかったモヤモヤしていたことが、少しずつ晴れていくような。団先生、このようなワークショップを企画して下さい、本当にありがとうございました。今後も積極的に参加させていただければと思っています。

◆ 北村 真也 ◆

私塾「アウラ学びの森」(<http://tiseikan.com>)
代表。人間科学修士。

最近、コーヒーにハマりだしています。たまたま入ったコーヒー豆の専門店を試飲したコーヒーの味に魅かれ、思わずそのお店で焙煎した豆を買いました。そして1年の2/3はいい豆を求めて世界中を飛び回っているという社長のこだわりにもまた感動し、これまたフレンチプレス式の

コーヒーマーカーと臼式の電動ミルを手に入れ、いよいよ私もカフェ・アディクションの仲間入りです。

◆村本邦子◆

夏の屋久島旅行やローマ出張あたりまでご機嫌な毎日を送っていましたが、10月に足を挫いて1月近くも松葉杖生活をしていました。正直なところ、足より気持ちの方が挫けてしまいましたが、これも老いのレッスンと、秘かに松葉杖ファッションを楽しみ(誰も気づかなかったと思うけど)、左足ペダルでピアノのコンサートにも挑戦しました。ようやく少しずつ回復ですが、靱帯も足も弱っているので癖になりやすいとのこと、時々足を挫いてはぶり返しています。こうなると、これまで当たり前だった二足歩行がすごいことだと思えてきますね。再びジョギングできる日が来るのかしら!?

◆荒木晃子◆

生殖医療施設&精神科診療所心理士。立命館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員。

身辺整理を始めた。とくに人生の終末期を意識してのことではない。例えるなら、店じまいではなく、棚卸といったところだ。

この秋、初めて手掛けた「不妊をテーマにした家族シンポジウム」で(自分なりに)大役を果たした直後、初めてのバーンアウトを経験する。援助者によくある、燃え尽き症候群という現象だ。おかげで、ここぞとばかりに、長い間あと回しにしていた治療を終え、しばらく長期休養をとる機会に恵まれた。一瞬、活動するエネルギーは枯渇したものの、どうやら、これが、人生をリセットする絶好のチャンスとなったらしい。そういえば、これまでも、ピンチをチャンスに変えた事象を幾度か経験したことがある。もしかして、私は、生まれながらのサバイバーなのかもしれない。そう考えると、なんだか元気になる。これが私流、「自分を元気にする自己暗示法」かも。

◆尾上明代◆

この秋、京都で2シリーズ目の「ドラマセラピー連続セッション」を行いました。今

回は、「心の声にしたがって Change! ～変わることは怖くない～」というテーマで、対象は一般の方です。

異なった可能性・さまざまなオルタナティブを提案し演じあう実験場を創ることで、変えたいと思っていることを「現実的に」変える力を引き出したり、変わることそのもののへの恐怖心を乗り越えることが目標でした。私たちの中にある共通の思い込み、ワンパターンの解釈やそれに伴う解決方法、ひいては、私たちの人生を制約する「ドミナント・ストーリー」に、多くのアイデアを使って新しい光を当てるワークをしました。ドラマの中で「実際に」いつもと違う行動することで、内面も影響を受けます。その変化・変容こそが「現実での自分」を変容させていく力になっていくのです。変化がどんどん参加者に現れるのを見ることができ、嬉しくてほっとしました。

◆木村晃子◆当別町ケアマネジャー

～三角おにぎり～

午前中の訪問がやや長引いて時計は12時近くになっていた。その日は振替休日という小学生の恵美ちゃんが、自分の部屋から居間に入ってきた。「こんにちは」と小さな声であいさつしてくれ、ダイニングテーブルに座ると、布巾をはぐっておにぎりをつまんだ。「あ、今日はさんかくだ!」恵美ちゃんの顔がほころんでお母さんの方に向けられた。お母さんの里子さんは、母親である良子さんの介護者である長女だ。

里子さんは、少し恥ずかしげにケアマネジャーに話をした。「実は、私が子供のころ、母が握るおにぎりはいつも三角だったんです。私は、ずっと母に反抗していたところがあって、結婚して子供を産んでも、母に育てられたようには、子供を育てたくなかったんです。私の小さな抵抗はおにぎりの形にも現れて、私は普段は丸いおにぎりしか握らないんです。でも恵美は三角おにぎりを喜ぶ。お母さん三角上手、って。だから、時々、三角おにぎりを握るんです。私が母を受け入れられなくて握らない三角おにぎりを恵美が喜んで、私も上手に三角ができる。すこし皮肉です

ね。」そうって笑った。恵美ちゃんの食べている三角おにぎりはとてもきれいな三角だ。葛藤を抱えながら母親を介護する里子さん、上手に握る三角おにぎりを誇っているようにもみえる。親子って…

◆団遊◆

今号からオリジナルの挿絵を連載の合間に入れることにしました。絵を描いているのは「高岡みなみ」と言います。私が代表をつとめるアソブロックという会社でアシスタントをしている女の子です。彼女は早稲田大学を卒業後、新卒で私のアシスタントになりました。入社の手続きは「なぜ働くのかかわからない」と面接で質問してきたことでした。真剣にそのことについて考えていました。その後、私が「他社の内定を3つ取ったらうちも内定を出すから4つの中から行きたい会社に入社せよ」と言うと、「なぜ働くのか」に対しての答えが曖昧なまま、それでも活動をつづけ内定をもらってきました。行動力もあるのだとわかりました。「考える力と動く力」この二つが揃っていればポテンシャルは十分だと思いました。それから4年が経ちました。

(団遊 www.danasobu.com / twitter.com/danasobu)

◆藤 信子◆

夏に London の 15th European Symposium Group Analysis に参加して、このごろは精神療法(主として精神分析の流れの)は、認知行動療法や行動療法などに押されていると聞いていたが、少なくとも Group Analysis(以下 GA)はまだ元気なのではないか、と思った。もっとも昼食の時に聞いた英国のグループ・アナリストの話では、CBT に押されている、ということであったが、44 カ国、33 言語の 500 名の人々が、朝のキノートレクチャーから、夕方の大グループまで熱心に、参加するのである。これまでの数少ない体験ではあるが、国際学会では夕方になると頭が英語でぎっしりという感じになって、時々観光に出かけたりすることがあったが、今回はそんな事にもならず、毎日せっせと参加した。GA という学派的集まり

なのだな、とあらためて感じながら、心理療法を学ぶ場―協会や研究所―についても考えた。理論と体験を重ねながら、自分の心理療法を見つけていくこと、という場面はまだ日本では少ない(この頃少なくなったのか)と感じる。自分の心理療法という姿勢を持つことについて考えた時でもあった。私は今中南米やアフリカにおける心的外傷へのアプローチに関心があるので、Cultures, Conflict and Creativityという今回のテーマも良かったのだと思う。

◆水野スウ◆

週いちオープンハウス「紅茶の時間」家主。石川県在住

あいかわらずはやっていない毎週のふつつ紅茶と、いろんなところへお話にでかける出前紅茶との二本立てで、あっという間に日々が過ぎます。マガジンの方がたがどんなお顔、表情、お声、話し方なのか、なまで拝見したいなあと思いつつ、みなさまが集う年次大会には予定が合わず、いまだその願いがかなわないでいます。

「紅茶の時間」は丸 28 年が経ちました。今回は、その周辺にあったワークショップ自主勉強会のことを書いてみました。毎回ですが、書きながら、新しい発見をいくつもします。まさしく題名通りに、「きもちは、言葉をさがしている」です。ここ 10 数年のいろんなかたちの学びが、あらたまって文章にすることで、私の中で再統合されていく感じが、とても新鮮です。

先日、あるパン屋さんの店内カフェに、4 時間という長丁場の、お話とワークショップの出前に行きました。お店はオープンしたままなので、ワークショップ中、ふつうにパンを買いに来るお客さんがいて、途中からいつのまに参加してる人がいて、早めに帰る人がいて、パン屋さん自身は、お客さんと会話し、レジ越しに話を聞き、ワークショップにも加わり、という感じで、まるでわが家のふつつ紅茶みたいな、ゆるやかにひとの動きがありながらの、初のパン屋さん紅茶の時間。

こんなふだん着感覚の出前ワークショップって、なおいいな。ワークショップもコミュニケーションの練習も、特別なことじゃな

くて日常的なこと、と思うひとがもっとふえるといいな、そう思わせてくれる場の空気でした。

それにしても、パンとお茶付きで参加費 500 円、って安すぎませんか？お店のもうけが何もなく、と心配したら、「いえいえ、うちはパン屋ですから、そっちのお代はいただきます。それにこんな集まりをする、いつもみなさん、お帰りの際、パンをたくさん買っていただきますからね」ですって。かっこいい！

◆山本 菜穂子◆

私の中に、先輩、上司、同僚、後輩からのたくさんのことばが生きていると感じる。本編の中には、団さんからのことばがたくさん出てくる。まるで、「団教」の狂信者(笑)の様で不気味だと感じる方もあるかもしれない。なぜ、青森県の県職員と団さんがつながっているのかと不思議に思われる向きもあるかもしれない。

青森県弘前市を会場に年 2 回、団先生のワークショップを有志で自主開催するようになって 10 年を超えた。初めは児童相談所の職員中心で、教育関係者や市町村、保健師などに声をかけた。(ね、瀧本さん♪)練習のため家族にお願いし、交代で家族面接をビデオにとって自主勉強会を開きつつ団先生を迎える。そんながむしやらな時期を超え、徐々に家族の見立て方が肌に馴染みはじめ、ジェノグラム面接や家族描画などの技法も手に入れてきた。その間、仲間も入れ替わりながら、それでも新旧コンスタントに 20 名前後の参加者を得て継続している。参加者が減ってペイできなくなったら止めようというのが最初の約束。でも、今秋も、25 名の参加者があった。児童相談所の職員は 3 分の 1。教育関係、高齢者福祉、女性相談、医療関係などの地域の様々な対人援助関係者が名簿に並ぶ。職種も年齢も経験年数も様々だけれど、同じ時を共有し、同じ言語を持ってつながる。いつもの顔と新しい顔。研修会場に流れる前向きで和やかな空気。緩やかに、でも確実に 10 年前にはなかった繋がりが育っているのだと感じる。そんなことがちょっと素敵だと思える。

そんな事情で、団さんとつながっている。年 2 回確実に話をするチャンスがある。そこで私は、全国の児童福祉の事情や青森県の位置を知る機会を得てきた。その時々には琴線に触れることばがあった。時に自分のあり方を見直させ、時に意欲を奮い立たせ。

さて、そうやって得てきた恩恵を私はどうやって後輩に伝えていくことができるだろう。私の中に生きてきたたくさんのことばを、私の体験をぐらせて私の実感と共に、次に渡すことを考える、そんな立場(年齢?)になってきたのかと最近思う。

◆脇野千恵◆

今、職場は子どもをめぐる大変な問題に取り組んでいます。まさかと思っていたことが、簡単に起こってしまったことに、こんなこともあるものなんだなとつくづく思います。

時間外労働は、ひと月一人平均 101 時間となりました。私自身、職場は早々に立ち去る方なのですが、さすがにそれでもできず、ゆっくり眠れないという疲労感を抱えてしまいました。授業という大事な仕事をこなしながらの対応。時間がゆっくりゆっくりとしか進みません。誰かがもうダメ！と手を挙げれば、何かが変わるかもしれませんが。そんな人は今のところいません。淡々と仕事をこなすことで、目を背けようとしているのでしょうか。この問題については、まだまだ解決には先がみえません。誰の責任？という話になると、本当に永遠に出口が見えないような気がします。

友人たちが、色々心配してくれます。今はいまよく伝えられませんが、このことは、いつかどこかで、話すことができればと思っています。

◆岡田隆介◆

20 年以上前にはじまった「児童相談所とその近接領域における家族援助・家族療法研修会」を、来年 2 月 4、5 日に広島安芸グランドホテルで行います。(詳しくは、<http://kazoku.sitemix.jp/>)。これまで 4 回主催・共催をしましたが、それらとは違って今回は当市児相の若手が手をあげて

実現しました。彼らにそんな余力があったことに驚き、そして感激しました。

こんなときは少し離れて見守るべきだと自分に言い聞かせてはいたのですが、案の定、突っ走ってしまいました。また、いくつかの若い芽を摘んでしまったかもしれません。とはいえ、この国はまもなくこんなめんどくさい年寄りだらけになるのです。嫌がらず、いいライバルになりましょう。

◆竹中尚文◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職

学生時代、英会話を習っていた。毎週、自己紹介をするのが課題だった。3回も話すと、ネタがなくなった。それだけ自分を語る言葉を持ち合わせていなかった。今、多忙である。自分を見失っている。私は、忙しいときに料理をするとすっきりする。先日、冷凍庫の中でパンチェッタを見つけた。久しぶりに、カルボナーラを作った。タイミングがすべてである。久しぶりのカルボナーラは失敗だった。3日間作り続けて、ようやく3回目になると気分がいい料理ができた。

◆川崎二三彦◆

物体がいきなり、A地点からB地点に動く。「ええっ、どうして？」たったそれだけのことで驚いたのは、果たしていつの頃だったろうか。

私が勤務する子どもの虹情報研修センターでは、毎日のように専門研修が行われていて、それはたくさんの講師がやって来る。そして今や、ほとんどの人がパワーポイントを使用するので、私は専門的な内容にはついていけずとも、パワーポイントで映し出されるスライドには、漠然とながら目を向けていたのである。すると、講師の中にはスライド作成に結構凝っている人もあって、「へえっ」と思うようなこともある。先に述べた物体の移動もその一つだ。

だから、パワーポイントが出回り始めた頃は「こんなもの、子ども騙しに過ぎない」と馬鹿にしていたのに、気づいてみると、私もいつの間にか見よう見まねで使い始め、今ではスライド上でジェノグラムを作

図するのが私の自慢になった。男女が交際を始めて結婚し、子どもが生まれ、離婚し、再婚し、同居家族が変化する。こんな過程をを時系列で次々にスライド上で動かしていくと、単に紙の上に図示されたものを見るのとは比べて、家族の動向が格段によくわかる。それまでは気づかなかったことを、スライドに描いていく中で発見し、驚かされたこともある。

ただし、この作業の難点は時間がかかること。スライド1枚1枚をにらみ、なんだかんだと手を加えていくと、いつのまにか膨大な時間を費消している。特に11月は厚生労働省が決めた児童虐待防止推進月間。各地で啓発事業が催され、私もそれらのいくつかに協力することになってパワーポイント資料の作成に忙殺されたため、とにかく時間を奪われてしまった。おかげで、本誌の連載原稿もメ切に間に合わず、2日と7時間遅れてやっと編集長に届けたのであった。

「なんだ、要するに原稿が書けなかったことの言い訳じゃないか」「えっ、バレてしまいました？」すみません、そのとおりでした。ここに伏してお詫びいたします。

◆早樫一男◆

これまで続けていたことは継続しつつ、4月からの新しい環境での仕事や頼まれごとをこなしていくうちに、あっという間に一年が終わります。新しい年も、もちろん、家族と関わってきます。家族にまつわる出来事は実に多様で、奥が深いものですから…。

◆西川友里◆

先日開催された対人援助学会に参加させていただきました。

マガジンのワークショップでは、同じグループになった執筆者の方に「すみません、〇〇さんの書いてらっしゃるもの、しっかり覚えてないんです…」と恐縮しつつ言うと、「あ〜、全部一気には読めませんよね」「1つ1つが濃い上に、めっちゃボリュームありますもん」「ちょっとずつ、つまみ食いみたいに読んで、全部読みきる頃に次号発行！って感じですよね」とおっしゃ

っていました。…ですよねえ！やっぱりみんなそうなんだ！と思いました。（いや、ただ単にフォローしていただいただけかもしれませんが（`・`））編集長の団先生いわく、マガジンはいずれ電話帳サイズの分厚さを目指すとのこと。ますます全体が把握できなくなります（笑）

基調講演の秦政氏のお話を聞いて、面白いなあと思う反面、後半に行くにつれてじわじわと不安が…「…ヤバい。これ、今書いてる（今号分の）マガジン原稿と内容カブってるやん。」帰ってから慌てて見直しました。

今回の内容については、自分なりの答えが見つかりつつあります。もうちょっと整理して、いずれははっきりとした形にしたいと考えています。

◆中島弘美◆

大阪にあるCONカウンセリングオフィス
中島です。

しばらくオフィスでの勉強会を開講していませんでしたが、ご要望の多かった家族支援講座を2012年から再開します。

対象者は現場で支援にかかわっている人限定です。まずは、これまで講座受講歴のある方を優先させていただき、これまでに温めていた内容をお伝えします。いわばバージョンアップ講座です。

春からは入門基礎コースも合わせて開講予定です。

このところ、現場実践者を対象とする研修講座をお引き受けしていると、私からみなさんに伝えたいことが多くあるにもかかわらず、研修時間だけでは消化できません、もっと時間があればさらにポイントを伝えられるのにと、もどかしい思いをしています。その未消化の内容をぜひ勉強会で伝えたいと思っています。

◆千葉晃央◆

秋田生まれの大阪育ちで京都に住む私はこれまで、関西から秋田へ何度移動しただろう。

移動手段としては、寝台特急「日本海」（大阪―青森間運行）が一番安い。先日乗車した、その日に廃止の方向であるこ

とが新聞で報道された。最大1日4本あった日本海も今は1本に減ってきてはいた。秋田の新聞ではカラー写真を交えての紙面であった。乗車中の車内でも、そんなタイムリーな日に乗り合わせた乗客たちなので、この話題もきこえてきて、青森では廃止反対運動の動きがあるそう。東北地方から関西に来るには、飛行機、新幹線乗継なら、この「日本海」よりも1万円以上高い。東北（山形、秋田、青森たぶん）では学生の修学旅行で京都に来る時に、広く利用されてきた。大阪生まれで、青森でリンゴ園をしている方、秋田から妹がいる京都へ行く方と、なかなか会わない東北にゆかりのある関西人、関西にゆかりのある東北人と出会えて、独特の乗客の一体感が旅の道中に出てくるのが忘れられない。関西弁と東北弁、もしくはそれを併用する方言が寝台のカーテン越しにきこえてくる電車の旅も今回最後かとも思っている車中であつた。

今回途中、天候の影響で、「日本海」に遅れが出ると、他のダイヤが乱れないようにするため、何度も「サンダーバード」等に線路を譲った。はやさ重視、利便性重視、快適性重視の流れは、電車も、対人援助の業界も一緒かと思った。あなたはどの列車に乗りますか？日常使いの普通列車に私は乗りますね。時間もそこそこ、揺れも少々ございます。

◆ 三野 宏治 ◆

初めての体験1

パッチ、ステテコ、タイツ。これらの衣類を拒否し続けてきました。「そんなものはオジサンのアイテムだ」などと思っていました。この原稿を書いているのは11月20日なのですが、秋田では雪が降りだしています。そして、ついに私はパッチを履くことを決意し、先日パッチユーザーになったことを告白します。まあ、随分前から年齢的にも見た目にも間違いなくオジサンであつたのですが、精神的にもそれらを受容できました。ネットで安く見つけて購入したのですが、そこには「メンズレギンス」と書いてありました。どう名付けようとパッチはパッチです。

初めての体験2

近所に新しい温泉施設が出来ました。これまでも車で10-15分も走ればいくつも温泉がありましたが見物が増えて行ってきました。400円と若干高いので（多くは250-300円）元を取ろうと長く湯につかったところのぼせてしまいました。脱衣所でひっくり返って、冷汗は出てくるは体は冷めるは大変でした。やっとの思いで帰り、汗を流し冷えた体を温めるために風呂に入りました。温泉から帰ってきてまず風呂に入る。そんな新しいライフスタイルを実践しています。

初めての体験3

家の裏は畑です。そこに野生キジがいます。毎朝、大きな声で鳴きます。引越してきた頃は何の音かわかりませんでした。ある日ツガイで飛び立つ姿を見ました。キジを見たその日にゼミがあり、学生にキジのことを話しましたが少し呆れた調子で「普通にいますよ」と言われました。それどころか「カモシカとかもいますよ」と言われました。

まだカモシカは見えていませんが、白鳥がV字編隊を組んで飛ぶ姿を見ました。また呆れられても嫌なので「白鳥をみたよ」と平然を装って言ったら「もうすぐ冬ですね。スノーダンプとか買いましたか？」と言われました。一体何なんだ「スノーダンプ」って。学生から教わること（私が知らないこと）は多いのです。

◆ 浦田 雅夫 ◆

楽しみにしていた対人援助学会に行けず。いつもお世話になっている、ほっとはあとセンターの生田一郎さんのお話も聞きたかったのですが…。とにかくバタバタと落ち着かない秋の夜長。アートミーツケア学会のホスト校裏方。学会を裏から支えるのは大変だと、はじめて気づきました。と同時に原稿の締め切りにも気づき…。編集長、ご迷惑をおかけしました。

◆ 中村 正 ◆

至福の時

京都市の二条駅近くにある立命館大学朱雀キャンパスで「シネマで学ぶ人間と

社会」というシリーズ企画を運営している。映画と対談と茶話をセットにしたものだ。現在進行中のものは「一粒の価値ー珈琲が映す世界と人間」である。2011年11月はジム・ジャームッシュ監督の『コーヒー&シガレッツ』（2003年作品）を取り上げた。招いたゲストは京都の老舗「小川珈琲」のバリスタチャンピオン（イタリア語でbarista、珈琲を淹れる職業人の呼称）の岡田さん。イケメンである。

この映画はテーブルを挟んだ会話風景だけの11篇の短編を集めた作品。コーヒーカップと灰皿の置かれたテーブルと会話がメインのオムニバス。白黒の画面構成が印象深い。

第1話は「変な出会い」。コーヒーを何杯も注文し煙草に次々に火をつける男と、そこにやってきた少し若い男とのやりとりを描いている。ふたりは待ち合わせをしていたらしいが、明らかに初対面である。やたらと興奮している中年男は意味のない挨拶を何度も繰り返す。どうにも落ち着かない。若い方もそれに應對して会話を続けようとするがかみ合わない。コーヒーカップを握ったり席を替えてはまた戻ったりと意味のないことを繰り返す。最後に若い男が歯医者にいくのを億劫がっているの、では俺が代わりに行ってくるといい診察券をもらい出かけていく。一件落着。いったい何だったのかわからないがすべてはうまく収まった。何の目的の待ち合わせだったのか、男がなぜあれほど興奮しているのか、説明はいっさいない。

第7話は「いとこ」である。世界的な女優と売れない歌手のいとこ同士の会話で、売れない歌手がちくちくと嫌味と皮肉をいう。心理ドラマとしてもなかなか秀逸である。この二人はケイト・ブラッシュェットという女優のひとり二役である。ひとりのなかに宿る二面性がうまく描かれている。

第9話も「いとこ」。人気を博しているイギリス人俳優を売れない俳優が会いたいと申し出て会話を始めたロサンジェルスのカフェ。実はお互いは遠い先祖でつながったいとこ同士であることを発見したといい、うさんくさそうな家系図を持ち出し説明します。かなり強引である。初対面のイ

ギリス人俳優は相手がなにを言い出すのかと思い、おどおどと対応する様子が面白い。強引に電話番号を教えてくれという。いや、電話は教えない主義なのだと有名な俳優は断る。その途中に有名な映画監督からその強引な男に電話がかかる。その友人と分かったとたん態度を変える俳優の豹変振りが面白い。二人の軽妙な駆け引きのキャッチボールが心地よい。

第 10 話は「幻覚」。ビル・マーレー（「ゴーストバスターズ」）と、ヒップホップ歌手であるウータンクランの二人との無意味な会話である。歌手のひとりが実は漢方の医者でドリルを使った手術もやるのだと話す。ビル・マーレーが本人のままウエイターで登場。コーヒーをポットから直接飲んだり、煙草にガスの点火スイッチから火をつけたりする。ばかばかしい3人の会話だ。

最後の第 11 話は「シャンパン」。暗い倉庫のようなセットで年寄りが二人テーブルに付いている。倉庫番らしい二人はランチを終えて、休み時間のつかの間、コーヒーを飲んでいる。

「テイラー？ どうした？」

「うん」

「大丈夫か？」

「いや、-----。世間から置き去りにされたような気分だ。」

「-----」

「マーレーの曲を知っているかい。」

『世の中から忘れ去られ。きれいな曲だ。』（BGMとしてのこの曲が流れている）

「このまずいコーヒーをシャンパンと思って、乾杯しようじゃないか」

「何に？」

「1920 年代のパリに。ジョセフィン・ベーカー、ムーラン・ルージュに。」

「それと 1970 年代のニューヨーク、それも 70 年代後半のニューヨークに。」

「コーヒーと煙草だけのランチは健康によくないよ。」

「ランチは食べたじゃないか。休憩で戻ってきたところだ。」

「え、そうだったかい。休憩は何分だい？」

「10 分さ」

「-----。嘘だと言ってくれ。」

「-----」

「さあ。頼むから嘘だと言ってくれ。」

「なにが」

「-----。いい、もういいんだ。昼寝するから、休憩が終わったら起こしてくれ。」

「あと 2 分もないぞ」

「-----」（もう寝ている）

「テイラー？」

「-----」（深い眠りに入っている）

テイラー老人は果たして再び目覚めるのか。静寂な死を予感させる。なんら悲しくはない。永眠という言葉が相応しい情景描写である。

いつもあたりまえのようにしてコーヒーをカフェでいただく。お隣の会話がこんな具合に聞こえてきそう。バカバカしい会話、喧嘩のような会話、一人でもの思いにふける自分との会話、やっぱり街にはカフェが欠かせない。小川珈琲の岡田さんとの映画後の対談はステージにテーブルと灰皿とコーヒーカップを置いてすすめた。映画の第 12 話のように演出した。第 13 話、第 14 話と続くように、みなさんもこれからカフェにいったらないおしゃべりに花をさかせましょうと締めた。好きな映画を企画し、楽しい相手を招いて対話し（目標は黒柳徹子さんの「徹子の部屋」だ）、その後ロビーでおいしい珈琲を手におしゃべりする、土曜の午後の至福の時である。
***** シネマ企画は ***** 、
<http://www.ritsumeihuman.com/cinema/>
をご覧ください。是非、おこしください。

◆サトウタツヤ◆

11 月 21 日（月）、科研費・新学術領域「法と人間科学」に関する会合が龍谷大学であり、翌日からイタリア・サレント大学のサルバトーレ先生を招聘教授に迎えた後、25 日（金）には日本 ALS 協会の橋本操さんに授業のゲストに来ていただき（学生には多大のインパクト）、その日のうちに広島へ。日本質的心理学会後には、29 日からクラーク大学の Valsiner 教授のところに短期訪問。こういうことをしているのかと自問しなくもないですが、こういうことが出来るのもいろんな意味で今しかないだろうと思い開き直る

ことにしました。

さて、私は文章を書くのが得意な方と思ってきたのですが、そういう自覚を捨てねばならないようです。あるいは、「難しい文章」と「気楽な文章」という二分法をやめて、常に真摯に文章を書くようにするか。そもそも、依頼された文章を全て引き受けるのが無理の始まりと自覚を持つべきか。



いずれにせよ、毎回このエッセイ提出が締め切りに遅れて申し訳ないです。今回は、アメリカ・マサチューセッツ州、クラーク大学で書いてます。リスが冬眠を前に一生懸命エサをほおばっているのが見えます。2/3の夜、サティアとヨハンナのご夫妻と共に、ウースターのお寿司屋さん（ババスシ）でお寿司を食べました。こういう記述は「ギリギリの覚悟をもった固有名の記述」からはほど遠いなあ。

◆ 大野 睦 ◆

大阪生まれ。日本福祉大学社会福祉学部卒業。屋久島でネイチャーガイドという職を通して多くの方とネイティブ（自然や人が持つ本来の）ビジョン（視点や考え方）を共有したいとエコツアー会社、有限会社ネイティブビジョン設立。
BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net>

12 月だというのに、気温 20℃で快晴。今日からロケに入ります。撮影日和！

◆ 坊 隆史 ◆

ふと、家を買おうと思いました。交通や買い物が便利なちょっとハイソなマンションです。友人の身内の一級建築士の方とも相談し、わりと真剣に検討しました。友人には「賃貸は家賃を払うのが勿体なくて」と説明しましたが、自分の社会的・経済的信用がどこまであるのかを試したい気持ちもありました。ところが結果はロー

ン審査で惨敗。過去の収入、現在の職場および職種で判断されたそうです。収入は仕方ないとして、職種について理解してもらえなかったことは辛かった。これが対人援助職に対する世間の評価なのか？なんだか社会人としての自分を否定された気持ちになりました。営業さんからは別の方法を提案してもらいましたが意気消沈してしまい、今回はフェードアウト。援助者としても社会人としてもまだまだ未熟だと痛感しました。購入をお願いされるようになるくらい精進あるのみです。

◆ 松本健輔 ◆

カウンセリングルームHummingBird 主宰
<http://www.hummingbird-cr.com>

父息子の関係とはほんとうに難しいものです。最近友だちが毎日のように父親と喧嘩をするという話をしていました。感謝の意はあるけど、つい口を開くと思っていることと逆のことを言ってしまう。

僕自身もまた当事者です。上手くコミュニケーションが取れない。単純な話しなかな素直になれない。

援助者としていろいろなことを勉強し、いろいろな話を聞き、こうしたらいいということは頭では分かっているけどなかなか出来ない。むしろ逆のことをしてしまう。ほんとうに入って難しいなと思います。

よく考えてみたら本当に親不孝をしてきたもんだと思います。大学在籍中にいきなり海外に行きたいと飛び出して、大学卒業したら就職してくれるかと思ったら大学院に進学し、卒業後専門職になるとしたら一度社会が見たいと営業の仕事をする。そうしたかと思えば、突然仕事を辞めて独立。保守的な父親にとっては理解のできない生き方に見えているのだと思います。ほんとうは一つ一つしっかり思いを説明して分かってもらわなければならないことだと思います。でも、なかなかそれを分かてもらわなければならない言葉が伝えられずにここまで来てしまいました。

そんな先日、一通のメールを送りました。内容は恥ずかしくて省略しますが、「感謝しています」ということと、「親孝行したいという気持ちはある」という内容です。親孝

行したい時には親はなしとはいいますが、そうならないための小さな一歩です。少しでも届いてくれていればいいのですが。

◆ 団士郎 ◆

2011年秋、私にとっての巨星が二つおちた。

立川談志が亡くなった。高校三年生の秋頃だったろうか、三一新書「現代落語論」に揺さぶられ、心底凄と思った。それ以来、心の中で自分は、立川団士郎だと思っていた。あれ以来四十七年、常に頭のどこかに談志がいた。二度、弟子になりたいと思ったことがある。二度目に思った時は、立川流の一般弟子になら、なれないこともなさそうだった。でも、やっぱり……とためらった。

それには理由がある。高座、独演会など、何度か生の舞台を見て、DVDやCDも持っているにもかかわらず、やっぱり私には談志落語が合わなかった。もっといえば、立川談志には大に関心があるのに、談志落語への思い入れが、どうしても同じほどには持てなかった。わざわざ浅草演芸場をのぞいたこともある。志ん生のLPはどさっとあるし、志ん朝、小三治のDVDセットだって、圓生落語全集だって持っている。

長年の友人に桂南光さんがいて、独演会にも機会があると出かける。落語雑誌や書籍も多く読んでいる。なのに、落語が一番面白いと思えない。いったいこれはどうした事かと、我ながら解せない。

ただ、無理におもしろいフリはすまいと心に決めて今に至る。これこそ立川談志に教わったことだと思う。世の中の何かに合わせて、なぞるように楽しむのではなく、自分で切り開いた面白さを見つける。そうしていると、やっぱりオーソドックス、スタンダードは凄いモノであることが分かる。

思いつきやまねごと、流行なんかではない、本当の藝、ワザに近づくことだ。

そんなことを一生かけて談志師匠から、今後も学び続けるのかもしれないと思う。

辻 悟 先生が亡くなった。治療精神医学を謳うロールシャッハ阪大法の中核にあった恩師だ。

私は辻先生に会う頃まで、いろんな事を見よう見まねで、それなりに出来る人間だった。それで殊更不都合もなかったが、自分自身には信用のならないさを自覚していた。時間をかけて、じっくり学んだ経験の欠如が理由だと思っていた。

学校での学びは、生徒一人一人に関心などなくどんどん進み、合格点だけが目安の世界に思えた。

仕事を始めて数年経ってから、自ら選んで通い始めた講座で辻先生にあった。冗談も言わず、論理的に詰める話法は怖かった。それまで、こういう先生に会ったことがなかった。それから数年間、自分としてはよく学んだと思える経験をした。

そしてある日、突然、腑に落ちて世界が見える経験を、ロールシャッハテストの学びの中でした。それが起きると、自分の中にある他の物事のあちこちでも、なるほど、そうだったのかという合点の連続が発生した。心理検査の肝なんて、このときにみんなスルスルと解けた。

個人の自信のある、なしは、こういう経験の有無にかかっているのだろうと思う。その道筋に連れて行ってくれた恩師だと思える人に会える幸運は、あちこちに転がっているものではないのかもしれない。

あそこで学ばせて貰ったのは、固定した知識ではなく、どんどん進化する仕組みを把握する枠だったことに、後になって気付いた。そしてそれは、いつまでも消えることはない。

ありがとうございました辻先生。自分の出来ることを、続けられる限り頑張ります。弟子 団士郎。



世界とつながる社会福祉現場

1 工程@ 1 円～知的障害者の労働現場 007

千葉 晃央

■UNIQLO・ユニクロ

『ユニクロ帝国の光と影』（横田増生著 文芸春秋）を読んだ。ユニクロといえば、障害者雇用率がトップの企業だ。障害者雇用を頑張っているので「みんな！ユニクロを買おう！」ということを障害者に関わる関係者が複数広く伝えていたりもする。この本を読むと、ユニクロという社風、ユニクロという企業のスタイルが、今の障害者雇用の状況（非常勤雇用、低収入、マニュアル重視等）とマッチしている部分が多いにあるのではないかと感じた。

■知的障害⇒バックヤードなのか？！

ユニクロでの障害を持ったスタッフの主な仕事はバックヤードときいている。知的障害者領域では、一般就労の場が店舗の場合、そのようなことが多い。具体的にいうとレストラン、旅館、ホテル等のバックヤードとなる。これに該当しない事例では、京都駅のすぐ駅前にできたイオンモール KYOTO の中にも障害者雇用をたくさんしていた店舗があった。開店時には大いに注

目された。そこでは、売り場に知的障害を持つスタッフが働いていた。オープン後しばらくたった去年の 11 月、その店舗は給料日の前日に、給料未払いのまま、一方的な解雇通知等で突如閉店。42 人の障害者を解雇し、新聞をにぎわすことになったのも記憶に新しい。工場や、詰め込み作業など、活躍している場は、やはりバックヤードということが多いように思う。

■ユニクロの中国下請け工場

『ユニクロ帝国の光と影』では、ユニクロの下請けをしている中国工場での作業手順が紹介されていた。ユニクロの高品質を象徴するものとして、限界不良品率 0.3%と、アパレル業界で驚異的な数字がある。それにいたる作業手順のポイントの一つはこうだ。札のタグ付けを例にとると、あらかじめ 50 着という区切りを仮に設けるとして、値札の数も 50 枚、服の数も 50 着と事前に数えて、それだけを他の作業台から独立した作業台に置いてから、作業を始める。その作業台には、作業をする一種類の商品のみ置くという状態になる。正しく作業がで

きた時には、50 着分の作業終了時に商品、タグ等、全てがちょうどなくなる。それが確認できて、はじめて作業の完了。出来上がった 50 着を、全て梱包等を行い、作業台の上に何も無い状態にしてから、次の 50 着に移る。そうすることで、サイズ S の服に、サイズ M のタグが付くようなサイズ違い、異なる色のタグが付くような色違いのミス等を防いでいる。本によると、ユニクロが依頼している中国工場では、ユニクロの監視が少しでも甘くなると、この作業手順が守られず、不良が出てしまうということがあるそうだ。

だ。しかも、このやり方は恒常的であり、緩めたりはしない。そして、ユニクロにはない全商品、全検品を職員の手で行ってきた。(ユニクロは抽出検品とのこと。)つまり、業界の驚異的な不良品率を誇るユニクロと同じレベル、もしくはそれ以上のことをしているともいえるのだ。この本を読んで、あらためて、自分たちが行っている作業の品質に一定の誇りのようなものも感じた。そして同時に、これまでもわかってきたことだが、中国工場と知的障害者の就労現場が下請け作業という共通の役割を担っていることを再度、認識することになった。

■ユニクロ以上？の作業をする福祉現場

この作業のやり方は、私がいた知的障害者の就労現場での作業の流し方と全く同じ

■国際品質基準に応える作業工程

知的障害者の労働現場であっても、取引先が求める品質に応えられるかどうかが取



り引きの前提にあるのは言うまでもない。福祉施設であろうとなかろうとだ。企業が自社の品質を保ち、お客様からその品質で信頼を得るために国際品質基準 ISO9000 シリーズを獲得しているところもある。その時には当然、私たち障害者の就労現場の作業工程も、国際品質基準 ISO の規定に適合したものとなる。作業工程のマニュアル化、不良品の発生メカニズムの検証等、取引先の方々と頭をつき合わせて、福祉施設の職員は取り組んできた。そういった、経験からも、自分たち障害者の作業現場の品質には一定のものがあるとは感じてはきた。そして、こういった一般企業との取引が私たちの労働現場の作業品質を引き上げ、維持する機会にもなってきた。

■一般企業に仕事を依頼する立場に

しかし、国からのアプローチの影響もあり、結果、下請け作業からの脱皮が進み、障害者福祉施設では自主製品が流行している事実はこれまでも触れてきた。一昔前とは異なり、福祉施設職員が商品開発、販売を行っている。それまで、下請けで仕事をもらっていた企業に、今度は自分たち施設側が商品企画をし、作業を依頼している話もきこえてきている。立場の逆転は、驚きと喜びも一瞬よぎるが、そのことで障害者の収入が上がったという話は今のところきこえてこない。

■中国から届いたモノのなかに…

10 年ぐらい前、中国から届いた商品をパッケージに入れるような仕事をよく施設で

やらせてもらった。中国から届いた箱を開けるといろんなものが商品の他に混ざっていることがあった。お菓子のカケラがその一つだ。現在、きこえてくる中国の労働状況のひとつに、早朝から深夜までの作業実態があるからだろう。前記の本によると、現在のユニクロの中国にある下請け工場でも様子は同じようである。お菓子でもつまみながらでもやらないとおなかですいて…という労働条件が実情なのだろうと思う。（作業量による出来高払い、不良品にはその作業員に罰金もあるようだ！）

他には、こんなものが出てきたこともあった。カッターとして中国での作業時に使われたと思しきものだ。それはカッターの替え刃に、手で持つ、握るところとして直接緩衝材のウレタンをぐるぐると巻き、上から更にガムテープでぐるぐる巻きにして止めたものだ。日本なら、100 円ショップでもカッターは買えるのに、と一瞬思いながら、100 円の価値がまず違うとか、経済の仕組みが違うなど、一呼吸して、いろんなことが頭を駆け巡った。

■9.11 アメリカ同時多発テロで…

この 10 年間で、変化したところもある。物の流れだ。10 年前は、中国で生産、日本で最終加工、消費であったが、今は逆に、日本の商品を加工して、中国に出荷して、中国で消費するという流れに変わってきた。2011 年 2 月に流れた日本と中国の GDP の逆転のニュースは、私の現場からはこうした品物の動きとして、肌で感じていた。

2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロが起こった時、京都の知的障害者の収入

がアップした。それは、テロを恐れて、海外旅行者が減り、国内旅行が増える。国内といえば京都が人気の観光地。京都の観光客が増えると、お土産ものが売れる。そのお土産物というのが京都の大きな産業のひとつで、障害者の施設でも、多くの作業を担っている。そのため、作業の注文数がハネ上がり、結果として、京都の障害者の収入はアップしたのだ。

■子どもが作ったものを親が買う？！

このように、知的障害者の労働現場も世界とつながっている。つまり、社会の経済活動の一部なのだ。その一般的な経済活動の流れの中に関わっていることこそ、ノーマルであるという側面もある。なぜ、そのようなことをいうかと言えば、現実として、障害者が作った自主製品をその保護者が買う、その収入で、その子どもたちである障害者の収入ができるという、身内でお金がぐるぐる回っているだけという現実も、これまで長く続いてきているのも事実であるからだ。

このような現実があるのは、「京都」という場の力もあるだろう。京都の伝統工芸品を輸出もするし、海外からも観光客が訪れる、お土産も売れる。こういった地域性からも、世界とつながっている実感は強いかもしれない。このような地域ではないところは日本のあちこちにある。地域の特徴は様々だ。地域性からも、知的障害者の就労現場が影響を受けているのは言うまでもない。「知的障害者の就労現場 京都版」というのが私のこの連載の裏のタイトルともいえる。

(写真：橋本 総子)



社会臨床の視界

(7)

男親と父親の「あいだ」にある父性の涵養

—虐待親たちに問うたことを今度は自分の問題として考えてみる—

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

「男親塾」という名前の由来

大阪の児童相談所で家族再統合支援のグループワークと個人のカウンセリングを実施している。このグループワークの名前は「お父さん子育て塾」としていた。でも、なんとなくしっくりこないと思っていたので、どんな名前がいいと思うかと虐待する男性たちに聞いたことがある。その結果、「男親塾」におちついた。男性のあり方や悩みを重視してみてもどうかとみんなが指摘した。それまで子育てしてきたわけでもないのに、虐待した父親を対象にして「子育て塾」というのはハードルが高すぎるというのである。なるほどそれもそうだ。もちろん、親であるという点は無視できないが、その親はもっぱら稼ぐ役割の親であった。なかには共働きの夫婦もあるが、子育ては妻の役割だと思っており、子育て能力を問題にされると困惑してしまうという。

それでも何か釈然としない点もある。暴力を用いたことで家族関係にひびを入れ、傷を負わせ、子どもを保護せざるを得ない事態を招いたことの責任は問いたい。せめて、「子育てなんて知ったことではない。それは妻の仕事で、俺は稼いでいる。」と思う意識それ自体が虐待するリスクとなる認知であることには気づいて欲しい。とはいえ、

そうした男性たちにとって腑に落ちる言い方でアプローチしなければならない。より適格的で受け入れられるやり方が欲しい。こうしてグループワークに参加してくれる程度に意識のある男性たちに相応しいアプローチとしたい。これを加害者臨床論では「応答可能性・反応性」という。したがって、男でありつつも親であることの面も考えてみたいという曖昧な当事者意識ではあるが、彼らの自己認識を尊重することとした。名付けをめぐる意見の交換をとおして、男親と父親という言葉やそのあいだにはいろいろ考えなければならない何かがありそうだと思った。

今回は、私の子育て体験も交えてこうした事柄を考えてみようと思う。男親なのか、父親なのか、換言すると、稼ぎ手役割とケア役割の両立やバランスをどう考えることができるのか、男親・父親・夫としての立ち位置を確認したいと願い、虐待親たちに発した問いを自らの来し方と重ねて記しておくことにしたい。

さらに、父親というと家族制度や社会制度にも関連する面がある。嫡出推定の原則がある。民法 772 条は妻が婚姻中に懐胎した子は夫の子と推定するという規定である。この規定は嫡出推定制度の一環であり、子の福祉のため父子関係を早期に確定し、子の身分関係を安定させることが目的である。

婚姻中に懐胎したこともって父親は制度によって推定されるということだ。また、一夫多妻制の国であれば父親のあり方は異なる。こうして、男性や父性・父親が制度的、歴史的、社会的存在であるとすれば、男性性（男らしさ）、父親・父性は構築物、フィクション、虚構としての面があることになる。同じように母性もまた育児へと女性を駆りたてるように構築されてきたといえる。親のあり方は創られたものであるとすると、男性にケアの能力が本来的に欠如しているのではなく、社会的に疎外され、剥奪されてきたことの結果であるともいえるので、男性たちだけを責めることにはならないし、努力の結果、これからでも構築できると考えることができる。

別の言い方もある。家族のなかでの親の役割としては「ケアかキャッシュか」という面があり、それは養育力の2面性（経済的とケア的）を意味し、さらにそれらがジェンダー分割され、男性と女性に割り振られていき、それを家族という制度が表現している。だから男性のケア的な側面である父性を涵養していくためには、こうした社会のあり方も問うことになる。ケアから男性たちを疎外した社会を「直し」つつ、虐待するその行動的心理的な面は「治す」というスタンスである。これは社会臨床としての重要なテーマとなる。

私の子どもが就学する前後、NHKの『すくすくネットワーク』誌（NHK出版局）に連載していた体験的父親論がある。1998年頃のことである。私自身の子育て日記でもある文章をひっぱりだし少々のアレンジを加えた。一般的に男性とケアすることに関する主題が数多く生成している社会となっており、そうした意味でも私のなかでは持続しているテーマである。現在放映され

ている放送大学の「世界の結婚と家族」という教養科目（2012年度まで）で同じような話をしているので視聴可能な方はご覧いただければと思う（テキストは、宮本みち子他編『現代世界の結婚と家族』、放送大学教育振興会、2008年。そこで「男性と父親－父親政策の視点から－」、「家庭内暴力と家族関係－男性・父親の視点から－」と題した章を書いている）。

初めての父親たちとのつながり

－「子育てすべきだ！」とはいわない

立命館大学大学院応用人間科学研究科の東日本大震災への支援活動の一環として青森県むつ市立図書館で「父と子の絵本の読み聞かせワークショップ」を実施した。同僚の村本邦子さんが企画した家族支援のプログラムの一コマである。本マガジン編集長の団さんの漫画展と講演会もあった。関西はまだ暑かったが、東北の秋の気配を感じた9月24日の土曜の朝のひとつときであった。

「父親も子育てすべきだ」という無粋なことを訴えたのではない。楽しい子育てをする小さなアイディアを伝え、一緒に楽しみたいと願って企画した。これを考えるための言葉も紹介した。たとえばIQとEQ（intelligence quotient / emotional quotient）のこと、つまり、感情や情操に関わる知的な働きのことである。こうした立場から男性問題に関わるいろんな取り組みをしていることも紹介した。

まずは気分ほぐしを行った。「ことば、からだ、かかわり」の関係を深めるためのゲーム風のワークである。父親たちが出会いをうまくすすめるためのウォーミングアップだ。

はじめは「からだほぐし」と気持ちトーク。二人一組になり肩もみをした。一分間、黙ってもむ、次にはおしゃべりしながらもむというワークをおこなった。おしゃべりしながらだと気持ちがよいということを体感する。時間もあっという間に過ぎていく。「あ、そこそこ、ここは痛い！どんなお仕事しているのですか。何か運動していますか。いい身体していますね。」などと雑談が交わされる。気持ちトークである。

次に、「あとだし負けじゃんけん」の練習をした。文字通り、後に出して負けるというゲームである。でも後に出しても勝ってしまう。最後に、「あいこ」になった時に握手をして和解する。勝ち負けのない平和な握手になり、ホッとする。家族同士でやると面白いともアドバイス。じゃんけんは勝つものと思っている。後にだしても勝ってしまう。身体はずるい。習慣の力は恐ろしい。男性性も同じように習慣になっている、としめくくる。

最後に、言葉イメージ練習、一種の群読である。一つ目のお題は「雨が降る」だ。私が「雨が降る」という。次々と父親にまわしていく。「しとしと」、「ジャージャー」、「ごうごう」、「ぼとぼと」と。「わんさわんさ」と続く。「ばしゃー」、「さらさら」、「びちぴち」、「どんどん」、「ごーごー」と。たんなるイメージだが、体験と重ねて気持ちがこもる。

二つ目のお題は「ひとが歩く」。同じように続ける。「てくてく」、「ぶらぶら」、「さくさく」、「ぼとぼと」、「のしのし」と歩く様子を音でつなぐ。「ああいそがしいそがし」、「おそろおそろ」、「どんどん」とやや転調する。もっと情景を含めて、「てをつなぎ」、「足をとられ」、「柵を越え」、「海をこえ」とも広がる。

これらの練習は絵本の世界に入るためのウォーミングアップ。楽しく子どもとシンクロするための「のり」が大切となるからだ。自分の体験と重ねてのイメージ練習ともいえる。気持ちを込めてという意味はということだとも話す。そうこうするうちに滑舌もよくなってくる。その時は時間がなくてできなかったのだが、「かっぱ」という谷川俊太郎さんの詩をつかったメニューもある。

かっぱ かっぱらった かっぱらっぱ かっぱらった とってちってた かっぱ なっぱ かっぱ なっぱ いっぱ かった かって きてくった

これはどう読んだらいいのかな？という言葉遊びだ。いちおう正しい読み方は次のよう。でも楽しめればいいので正解を探すことが目的ではない。念のため。

かっぱ／かっぱらった／かっぱ／らっぱ／かっぱらった／とって／ちってた／かっぱ／

なっぱ かった／かっぱ／なっぱ／いっぱ かった／かって／きてくった

これらは以前にも紹介した「レポートトークとラポートトーク」の練習である。感情とコミュニケーションと関わる男性の表現力の弱さが気になっているのでいつもこの話をしている。とにかく初めて出会う父親たちだ。難しい意味づけはせずに、ワークをしながらうちとけあうことがねらいである。やればのりのいい男性たちだ。

5組の幼児と父親が参加した。父親が読みきかせた方がいいとセレクトした絵本の紹介をした。まず、エリック・カールの仕掛

け絵本、『パパ、お月様とって』（偕成社）だ。父親の気持ちが雄大になる。そう子どもに言われたら、「よっしゃ！」となるはずだ。他には、佐野洋子さんの『100 万回生きたねこ』（講談社）、田島征彦さんの『じごくのそうべい』（童心社）もおすすめした。そして今回、一押しとしてとりあげたのは宮西達也さんの「ティラノサウルス」シリーズである（ポプラ社）。『おまえうまそうだな』、『おれはティラノサウルスだ』、『きみはほんとうにステキだね』、『あなたをずっとあいしてる』など多数でている人気絵本となっている。『おまえうまそうだな』という絵本のタイトルを大きな声で読むだけでも子どもたちは大騒ぎ。

はじめは練習。私が『パパ、お月様とって』と『100 万回生きたねこ』を、ゆっくりと、感情を込めて読んだ。ここまでは父親だけの会である。次に、子どもたちを招いて今度は父親たちの番だ。すきなところに陣取って父親と子どもたちの絵本タイムが始まる。おとなしく父親にだかれている子ども、絵本を指さししながら別の話へとひろがっていく子ども、神妙な顔つきで話に食い入る子ども、いろんな輝きがある。日頃の姿が目に見えかぶ。

絵本の力-父親の情操教育

こうした経験からすると、男性が親になるには特別な努力や意識づけが要るのだと思う。私自身も自分の子どもと遊びながらたくさんの発見をした。なかでもこうした絵本や物語の読み聞かせは面白かった。こんな絵本も印象深く残っている。「ぼくの父親？ふつうのおとなだよ。やさしいけど。でもたいへいは、なんかちがうことを考えてる。遊ぶことができないし。」という少年

のつぶやきをもとにした『小さくなったパパ』（ウルフ・スタルク、小峰書店）という絵本だ。これはてっきり私のことかと思った。私も娘と遊びながら別のことを考えていることが多い。たとえば研究や原稿のこと。なにかネタはないかといつも考えてしまう。純粋に遊べないとはこうしたことをいうのだろう。思えば幼い頃のように遊べなくなっている自分にも気づく。いつのまにか鎧を着て、世間にあわせ、日々のことに精一杯で、何かしら流されていくようになってから、ずいぶんと時間が経ったように思えてくる。育児をしながら感じる時間と空間は、30 代半ばの父親に微妙な変化を与えてくれていた、と 50 歳をこえて多忙を極める折り返しの齢になってそう思う。

絵本の読み聞かせは、新しい時空間にかのま誘ってくれるいいチャンネルだった。とくに父親の「男らしい」人生からすると、一種の「癒し」のような作用を果たしてくれた。絵本は棒読みでは味気ない。感情や気持ちを込めて読むのが楽しい。ゆっくりと語りかけるようにして読むと子どもの目が輝くのがわかる。そして話があちこち飛ぶのも楽しみだ。子どもは絵本に反応して一緒に物語を楽しむことができる。むしろ子どもの空想力に感心し、教えられることが多い。時間の流れをゆっくりめにきりかえ、空想の世界に身を漂わせ、共にたゆたうことができるいい時間だ。こうした感覚は、男性の日常生活にはないことだと思う。だから面白い。父親の情操教育にとって絵本や物語はとても大切なように思えた。いつでもできる父親の育児だという点も大事だ。

他にも『うちに帰れなくなったパパ』（徳間書店）も印象深く残っている。書いた人はラグンヒルド・ニルスツンというノルウ

エーの作家。舞台は夫婦と子ども2人で暮らす家族。新しい家に引っ越したその翌日、父親は今日も元気に「いってきます」と仕事に出かける。ところが、ひょんなことに家への帰り方がわからなくなってしまった。バスに乗るがどこで下車していいのかわからない。見覚えのある街を歩き回るがたどり着けない。途中、探検家、ハングライダー乗り、カウボーイなどいろんな人に出会いながら家を探す。探検家は野心丸出しで有名になることを夢めている。ハングライダー乗りは「みんな飛んで俺をみあげているのさ」と優越感まるだし。レーサーの彼は「ひとりぼっちだけど、砂漠まで走る」と無理しながらも意気軒昂。野に暮らすカウボーイは「まだまだ旅の途中ってとこさ」と雄々しい。「へー、みんな男らしく生きてんだ」と父親は感心するけど、「早く家に帰りたい。しなきゃならない仕事がある」とつぶやく。世間の男って、見栄と打算と野望と孤独に生きているんだなと感じながら、歩き疲れて戻ったところは生まれ育った母の家だった。

家を探しながら出会ったこの男たちはこの父親の分身たちだったのかもしれないと思う。でも、寝ようとしたベッドはすでに小さく、寝心地はよくない。「ここじゃもう眠れない」とつぶやく父親。この一言でこの父親は家に帰ることができるだろうと私は感じた。ママからの自立を自覚する思いとあきらめが、このつぶやきに込められているように思えた。この男性のように帰る場所には「ママ」がいる。日本の父親はたくさんの「ママ」に囲まれて生きている。産みの親はもちろん、妻にも母役割を求める。もしかしたら娘にも母役割を押しつけるかもしれない。息子がいればその妻にも舅として母役割を求める。母役割とは、食

事をつくらせ、他人の世話をし、掃除をし、育児や介護を担当するということだ。こうして見ると、家のなかで何もしないという男性役割、父親役割はずいぶんと楽だ。それを支えるのがたくさんの「ママ」だ。もちろん仕事帰りに立ち寄るスナックにも「ママ」はいる。うーん、やはり「ママづくし」の男の生活。

依存してばかりの生活では自立心が萎えていくとこの絵本は語っているようだ。これからの社会に必要な身の周りの生活的自立能力は身につかない。仕事ばかりの一本調子な人間は折れるとこわい。やはりマルチな人間はしなやかに、変化に対応できると体験的に思う。この社会、先行きがなかなか見通しにくい。私が家事や育児など、家のなかのことに関心をもった方がいいのではないかと薦める理由は、男女共同参画社会づくりのためだけではない。ようするにいろんな発見があって自分のためになることが多いからだ。将来何が役立つかわからない。男子厨房に入り、子どもの世界を探りながら知恵と技を磨いてはどうかと思う。体験上、仕事にプラスになることが多かった。家のなかでは使う脳の部位が異なり、言葉や感情もちがうような気がする。

そしてなんといってもおそろべきママの独占状態にある家庭という領域に父親を解放することの大切さである。そうしないと子どもたち、とくに男の子は同じようにまた帰るべき家を見失うことになるのだろう。息子の自立にとっても父親の自立は欠かせないと思う。生活のなかでみせる実の姿の父親がみえないので、このままだと父親受難となる。「父親って、何の役に立つの」と子どもがたずねる。「うーん、なんだろう。わかんないな。でも給料をもってくるからね」と語る母親。こうした会話がどこの家

からでも聞こえてきそうだ。父親は家のなかで居場所をなくしていく。「うちのパパ、今日はきちんと帰ってくるかしら。もしかしたら……」と思う妻、そして「俺も大丈夫かな」と思う父親は意外に多いのかも知れない。

では、家に帰れなくなったこの父親が探していたのはいったい何だったのか。少子高齢社会、男女平等という大きな変化のなかで迷う父親の姿のようでもある。稼ぐ役割の男親役割に徹していればいいというわけにはいかない。長く母性（ママ）に依存してきた息子の哀れ（自律的できないこと）も斟酌すべきだろう。依存から脱出するためにも家のなかでケアの役割を磨き、それを親性の一環としての父性として育んでいきたいものだ。この隘路に男親から父親への変化が位置づく。

親性を育むー 鍵となる父性の涵養ー

でも父親は憂鬱である。突然に子育てと介護を託され、期待される世の中となった。というのも、父親は知らないのだ。どんな具合にして親になればいいのかを。誰も教えてくれなかった。父親の父親は何もしてくれなかった。「生きてきたように老いていく」ということと同じで、「人は育てられたように子どもを育てる」しかない。そんな父親に、「子育てしなさい！」だけでは義務としての育児となるだけだ。

1970年代かけて専業主婦の比率が高まり続けた。その頃生まれたのが、今現在30から40代の現役子育て世代である。そして介護もこれからは期待されている。稼ぎ手である大黒柱役割を担う夫と内助の功で支える妻が一姫二太郎を育てるという典型的な「幸せ家族」に育った父親と母親は、それ

が普通だと思っている。父親は何も知らない。

だから父親は少々あわてている。父親の「家族的責任」という言葉が登場したからだ。子どもの問題行動が世間を騒がせるたびに、父親の責任はどこへいったと問われる。もちろん、そんなことはわかっているが仕事が忙しくてという事情も分かる。でも、こうした「幸せ家族」には母性過剰と父性不在がつきものだということも考えておくべきだろう。もちろん父性でも母性でも親は親だから、自立した人として子どもを育てていく責任は両方の親にある。とはいえ、さしあたり「男は外のことを、女は内のことを」という具合に、性別役割を担って生きざるを得ないジェンダーの現実が強く作用してきた。現代は、その両者のバランスが求められ出したといえる。男性は父親として家族の方に関心をもっていくことが期待されている。いってみれば「父親の家族復帰支援」である。「女性の社会進出」という言葉はあるが、「男性の家庭進出」とはいわない。ジェンダーにおいて非対称である。バランスを回復させるために広めたい言葉である。

したがって社会的に創られたこうした関係性を変え、「男性の家庭進出」めざす父親にはヒントが必要だし、スキル伝授も導入部分としては有益だと思う。家族への帰り方、つまり子どもとの遊び方や勉強のさせ方のヒントである。各地で頼まれて父親教室を行うことがある。冒頭のむつ市の企画はその典型である。絵本の読み方教室、料理教室、妊婦教室、介護体験講座、遊びかた講座、悩み相談、脱暴力の支援など多彩な活動を仲間たちと行い、ヒントをともに考えてきた。父親の父親が何もしられなかったので、新しい男性たちが相互に学び

はじめたのだ。最初のうちは照れくさいけれども、慣れてしまうと男たちも捨てたものではない。義務としての子育てではなく、子どもとの関わりあいを楽しむようになるとう大丈夫。

こうした活動をしなから思うことは、育児にかかわる能力は本能でもなんでもなくて、身につけるものだということ。それは母親だってそうだ。「母性本能」なんていう言葉はそろそろ死語にした方がいい。女性たちには育児の押しつけになるし、なによりも男性が無視されている。男性がケア領域から疎外されていく。そして、女性にとっても親になることは課題をもった時代なのだから、男も女も新しい育児のあり方を模索しなくてはと思う。親性の形成という課題である。

しかし、親性のジェンダー分割があるので、保育園でも、幼稚園でも、どこにいても母性過剰だ。育児は女性の仕事となってしまう。「ねえお父ちゃん、どうしてそんなに保育園の送り迎えや会長（保護者会の仕事をしていたことがある）なんてしているの。別に暇じゃないのに。よその家はお母ちゃんが多いよ。」と保育園時代に娘が話してくれたことがある。「お父さんはなんのためにいるの」とは言わない娘けれども、やはり父親と母親は違うと思いついてしまっていた。「子どものことも仕事のことも両方ともできるといいの。」と答えた。

先に紹介してきた絵本でも同じだ。父親が知らない間に母親が読み聞かせする世の中の大半の絵本は、父親を必ずしも良いようには描いていない。ずっとけた父親、何もできない父親、死んでお星様になってしまった父親、ヒーローのような偉大な父親という具合だ。どれも実感にそぐわない。それに比べると、母親はよく登場するし、

描かれ方もとくに違和感はない。くる日もくる日もこうしたバイアスのかかったストーリーのお話に浸っていることを父親は知ったほうがいいだろう。もちろんそれほどまでに男性たちが子育てをさぼっていたということに他ならないのだが。

二人だけで育児をするのではなく

—家族を開くほうへ

もちろん男性も育児に関わる努力はしているし、イクメンという言葉も定着し、各地ではおやじの会が活動している。しかし、男親としての育児は非日常的なようである。まるでお祭りのように。普段は何もしない男親だから「ここぞ」とばかりに張り切る。土日ともなれば出番で、遊園地に行ったり、公園でスポーツしたりと頑張る。男の料理というのも曲者でやたらと豪華に金ばかりかけるし、「どうだ、うまいだろう。俺もやればできる。」といわんばかり。たとえまづくても、「そうね。おいしいね。」と言わなければ後が怖い。

育児や家事はきれいなことばかりではない。感情のかたまりのような子どもを相手に「なにこのガキめ！」と思うことも多い。子どもはとにかくよく泣くし、言うことを聞かない。食べ物は散らかすし、ミルクはこぼすし、なんでも口に入れようとするし、それはもうてんやわんやの大騒ぎである。夜泣きでもされた日にはもう大変だ。翌日の仕事を心配しながら、寝かしつけようとドライブしたり、夜中の散歩に出かけたり、ガレージで遊んだりと休む暇もない。どちらが面倒見るかで夫婦仲が悪くなりかけることもしばしばであった。「もういや！」という場面が子育てにはつきものだった。でも子どもの寝顔をみて癒される。辛いこと

はすべて忘れてしまう。そうした日常の繰り返しこそが育児だ。

こうしたことからすると、非日常型の男親の育児は「いいとこ取り」になってしまう。母親にとってはそれ自体がストレスとなる。なぜなら、非日常の育児しかない男親は子どもからはやさしく見えるからだ。力任せに一生懸命に遊んでくれるし、おやつも買ってくれるかもしれない。母親のようにあれこれ厳しく怒らず、小言も言わない。だからうまくできれば父親は好かれる。でも母親はそうはいかない。24時間子どもとつきあえば「うるさい母親」となるのは当然だ。

とはいえ、こういう男親でも貴重である。最初は非日常的でもかまわないのかもしれない。そしてゆっくりと日常化していけばいいと思う。

そしてもう一つ。しかし、「そうはいってもなかなか普通の育児なんてやってくれない」という前に、思考の枠をずらしてみるといいと思う。ストレスをためて「あなたももう少し面倒みてよ!」というのでもいいが、少し異なる角度から家族を眺めてみたい。そこで提案。「半分こイズムはもうやめよう」というのが私の考えだ。男女協働参画社会づくりという際に問われているのは、私たちの男女平等への想像力と構想力だ。男も家事と育児と介護に参加しなさいというのは、正しいメッセージだ。間違っていない。けれども、妻と夫、女と男が向き合いながら、家族のなかだけですべてを平等に分担することでしか男女平等ということイメージできないとすると、それは貧しい。どうして家事や育児や看護や介護をすべて家族だけで完結させないといけないのだろうか。

「半分こイズム」がこの点を見失うと、

閉じた家族となってしまう。どうして他人が必要なのか。それは家族の人数が少なくなっているからだ。兄弟姉妹や親戚が多ければ、それだけ人間関係にもまれて学ぶことが多くなる。でも今はそうではない。人間関係が希薄になり、地域のなかに家族は開かれていない。家々は鍵をかけ、変なおじさんには要注意という看板もあるぐらいだ。ほうっておくと家族関係が閉じていく。だから、保育園や幼稚園の保護者同士、ベビーシッター、育児仲間、友だちとつながり、誰でもいいので風通しをよくして家族を開くことが面白いと思う。他人からはよく学ぶのが常である。

ななめの関係

過去はそうだったといえるが家族は単独で子育てをしてきたのではない。地域や親族も含めて子育てはいろんな人を巻き込んでいた。核家族の親にのみ子育てを託すと、家族は閉塞していくばかりだ。ましてやさらに進む少子社会である。個々の家族の母親にのみ子育てが任せられ、周囲の社会から孤立することもある。そうすると関係が閉じていき、逆に家族関係は密になっていく。そうした密度のなかでは子どもと親が「あわせ鏡」のようになる。それは互いに互いを写しあう無限連鎖となる。「鏡のなかの鏡」が果てしなく続き、最期は何が何だかわからなくなり、見えなくなる。親子という二者関係はこうした状況に陥りやすい。

やはりいいのは三面鏡のような関係、つまり第三者を入れた関係だ。身近には、母と父と子の三者関係がある。単親の場合は二役をこなしてもいいし、他人でもいい。血縁関係でなくてもいい。要するに第三項があればいいのだ。つまり三面鏡だ。親子

という二者関係は閉塞しがちだし、脱出口がない。互いに互いを写しあい距離が取れなくなる。息苦しい。二人関係というのはその絆が強い分だけ他者を寄せつけない。二人関係は互いに他を独占したいという欲望を表わす。恋人関係がその典型だ。こうなると「ラブ・イズ・ブラインド」の世界だ。

子どもが小さい頃、保育園の保護者同士がつながりいろんな人が出入りし、よその家によく遊びに行っていたし、なんとか父親も子育てにかかわってきた。多様に第三者が存在していた。かつて、こうした関係はずいぶんとあった。地域のなかのおっちゃんやおばちゃんたち、そして親戚も多かった。叔父や叔母たちは親代わりで、厳しくもあり、やさしくもあった。友だちの親に真剣に叱られたこともある。子育ては地域や関係のなかで行われており、親より効き目があった。

社会のはじまりは三人関係にある。家族のなかにこうした三人目はどれだけ存在しているだろうか。家族を開く課題であり、たてとよこの関係だけになりがちな核家族に「ななめ」の関係を入れるということでもある。

おもちゃに学んだこと

絵本にも学んだが、おもちゃも面白いと思った。おもちゃは女の子用、男の子用というのがはっきりしている。テレビやマンガもそうだし、日常使う子どもの身の回りの品々も同じようだ。女の子はピンク、男の子はブルーと色使いまで明確に分かれている。

男の子らしいおもちゃは、ロボット、戦争もの、お城や要塞、自動車、銃や刀など

だ。テレビゲームもよく似たもので、戦争、暴力、攻撃などが物語として背景にある。他方、女の子らしいおもちゃは、お人形、お家セット、ままごと、ぬいぐるみ、お化粧ごっこなどだ。実に整然と男の子用、女の子用と分かれているおもちゃは、やはり問題だし、なんとかならないものかとかねがね思っていた。

しかし、子どもはそんな親の思いを無視してよく遊ぶ。お人形をつかった遊びやままごと遊びも好きだ。もちろん男の子が好きなおもちゃもたくさんもっている。合体型ロボットや要塞のまわりで戦う兵隊のおもちゃもつかう。家に遊びにくる女の子同士で戦いごっこが繰り広げられることもあった。

ところが、同じおもちゃを使っても、私が体験してきた男の子同士の遊び方とは異なるのだ。娘たちのごっこ遊びは面白かった。兵隊たちが戦うまねをする。「エイ、ヤッ」「ブーン、ダダダッ」という具合だ。でも最後には、双方が戦いなんかやめて仲直りするのだ。「戦争してごめんね、これからは仲良くやろうね」と。そして、傷ついた兵士たちを動物のぬいぐるみが癒してあげる。「痛くないよ」と慰めてあげるのだ。大げさにいえば、平和が訪れて遊びは終わる。

こうした娘たちの遊び方をみていると、男の子用、女の子用という具合に分かたれているおもちゃの性差を乗り越えて、子どもたちがそれらを使いこなせばいいのだと思うようになった。目くじらを立てない。おもちゃだけではなくて、よく似たことは他にもいろいろある。テレビ、マンガ、ゲームだ。テレビを見るなどといっても無理だ。マンガに熱中するなどといっても反発されるだけだ。ゲームをするなどといっても無視される。だから、こうしたものとうまくつき

あうことが肝心なのだろう。

私の幼い頃とは全く異なり、現代の子どもたちはテレビ、マンガ、ゲームやおもちゃに囲まれて生きている。以前は遊ぶものが豊富でなかったから、自分たちで工夫し、時には作った経験もある。野に遊ぶこともたっぷりできた。逆に豊富にありすぎると創意工夫をしながら遊ぶ能力は衰退する。とはいえ、臭いものにフタをするように、こうしたものから遠ざけておけばいいというわけにはいかない。戦車から人形までいろんなおもちゃがあってもいいと思う。これらを使いこなす自主的な力が大切なのだろう。

男の子問題

米国コロラド州のコロンバイン高校銃乱射事件は1999年4月20日に発生した。その時にカリフォルニア州のバークレイに住んでいた連れ合いと娘に電話をかけたが、学校関係者はずいぶん深刻な様子だった。娘の通う学校では校長自ら親宛の手紙を書いたという。「週に何回かは子どもと何かを一緒に行く体験を」という内容だったらしい。食事を一緒につくる、スポーツをする、ピクニックにでかけるなど、とにかくなんでもいいからテレビやゲームに埋没しないようにさせましょうという内容だったという。

銃をもつことを個人の権利として認めた国ならではの激しさをみせるスクールバイオレンスである。そして多文化社会や競争社会であることの課題も垣間見える。もちろんこうした形態での暴力ではないが、学校をめぐる事件は日本のなかでも散見される。加害が男性であることが多く、そこに関心がむかう。男性問題に取り組む心理学

者ブラノン教授が男の子に期待する四つのメッセージを整理した。「勇猛心を持て、地獄を体験させろ、大物になれ、女々しくするな」というもので、男の子にたいして周囲の環境はこうしたメッセージを送るという。ジョン・ウエイン、ブルース・リー、クリント・イーストウッドがヒーローだった頃、つまり社会全体がこうした物語で大きく発展していた頃につくられたという。このような男の子像が一人ひとりの成長の物語として社会の発展の物語と重なり合っていた時代はまだよかった。「大きいことはいいこと」だった。だから男親が家にいなくてもよかった。男の子の成長と大黒柱として頑張る男親の姿と社会の進歩・成長は同心円を描くようにして調和がとれていた。重厚で長大な産業が男らしいイメージをつくってきた。喧嘩やいじめもあったけど、すべて大目に見られていた。

しかしそれはもう今は昔の話となった。成熟した社会ではこうした荒野を拓くようなパイオニア的な男の子らしさ像は邪魔でさえある。米国でも男の子問題は真剣に議論されている。たとえば、学習障害児として認められている男の子は女の子の二倍もある。注意欠陥多動障害は同じように十倍程度の差。臍についても男の子が困難だと感じる母親が多いと報告されている。学習についても安定した成績を示す女の子が多く、読み書きという分野だけではなくて、科学や算数という分野でも成績がよくなってきた。暴力の被害にあうのは男の子（性的な被害を除くと女の子よりも三倍近い）、自殺も四倍から十倍の格差で男の子は死に急ぐ。もちろん加害者となるのも男の子に多い（臨床心理学者、William Pollack, *Real Boys: Rescuing Our Sons from the Myths of Boyhood*、『本当の男の子—男の子らしさ

の神話から私たちの息子を救うー』という書物より)。まとめて言えば「男の子の困難」である。これらに対応すべくいくつかの取り組みがはじまっている。男の子の暴力や攻撃性をなくす予防教育であり、感情をきちんと言葉にできる怒りコントロールのトレーニングである。家族はもとより、学校も地域もこうしたことに敏感になりはじめている。

父性を育むケアの力

-ワーキング・ファーザー

父親不在で、父性の欠如した家庭には母親しかいない。母親はもちろんがんばっているが、父親の出番は男の子問題をとおして考えるとよく見えてくる。日本の父親たちの子育て時間が一日平均 17 分だというのは国際社会においてはひんしゆくものだ。ケアとキャッシュの両方の役割をバランスよく保つためにも、男性のケア能力の開発がまずは大切だ。男の子の困難は自らをケアする能力の開発とも関わっている。ケアとは自己への配慮のことであり、それをもとにして他者への配慮が可能となる。

娘との二人暮らし体験が何度かある。その時は妻と娘がカリフォルニアにいた。子どもだけが学校の関係で先に帰国し、6 月に京都の地元の小学校一年生となった。二ヶ月遅れの新入生だ。あわせて学童保育にも通うこととなった。大学の仕事と市民活動とに忙殺されながらも、子どものための時間を確保しなければならない。学生や地域の人々に保育サポーターを依頼して仕事との両立が可能な日程を調整する。幸いにして、職場である大学と小学校や学童保育所が徒歩数分以内のところなので、時間のロスが少ない。夕食の用意を中心にしてな

んとかやりくりすることとした。掃除、洗濯、炊事、あとかたづけはとくに苦になるわけでもない。本読みにも根気よく付き合う。二人で遊んで、入浴して、お話しながら寝てしまうという一日のリズムができてきた。

しかし困ったことがいくつかある。一つは髪の毛。当時の娘はロングヘアだった。暑いとき、髪を束ねたいという。「三つ編み」にして欲しいというのだ。これは困った。

「知らない世界」に出会い、茫然自失状態。教えている女子学生に聞くのも妙だし、あなたの髪で練習させて欲しいというわけにはいかない。そこで知り合いの美容師に相談した。三色の太めの紐を束ね、それをピンで壁に留め、指を交互にして編み物をするようにして練習すればいいと教えてくれた。子どもの髪はつややかですべりやすいので、霧ふきで濡らしながらやるといいよともアドバイスしてくれた。

毎夜、娘の髪を使って練習することになった。とはいえ、なかなかうまくいかない。

「痛い!、へたくそ!、もういや!」の連発。特に毎朝となると時間がない。そこで、ヘアバンドを使ったり、左右に二つに分ける簡単なやり方でなんとかしのいでいたことを憶えている。それさえも時間がないときは、カチューシャでごまかした。

もうひとつの困りごとは裁縫だった。体操服に名前を書いたゼッケンを縫い付けなければならない。針と糸でできることはボタンつけぐらいだ。私にとってこんな作業は未知なる世界。どうすればいいのかわからず途方に暮れた。二着の体操服にゼッケンを縫い付けるのになんと三時間もかかった。おまけに苦勞のわりには仕上がりがよくない。我流だから仕方ない。暗澹たる気持ちだ。不揃いの縫い跡。しわになる体操

服。洗濯のたびにほつれていく感じがする。ぶつぶついいながらひたすら針を動かし続けた。

世のお母さんたちは本当に何の苦労もなくこうしたことができるのかと不思議に思い、周りの女性たちに聞いてみた。髪を編むことは別にして、裁縫に関しては、嫌だという意見の持ち主も少なくないことがわかった。自分の母にやってもらったという人が結構いた。そうかと納得し、私も母にお願いすることにした。

そういえば、日本の保育園、幼稚園、小学校はなんと手作りを重宝することか。とくに働いている母親はこうした手作り品に愛情を込めてやり、日ごろ、子どもとふれあう時間がない分をカバーしてくださいといわんばかりだ。弁当におやつ、裁縫、バザーの手作り品と次々にいわれる。働く母親にはけっこうきついだろうと、ささやかな経験から想像する。かくして、愛情の証はカタチに表わされなければならないとなる。

でも、手作り主義より手抜き主義の方が子育ては楽だと私は思う。少子社会なので、子ども一人あたりに注がれる愛情の量は多くなる。子どもからすれば息苦しいこともある。ほうっておいても子どもに関心が向かうので、カタチばかりの手作り主義は適当にやり過ぎして、もっと子どもと遊ぶ時間を確保したいなと思いながら、難題に挑戦する日々が続く。三つ編みと裁縫に精出す「ワーキング・ファーザー」である。

男親と父親の「あいだ」―父性を育み、ケアの力をつけることの社会的意味

『XY―男とは何か』(筑摩書房)という書物がある。書いたのはフランスのバダン

テール。彼女の提案は「ママパパ」のすすめである。その本のなかでこんなことを言っている。男性はわが子の誕生を機に父親業を始める。生後数ヶ月の乳飲み子の間、赤ん坊のめんどうをみるために父親は、ママのような父親になる。父親というよりは、男の母親になると言ったほうがいいかもしれない。もちろん、父親業といってもそれは「母親業」のようなものだけでも。

しかし、男が子育てする時にはある格闘をしているという。それは女らしさとの闘いだ。もっと一般化すると、受胎した瞬間から、男の胎児は女性的にならないように闘いをはじめるといってもいい。男の子は女性のお腹のなかで育ち、女性から生まれる。男の子は、母親が放つ女らしさ、自分の中の女らしさ、まったくの受け身という赤ん坊の地位が示す女らしさ、という三つの女らしさに逆らうことでしか生きる道がないという。ようするに、男の道とは女らしさと格闘するいばらの道なのだ。

だから、男性が家事や育児に関わるためには、みずからの内なる女性イメージや女性性あるいは伝統的な男性性とは異なる力能を開発し、総動員しなければならないこととなる。かくして、男性が行う家事と育児の家庭内役割は、男らしさイメージに挑戦する課題となる。なぜならそれは「女らしい仕事」と観念されてきたからだ。育児や家事という他人をケアする行動をとおして自分のなかの女性的役割とされる側面を意識し、思い通りにならない子どもを育てながら、まったくの子ども中心、つまりは受け身となり、かつて自分の母親が自分に対してしていたことと同じことをするというのが育児と家事の男にとって位置づけとなる。これを担うのが「ママパパ」になるということだ。男親から父親への変化であ

り、そこでは父性が育まれるということだ。

これまで身につけてきた男性性とケアする役割の両方を演じることができるような男でなければ、良い父親にはなれない。生殖能力の差異は大きく、男性は親になるのに意識的な努力がいる。父親は父親なりの仕方と意味づけで子育てに関わる。けれどもそれは社会的に作られている「男らしさイメージ」と時には対立する。男性が「ちょっと今日は子どもの面倒みるので早く帰りたい」と上司にいうにはまだまだ勇気がある。ケア機能を発揮するには相当な決意がいるということである。

とはいえそういう闘いをしてまで男性が「ママパパ」になるには意味がある。ケアする父親は子どもにとっては新しい男イメージとなる。安心感もつくりだす。遊んだり食事をしたりして一緒に何かをする協働体験や体感的な記憶も大事だし、父親の働く姿をみることも、そして何よりも父親が子どものことに関心をもっていることへの信頼感、こうしたことから形成される父子関係が重要だと思う。そのことをとおして情緒的な絆が形成されていく。情緒や感情をもとにした、これまでの男性にはない新しい関係をつくることのできる一つのチャンスだと考えるべきなのだ。

冒頭に述べたように男親というのは男性性を意識した言い方である。パワーという言葉がイメージできる。また、父親というのは家族制度の印象があり、大黒柱役割を意味するキャッシュに傾斜している。つまり、男性の生活はパワーとキャッシュに力点があり、ケアから疎外されているといえるだろう。虐待親たちとのグループワークから、男親であることから脱して、徐々に父親であることの大切さを感じていくが、その過程で涵養すべき親性のひとつとして

の父性 fatherhood を浮かびあがらせるようにしている。そこをとおして育児や介護を志向する男性のケアにむかう回路が拓かれていくと思う。こうして身に付く能力は、この文脈ではケアという言葉を使ってきたが、さらに広い言葉へと広がる内容がある。仕事や会社でもそうだが、後進を指導する際の「次世代育成力」と重なる内容をもつと思う。まだまだ硬い言葉だが、しなやかなリーダーシップともいえる。父性として涵養していきたいさまざまな力は応用可能性が広く、社会的にも意味のあることだと思う。その開発はあらゆる場面での男性の感情的知性（EQ）を豊かにしてくれると実感する。

なかむらただし（社会病理学／臨床社会学）

ケアマネの会った 家族たち

7

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

～夫婦～

結婚記念日

「こんにちは。今日はいいお天気だね。」と病室に入ってきたのは、田村さんの奥さんです。田村さんは、入院生活7年目。奥さんは、週に2、3回、電車やバスを乗り継いで2時間以上かけて見舞いにやってきます。9月30日。肌寒い北海道の秋晴れの日でした。

田村さんは、寝たきり状態の体で、話しをすることも食べることもできません。できるのは、わずかに指先を動かすことと、まばたき位です。それでも、いつものように奥さんが病室に入ってくると、奥さんの方に目をむけます。奥さんが上着を脱ぎ手荷物を棚にしまうと何かを催促するようにじっと視線を送っています。

奥さんは、廊下に出て病棟の看護師に挨拶する

と車椅子に乗せて欲しいと頼みます。看護師と介護士が田村さんの元へやってくると、二人がかりでベッドからリクライニングの車いすへ移乗させてくれました。その後、奥さんは寒くないように、膝かけやマフラーを田村さんに巻きました。看護師が「田村さん、いいですね。奥さんが来るのを待っていましたもんね。お散歩行ってきました。」と言葉をかけます。

「今日はね、実は結婚記念日なの。忘れていたのだけれど、朝、娘が教えてくれてね。思い出したのよ。もう47年。いろいろあったけれど、結婚して47年もたつの。」奥さんはちょっと嬉しそうに看護師に話しました。「47年。すごい。あと3年で金婚式ですね。」看護師が言葉をかけると、「そうだね、あと3年頑張ってくれるかな。」とご主人の方を見た。田村さんは表情を変えずに車椅子に座って窓の外を見ていた。

その後、二人は広い病院内を車椅子で散歩し、屋上から見える札幌の景色を眺めた。言葉を発す

ることのできない田村さんの車椅子を押し、屋上では澄み渡る景色を眺めながら、奥さんは、田村さんに話しかけます。そして、持ってきたカセットから田村さんの好きな曲を流し、口ずさみます。入院生活7年目の田村さんご夫婦の今です。それは静かで穏やかな夫婦の時間です。「あと3年。どうかな、それまで一緒にいられるかな」奥さんは黙って景色を眺める田村さんの横顔をみつめた。

足跡

田村さんは、入院する前は奥さんとの二人暮らし。週2回のディケア利用は奥さんのレスパイトが目的でした。当時、咽頭癌の後遺症で嚥下機能が落ちていた田村さんは手術で気管切開をしていました。食事にも時間がかかり、食後の吸引などの処置も奥さんが行います。またパーキンソン病でもあり体の動きが思うようにならない田村さんの動作を一つ一つ介護していたのは奥さんです。それは、65歳近くなった奥さんにとっては疲れる毎日でもあります。60歳で定年退職した田村さんの自宅での介護を5年ほど奥さんが行っていました。時に壮絶でした。

時々訪れる娘たちが、発語不明瞭な田村さんの話に時間をかけて聴いていると、「本人、本人って、世話をしている者の言葉は誰も聴いてくれないの」と叫ぶこともありました。

今のお二人の姿からは想像ができませんが、田村さんご夫婦の歴史は決して楽しい思い出ばかりではないのです。長年の夫婦の葛藤が介護の中にも時には「対立」という形で現れることもありました。

田村さんは、高校の教員でした。そして同じ高校に代替教員としてやってきた奥さんと出会い結婚しました。やがて二人の娘が生まれ奥さんの教員生活も終了しましたが、小さな町では珍しく「バレエ」を子供たちに教えていた奥さんと、田村さ

んは意見のぶつかり合いが多くなりました。時代の先を行く奥さんと、古い考え方を持った田村さんとの戦いです。結婚後の生活を奥さんは語ります。

「あまりにも違い過ぎた。育った環境も、考え方も。考えの違いはとことんぶつかった。若かった勢いもあって、それは激しいぶつかり合いだった。子供が幼い時には離婚も考えたことがあったけれど、子どもが可哀想だという自分の価値観で離婚の選択はできなかった。でも、度々激しくぶつかっては、家を出たり入ったり繰り返しながら、生活は続いてきた。」と。夫婦が激しくぶつかりながらも、田村さんの家庭は続いた。そんな中、思ったより早くに次女が高校の途中から自宅を離れ生活することになったので、夫婦二人になる時期も想像よりは早くに迎えた。そして、次女が家を出た後は、夫婦のぶつかり合いも減っていったと言う。

激しさから静かな夫婦の時間

田村さんが、咽頭癌の宣告を受けたのは、50歳の頃だった。それから間もなく、パーキンソン病の診断もついた。まだ、教員をしながら通院が始まったが、パーキンソン病という診断を聞いて、いつかは寝たきりになってしまうのか、という思いも奥さんの中にはあった。けれども、今、ベッドの上で寝たきりで食べることも、話すこともできず、いつも何かを思い、涙を流している、こんな状態になるとはその時は勿論想像はできなかった。少しずつ介護の量が増えていった時にも、夫婦喧嘩もしながら、介護は自分が担うのは当然のことだと思っていた。どんなに激しくぶつかり合った相手でも、病気を前に無力になった状態では手を貸していくしかないと思った。それは昔、祖父母や親の代ではそうやって、老いたり弱ったりしていく家族を家で看たり、看とったりしていた

時代を見ていたからだと言います。最期の時を迎えるまで、残った者が看ていた時代の価値観なのでしょう。

今、奥さんが田村さんの元へ見舞いにやってきた時には、田村さんが長年教員生活をしてきた中での思い出話がされます。田村さんにとっての思い出は、教員時代、生徒や同僚教員との出来事です。古いアルバムを見せると、写真をじっと眺め、その時々エピソードを奥さんが話すと、田村さんの表情はふっと緩み、笑顔になります。夫婦が共有できる楽しかった思い出は、教員とその妻の思い出なのです。

奥さんはこう語ります。たくさんぶつかって戦ってきた相手が病気になってしまった。今、考えると言うべきことを言い合ったから、今は過去に抱いた相手への‘憎しみ’みたいな感情は一切なくなった。今は、面白かった、楽しかった昔話をして、にこりとした笑顔を見られることが大事だと思っています。

何も言葉を発しない夫に対し、切ないのだろうか、悲しいのだろうか、心の中で泣いているのだろうか、言いたいことが言えないのはどれほど辛いことだろうと胸が苦しくなるというのは、かつて互いの想いをさらけ出しぶつかりあって、わかりあった今があるからでしょう。

今は週に2、3回2時間以上もかけて見舞に通う奥さんだが、田村さんが入院して3年程たった頃です。「どんな状態でも、寝たきりでもいいから、一緒にいて欲しかった。一人になるのは嫌だ」と思ふ時期があった。」と話します。そう思った頃には病院への見舞いの足も遠のいてしまい、しばらく家で一人きりの時間を過ごしていたそうです。心配してくれたきょうだいが、旅行に誘ってくれました。けれども、「誰かと一緒になければ歩けなくなってしまうのは嫌だ。」と思った奥さんは、このままではダメだと思い一人で外国旅行に出かけました。その事で、気持ちが一転でき、「明るい気

持ちで病院に見舞いに行こう。自分が行けるうちは病院に行って笑顔の時間を作ろう。」そんな風に思えるようになったそうです。

今、田村さんの奥さんは、孫に教えてもらった携帯メールできょうだいや娘とのやりとりができるようになり、声をかけてくれる人の誘いに従って、フォークダンスや歌声サークルへの参加もしています。「私が元気なうちはこんな生き方だと思う。自分自身が元気でいなければ見舞いにも行けない。無理はしないで、できるうちは、今の形を続けていきたいと思う。」と奥さんは話します。

「夫婦」時々「両親」

奥さんから夫婦の思い出話を2時間ほど聞きながら、話される内容が夫婦の若いころの戦い(夫婦喧嘩)や、教員をしていた田村さんとそれに協力する奥さんの話が大半をしめていました。お二人には二人の娘がいるのです。娘たちの話はあまり出てきません。

「家族の思い出と言ったらどんなことが浮かびますか。」と質問してみました。すると、少し考えながら奥さんは話しました。

家族の思い出。それは、車の免許を遅くにとった田村さんが、車を購入してから、道内の温泉巡りに行ったこと。二人の娘が、その時々大きな問題にぶつかった時には、例え夫婦が冷戦状態に陥っていた時にも、休戦し娘のために力を合わせたこと、そんな思い出が家族の思い出としてあっさりと言られるのです。あまりにも、家族全体の思い出の薄さに、夫婦の壮絶バトルは娘たちにはどう映っていたのだろうか投げかけてみました。

「子供たちは、あんな家庭では嫌だったと思うけれど、今はどうしようもないし。子供には嫌な思いをさせてしまったけれど、生きるって大変な事で、それをありのままに見せてしまっていたと思う。憎しみをぶつけ合ったこともあったけれど、

今は全くその感情はないし、面白い人生だったと
感じています。」

「夫婦」とは何か、奥さんは話します。「自分の
考えを話し合い、ぶつかってもいいから納得する
まで話をして、十分納得できたら、最期まで共に
歩いていく。話合いを徹底的にできたからこれま
で一緒にいられたし、自分の人生には納得してい
ます。それが「夫婦」ということかな。」と。

田村さん夫婦は、結婚して子どもが生まれても、
「夫婦」という関係はずっと続いていて、そんな
二人に、娘たちが時々体を張って何かの行動を起
こしていたのだと思います。娘たちが何か問題を
発信した時、「夫婦」の関係を休戦し「親」として
共に力を合わせたのでしょう。配分としては「夫
婦時々親」だったような気がします。

ケアマネの卵として初めて出会った夫婦

田村さんは、私が介護支援専門員実務講習受講
試験に合格し、実務講習の際に、介護認定調査や
アセスメント、ケアプラン作成の演習のための‘モ
デル’としてお願いし協力してもらいました。当
時の田村さんは、少しずつ弱って体の自由も奪わ
れていく状態の中でした。かすれた声と筆談で会
話をしました。これから、ケアマネジャーになる
私には「利用者の話を、最後までゆっくり聴いて
やりなさい。はやとちりして解釈しないように、
話しが終わるまでしっかり聴くこと。」と言いま
した。その言葉は今でも私の心に残っています。

奥さんに今回の「夫婦」をテーマにインタビュ
ーした時には、実に多弁に語る夫婦の思い出と比
べ、娘たちの話題の少なさに寂しさを感じました。
話を聞きながら、「そうか、ずっと夫婦だったんだ。
親ではなく夫婦として歩んできた二人だったん
だ。」と感じました。

話を聞きながら、語られる思い出の中に自分た
ちが登場しないことに、幼かった頃、抱いていた

気持ちがもう一度蘇りました。「私は寂しかったよ。
仲のよい両親の下で育ちたかったよ。ずっと寂し
かったよ。」

田村さんと奥さんは、私の両親です。それでも、
私の言葉に「でも、仕方なかったよ。」という母。
そして、改めて、母と私は長いこと、がちゃがち
ゃしていた当時の家庭を思い起こしました。私の
記憶には、父と母はいつも戦争だった。一度だけ、
私の給食のメニューが、パンとお汁粉とハムだっ
たという話を私が寝ている枕もとで二人が話して
いて、「学校はずい分おかしなメニューを出すもの
だ」と笑っている会話を記憶している。幼い私が
記憶している両親の笑い声はそれだけだ。

今、父には言葉も、体を動かす自由はない。そ
の代わり、夫婦には穏やかな時間がある。

「あんなに、激しい人生を歩んだ二人が今は嘘
のような穏やかな時間を過ごせて、二人は幸せだ
ね。」とやや皮肉めいて母に言ってみた。すると、
間髪を入れず、「うん。幸せだったね。」とあっけ
らかんとした母の一言。

笑った。そして、今、この原稿を書きながら私
は大切なことを思い出した。私はその生い立ちゆ
えに苦しい思いをたくさんしてきた。今でも、悲
しさや寂しさを手放せずにいる内なる子供を抱え
ている。けれど、幼かった私の願いはただ一つ。

「両親に仲良くしてもらいたい。」今、あの頃の私
の願いは叶っているのだ。

寝たきりになってしまった父の残された時間が、
夫婦にとって穏やかで楽しくありますように、今、
娘として願っています。

ケアマネの卵として初めて出会った、田村さん
ご夫婦の物語でした。

街場の就活論 vol.7

～新卒採用に今何が起きているのか～

親子の会話が持つ影響力

仕事で乙武さんと会いました。そして色々話す中で「障害者を見る眼」の話になりました。当然のことですが、乙武さんは街を歩いていると「ジロジロ」と見られます。五体不満足で世間に知られるようになるはるか前から「ジロジロ」と見られます。当然です。どちらかという、見ない方が、不自然です。「ジロジロ」「ジロジロ」。乙武さんから言わせると「いつものこと」だそうです。



ただ、本当に「ジロジロ」見るのは実は子どもたちで、大人たちは「チラチラ」見るのだといいます。さらに子どもたちは、「なんであの、手も足もないの～？」と大きな声で周囲に尋ねるそうです。このような場面に遭遇したら、あなたはどうか対応しますか？

一番多い反応は「こら！そんなに人をジロジロ見るものではありません」「すみません、許してね

と双方に声をかけ去りゆくパターンだと言います。確かに、一般的に他人を「ジロジロ」見るのは礼儀がいいとは言えないことかもしれません。ただ、その度に乙武さんは「あー、せっかく障害者のことを知ってもらったのに…」と残念に思うそうです。「手と足がない人が妙な機械に乗って動いていたら、『なんだ!?!』って思うのが当然の反応なのにね」と笑っていました。

学生と進路の話をしていると、同じような感覚に陥ることがあります。それは学生の話ではなく、保護者の反応に対してです。例えば「僕は就職することも意味もよくわからないし、専門学校にでも行こうと思っている」というような学生がいた場合（結構います）。保護者の反応は「何を甘いコト言ってるの！そんなお金うちにはない！通うんなら自分で稼いで通いや！」と断ち切るか、「将来なりたいものに近づけるなら、まあ出せるうちは支援しよう」と受け入れるかどちらが多いようです。

その回答を持って「親はこう言っているのですが」と僕のもとに相談に来られたりします。これは、「障害」が「礼儀」の話に置き換わったのと同じで、「進路」の話が「お金」の話に置き換わっています。

大学3年生になるまで手とお金をかけて育て上げて、ようやく「進路」や「社会」のことに少し興味を持ち始めた矢先。将来のコト、社会人として生きてきた自身のコト、我が子への願い・想い、誇れることばかりではないかもしれませんが、そんなことを語るにようやくやってきたチャンス！、なのにここで「進路」の話をできない保護者が多いと思うのです。

結論は本人が出さないといけないし、結果も本人が受け入れないといけないことですが、そのきっかけを保護者がつくることはできます。せっかく「進路」や「キャリア」の話をしたがついてのに、どうして一般的で大して中身の無いアドバイスに置き換えてしまうのか、もったいなくて仕方ありません。



もちろんすべての保護者がそうだとは思いませんし、もしかしたらほんの一部のそんな親を持つ学生と、僕が触れ合う機会がたまたま多いだけかもしれません。ただ、実感としてはそうなのです。

例えば団家では「20 歳になったら父親と二人で海外旅行をする」というルールがありました。子どもにとっては、面倒な親父との会話をそこそこにスルーできれば、親持ちで好きな国に連れて

行ってもらえるのですから「ラッキー」な旅ですが、親の意図はそういうところにあったのかもしれないと、思います。

とある文具屋さんのハナシ

ある雑誌の中で、私もよく知る、小さな街の文具屋さんのオーナーが、こんなことを言っていました。

「文具はとにかく細かいものが多いのですが、雑に入れてもきれいに見えるように、側（がわ）をきちんと作っておくのが大事です。だから店を開くときには、何回も打ち合わせをしました」

実際に店に行くと、確かに個別にはバラバラなものが入っているのですが、全体は整然としています。美しい趣のあるお店です。100 円のものも、200 円で売れてしまいそうなお店です。これを見て、キャリアも同じだなと思いました。

人生というほど大きな括りではなく、例えば「仕事」だけにフォーカスしても、本当に様々なことが起こります。そして、日常は個人に気遣いをすることなく、猛スピードで過ぎ去っていきます。社会の中で生きていくということは、このスピードにある程度歩調を合わせるということだと思っています。エスカレーターで止まろうが歩こうが自由ですが「それでも前に進んでいく」という事実だけは動かしようがありません。

そして年月が経ち、ふと足跡を振り返った時に、自身のキャリアという箱に何が入っているか、それは、到達してみないと、はっきりとは分からないものだと思います。もちろん「あんな仕事がしたい」「こんなスキルを身に付けたい」と思いを馳

せ、それに向かって突き進むのが理想的ですが、その希望がすべて叶うことはありません。だからこそ、最初に「側をきちんと作っておく」ことが大事だと思います。



キャリア教育の本質は、ここにあると思います。例えば文具屋さんの「側」を例えに続けると、その中に何が入るのか「開店してみないとわからない」という前提があります。だからこそ「たぶんこのくらいのサイズのモノが入るだろう」と何回も考え、話し合い、側を作っていきます。そして、結果的によくできた「側」は、どんな仕入れにも臨機応変に向き合える「側」になっています。

キャリアに置き換えると「この先、どんな風になれそうか、なりたいか」。これを考えることが、文具屋が「側」を考えることと同じだと思います。そして、そこそこの「側」を作っておけば、紆余曲折の中で過ぎ行く「仕事」と、それで身につくキャリアの数々が、振り返れば整理された何かにつながっていくと思います。

ただ、偏差値教育で育ってきた学生たちに、これを「体感」させるのは、なかなか難しいこともあります。明確な目標がないと、動くことが

できません。甲子園を目指せ！と言われれば、素振り 1,000 回も苦にならなかった人が、就職活動時期に、何から手をつけていいかわからなくなり、立ち止まってしまいます。

そんな凝り固まった頭を打破する例として、幼稚園や保育園の砂場の話をすることがあります。子どもたちは、砂場を前にして「遊び方がわからない」とは言いません。何を作ればいいかわからないから動けないとは言いません。まれに保護者の影響か「手が汚れるのが嫌だ」と敬遠する子はいますが、砂場を前に立ちすくむ子供を見たら、あなたはどんな風に思いますか？ 学生に聞かけると「それはちょっと可哀そうな子どもだ」と思うようです。その姿が「今のあなたたちに被ります」という呼びかけに、反応できる子は、そこからがスタートです。

「プリズム」

百田尚樹さんという方が書いた「プリズム」という本を読んでいた。この中に、こんなくだりが出てきます。家庭教師をする 32 歳の女性と、小学校 5 年生の生徒の会話です。

「将来は何になりたいの？」

「みんなそれ聞くね。親戚のおじさんとか、パパの会社の人とか、僕に会ったいていの人が聞いてくる。大人はどうしていつも子供にそんなことを聞くのかなあ」

「修一君はどう思うの？」

「——。なりたいものに、自分がなれなかったからじゃないかな」

僕はこれを見て、一瞬「そうかもな、うまいこと言うな」と思いました。小説の一節ですから、

それを取り上げてどうこう言うのもおかしい話かもしれませんが、しかしその後「いや、待てよ。どちらかといえば、上手く行った人が体験から来るアドバイスとして言う話だ」と思いました。

「将来どうになりたい?」「夢は何?」は、気付きを与える投げ掛けとしては、それほど強いパワーを持つ言葉ではないかもしれませんが。「どうやって飯を食うのだ?」「結婚はいつしたい?」「老後は?」、こんな質問の方が、アクションに落としやすいのも事実でしょう。保険会社の営業の王道ですネ。

でもやはり、僕は「将来」に夢を馳せて考え続けることが、人間の動力になる気がしてなりません。そして、世の中で言う成功を成し遂げた人や、自分の人生を謳歌したと胸を張って亡くなっていく先輩たちは、その動力が「まだ見ぬ自身の可能性への追及」つまり「夢を見る力」だったように思います。だからきっと、「将来どうになりたい?」「夢は何?」と、聞き続けるのではないかと思います。

答えが返ってくることを期待しているわけではありません。その質問をすることが大切だとわかっている人が、投げ掛ける質問。それがこれらの質問ではないかと僕は思います。だからこの質問に「答え」を求めてはいけなのではないか。質問をすることがメッセージに他ならないと思うからです。ところが、大して話に身がない人ほど「夢はもっと具体的に!」などと叫び、答えを出させようとする傾向があるように思います。



ある幼稚園の園長から話を聞いて以来、僕は自分の子どもにできるだけ「どうして?」と聞くようにしています。「カエルはどうして緑なの?」「月はどうして丸いの?」「お母さんはどうして女の人しかねないの?」。子どもは、正解とは程遠い回答を、小さな頭で考えて投げてきます。そのときの僕の答えはただひとつ。「なるほど。そうかもしれへんな」。この不思議の連続が、将来の学ぶ気持ちを育むのだと、教えられました。

小学校にあがって、ある日「あっ!幼稚園で園長先生に聞かれたどうして?の答えがこれだった!」と気付く日が来ます。その発見と気付きが、学ぶ楽しさの土壌になるのだと言います。公式を教えて100点を取らせるよりも、0点でも学ぶ楽しさを教えた方が、何十倍もその子の人生は豊かになる。これは「魚を買い与えた恩は食べればなくなるが、魚の捕り方を教えた恩は一生忘れない」という中国の故事にも通じます。

「夢はなに?」「将来どうになりたい?」。この質問には、これと同じようなモノが含まれている気がします。



心理療法が始まるまで

(7)

ーコミュニティと病院でー

藤 信子

先号で、「自分の経験を医療スタッフをはじめ周り人と話せる場があることは重要なこと」と書いたが、今回はこのことについて、もう少し考えてみようと思う。この連載の(2)に患者さんが主体的にその人なりの「問題」を考える必要があるけれど、忙しい病院でそのような時間はとれているのだろうかと書いた。心理療法は、対話をとおして自分で気付いていないことに、気付いていく過程である、私は私たちを取り巻く社会、環境などで私が束縛されていることに気付いたり、私の中に受け継いでいる対人関係について意識していく過程だとも言えるだろう(藤2011)。そういう心理療法が今は精神医療の中で、あまり大切だとは思われなくなってい

るようだ。

米国では精神分析療法に対しては、保険会社の保険はきかなくなった久しい。だから治療者は比較的短時間で有効な治療法を開発することになる。エビデンスベースドということは、効果のある治療を求めるという点から見ると当たり前だと思える。しかし、エビデンスの求めやすい治療法や研究と、時間がかかり結果のにくいものもあるのではないだろうか。現在の米国の精神医学の診断はDSMに基づいており、日本でもそれに基づくことが共通用語になっているようだ。現在示している症状、患者さんが訴える内容だけに基づいて話を聞いて診断が行われると、病気の特徴が見えにくくなり、どんな患者さん

がどんな体験をしているか分かりにくいようなことが、事例を聞いているときに感じることもある。DSM の診断は、ある症状があるかないかというように見ていくので、統合失調症の場合、陽性症状（シュナイダーの1級症状）を見ることになるらしい。1級症状の幻聴や妄想は、精神分裂病でなくとも存在するのだから、精神分裂病（統合失調症）の診断は、ブロイラーの基本症状（連合弛緩、両価性、自閉、感情の平板化）で考えるのだと、昔（本当に昔になってしまった）教えられた私には、そんなに病気を見る観点がずれてしまったのかと驚いてしまう。連合弛緩をはじめ、基本症状は思考の問題だと言えるけれど、それは明確でないため、エビデンスと言う考え方に馴染まないのだとは、ある精神科医に聞いた話である。

精神科医は診断に際して、患者の話のどこにポイントを置いているのだろうかと思ふ余計なことを考えてみたくなる。思考に焦点を当てるとしたら、何故この人はそんな風に考えるのかと思ひ、聞いてみるのだろうかと思ふ。また昔の話だけれど、妄想は思考の内容ではなく「思路の問題」である、と教えられた、考える筋道としてどうなっているかを聞くようにといわれた。以前はこのような思考についての精神病理学が盛んだったが、今はもう見かけない。現在このような研究をしているのは、英国の認知行動療法を開発している、Garety たちだろうか。どうしてそのように考

えるかが問題でなく、妄想か幻聴があることさえわかればよいのなら、話の聞き方は変わってくるのだろう。そうすると、患者の思考について注意深く慎重に聞くことはあまり大事ではなくなり、聞き方に対する関心は減るのではないだろうか。聞き方は訓練がいることもなくなるのではないだろうか。

話の筋道を追うということ、この人はどうしてそのように考えるのだろう、という関心は、どこかに「私は普通このような筋道で考えるけれど、何故この人は、ここでそのように考えるのだろう」ということを含んでいると思う。この「私」が入ってくところが、エビデンスから離れると思われることかもしれない。「私」が感じたり、考えたりすることを手がかりに相手(患者)を理解することは、人によって差があるので、そんなことは大きな集団で統計的に扱えないということだろうか？

統合失調症は脳内の生化学異常なので、それに効く薬物を出すのです、と言われるだろう。脳内ではそうだろうけれど、体験しているその人がいる。その人が自分に起きている体験を考えたり、まとめたりすることをせずにどうして自分の病気について考えられるのだろう。この主観的な側面については、現在はあまり大事にはされないのだろうか。ここでやっと先号に書いたことに戻る。患者さんが自分の体験を話したいという雰囲気の治療環境は、どのように作られているのだろうと、

考えている。〇〇療法と名のつく療法（この場合特定の療法をイメージしてほしい、心理療法というのは、普通名詞のようなイメージなのでこれには含まれない）は確かに増えているけれど、本人が自分の問題を話せるように、見つけ出せるまでが時間がかかることが多い場合、その〇〇療法の目標は何になるのだろう。誰にでも合いやすい目標から始めるとしても、それで解決するわけではないだろう。誰にでも合う治療目標ということを否定するわけではない。私たちは人と共通する問題をたくさん抱えているので、それは有効だと思う。一緒に考えながら、自分の問題を探していくことは、そう短時間にはできそうに無いと思うけれど、どうだろうか。〇〇療法の時間だけでなく、いろんな場で話せて、自分の考えること、話すことばを見つけたしていく場が大切なのだと思う。心配しているのは、今の精神医療が心理療法のような時間のかかる治療に、関心を示さないとしたら、患者さんの悩みは誰が聞くのかと思ってしまう。〇〇療法の対象は症状で（訴えている症状だけれど）、悩みではないところが難しいところなのだと思う。精神科病院は、病院なので病気を治すのであって、悩みを聞くのではない、そういう主観的な取り上げ方はしないといわれるのではないかと、ふと思ってしまった。でも悩みが問題というだけでなく、悩みを聞いていくことを重ねないと、問題にたどり着かないこともあると思う。

文献：藤 信子（2011）私の・外のグループ、内のグループ．集団精神療法 27（2）

主役は、28歳の男性 A の部屋で、二人でシンナーを吸引しているところを警察に補導された15歳中3の女兒です。Aとは結婚の約束をしているといいます。本児はやせていておとなしく、影が薄い感じ。頭痛や不眠を訴えるも幻覚・妄想は認めていません。食事は極めて小食。一時保護中の検査では、知的に軽度の障害がありました。

母は広島県で生まれ、小1のとき母方祖父母が離婚、祖母に引き取られました。母も、小学校時代から万引き・深夜徘徊で何度か児童相談所に一時保護されています。中学1年で家出し、臨県に住む祖父のところへ転がり込み、そちらの中学校に転校しました。高校在学中に、暴力団関係者を自称する本児の実父と知り合って同棲し、高校は中退しました。18歳のとき、本児を妊娠して出産。妹を出産直後に実父と別れ、祖母を頼って広島県に戻りました。祖父母からすれば、晴天の霹靂です。それ以降、本児の実父・祖父とは音信不通です。

翌年、母は二番目の男性と付き合いようになり、毎日足繁く通います。子育てはせず、本児や妹の世話は祖母がしました。本児は、この男性が父親だと思っていたようです。この男性はアルコールが入ると乱暴になりますが、本児に暴力をふるったことはありません。

祖母は母とは言い争いをしても、孫たちにはやさしかったようです。やがて二番目の男性との間に男児が生まれるも認知してもらえず、男とは疎遠になりました。母は異父弟を引き取り、祖母に託しました。

このころから徐々に本児が不安定となり、小1半ばには、徘徊・ケンカ・盗み等を頻発するようになりました。母はあいかわずふらふらと家を空け、学校との連絡はすべて祖母がしていました。当時、本児は『母親とはそういうもの』と思っていたようです。収入は祖母の内職と児童手当で、ギリギリの生活でした。

その後、母は出会い系サイトで知り合った三番目の男性と交際を始めます。そして本児が小6のとき、その男性が住む神奈川県に引っ越しました。本児としては卒業まで祖母宅にいたかったのですが、妹弟が行くというので従いました。

母はその男性とは同居せず、近くに住んで生活保護を受けました。男性は訪問販売をして全国を転々とする生活で、不在がちでした。

本児は、この男性を極端に嫌いました。二人きりになることを極端に避け、母親が不在の夜には夜遅くまで徘徊しました。家出・リストカット・怠学等により、神奈川県の児童相談所に一時保護されこともあります。しかし、児童相談所ではほとんど胸の内を語っていません。このときは、母が男性と別れることを条件に家庭引き取りとなっています。

やがて第4子(男児)を産みましたが、男性が帰ってこないため広島に戻り、また祖母のもとに転がり込みました。神奈川県での2年近くは、実質、次女が異父弟たちのめんどうをみていました。

広島でも、子どもが多く体調もよくないと生活保護を受けました。あいかわず母はふらふらと落ち着かず、子育ての中心は祖母でした。家の中はごみが散乱していて足の踏み場もない状態です。なお、母と三番目の男性との関係は現在も切れておらず、ときどきあっているようです。あるとき、本児が男性と別れてほしいと頼んだところ、「そんなことを言うならあんたの面倒見ない」と言われ諦めたとのことでした。

本児は弟たちにきつくあたることはしませんが、面倒を見ることもほとんどありません。それに対し次女は、言葉遣いや行動が荒々しく異父弟たちにきつくあたりますが、面倒はよくみます。次女には補導歴はありません。本児と次女の関係は悪く、いつもいがみあっています。

広島でも夜間徘徊をしているところを補導され、一時保護されました。家庭引き取りとなったものの中学校に溶け込めず、不登校状態となりました。そのころ退学傾向のBと仲良くなり、Bの遊び仲間Aと知り合います。Aは無職で、過去に恐喝や詐欺で2度刑務所に入っています。

やがてAから告白されて受け入れ、Aの家に入り浸るようになります。学校は、A宅からときどき登校する状況でした。母はこのことに無関心で、学校もAとのことは把握していませんでした。

やがてAは、母に対し本児と一緒に住みたいと申し入れます。母は『本児がそれを望み、Aが定職に就くならよい』と返答しました。しかしAは仕事をせず生活保護を受け、昼間からシンナーを吸引してフラフラするありさまでした。

本児は一緒に住むようになって、Aのシンナー依存の状況にショックを受けました。そして、自分が頑張るとめなければAは死んでしまうと考え、説得したりシンナーを隠したり必死を努力しました。しかし、Aは思いとどまるどころか一緒に吸いながらセックスをしようとしつこく誘うばかりで、ついに好奇心に負けてしまいました。本児はシンナーを吸うことにためらいながらも、嫌われたくない、帰るところもない、という思いで同棲を続けていたようです。

あるとき、近所の住民からの通報でAの部屋に警察が踏み込みました。Aは現行犯で逮捕、本児は家庭裁判所送致となりました。この後、本児は初めて三番目の男性からレイプ被害を受けていたことを調査官に打ち明けました。

7. 家族の問題理解・仮説を見立てる

「ここからいよいよ見立てに入ります。問題を理解して仮説を立てるのは援助者だけではありません。というより、家族の方が先に見立てています。それはとても貴重な情報となりますが、そう簡単には語ってくれるものではありません。

これまでの手順は、家族に見立てを披露してもらうためにも欠かせないプロセスでした。不安や怒りを受け止め解決努力をねぎらってくれたのだから、仮説だって真摯に受け止めてくれるはずと家族は期待するでしょう。そして、通り一遍ではない深い物語を打ち明けようという気持ちに傾いてくれるわけです、おそらく。

家族のよっては、問題の解決以上に自分の仮説への賛同を望んでいたりします。でも、こればかりは無条件に受け入れるわけにはいきません。なにしろ、問題の根幹をなしている部分ですから。

それは後の話として、まずみなさんに『本児は、いま起きていることをどのように理解しているか』を考えてもらいます。本児になったつもりで、この家で育ち、そこを出て、Aと生活するにいたった物語を組み立ててください」。

(各班の意見を報告)

「はい、ありがとうございました。みんなで一緒にこの家族をみてきても、班によってずいぶん感じ方が違うんですね。この場で、あなたの人生はこんな風に何通りにも見えるんだって、彼女に聞かせてあげたい気がします。

さて、わたしは次のように見立てました。

表7 本児の問題理解・仮説

いつも子どものそばにいて、自分を犠牲にしても子どもを守るのが母親だと思う。自分の母は、ずっと好き放題をして生きてきた。あの人の心には、子どもは住んでいない。

母は好きじゃない。むしろ嫌い。けど、憎いのとは違う。そんなものかなって思うだけ。家族は愛し合うものと思うけど、うちは違う。自分は母みたいになりたくないから、家を出た。このままだと、母と同じになる気がして…。

Aというと、いろんなことを忘れられる。Aとはお互いに頼りあえる関係、こんなのは初めて。だから嫌われたくない、好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことがない。

Aとの関係は命がけで守るつもり。Aとのことは、自分がしっかりすることで乗り越えられる。こういうのが家族であり、人と人の付き合いだと思う。

間違わないでください、私にはそう見えるということであって、所詮、推測ですから」。

8. 家族の枠 (人生観・信念) を感じ取る

「前にも言いましたが、わたしたちが“問題行動”と呼ぶものには、家族の解決努力という側面があります。今回のことだって、あきらかに逸脱的な行動で診断的には素行障害ということになるのだけど、本児にしてみれば『家族とはなにか、人を愛するとはどういうことか』を追求する営みです。

Aへの傾斜は家族から距離を置き、家族に変わる支えを求めた必然の結果であり、シンナーとの妥協はレイプ環境に比べたら比較にならない選択だったでしょう。こういった行動選択の背景には、本児が生きてきた枠組み・人生観が横たわっています。

この枠が面接で語られることは、めったにありません。わたしたち子どもの精神科領域では、特にそうです。枠は、基本的に援助者が感じ取るものだと思います。アンダーウェアですから、見せてくださいというものじゃない。

枠は人生観・社会観・生活信条などが混ざったものですが、総論が枠でさきほどの仮説が各論と考えればわかりやすいかもしれません。さて、彼女はどんな枠組みで生きているのか、そこを感じとりましょう。これは短くまとめたほうがいいですね。どうぞ、ゆっくり時間をかけて話し合ってください」。

「」。

(各班の報告を聴く)

「難しかったですか？ 先の問題理解・仮説以上に隠れていますからね。何度も言いますが、正解なんてわかりません。当の本人にさえ分からないかもしれない。私たちひとりひとりが、彼女のことをどう感じているか、そこに行き着くと思います。わたしは、次のように感じました」。

表8 本児の枠組み

母親は身勝手だし、兄弟はバラバラ。自分の家族は、家族とは言えない。そうである以上、家族をあてにせず自分が強くなって道を切り開いて生きるしかない。
--

「“家族をあてにてはいけない”は家族への恨みや絶望ではなく、自分に言い聞かせる叱咤激励です。彼女の半生から導かれた、この年齢にしては途方もなく重い枠です。基本的に、援助者がどうこうできるものではないでしょう。ただ、もしいまここにある問題を納得のいく形で乗り越えるたら、その結果、背後の枠も変わる可能性はあると思います」。

9 仮説を置き換えて再構成する (図2)

「見立てが終わったら、いよいよ具体的な援助です。目の前にいる人が着用しているシャツ＝問題理解・仮説について、援助者なりのアイディアを出さねばなりません。新しいシャツをすすめるか、今着ているシャツを生かす方向でいくか、仕立屋の判断のしどころです。私は、『お客のシャツを新調するとしたらどんなデザインになるだろう』から入る医療モデル的なクセを持っています。

先ほども言いましたように、お客は愛着のある自分シャツを仕立屋が評価してくれるものと期待しています。そこに

シャツの新調をすすめられたら、強く抵抗するのは当然でしょう。その気持ちに整理をつるのは、仕立屋のセンス、援助者の専門性への信頼以外にありません。

こうした専門性をもった職種の末尾にはたいてい師・官・司といった文字が着いていて、診断・治療とか指導・教育を行います。彼らは、根拠を持って自分の考えを推し進めます。



ところが、われわれの領域には医療・教育のような目に見える専門性はありません。家族の物語の専門家は家族に他ならないからです。そこで、家族の仮説をこちらのものに置き換えるために、図2のような手順を踏みます。

まず家族の「〇〇が問題」という仮説を受け入れず、「いいえ、わたしは問題は△△だと思います」と援助者の説を説明します。あわせて具体的に解決策を提案し、心理教育的に伝えます。もしそれらが家族の腑に落ちると、新しい解決策が実行に移されるというわけです。

そうすると家族の新しい相互作用が生まれ、家族システムは変化していきます。もしかしたら、家族の枠も変わるかもしれません。しかし、家族の腑に落ちなければなにも始まりません。

思うに、心の領域では仮説の多くは人間関係のもつれをもって組み立てられています。虐待や養育困難だったら親子の関係、離婚や別居であれば夫婦の関係、学校不適応なら教師や友人との関係、のように。この人間関係原因説は、信頼とか愛情といった情緒的かつ主観的で当事者にしか分からない要素からなっています。

自分にしか分からないと思っているところに別の説を提示するのですから、似た仮説での置き換えは難しいです。思いもよらないほうが、かえって腑に落ちやすい気がします。わたしはよく、「人間関係が原因」説を「コミュニケーションが原因」説に置き換えます。家族のコミュニケーションがうまくいってないから、結果として不信や誤解が生まれるのだという理屈です。

情緒的なものを排した目新しさと、明日を描くノウハウ満載の解決策をセットにします。そんなことなら自分にもできそう、そう思ってもらえたら大成功です。その際の言い回しを、表9にあげてみました」。

表9 よく使う言い回し

『そのときは、どんなふうに言いましたか？』
『もしまた同じようなことがあったとして、同じようなことを言ったらどうなるでしょうか？』
『じゃあ、今までと違ってこんな言い方をしたらどうなるでしょう？』
『試しに、私があなたに言ってみますね。どうです？どんな風に感じましたか？これまでと、どこが違っていましたか？』
『次にチャンスがあったら、いまの言い方を試してみませんか』
『ほかにもこの種のツボがいろいろあるのですが、そういったコミュニケーション・スキルを学んでみませんか』
『あなたの力がアップすれば、相手も変わると思います。スキルアップって、伝染するんです』
『さっそくやってみられたんですか。すごいですね、で、いかがでしたか？』
『それは予想以上の変化です。なにか、ご自分で工夫されましたか？』

とりあえず試してみるノリがいいと思います」。

「そうだ、ちょっと各班でやってみましょうか。表9をみながら、本児と心理教育的なコミュニケーション・スキルに関するやりとりをちょっと経験してみてください。そして、実際の感想を話し合ってください」

(各班の報告を聴く)

「ちょうどいい時間になりましたね。では、今回はここで終わって、次回は本児と面接をするとしたらこんな感じかな、みたいな話から始めようと思います。」



の中の

子ども
たち

第7回「ラビット・ホール」

—子どもが死ぬということ—

川崎 二三彦

無理心中

他人には「さもありなん」と思われるようなことでも、当事者にとっては想定外としか受けとめられないことは珍しくない。多額の借金をかかえ、夫婦げんかではモノを投げつける行為もあったという夫は、自分では考えてもいなかった離婚を妻から突きつけられて驚愕する。

とはいえ妻の意思は固く、小学生の一人娘とはいつでも会えるという条件で離婚に応じ、一人暮らしを始めたのであった。ところが、離婚後たった1週間で事件が起きる。元妻の住む家から子どもを連れ出し、おもちゃを買ってやったり銭湯に入るなどした後、自宅に連れ帰って一晩過ごした翌朝のことだ。

「○恵は私の子です」「別れて暮らすなんて無理」「あの世で一緒に暮らします」

こんな遺書を書いた後、隣ですやすや寝入っている子どもの首を絞めて殺害し、自らはリストカットしたものの死にきれず、娘殺害の罪で逮捕されたのであった。

私が見たのは、大柄な体を縮こませ、肩を落として座る男の姿。今は被告人となって公判廷に登場したのである。

「活発で元気な子だった。なぜ娘にそんなことができるのか。憎くてたまらない。娘の味わった苦しみを自分も味わってからこの世を去ってもらいたい」

元妻であり、母である女性の供述調書が読み上げられ、被告人は、嗚咽しながら次のように話すしかないのであった。

「私の身勝手な行動により、未来ある大切な命を奪ってしまいました。一生かかってもこの罪はつぐなえませ

ん。申し訳ございませんでした」

どこにでもあり得るからこそ

こんな裁判を傍聴した後で観たのが「ラビット・ホール」である。

やはり子どものいのちが奪われ、そのことをめぐる父母の、夫婦の葛藤がテーマの映画。ただし、こちらは交通事故による死である。だったら私がついさっきまで目の当たりにしていた無理心中未遂事件よりも、失礼ながらありふれている。映画にするなら、むしろ心中事件のほうが起伏あるストーリーになるぞ、などと漠然と考えながら観ていたのだが……。

＊

本作は、同名の戯曲が下地になっているという。死亡した子どもの母親ベッカ役で主演したニコール・キッドマンがその芝居に感動し、自らの製作会社で映画化を実現させたのだが、見終わってなるほどと思った。

ことこの映画に関する限り、何か特別な事情で子どもが亡くなってはいけないのである。むろん、家族の誰かが責任を負うような背景があるなんてことは、展開上許されない。なぜといって、誰もが経験する可能性のある不幸だからこそ、観る者にとっては他人事でなくなるからである。そして、一つの事実を受けとめる、その受けとめ方



が人によってさまざまであることが、印象的に表現される映画だからである。

喪失体験とは

それまで育ててきた子どもを、突然のアクシデントで奪われたら、人はどうするのか。いつまでも忘れまいとして、子どもが使っていた部屋の様子を何一つ変えず、そのままの状態でおきたくなるだろうか。あるいは、悲しみを振り切って前に進むため、全てを忘れ去って再出発をはかろうとするだろうか。

映画では、夫婦の一人が子どものさまざまな持ち物を処分しようとし、一人がそれを激しく咎める。同じ境遇の人たちが集まって話し合うグループに一人は参加し続け、一人は拒絶する。子どもに対する思いはいずれ劣らぬのだけれど、こうした食い違いを通じて、夫婦は喪失感を通奏低音にしていがい合い、傷つけ合う。

ところで私は、いずれか一方に感情移入したり荷担するのでなく、彼ら二人の葛藤を、それぞれさもありなんと頷きながら観ていたのであった。

ということは……

と考えると思い当たったことがある。もしかして彼らは、一人の人間の中にあるアンビバレントな二つの、若しくは矛盾する種々の感情を形象化するために生み出された人格であって、実は一人の人間の中に彼ら二人ともが存在しているのではあるまいか、と。

原作の戯曲がピュリッツァー賞やトニー賞を受賞したというのは、現実生活ならば、おそらくは日常生活の雑事などに追われてふり返ることすらままならない私たちの感情の機微を、夫婦二人の登場人物に托し、気持ちの奥底に潜む襞に分け入るようにして示し得たからであろう。それを見事に映画化したからこそ、本作は印象深いのである。

小石

映画の最後近く、享年 30 歳の息子を亡くしているベッカの母が、「いずれ悲しみは消えるのだろうか」という彼女の問いに答えて口を開く。

「この 11 年間、悲しみはずっと消えない。でも変化するわ」

「何というのか、重さが変わるの。のしかかっていた重い大きな石が、ポケットの小石に変わる」

こう聞かされて、ベッカの中の何かが動くのだけれど、実は私自身も、目の前でその小石を見たことがある。

父が亡くなった時のことだ。医師が声を落として「ご臨終です」と告げた途端、真っ先に遺体に取りすがったのは母であった。涙を押さえながら「お父さん、アキラのところへ行って私たちを守って下さいよ」と、感極まった調子で話しかけるのだ。アキラとは、父の死よりも約 40 年近くも前、私が生まれる前に事故で亡くなった私の兄に当る人物である。したがって私にとっては遠い過去の現実感なき存在に過ぎないし、両親から彼のことを聞いたこともほとんどない。だから父の死の瞬間、彼の人の名が母の口をついて出たことは、意外でもあり驚きでもあった。だが母にしてみれば、40 年間という期間、変化はしてもやはり常にポケットに入っていた小石だったのであろう。

人の死、わが子の死とは、このようなものなのであろう。

鑑賞データ

2011/11/16 TOHO シネマズ シャンテ

* 公式 HP <http://www.rabbit-hole.jp/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/15765>

<これまでの連載>

- | | |
|---------------------|---|
| 第 1 回「プレシャス」 | http://bit.ly/9qGWXm |
| 第 2 回「クロッシング」 | http://bit.ly/rYwUnO |
| 第 3 回「冬の小鳥」 | http://bit.ly/eGJ1d9 |
| 第 4 回「その街のこども（劇場版）」 | http://bit.ly/hzhB9t |
| 第 5 回「八日目の蟬」 | http://bit.ly/keXFwL |
| 第 6 回「いのちの子ども」 | http://bit.ly/pm8V0p |

『 新一年生は要注意 』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

◇
一年生の一年目

ピカピカの一年生といえば、うんと大きなランドセルを背負い、喜びいっぱいの小学一年生の姿を思い浮かべる。もちろん、一年生は小学生だけでなく、幼稚園、中学、高校、大学、そして入社一年目の社会人一年生、さらに新婚の花嫁や、赤ちゃんが誕生してはじめて母になる女性も、同じ新一年生にあたるだろう。

それぞれが大きな期待や希望をもって、これまでとは異なる環境のなかで生活をスタートし、ひかり輝いている。

この新一年生、とりわけその一年目は注意を要する時期だと考えている。

新しい生活のリズムを作ることがスムーズにできれば、いろいろな可能性を広げることになり、大きな成長につながる一方で、張り切りすぎて持続できずに体調を崩したり、事前に思い描いていた新生活と異なり、その落差から元気がなくなったり、環境の変化があっても、これまでと同じような調子で過ごしていて、誤解されてトラブルに巻き込まれたりする。そんな、予期せぬ事態が発生しやすいのが新しい環境のもとでの一年目だ。

◇
休み明けの五月と九月

春、当オフィスのカウンセリングにやってくる人たちは、学校からの紹介や、医療関係からの紹介が多いということもあって、高校や大学一年生が最も多い。

新年度からの新しい場面になじめず、不登校やうつ状態、不安、原因不明の体調不良に陥ったりする。

季節でとらえるとそのつまづきの著しい時期は、まずは大型連休明けの五月だ。四月のあいだは、新入生全員が浮ついていて、落ち着かないが、五月になるとそれぞれがペースをつかんでそれなりの生活をしはじめる。その波に乗れずに、うまくいかないまま、停滞すると五月の連休明けの登校が重荷になり、元気をなくす。

もうひとつの時期は、夏休み明けの九月だ。秋分の日以降の後半から十月にかけて、欠席日数がじわじわ増える時期となる。この時期どのようなことが考えられるかというと、新年度の最初はあまり思い通りにいかなかったけれど、なんとか一学期を終えた。夏休みのあいだに挽回をして二学期から軌道に乗せたいと思って、迎えた二学期。予想に反して夏休

みに充電した元気もあっという間になくなっていく。そんなとき欠席が増えてずるずると過ごしてしまう。五月と九月はそんなドラマが見受けられる。



私立学校進学はギャップが大きい

多くの人が、環境の変化を実感する最初の経験は、たとえば、私立高校に進学したときや大学入学後ではないだろうか。

それまで、地元の学校に通っていた人が、離れたところにある私立の高校や大学に進学する場合は、環境の変化がかなり大きい。(もちろん、私立小学中学受験をしたあと入学する一年生も同じような体験をしていることだと思う。)

私立の学校は規模も大きく、ひとクラスの人数も多い。しかも、いろいろな地域からいろいろな人が集まっている。見知らぬ人ばかりの学校に通い、友人関係もゼロから築いていくことになる。

学校では、話すことばのちょっとした違い、習慣の違い、当然と思っていたことが通用しなかったり、カルチャーショックがあったり、新しい仲間と溶け込むまでには、紆余曲折がある。

仲間外れにならないか、気の合うともだちができるかどうか、友人関係の不安は、はかり知れない。

高校一年生の男子のなかには、入学式直後から、ひそかに同級生の力比べをしていて、ささいなことをきっかけにトラブルに発展したりする。

仲間作りのために、オリエンテーションとして、新入生を対象に宿泊研修を実施しているところもある。行事をきっか

けに多くの生徒は、気の合うともだちができるが、クラスのなかでもめてしまい、立場を複雑にすることもあるだろう。

うまくいくチャンスがあると同時に、なじめないとおきざりにされる気分にもなる。



こんなはずじゃなかった！

私立の学校に進んだ新一年生の子どもに対して、

「入学して、思っていたのと違っていたことはどんなことがあるかな？」という質問をよく投げかける。

すると、新生活に溶け込んでいない生徒にとって、思っていたほど、学校生活が楽しくないという返事が多くをしめる。

学校見学のときにみた学校紹介の映像と現実が違う！

ある新一年生が心境を話す。

「大学受験は楽だからと私立高校をすすめられた。入学後は、もうそんなに勉強しなくてよいと思っていた。七時間目まで授業があるとか、毎日小テストがあって点数が悪ければ居残りとか、常に勉強ばかりしなければならない。それに高校に入学したばかりなのに、大学受験の話が出てきて、うんざり」

私立高校は、大学進学に力を入れているところが多く、高校の教科と大学受験の学習塾が一体になったような授業時間数の多い高校が多々ある。

学校としては、生徒の学力向上などを願って、さまざまなプログラムを用意している。保護者も質の良い教育をまとめる傾向があり、これだけ整っているのは

大歓迎と賛同する。提供する側と、求めている側の思いが一致すれば、問題はないが、すべての生徒が同じように感じているとは限らない。

さらに通学の負担もあるようだ。

これまで七時に起きて準備をして近くの学校に行ったらよかったけれど、学校までの距離が遠いので、朝六時前に起きて、六時半に家を出て電車に乗らないと間に合わない。クラスのともだちは、同じ方向に自宅があるわけではないので、登下校はひとりの場合が多い。その交通機関での混雑は、疲れを増すことにもなるだろう。

教科書が多くてカバンが重いし、決められている革靴も歩きにくい。

いったん、ひっかかってしまうことがあると、うまくいかない理由や不満が次から次へと出てくる。



最初の一カ月の過ごし方

ある私立高校の先生がとても大切なポイントを話してくれた。

「入学してから、中間テストまでの出だしの過ごし方が大切です。厳密に言えば、最初の定期テストで、どのぐらいの成績を残すかによって、そのあとの学校生活がほぼ決まってしまうようなところがあります。ある程度、納得できる成績をとることができる生徒さんは、友人関係や、クラブ活動など高校生活全般がだいたいうまくいっているという目安にもなります」

反対に気になるところは、

「最初の定期試験を欠席して、受けら

れない場合は、その生徒さんは同じようなことを今後くりかえす可能性がありまず、最初の試験は成績が良くないだろうと予測しても必ず試験を受けるようにと指導します。成績よりもまずは、学校のスケジュールをこなすことです。その後の定期試験で、成績が急激に上がったりする生徒さんはそれほど多くありません。

特にその傾向は女子が強く、男子の中には途中から成績アップする生徒さんもいます。けれど、成績が急に上がる生徒さんよりも、徐々に成績が低下していく生徒さんの方が多いです。」

高校生活を充実したものにするためには、四月の過ごし方がポイントとなるという高校教師の経験話。そのような傾向を事前に教えてもらっていると、保護者は、どこにポイントを置いて子どもを見守ったら良いのかとてもわかりやすくなる。



家族の解放感

受験生のいる家族は、希望する学校に合格できるようにと受験前までは熱心に応援し、なにかと協力的に接している。受験期間が終了して進学する高校が決まると、イベントが終了したかのように、たちまち関心が薄れ、家族全体が荷物を下ろした気分になる。

入学後家族が新一年生をサポートすることは受験時期に比較すると多くない。なかには、第一希望校に入学できなかったのも、高校では勉強がんばれ、巻き返しをねらってさらに熱が入る場合もあるだろう。高校入学を成績のみの尺度でみ

ていくと、まさにその応援スタイルになるのだが、新しい環境に適応するには、大きな負担が伴うことは、あまり認識されていないようだ。

保護者である親も新しい高校の行事や懇談会などに参加すると、これまでよりも緊張することだろう。保護者同士も知り合いがいなくて、心細く、よりどころは、担任の先生のみだったりする。

子どもも親も同じで、新一年生は、乗り越えるべき山がいくつも存在する。



クラブ活動をどうするか？

クラブ活動にまつわる話題もよく登場する。高校によっては、必ず運動部に入部することが義務付けられているコースのある学校もある。クラブ活動が授業と同じくらい重要でその成績が大学進学に反映されスポーツ推薦枠での入学なども用意されている。そう簡単にクラブ活動に入部したり、退部したりするわけにはいかない。

本格的に活動しているクラブは、全国大会を目指して、毎日厳しい練習があると、ついていくだけで精いっぱい生活になってしまう。

よくある話は、レギュラーに選ばれなかったのでクラブを続けるのが苦痛になった、どうしようと悩むことだ。

クラブをやめしまうと、レギュラーに選ばれた友達と顔を合わせるのがつらい。かといって、やめずにクラブ活動に参加していることも、不完全燃焼。

そこでどうするか、何かを決断しなければならないことが目の前にいくつかわ

き起こってくる。

これまでうまくできていたこと、やれていたことも、新しい場面では、必ずしも通用しない。

こうやって新しい生活に、もまれながら人は成長してゆく。わかってはいるものの、思い通りにならないのが続くと身にこたえる。



予防カウンセリング？

受験勉強は個人作業で、自分の力の及ぶ範囲でなんらかの結果がでてくるが、入学後の新しい環境での適応は、努力次第で問題解決できる部分は限られてしまう。

新しい環境で適応するか否かはそれまでの生活や過ごし方でなんとなく、予測されているようなこともある。

子どもの周りにいる親や大人が、ちょっとした変化見逃さないようにすることが大切だ。

人が生きていく中での節目や新しいステージへの移り変わりのときには、何がしか予定外のことが起きていることに気がつく。

希望に胸を膨らましながらかも、うまくいかないことが多い。そのため、新しい環境の中で生活をするまえに、気をつけるべきこと学ぶべきことを、少しでも事前に理解していたら、結果がことなっていたかもしれないと思うことがある。

中学三年生の受験生に、高校受験の対策話はよくされているが、進学する高校が決定したあと、「入学したら、こんなことがあるかもしれないから、気をつけてよう」と前もって伝えていけば、予防で

きることもあるだろう。

子どもだけでなく、保護者も同様に事前学習が必要だ。新しい学校に進む場合、高校生活になじむための親対象の事前講座=適応できるようにするための予防カウンセリングようなものが実現できることを願っている。

螳螂の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第七回

団 士郎

仕事場D・A・N／立命館大学大学院

2011年の今、1990年夏の日誌を読んで思うことは、我ながら元気だの一言である。よく動いている。一つ一つの仕事の質や見解まではどうこういえないが、とにかく楽しそうだ。基本的には今も毎日楽しいのだが、あの頃は働き盛り、元気だったなと思う。そしてそう思える昔が、文字記録に残っているのを幸運だと思った。

私はワープロ、PCが登場するまで、書くことが苦痛だった。文章を書くのが苦手だったわけではない。清書が嫌いだった。それが理由で原稿を頼まれても、適当なところで妥協していた。初めて分担執筆した本の原稿（当時はまだ原稿用紙に清書して提出だった）も、最終的には「これ以上推敲すると、又清書し直さなければならないから面倒だ！」が理由で、読み返すのを止めた。だから本になってから、いろいろ思うところがあった。

PCが普及して、話すようなペースで書けるようになった実感があり、書きたいところから書いて、文節毎に前後入れ替えが可能な編集機能を駆使できるようになったのは私にとって大変革だった。書くことが楽しくなった。

そしてもう一つ、時代は多少前後するが、書くことをそそのかしてくれた二人の編集者との偶然の遭遇が重なる。

一人目はなんでもない話で、先方は心当たりもないだろう。定期購読していた月刊誌「話の特集」（随分前に休刊になった）と共に、編集長・矢崎泰久氏をクセのある興味深い人だと思って見続けていた。愛読者カードも時々書き送ったりしていた。その一回が、イラスト付きの描き文字のまま、読者の声欄に掲載された。嬉しかった。そんなことを期待していたわけではなかったので、本当にびっくりしたのだ。

そのしばらく後の事だが、筑摩書房から独立した編集者・原田奈翁雄氏の創業した径（こみち）書房。ここから創刊された「いま人間として」を創刊準備号から愛読していた。そしてゼロ号、一号と愛読者カードを書き送っていた。そんなある日、径書房編集部と書かれた封書が届いた。出版案内のDMかと思って開封してみると、「いま人間として」第3号の特集「仲間」をテーマの原稿を書かないかという誘いだった。びっくりして大喜びした。

執筆依頼など受けたことのない、地方公務員だった。文章はたくさん書いていたが、商業誌からの依頼原稿など、どう書けばいいのか・・・と戸惑いながらも、とにかく嬉しかった。そして、漫画家仲間「ぼむ」の連中との同人誌作りのドキュメンタリーをマンガも含めて（これは他の人と違った強みだった）書いた。しかし、「こんな生真面目でかたい雑誌、誰が購読しているのだろうか？」と案じていた通り、10号余りで休刊になった。

この二つの出来事が私に、ものを書くことを後押ししてくれた。プロの編集者に選んでもらえたという一点が、その後の行動をどれだけ支えてくれたことか。チャンスを与える人の有り難さは今も忘れない。

1990年7月

7/3 TUE 京都市南保健所の保健婦さんを中心にした事例検討会に呼ばれて家族療法の話をした。世の中には誰が悪い、何が悪いのかと犯人や原因を探すのが、好きで好きで仕方ない人が多い。そしてその人達は押し並べて、問題解決には力がない。

原則的なこの姿勢は、当時も今もそう変化はない。我ながら、相変わらずだと感心する。ただ、こう言っているからと言って原因がないなどと主張しているわけではない。

原因究明は問題解決や軽減に、必ずしも役に立つとは限らないと言っている。この発想が持てたことが、私の人生の後半の大きな分かれ道になったと思う。

7/4 WED わが児童相談所に新人として配属されてきた一時保護所指導員のK君の研修で職場の四方山話をした。

K君の新採研修に職場は大いに張り切った。外部からの視察や研修依頼にもそれなりに力を入れていたから、内部スタッフの新採研修となればもっと力も入った。しかしその内、空気が抜けるようにモチベーションが下がっていった。彼は国家公務員の試験を受け続けていて、現在は法務省関係の職場を摸索する間の腰掛けらしいということが分かってきたからだ。

進路選択は基本的に個人の自由だ。他人が勝手な思いを押しつけるものではないことは分かっていた。しかし我々がトーンダウンしていったのも仕方なからう。

彼は結局二年目も居たのだったと記憶し

ているが、相変わらず受験生で腰掛け職員。そこへの対応エネルギーが空しくなっていくのは避けられなかった。

7/6-7 FRI-SAT 三年目を迎えた、児童福祉施設中堅職員研修の初回。新しい参加者七人と初顔合わせ。プログラム講師は松井洋子さん(ボディーワーク・からころ代表)。参加者それぞれが非常にしなやかで、初々しいのに驚く。

継続してきたことが定着して、その影響が初参加の人達の振る舞いの中に認められることが嬉しい。

施設職員のための通年連続研修会が順調に継続されていった。こういう蓄積が、10年後の場や施設を形作る。



そんなことは分かっているようなものだが、しばしば先行する物事は、後発のアイデアや、声の大きなものの影響で簡単に終結を迎える。そして又、大した工夫もない新しいだけの事業に書き換えられていく。

その結果が現状であることを、経験の短いスタッフは知ることすら出来ない。「継続」は侮れない大きなテーマなのだが、そんな経験も与えられない若い人達は、現状を防衛的に語る以外、自己肯定の手だてがない。

でもそれは、あなたのせいではなく、システムを継続的に維持管理する責任を持った人間に知恵が足りないせいなのだ。だから管理者やトップの人選には注意がいる。事なかれ主義の臆病者をトップに頂くと、スタッフは砂をかむような現状砂漠に向かって働けと追いたてられることになる。そして失敗が起きると、自己責任にされる。

必ず上手くいく方法など誰にも分からないのだから、受け継がれている先人の知恵に学ぶ程度の謙虚さはあって良い。新しいモノが素晴らしいモノだなんて、子どもっぽい好奇心しか満たさない理屈だ。

7/9 MON 月例の「継続中の全ケース進行状況報告」を第一議題にした課会議。その後、膠着状態のいくつかケースの打開案を担当と話し合った。午後はヤセ症の子との面接。

コンピュータが導入され、この20年の間に職場環境や業務管理環境は大きく変化した。業務の進行状況管理強化によるメリット、デメリットは両方あるのが当然だ。PCの導入、データの共有化も一面だけでは語れない。「進行管理」自体が複雑さを持ったテーマなのだ。

そう考えると、今は管理と記録が徹底して追求される時代になったのかもしれない。当時は、ケース進行管理が難しい故の問題を抱えていた時代だった。

各児童福祉司がどんな継続ケースを、どれくらい持っているのか。管理職がカルテに目を通していたら分かるようで、実際はなかなか正確なところは把握できなかった。(担当者が記録を書く時間が限られ、カルテの回ってくるのが遅い)。その結果、年度末や、担当者の異動がきっかけで、「そんな

ケースがあったの！」なんてことが実際にあった。

それをなくそうと、継続ケースの月例進行管理を提案して開始していた。指導継続ケースを一覧表にして、担当順に、全ケースの一ヶ月の様子を口頭で報告して貰った。その結果、長期にほったらかしになってしまうケースがなくなっただけではなく、手つかずのまま指導継続中だったケースが、コンタクトと共に終結になっていって少し身軽にもなった。

7/10 TUE 今年の新任児相職員研修を福知山児相で行った。「職場のチームワーク」をテーマに話すよう依頼されて出かけた。その後、特急で戻って職場に顔を出して、雑用を片付けてからKISWEC(京都国際社会福祉センター)の家族療法訓練の当番日なので出かけた。

この夜、出かけた家族療法訓練で、私はこんな経験をしていた。

思春期病棟のある病院の院長が訓練受講に来ていて、セラピストをする日だった。今日来てくれたボランティア家族(研修のために、一般の家族をお願いしている)は、成人した息子、娘とその両親の四人家族。元国鉄マンの父親は、広島に原爆の投下された直後、蒸気機関車を運転して広島市内を走ったそう。



「初めてそんな話聞いた！」と成人した息子が驚きと共に呟いていたのが印象的だった。

今、振り返ってみると、一日でいろんなレベルの出来事に対応している。今と過去と、未来のためにが交錯している。その一つずつにしっかりアクセスしておくことが、それぞれのその後を作る。

これらのことを思い出すと、あの時の芽が、何として実っていったのかも分かる。職場の応援もあって受講した訓練だったから、意識して成果を、児相に還元しようとしていた。

それが三年目には思いがけず家族療法訓練スタッフとして実施する側に回ることになっていた。自分としては、貰ったモノは返すという意識で、とくに問題ない話だった。

しかし地方公務員法がからんで時々、経過や様子の分からない管理職から、「兼業の禁止」が注意されたりした。

働かない人には甘いのに、人の二倍働いている人間にうるさいことを言う組織を、私は納得していなかった。そこから職場に還元されているものの存在に敬意が足りないとかえ考えていた。

公務員組織だけで世の中が構成されているわけではない。外の世界の空気も知恵も導入しなければ、職場が職員互助組織化してしまうと確信していた。この批判が世間の言う「親方日の丸」という言い方だった。

そんな、生ぬるい仕事をしている気はなかったのも、外に向けではなく、組織内部にも自分の姿勢ははっきりさせていた。

今、児童相談所の内部にこんな乱暴者の力はなく、市民社会に対して防衛的になりがちな状況と、起きてしまった事への対策

が溢れている。これは組織内に未来に向けた英知を醸成してこなかった組織管理者の責任だろう。

数年後、私が京都府を退職してから、この研修に同僚の早樫一男君（現・同志社大学教員）が関わっていることについて、兼業を禁ずる条項に反しているとかの指摘があり、彼は人事記録上の処分をされた。実害のあるものではなかったようだが、なんと短絡的で、社会システム全体を見ない反応だろうとあきれた。（そして、それなら私がいるときに言えば良かったじゃないか！と思った）

私たちが最初に受講したときも、組織の一員でありつつ、全国の児相や周辺機関職員の研修の場の担当をすることにサポートイヴだった京都府は、どんどん縮んでいった。そして処分といえば後年、児童虐待死事件が京都児相管内で起きてしまった時、頑張っていたけれども起きてしまった地域の不幸について、私のよく知る熱心な担当児童福祉司を処分した。

7/13 FRI 新体制になって初めての三児相課長・係長会議。養護ケースの京都府的分析をし始めている。数字の奥に少しずつ、いろいろな意味がちらついているのが見える。

この段階ではまだ、児童虐待増加の予感程度だったと思う。「養護問題の質が変化してきた」なんて言っていたのを思い出す。そして大阪市に代表される都市型の養護問題と、京都府とは同じではないと話し合った。「やっぱり京都府は田舎だよなあ」とネガティブではなく話していた。

この後、どんどん露出の多くなる児童虐待の大阪市方式？や、愛知県の論調と、京都は一線を画していると思っていた。

しかしこの潮流は全国を席卷し、児童虐待問題対応のスタイルの本流に飲み込まれていった。もはや小さな実践からの提言など許されない、全国的で大学アカデミズムに後押しされた主張が「こども虐待」問題のトレンドを形成していった。こういう事態はいつも、牽引する数名の学者と、キャッチーな理論が担っていた。

そして二十年、誰も彼もがヘトヘトの現状を形成して今に至る。誰が悪いのでもないが、結果が良くはない。通告は増え続け、トップランナーは消耗しきっているし、後に続いた者はどんどん脱落し続けている。

今更引けない人々の献身によって支えられている日本の子ども虐待問題。今後どう収める計画なのか、私には見えない。

経験的に言うなら、社会が飽和し、金回りが悪くなったのを理由に、今から出てくる他の理屈や現象に飛びついて、子ども虐待ブームが去るかたちで放り出されて沈静化するのだろう。

その時にはおそらく通報数ではなく、子ども虐待死の実数が語られることだろう。そして社会はもっと厳しい別の課題に直面して、大騒ぎしていることだろう



「一人の子の虐待死に学ぶこと」は科学だが、「一人も虐待死させてはならない」はスローガンだ。それを一緒に語ってはならないのではないかなと思う。

7/14-15 SAT-SUN 栃木県の社会福祉教育センターから研修の依頼をされて来週ははじめに行くことになった。すると「私も行こうかな」と嫁さんが言いだして、前々日の土曜日から出発することにした。初日は奥日光・中禅寺湖の更に奥、湯の湖畔のホテルで一泊。海拔1500メートルの高原は肌寒かった。滋賀を朝八時に出て、着いたのは午後四時半。次の日は滝巡りをしながら日光に下って宇都宮に出た。ちょっと有名なレストランで、なかなか珍しいフランス料理を食べた。

各都道府県に「社会福祉研修センター」のような組織が活発に機能していた時代があった。

私は府の社会福祉研修所で、田中昌人氏の発達保障理論に基づく講義や実践のドキュメンタリーフィルムを見せられたりした記憶がある。そういうことを各府県で実践していたのだろう。職員の養成に力を入れていた時代だ。

訳も分からず多忙ではなく、短期で人が入れ替わってしまうこともなかった。先輩はうっとうしくも有り難かったし、研修機会も内外に豊富だった。

組織内自治研活動や全国の児童相談所問題研究セミナー（後年、児童相談研究セミナーに改称）など、業務を社会科学的に検証したり、見直したりする機会がいくらかもあった。積極的にその中に身を置くことで、いろんな事を学んだ。

7/20 FRI 朝、所長・次長との定例の週間打ち合わせのあと、社会福祉実習の大学生7人に非行問題について、一時間半ほど話した。午後、西川さん(隣接する知的障害者更生相談所所長補佐)に庁舎使用問題で意見を求められた。その後、定期的に通って来る子どもと続けて二人会った。二人目の子は、元気が出てきつつある不登校の中三女子で、彼女の希望でこの夏、北海道の酪農農家へ体験実習的に出かけることを考えていて、その計画を練った。

その後、息子達に暴力を振われている父親との川畑君の夕刻からの面接を少し見て、編集者講座に行った。泉麻人が講師。エッセイが宿題で出ていて、その講評をした。「このまま雑誌に載っていてもおかしくない完成されたものがあった」と前置きして、僕のものが読まれた。子どもの頃にはこういう経験が全くなかったので嬉しくなった。いくつになっても誉められると嬉しいものだと思えて実感する。

この日のことは、とても鮮明に思い出せる。所長、次長とはウイークリーの定例会を持っていた。気が合う上司ばかりではなかったが、意思疎通機会は確保しておくことで、不要なトラブルは防げていた。

毎年のことだったが、実習生への対応は出来るだけ丁寧にと考えて、手厚いプログラムを実施し、実習ノートへの記述もおざなりにならないよう気をつけていた。しかし、そんな思いは、それほど伝わったわけではなかった。自分の若い頃を思い出せばやむを得ないかと思うが、若者は無神経で無頓着だった。

精更相(知更相)との庁舎共同使用問題上のトラブルが前任者の代から混迷したまま続いていた。隣接地に建てられた新しい

庁舎の一階に、児相のプレイルームが新設され、二階(事務所)三階(面接ゾーン)に知更相が入っていた。この状況は、庁舎管理問題でしばしば両相談所がぶつかる事になった。

西川さんとは心理職の先輩・後輩関係ということもあり、ここで解決しておかないと、ずっと引きずる事になると思っていた。結局、大幅な譲歩も含めて、未来に向けて、積み残し課題を放置しないという一点で合意した。

一つの建物は一つの公所であると認識し、プレイルームを放棄した。そして知更相は事務所を一階に降ろすことになった。元々の経過を考えると、それは不当な譲歩だと主張する人もいた。

この数年後、まさか自分が西川さんのポジションに異動になるとは考えもしなかった。そしてあらためて、自分も一緒になって片付けておけたことが幸運だと思った。情けは人のためならず・・・を実感した出来事だった。

川畑君の面接していたこのお父さんの家族(夫婦)物語は哀れなところのある話だった。ずっと後に、木陰の物語の一作として描いた。



夜、編集者講座に出かけて、コラムニスト泉麻人氏の話聞いた。そこで前回の課

題への講評を聞いたのだった。この頃から、自分の書いているものへの自信が少し出てきていたのだと思う。

7/21-22 SAT-SUN 今秋開く全国児童相談所問題研究セミナーの母体である「全国連絡会」の会議を京都で開催した。関東・中部からたくさん全国運営委員の人達が来てくれた。各府県の今日的状況をつぶさに知る事ができて、毎年のことながらこの集まりは面白かった。プログラムの検討もしてもらった。

日曜の正午に終わって、映画を観る人や、ぶらぶらするという人達と別れて、帰宅して読売ユーモア広告大賞の応募作品を二枚描いた。月末締め切りで、今日描かないと不参加になるしかなかったのだ。

この時に描いて、入賞して貰ったメダルがこれだ。私は賞や当選等というものに、ほとんど縁のない人生を送ってきたが、この時期だけ、いくつかの幸運が届いていた。

漫画家としては合計3回、それなりの受賞をしたが、2回はこの年と翌年の連続だった。翌年は、授賞式にも来るようにと主催者（読売新聞社）から強く招待されて、大手町の読売新聞社屋に出かけ、パーティ会場で漫画界、デザイン界の重鎮達を眺めていた。



7/25 WED 年二回、府県持ち回りで開催される近畿児童相談所職員研修会が和歌山であった。終了後に、心理判定員協会の近畿ブロックの幹事の引き継ぎを行わなければならなかったのに、気は進まなかったが参加した。中味は期待に違わずしょうがないものだった。しかし後の心理判定員の集まりは、短時間ながら面白かった。別れ難い人があったので、駅前の喫茶店で、八人ほどで続きの話をした。

この頃、まだ近畿の心理職連中が個人的に親しいということではなかった。それぞれの属する府県の専門職として、お互いのメンツや牽制も含みつつ、出会っていたと思う。

そんな事態が急速に変化してゆくのは、川畑隆君が発起人になって創刊した「児相の心理臨床」誌に負うところが大きい。

この雑誌は15号まで発刊され、リニューアルして又、「そだちと援助」誌として発行され続けたが、この間に阪神淡路大震災があって、大きな役割りを果たすことになった。

7/26 THU 受理判定処遇会議、月一度石坂、田辺両児童精神科医が同席する日。

登校拒否をしないでやっていけるようになった中三女子の希望の牧場体験実習を実現すべく、T市教育研究所のT川氏に骨を折ってもらっている。一人で12日間の旅に出かけられるかどうか、楽しみに根回しをしている。

京都府の児相に、常勤の児童精神科医はいない。囑託の精神科医は府立医大ルートでこちらの希望と関係なく、配置されていた。着任早々、子どもは見たことがありませんと告白する正直な医師もあった。

そんな経緯でケース会議に京大病院の石

坂医師が定例出席することになっていた。

先にも述べたこの少女、担当者として、彼女の夢を叶えるため、つてを探して北海道芽室町の酪農家に、何度も手紙を書いてホームステイさせてもらえる段取りをした。

そして何もかも整った出発直前、彼女は「行かない!」と言って断った。腹も立っただし残念だったが、これが彼女のその後の身の振り方には生かされたところがある。

7/27-29 FRI-SUN 広谷、飯田、川崎、私の中年川遊び隊で、今年の目的地、和歌山県の飛び地・北山村に行った。滞八丁の上流で、昔筏流しをしていた人達が観光用に筏川下りをさせてくれる。予約時間に間に合うように、奈良県の山間部をひた走りに走った。

しかし、はじめの予定の筏下りコースをゴムボートでチャレンジする計画は、ボートをもって川に下ることが困難なため中止。そして次の予定地である十津川温泉の下湯へ向かって、川を眺めつつ走っていると、滞八丁を遡るジェット船のことが浮かんた。「車を河口に置いて、ゴムボートを抱えてあの船に乗り、上流で降ろしてもらったら、そこから下れるぞ」。

こうしてゴムボート河下りをした滞峡は、流れの非常にいい川だった。最終便に乗ったことが結果的に、下ってくる観光船に迷惑かけることもなく、快調に流れを楽しめることになった。夕方の少し冷えてきた河面を、例によって流れのままに男4人が、2隻のボートで下るのだった。

この豊かな山間の地が2011年の台風、洪水で壊滅的打撃を受けて、今も避難所暮らしの住民が多くある。

あらゆるモノが変化することを肝に銘じて、今できることをするのが、今生きてい

る者の使命だと思う。

7/30 MON 面接を二つ済ませて、午後から福知山へ行った。秋の児相研セミナーでやってもらう基調公演のシナリオ原案の打ち合わせだ。「あらじん」という名の変った喫茶店で、5人でいろいろプランを練った。

児童相談qw所の一日を、ドラマ仕立てにして上演するプランだった。原案を私が書いて、脚色・シナリオ化を福知山児相の児童福祉司小巻さんが担当した。

できあがった脚本で出演者が何度か練習をした。この稽古も面白かった記憶があるが、私は出演しなかった。

そして本番当日、全国から集まった同業。同職者に、「ある児相の一日」の芝居を上演した。

あのシナリオは今でもどこかにあるのだろうか？



学校臨床の新展開

—⑦ひとり親と子育て—

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

「やさしい花」を見て

前回は、『ひとり親』がふつう」と題して、ひとり親について考えましたが、今秋、NHKで放送されたドラマ「やさしい花」は、ひとり親と児童虐待について、多くの問題提起をおこなっています。

若年での妊娠・出産、結婚などは親族からの理解がなかなか得られず、若い夫婦やシングルマザーが孤立無援の状況で出産を迎えることも少なくありません。特にひとり親では、経済的問題、就労問題、子どもの保育問題などが深刻ですし、そのことを背景として虐待やネグレクトといった養護上の問題に発展することもあります。

さて、ドラマのなかの一場面。母親は不安定就労のなかネグレクト状態になっている子どもの養育をふりかえり、久しぶりに子どもの好きな料理でも作ってやろうと思うのですが、子どもから、「いらない。」と

拒否されます。母親は、「何で、あんたのために、こんなに一生懸命やってるのに…」と泣きながら、子どもを叩き訴えます。

何も見返りを求めているわけではないのに、人は人に対して一生懸命であればあるほど、思いが強ければ強いだけ、「なぜ、わかってくれないのか」という感情が湧いてきます。これは、親だけではなく、援助者も陥りやすいことではないでしょうか。

もうひとつは、児童虐待通告の問題。「疑わしきは通告すべし」と法律上は規定しているのですが、一般市民には通告することへの躊躇があります。また、果たして、通告をするだけでよいのかという葛藤も。ドラマでは、かつて児童養護施設で生活をしていたという娘が母にむかって「親子離れたほうがいいなんて、そんなに簡単にいわないで!」「親はいいかもしれないけど子どもは悩むのよ!」「親子は一回はなれたら、一緒になるのが難しいの!」などと感情をあらわにして訴える場面がありました。疑わしきは通告、必要に応じて専門家が親子

分離し保護、あーよかった。ということではないのです。そのことを、しっかり伝えてくれています。

ある学生はこのドラマの感想をこう語っています。

「私は、今まで虐待をする親の気持ちを全く理解することができず、反感を持っていました。でも、このドラマをみて、少し考え方が変わりました。やはり、ひとり親で子どもを育てることは大変だし、周りに、相談できる人がいなかったら、なおさら大変だと思います。虐待をするような人が何で子どもを産んだのか？と思うこともあったけど、なかには虐待したくてしているわけではなく、ほんとうは子どものことを何よりも大切に思っていて、どうしようもなくなったときに、思わず手を出してしまっている人もいることがわかりました。」

虐待をする「とんでもない人」は、実は「私」も含め、状況しだいで、誰にでもあり得ることだと感じたのでしょう。「とんでもない人」から「子育てに困っている人」へと認識が変わった瞬間です。

地域や学校での支援

先にも少し述べましたように、特に若年の核家族やひとり親家庭では、何らかの要因により、簡単に養護上の問題に発展することがあります。親の就労時間や内容は子どもの家庭での生活に大きな影響を与えま

す。深夜の就労など親の就労形態によって、就学前の子どもは通常の「保育」が受けられないため、やむを得ず、24時間託児所などの「認可外保育施設」を利用せざるを得ないこともあります。小学校にあがると、いわゆる「放課後児童クラブ（放課後児童健全育成事業）」がありますが、主に低学年が対象ですし、時間も限られています。また、「ファミリーサポートセンター事業」を活性化させている地域もありますが地域間格差が大きいのが現状です。児童養護施設や乳児院などの児童福祉施設では、「子育て短期支援事業」として、「ショートステイ」や「トワイライトステイ」を各市町村と契約して行っているところもありますが乳幼児が利用の中心ですし、このシステムは児童養護施設などの充足率が低かった時代にできたものですので、いまのように充足率が高い都市部の施設などでは、「ショートステイ」や「トワイライトステイ」としての枠自体が少なくなって受け入れられない状況のところも少なくないようです。児童相談所による「一時保護」というものもありますが・・・。

さて、このような養育上の課題をかかえたケースには、社会資源を活用し、関係機関と協働した支援が必要になってきます。そこではニーズを的確に把握する力や、アセスメント、プランニングする力、関係機関と協働する力、ケースマネジメントを行う力などが求められます。面接室を超え、関係機関と協働し、状況の変化に臨機応変になおかつ科学的に見立て、手立てを考えることが求められます。このようなケースがスクールソーシャルワーカーの真骨頂が発揮される例のひとつではないでしょうか。

就学前の児童はもちろんのこと、就学後の子どもたちの放課後の問題もとても大事なことです。

既存のシステムでは立ちいかないときソーシャルワーカーは新たな社会資源を開発することも求められます。子どもの貧困が注目されるようになって以降、各地には、貧困や家庭の養育力に起因する子どもたちの学力格差や生活の質の格差を補完するための資源ができています。「遅寝、遅起、朝ごはんなし」で生活リズムが崩れ、学習習慣が定着していない子どもや、親から生活技術や生活文化の伝承がなされずにいる子どもたちが少なくないためです。

京都の幸重さんは、スクールソーシャルワーカーの傍ら NPO を運営し、地域の空き店舗を活用し、低価格で子どもたちが朝食を取れるサービスを行ったり、入浴や夕食のサービスをされています。

<http://www.kodohiro.com/>

極めて単純ですが、毎日の食事、おいしいものを楽しく食べること、安心して寝ることが、大人も子どもも明日への活力の源ではないでしょうか。そんなあたりまえのことを安心できる大人が支えるとき、子どもは本来持っている力を信じて、前に少し踏み出すことができるのだと思います。

学びの森の 住人たち (2)

学校でもない
学習塾でもない、
〈森〉という
学びの世界が
投げかけるもの

北村真也

(アウラ学びの森、人間科学修士)

1. 省察の中から

フリーディの概要

フリーディは、私が大学4回生の時(1984年)から15年間にわたって京都市内で活動が続けた学習塾です。学習塾といっても、それは、ただ学校の学習を補完したり、受験に対応した指導をおこなうということだけではなく、子どもたちにとっては「もう一つの学校」のような存在だったように思います。

フリーディは、わずか15坪ほどの建物でしたが、絶えずそこには100名以上の子どもたちの出入りがあって、一つのコミュニティとしての機能を持ち得ていたのかもしれませんが。

実際私は、アメリカのオルタナティブスクールのイメージをフリーディに重ねていました。学習塾というよりは「もう一つの学校」としてのイメージを大事にしたかったのです。そこには、知らず知らずのうちに「対学校」という当時の管理的な公教育に対するアンチテーゼがあったのかもしれませんが。

1980年代は、学校教育現場にとって試練の時代でもありました。〈校内暴力〉というコトバに象徴されるように、学校がとても荒れた時代でした。

「〇〇中学のガラスが100枚割られた」、
「〇〇中学では教師が生徒に殴られてけがをした」

とか、そんな学校の惨状をマスコミがさかんに取り上げていたように思います。それは高度経済成長を達成し経済大国と呼ばれた私たちの社会の影の部分であったのかもしれませんが。私たちの生活世界が急速に消

費化へと向かう中、学校という管理された社会システムへの抵抗として、それは必然という流れの中で生じてきたのかもしれない。

当時のフリーディに通う子どもたちの中には、どちらかというと学校というシステムの縁（隅っこ）にいたような子どもたちが通っていました。学校の番長やチャリンコ暴走族、勉強がさっぱりできなかった子、ギャグばかり言っては周りを笑わせる子など、とにかく今思い出すのはそんな一風変わった子どもたちでした。ところがそんな彼らとじっくりつき合ってみるとそこには実に豊かな世界が見えてくるのでした。

A 子はお母さんとケンカをして家を飛び出しました。学校でスカートの丈のことを指摘され、それにムカついた彼女が教師に向かって反抗的な態度をとったことで、お母さんとの間でケンカになったそうです。彼女兄がそのことをフリーディに伝えにやってきました。そしてみんなでその子を探しに行くことになったのです。子どもたちは自転車で、私たちは車で彼女の立ち寄りそうな場所を探しましたが、彼女を見つけることはできませんでした。心配そうな兄は、自分もかつて自分の家が母子家庭であることを母親に辛く当たった経験があること、そしてそれを妹も見て育ったので同じようなことをしているのではないかということ涙を流しながら私たちに話していました。

結局夜中になって妹は親戚の家にいることがわかり、みんな一同にほっとするわけですが、本当に自分ごとのようにA子のことを心配し探し回るような関係性がそこにあったのです。自分

さえよければいいという思いではなく、みんなのことを真摯に考えられる他者性で彼らの世界は満たされていたように思うのです。学校というシステムの縁に生きる彼らの生活世界の中に、私たちがどこか忘れ去ろうとしている豊かさが残っていることを私はどこかで感じ取っていました。そしてそんな彼らのためにも「もう一つの学校」のあるべき姿を模索しようとしていたのかもしれない。

パフォーマティブな教師

『飛び出せ！青春』

『われら青春！』

これらは私が中学生の時、1970年代の代表的な学園ドラマでした。それは、ちょうど小学校時代にスポコンアニメの代表である『巨人の星』の洗礼を受けたいわゆる「テレビ世代」と呼ばれた私たちの多感な成長過程に多かれ少なかれ影響を与えたわけです。

そしてこれらの学園ドラマには共通して、はみ出した生徒たちの面倒をみる熱い先生が描かれていました。

「はみ出した生徒」－「熱い先生」－「生徒たちの変容」

この一連の文脈が、まるで公式のような形で存在していたのかもしれない。そして私自身の中にもその公式は無意識のうちにインプットされ、いつの間にか「パフォーマティブな教師」というイメージが私自身の中で理想化されていったのかもしれない。

フリーディでも、さまざまなドラマがその15年間に起こりました。そこには怒りがあり、笑いがあり、悲しみがあり、喜びが

ありました。その一つの例として、ある時、生徒が万引きを起こすといった事件が起きました。その時、当然のことのよう熱い教師であった私は生徒たちを叱りつけ、そのことを契機に塾で合宿生活を始めてしまうのです。今の時代であれば、そんな塾の先生なんて受け入れられないかもしれませんが、当時の親たちはそんな熱い教師の指導に感謝してくれたのです。つまりそこには、パフォーマンスな先生に巻き込まれていく生徒たちと親たちがそこにいて、何かしらのドラマが起こり、そこに関わる人たちの変容が生じていくといった文脈があったわけです。コトバを変えれば、全員がその文脈の上に乗っかっていた、つまりあの学園ドラマの世界をどこかでみんなが共有していたと考えられるのかもしれませんが。

教えない先生

フリーディには、私のほかにも10名ほどの先生がいました。その多くは大学院に進学していった私の同級生、そして後輩たちでした。ただその中にたった一人だけ、大学院にも進学しない、企業にも就職しなかったという先生がいました。M先生です。このM先生は、フリーディ初めての常勤の先生でした。

M先生は、教えない先生でした。いや教えないというのは不正確です。授業をしないのです。パフォーマンスをほとんどといっていいほどしない、そんな先生でした。

では授業中に何をしているのか？

実は、ネコのように生徒たちの様子をじっと観察しているのです。そして彼らが学び始め、彼らかが質問をしてくるのを待つわけです。彼らの質問には、M先生はとて

も丁寧に答えます。しかし決して勉強をやらせようとはしない。生徒たちがやり始めるのをただじっと待ち続けるのです。

そんなM先生の担当する生徒は、どういうわけかその成績がみるみる伸びていきました。今まで「2」の成績をとっていた生徒が、次のテストでは100点をとったりするわけです。私は一度M先生に聞いたことがあります。どうしてそんなに急に生徒たちが変わるのかと……。するとこんな答えが返ってきました。

「理由は、簡単。教師は生徒から“こんな頼りない先生じゃアカン”って思われたいけない。頼られている間は、いつまでたっても伸びない。そこには教師の自己満足しかない。彼らが自分でやらないと何も始まらない。やらされている間は、いつまでたっても伸びない。ただそれだけのこと……」

私は、M先生のコトバに少なからずショックを受けていました。どこかで気づいていたのです。私の授業の時にだけ集中して学ぼうとする彼らの姿を。私がいけない場では、あまり学ぼうとしない。ただ使い分けしているだけなのです。本当に変わったわけじゃない。

「どうすれば、生徒をひきつけられる授業ができるのか」という教師のパフォーマンスを追及しようとばかりしていた私が、その方向転換を迫られる場面がやってきたのです。ただ、その時はそこまで明確にその状況を整理できたわけではありませんでした。今までの私自身のあり方に疑問を持ち始めたといったところかもしれません。

「果たしてこのままでいいのだろうか……？」そんな感じでした。ただ1990年代に入り、生徒たちの様子がどんどん変わっていくにつれ、私のこの問いも次第に大

きくなっていったのです。

〈教える〉から〈学ばせる〉へ

私とM先生の違い、それは〈教える〉か〈学ばせる〉かの違いのように私は考えていました。しかし、このことはその前提として、いかに生徒を深く観察するかということに裏付けられているように思います。M先生は、まさにネコのように彼らをじっと観察しては、ここというタイミングで何かを投げかけていたのです。

一方パフォーマンスな教師であった私は、生徒を見ているようで見えていない。〈教える〉ということに一生懸命向き合えば向き合うほど、彼らが見なくなっていく傾向があることに気がつき始めるのです。

「いかに教えるか」ではなく、「いかに学ばせるか」、その変革はパフォーマンスな理想の教師像が埋め込まれた私にとっては大きな挑戦でもありました。ただM先生の実践が一つの有効なモデルになったことだけは確かなことでした。

2. 変わり始めた子どもの世界

群れなくなった子どもたち

フリーディでは、年に数回のイベントをおこなっていました。その時はみんなで夏祭りやクリスマス会を楽しんだりするのですが、いつの頃からそんな場でもみんなで楽しもうとはせず、携帯用のゲームをする子どもが現れるようになってきました。会には来るものの、その行事には参加しようとはしないのです。そして会の最後におこ

なうビンゴだけに参加して、景品をもらって帰っていく。彼らはそんなタイプの子どもたちです。

そういえば、そんな彼らの行動は、自分たちだけの世界でも見られるようでした。友達の家へ遊びに行ってもするのは各自のゲーム。みんなで一緒にいるけれども、各自がそれぞれに遊んでいるだけなのです。

私の子どもの頃は、近所の子ども同士で鬼ごっこをしたり、缶蹴りをしたり、下駄隠しをしたり、とにかくみんなで遊んだものです。どうしてみんなで遊んだのかというと、ひとりで遊ぶモノがなかったのです。いや、みんなで遊ぶモノもあまりなかったのかもしれませんが。だからそこらあたりにある石ころや空き缶なんかを使って、自分たちの遊びを創りだしていったのです。

思い返せば、豊かな時代だったのかも知れません。私が育ったのは、京都の市街地の中心部でしたが、近所には小さい子どもたちの面倒を見てくれるお兄ちゃんたちやお姉ちゃんたちがいて、しょっちゅうみんなで行動していたように記憶しています。そしてそんな子どもたちの行動を見守ってくれる地域の大人たちがいて、いけないことは容赦なく叱りつけてくれました。

私が子ども時代を過ごしたのは、1970年代ですが、そんな地域の状況は1980年代まで続いていたように思います。しかし、そんな地域の機能は、90年代に入るや否や急速に失われていきます。そしてそれは、子どもたちが次第に群れなくなっていくこと重なっていくのです。そこにはいったい何が起こったのでしょうか？

溢れるモノの中で

ファミコンやゲームボーイなどの電子ゲ

ームの登場は、子どもたちの遊びの形態をずいぶん変えてしまったのかもしれませんが。それは「集団から個人へ」というコトバで表現できるのかもしれませんが、気になるのは、ゲームを提供する側に子どもたちの遊びの形態が事前に意図されていたということです。ゲームを媒介として、子どもたちの生活の姿そのものが誰かの意図の上に乗っかってしまう。このことが「消費化」の本質なのです。

J.ボードリヤールは『消費社会の神話と構造』の中で「消費化による主体の喪失」ということを述べています。これは消費化の影響がどこまでも浸透した社会においては、消費者が自分の意思でそれを選んだのか、誰かによって選ばされたのか、その区別がよくわからなくなっていくということです。つまりふと気がつけば選ばされているわけです。しかも消費社会においては、絶えず消費活動が拡大的に継続されなければなりません。そしてその消費が継続されるためには、消費者にはある一定期間そのモノを使った後には、必ず新しいモノへと買い換えてもらう必要があるわけです。そうするとモノを提供する側は、いかに新しいモノが以前のモノより優れているかを主張するでしょうし、それは視点を変えれば、以前のモノがいかに劣っているかを表現することにもなるのです。

このように消費社会においては、絶えずそのモノの背景に誰かの意図があります。しかし消費者には、その意図を感じさせないように、そのモノを選択してもらわなければなりません。だからモノを提供する側にとっては、本当に賢い消費者の存在は困るわけです。こちらの思うように商品を購入し、こちらの思うようにその商品に飽きてもらい、そして新しい商品を購入しても

らう、そんな主体性の乏しい消費者がいいわけです。

80年代はそんな消費の拡大した時代でした。70年代の高度経済成長期を経て国民総中流化を成し遂げた私たちの社会は、80年代にさらにその消費活動を拡大していきやがてバブル期へと突入していったのです。

消費化は、より個人のニーズに対応する形で発展していきました。「みなさんのニーズ」から「あなただけのニーズ」へとニーズそのものが細分化されるようになっていきました。そうするとある領域に複数の種類の似たような商品が用意されることになり、私たちは自分の好みに合うものを手に入れられるというわけです。

ところが一方で考えないといけないのは、私たちは自分たちのニーズにピッタリなモノを手に入れられるようになることは、同時に自分の手で自分のニーズに合うモノを創り上げようとする創造性を失ってしまうことにつながっていくということです。それはボードリヤールの言うように主体性の喪失かもしれませんし、誰かと一緒になって自分たちのニーズに合うものを創りあげるといった共同性の喪失と言えるのかも知れません。

溢れる情報の中で

「学校の先生なんて、どうせ怒ったって僕らのこと殴ることできこない。殴ったらすぐ首やからな。だから怒らせたって、どうってことない……」

「学校は、いつもきれいごとだらけや。先生なんて偉そうなことばかり言っているけれど、その陰で危ないことやっては新聞沙汰になっている。きっとあんなの氷山の一角や」

「日本の政治なんて、もう誰がやっても同じ

や。教科書には、さも“ごもつとも”なことばかり書いてあるけど、実際の政治なんて民主主義なんかじゃない。汚い世界なんだろう」

これらは、アウラの中学生たちが実際に口にしていたコトバです。みなさんはこれを読んでどう思われますか？ 生意気な子どもの声として片付けてしまわれますか？ 実は、こここのところをしっかりと抑えておかないと、これからの教育について大きな捉え損ないをしてしまうような気がするんです。

かつて、N.ポストマンというアメリカの教育学者が『子どもはもういない』（The Disappearance of Childhood）という本の中で、「子ども」と「情報」との関係を論じました。ポストマンによると、中世以前にはそもそも「子ども」という概念そのものがなかったと言うのです。そしてその後、ルネッサンスにはいり、印刷技術が発明され書き言葉が一般化する中で、「子ども」という概念が「幼児」と「おとな」の中間に位置するものとして作られていったのです。このことは、書き言葉の普及によって、文字を読み書きできることがしだいに社会参加のための重要な条件となっていったことと関係があります。すなわち、幼児からおとなへ中間期に、ある一定期間、社会参加のために書き言葉を訓練する必要が生じ、この過程にあたる段階を「子ども」と位置づけ、その訓練を行う場として「学校」が誕生したのです。そういった意味では、「子ども」というものはまさに「情報」を取り巻く状況によって定義されてきたととらえられるのです。

ポストマンの主張は、このことを一旦押さえた後、さらにこの「子ども」という概念そのものが情報化社会によって大きく変

わりつつある現状に迫っていきます。すなわち、社会の情報を十分に持ちえない存在としての「子ども」はもういないと明言するのです。情報化社会に生きる子どもは、そのメディアの発達によりすでに情報を所有しているのです。彼らは、おとなたちの語る世界を「ただのきれいごとには過ぎない」とあざ笑うのです。先の中学生の例のように、彼らはその情報の真偽はともかくとして、すでに情報を手にしてしまっているのです。

だからこれからの教育は、このことを確実に踏まえないといけなように思います。一昔前なら、より多くの情報を手にしていることが賢者の条件でしたが、パソコンや携帯など、誰もがインターネットの端末を手にできる時代においては、誰もが情報を持っていることは前提条件となってしまいます。少なくとも、子どもは何も知らないと思うのは大間違い。彼らは私たち以上に多くのことを知っているのかもしれないのです。ただ、現代のように情報過多な状況においては、その情報が真実を表現しているのかどうかはわかりません。多くの人が情報によって操作されていることもまた事実なのかもしれないのです。

しかし、ともかくこれまでの「子ども」というものの概念は、あらためなくてはいけないことは確かなようです。ポストマンの言いたかったことは、「〈近代の子ども〉はもういなくなった」ということであり、私たちは、「〈ポスト近代の子ども〉」の概念を新たに作らなければならない」ということであり「それに見合う学校を作りださねばならない」ということなのです。

「先生、何熱くなってるの？」

「パフォーマティブな教師とそれに巻き込まれる生徒」。この関係が、80年代のフリーディの教育を支えていました。それは学校教育の中で学ぶことの意味を見失い、懸命にその意味を見出そうとしてきた私の思いの表現であり、学校教育の中で自分の居場所を失いつつあった子どもたちの思いの表現でもありました。そういった意味でも、フリーディは学校という学びの場と複線をなす「もう一つの学校」であったのかもしれませんが。そしてそれは、教師と生徒の深い関係とそこから生じるドラマによって支えられていたのです。

ところが、そんなフリーディの根幹の構造が揺らぎ始めたのは、90年代に入ってからでした。それまでの教師と生徒の深い関係を冷ややかなまなざしで見ると子どもたちが登場するようになっていったのです。

「先生、何熱くなってるの？」彼らは、必死に何かを語ろうとする教師に向かってそんなコトバを投げかけます。教師だけじゃなく、一生懸命に何かに取り組もうとしている生徒にさえ冷めた視線を投げかけるのです。自分たちは、何をしたいわけでもなく、ただ何となくフリーディに来て、何となく勉強し、何となく帰っていく。そんな生徒が目立つようになったのが90年代に入ってからだったように思います。佐藤学の言う「ニヒリズムとシニシズムの蔓延化」が子どもたちの世界にも少しずつ押し寄せてきたのです。

3. 90年代の渦の中で

ダルイ、ウザイ、メンドクサイ

90年代、それは私たちの生活が大きな渦

に巻き込まれた時代でもありました。その前半はバブル期。まさに怖いもの知らずの日本経済を謳歌できた時代でもありました。そしてその象徴が時代の寵児と呼ばれたIT関連の企業家たちでした。彼らの生活は、マスコミを通じて派手に紹介され、多くの若者たちはそんな彼らに羨望のまなざしを向けていました。しかしやがてバブルが弾けることになり、それまでの経済成長を前提とした私たちの価値観がその方向性を見失い始める時がきたのです。

もともと日本の教育の近代化は、富国強兵政策の一環として位置づけられていました。ある一定以上の質を持った労働者が、日本の将来には必要不可欠だったのです。そして身分制度を廃止し、「貧しい家の出身であっても教育を受けることによって立派な人物になれる」ということを美談として語り継ぎ、国民の上昇志向を育ててきたのです。だから経済の成長が停滞する、もしくは低減するということは、その根底が覆されてしまうことになるのです。つまり努力して学んでも、生活の豊かさが保障されないという状況を引き受けなければならなくなってしまったのです。

日本の近代教育というシステムは、経済のプラス成長ということを前提にしてデザインされてきました。途中、戦争というイレギュラーな事態はあったものの、そこから復興できるということが暗黙に了解されていたのかもしれませんが。しかしバブル崩壊後は、その前提そのものが崩れ去っていったのです。

大学を卒業しても就職に苦戦しなければならない。一旦就職しても、そこで安定した生活が送れるかどうかの保証もない。そればかりか、消費化の渦に巻き込まれた子どもたちは、与えられることに慣れ過ぎて

しまい、自分から何かを切り拓いていくような生活に適応しにくくなってしまいました。だから彼らの就職状況の困難さは、社会そのものの抱える状況と学生たちの抱える状況との重なりの中で生じていったと考えることができるのです。

大学を卒業してもその一方で就職に苦労してしまうという状況は「勉強なんか、どうせやっても無駄」というニヒリズムに容易に結びついてしまいます。それまでの「苦労を重ねれば、いずれは幸せが訪れる」といった公式が機能しなくなったことで、子どもたちの価値観そのものが迷走し始めたのかもしれませんが。そしてそんな状況の下で、彼らは「ダルイ」、「ウザイ」、「メンドクサイ」を連発するようになっていったのです。

モラトリアムとしての10年

バブル経済の崩壊は、成長を続けることを前提とした近代社会の基盤を決定的に揺るがすことになりました。そしてその背景には、消費化と情報化の進行による個人の脆弱性、さらには成長路線が危ぶまれたことによる社会価値の喪失感、そこから派生するニヒリズムや価値の多様化などがありました。それはまさに社会全体が大きなモラトリアムの渦の中に巻き込まれていくといった状況がありました。

社会学者の宮台真司はこのようなモラトリアムな現代社会のことを「二重の再帰性が交差する社会」と呼んでいます。二重の再帰性というのは、個人のシステムと社会のシステムの再帰性のことです。消費化と情報化が十分に浸透したポスト近代の社会においては、個人が絶えず自分というアイデンティティ（システム）を更新する必要

性があり、社会もまたそんな多様な個人を管理するための多様のシステムが求められるようになっていったと言うのです。そして社会のシステムの多様化は、ますます個人にとって社会をつかみどころのないものとし、さらに社会そのものの不透明感が個人のアイデンティティの確立を阻害していくという再帰的なループがそこに生じていくというわけです。だから90年代前半は、再帰的なシステムが複雑に機能しながら、社会全体がモラトリアムな渦の中へと落ちていくようなイメージだったのです。

しかしその後の90年代後半に私たちはかつてない大きな災害を経験します。95年の阪神淡路大震災です。まさに社会全体が大きなモラトリアムな渦の中にあったその時に、この震災はおこったのです。

震災は、私たち一人ひとりが何らかの形で自分自身の生活やこれからの生き方を振り返って考えるきっかけを与えてくれました。「たとえモラトリアムな価値観の渦の中にあっても、そこから本来の自分たちの歩む道を見出していかなければならないんだ」という意識を呼び戻してくれたのかもしれませんが。そしてやがて私たちは一方でまだまだ大きな不安を抱えながらも、また一方では微かな希望を抱いて新しい21世紀を迎えることになったのです。

そして当時のフリーディもそんな社会の大きなうねりの中にありました。私自身は、教師としてのパフォーマンスが空転してしまうようになったこと、子どもたちにコトバが届きにくくなってきたこと、彼らの意欲や意志といったものが見えにくくなってきたことを通してどこか教育の構造的な課題の存在を予感するようになっていました。近代教育のフレームそのものが、今の子どもたちの生活世界と根本的に矛盾してしま

うようなそんな感覚を感じるようになっていったのです。そしてこの感覚が、やがてアウラの誕生へと発展していくことにつながっていくのです。

私たちはどこへ向かえばいいのか？

21 世紀を前にして起こった阪神大震災、それは、まさに近代からポスト近代へという社会全体のパラダイムがシフトしていくその狭間に生じた出来事であり、この出来事を通して「私たちは、これからどこへ向かえばいいのか？」そんな問題提起をそれぞれが突きつけられる結果となりました。

私は 10 年以上続けたフリーディの活動にどこかで終止符を打つ必要を感じていました。新しい学びの理論と新しい学びの実践が必要だと感じたのです。社会が近代からポスト近代へと移行していく中で、教育も近代のシステムからポスト近代のシステムへと更新されていかなければならないと感じていたのです。当時フリーディは、京都市内に 2 つの教室を開いていたのですが、私はそれら段階的に閉める準備に取り掛かりました。そしてそれは同時に、新しい学びのモデルの模索の始まりでもありました。「私たちはどこへ向かえばいいのか？」その問いの答えを私は、私なりに見出そうと動き始めたのです。

4. 〈先生〉というラベル

ガソリンスタンドでのアルバイト

私は学びの森を立ち上げる前に、ガソリンスタンドでアルバイトを半年間した経験があります。そしてこのアルバイトの経験

がきっかけとなって、今までの教室を少しずつ整理し始め、40 歳になった年に学びの森を立ち上げることになるのです。だから、私にとってこのアルバイトでの経験は、大変大きな意味を持つことになったのです。ここでは、その経験を書いたエピソードを紹介したいと思います。

その日私は、自宅のある亀岡から京都に向かう車の中から普段の見慣れた風景をただボーッと眺めていました。京都市内に入る峠道のふもとに、一軒のガソリンスタンドがあります。そのスタンドのところにひとつの立て看板があり、そこに「アルバイト募集」という文字が書かれていました。

「あれ、これ昨日読んだアルバイトニュースに載ってたぞ」

私は、その前日に本屋で配布されているアルバイトニュースを持ち帰り、家で読んでいたのです。その中にこのガソリンスタンドの求人情報が載っていたのです。私はその偶然に驚きながらも、「これは、ここで働かないといけないということだ」と、直観的に思い、車を U ターンさせてそのスタンドに入っていました。

私は、大学の 4 回生の頃から自分で学習塾を始めていました。当時、銀行から運転資金を借り入れ、京都市内に教室を 1 つ構えて自分の理想の教育に向かってその実践を模索していました。思い返せば、在学中に出会った一冊の本がそのきっかけでした。当時、北海道新聞のジャーナリストだった大沼安史さんが 70 年代のアメリカのオルタナティブ教育の実践を紹介した『教育に強制はいらない』という本です。私は、当時のアメリカの自由な教育に感銘を受け、それを日本で実現したいと考え、私塾を始めたのです。それ以降私は、リベラルな教育の実現をめざした取組を

そこで15年おこなうことになったのですが、10年くらいたった頃から、一つの疑問を抱くようになっていきました。それは、「先生」と呼ばれてきたことへの疑問です。

私は22歳の頃から、ずっと「先生」（今は、「塾長」と呼ばれていますが）と呼ばれてきました。「先生」と呼ばれ続けると、自分を「先生」と思いこんでしまう。自分なりに「先生」が何なのかという定義づけもされないまま「先生」になってしまう。つまり「先生」と呼ばれ続けることで見失ってきたものがあるのではないかという疑問を私は抱いたのです。だから、人に雇われる仕事をしてみようと思いついたのです。そこから出てくるものはいったい何なのか、それを知りたいと考えたのです。そして、私は1冊のアルバイトニュースを手にいれ、このガソリンスタンドと出会うことになったのです。

「あの、すみません、アルバイトを募集されていますか？」

「してますけど…」

40歳くらいの陽に焼けた顔のマネージャーが、私に対応してくれました。

「アルバイトしたいんですけど…」

「誰が？」

最初、マネージャーは、ネクタイにスーツ姿の私がアルバイトを希望していることにピンとこなかったのかもしれませんが。

「私なんですけど…」

私はそう言って、生まれて初めて書いた履歴書を彼に手渡しました。今から思えば笑い話になるのですが、私は履歴書の資格欄に、TOEFLのスコアやら、心理関係の資格などを書き連ねていたことを思い出します。

「塾を経営してはるんですか…、何か事情がおりなんですか？」

「いや特に事情はないんですけど、私は今までどこにも勤めたことがないもんで、人の

下で働いた経験がないんです。これではいかんと思ひまして…。こんな私でもアルバイトとして雇っていただけますでしょうか？」

「変わっておられますね。でもわかりました、来てください」

こうして私は無事、面接をパスしてアルバイトに採用されることになりました。生まれて初めての面接、生まれて初めての採用、何もかもが私にとっては初めての経験でした。スタンドの制服と帽子、それに作業靴を貸してもらい、私は塾の仕事の都合のつく水曜日の午前7時から12時までの5時間、週1回だけでしたが、私のスタンドでのアルバイト生活は始まりました。

「まず、発声練習から教えます。あそこに山があるでしょ、あの山にいる人に聞こえるくらいの声で…、“いらっしゃいませ”、“ありがとうございました”、“かしこまりました”、“少々お待ちください”、“レギュラー満タン入ります”、“キャップOK、ロックOK”…」

車の誘導の仕方から、言葉のかけ方、ガソリンの入れ方、ボンネット点検の仕方…、私は、一つ一つ仕事を覚えました。もちろん、いろいろとミスをしました。その度に、マネージャーや先輩（先輩といっても大学生たち）から叱られました。でも叱られながらも、私はマネージャーと先輩の叱り方の違いや、叱った後のフォローの仕方、それに叱られた時の自分の感情などをじっと観察していました。普段の仕事では経験のできないことです。自分か叱られる立場になって初めて理解できる感覚です。

スタンドの仕事は立ちっぱなしでした。普段、エアコンの効いた部屋で座って仕事をしている私にとっては、慣れるまでなかなかつらいものがありました。お客さんもいろいろです。偉そうな人もいれば、本当に丁寧な対応してくれる人もいます。「お兄さん暑いし

大変やろ、これでジュースでも買って」と、洗車の後、小銭をいただいたこともあります。とっても嬉しかった思い出です。

スタンドに入って半年が経った頃、私はある大切なことに気がつきます。そしてこのことへの気づきが、後の学びの森の構想へとつながっていったのです。私の気づきは、〈経験〉に関するものでした。当時スタンドには、私の他に 20 代のバイトの子と学生のバイトの子が数名おりました。私を含めてバイトの人間は、毎日ほとんど同じ仕事をしています。来る日も来る日も同じことの繰り返しです。しかし、同じことをしていても、私とバイトの A 君とでは、その意味付けが違っていました。大学生の A 君は、バイトで稼いでバイクを買おうとしていたのです。彼にとっては、スタンドでの仕事は自分がバイクを手に入れるための手段としての意味を持っています。一方で私にとっては、このバイトは自分が経営者という立場の中では見えない世界を学ぶ場という意味がありました。私にとっては学校のようなものです。

本来、〈経験〉というのは、その経験をした人によって全く違った意味付けがされるものです。このことを哲学者の森有正は、〈体験〉と〈経験〉というコトバを使い分けることで説明をしました。〈経験〉とは、その人が意味付けをした〈体験〉のことであり、同じ体験をしても、違った〈経験〉が成立するのです。そしてこのことは、教育に関しても同じことがあてはまります。同じ授業を受けても、学習者によってその意味付けが違って来る。ある授業を受けて、人生そのものが大きくシフトしていく学習者がいる一方で、昼休みの弁当のことばかり考えている学習者がいるのです。つまり、学びはいつも学習者によって定義されるということなのです。

私にとって、この気づきはことほか大きな

ものでした。今まで教育は、一般的には教える側によって定義され、その方法が決定されていました。つまり〈教える〉という側に立った教育論がそこにあったのです。でも一方で〈学ぶ〉という側に立った教育論が大変重要であることに気がついたのです。常に学習者である〈個〉にフォーカスしていく教育の必要性を、私はその瞬間に感じ取っていたのです。

スタンドでのバイトを始めて半年後、私はこの仕事を卒業する時が来たと感じました。何を得るために私はこのバイトをしてきたのか。それがとてもクリアになった時、私はマネージャーにその旨を伝えました。

「北村さん、卒業ですね。この経験をもとにして、これから、もっと御自身のお仕事を大きくしていきましょう」

お世話になったマネージャーから、ありがたい言葉をもらって、私のアルバイト生活は終わりました。そしてそれから、学びの森のコンセプトを原稿にまとめ上げ、私は新しい教室を立ち上げることになったのです。

ラベリングについて

「ラベリング理論」は、H.S.ベッカーが提唱した理論です。ベッカーは、逸脱的な行動をとる人たちは、社会からある特定のラベルを貼られた存在としてそのまなざしを向けられていることに注目します。そしてやがてそのまなざしは、本人自身に転移していき、逸脱的な行動をとる人自身が、自分にラベルを設定してしまうのです。つまりそこには、二重のラベリングがおこなわれているわけです。そしてラベルは、その人を知らず知らずの間に縛りつけ、その捉われの中でパースペクティブに偏りが生じていくというのです。

ベッカーはこのラベリング理論を説明するためにその著書『アウトサイダーズ』の中でジャズ・ミュージシャンの例を挙げました。彼は参与観察の手法を使って、彼らのラベリングを通じた捉われの実態を解き明かしていくのですが、このラベリングは何も逸脱的なアウトサイダーズに特定して観察されることではないのです。彼らの事例はそれがとてもわかりやすい形で表現されているだけのことであって、実は私たちの誰もがラベリングの捉われを背負って生きているのです。ベッカーはそのことをこの理論を通して説明したかったのではないかと私は考えています。

さて話を本論に戻していきましょう。私は新しい学びの場の構想を立てていくために、ガソリンスタンドでアルバイトを始めました。一見するとそこには何の脈絡もないように思われるのですが、私の中では「先生」というラベルを一旦取り除くことで、新しいパースペクティブを手に入れることになったわけです。このことは私自身にとって大変大きな意味を持つことでもありました。パースペクティブが変われば、私の見る世界そのものが変わっていくのです。そしてこのパースペクティブは決して誰かに与えられるものではなく、私自身によって定義されるものだったのです。言い換えれば、私は私の新しいラベルを貼り付けたのかもしれませんが。そしてラベルを一旦はがし、新しいラベルへと張り替えていく過程そのものが、学びの森における新しい学びの概念と重なるように思い始めていったのです。

学びは、学習者自身によって定義される

「学びは、本来学習者によって定義される

ものだ」という気づきは、学びの森の構想の根幹にくるものでした。それは、私の高校時代のカンニング事件から始まった「学びとは何か」という問い、そしてもう一つの学校としてのフリーディでの経験、さらには社会の変化を背景にした子どもたちとの関係に対する違和感、そして教えないという M 先生との出会い、それらが、このガソリンスタンドでの経験の中に統合されていきました。それは長い間抱き続けた私自身の問いが「学びは、学習者自身によって定義される」というとてもシンプルな表現として私の前に現れた瞬間だったのです。

でも今になって振り返ると、その答えを私は既に持っていたのかもしれませんが。ただ持っていたも、それをうまく言語化できなかった。どこか私が経験してきた学校現場や、それに代わるものとして私自身が運営を始めた学習塾、それでもどこか違うという感覚がありました。その感覚に気づくための経験を重ねていき、それがガソリンスタンドでのアルバイトを契機に統合され、コトバとして私の前に現れたのだと思っています。そしてそれを可能にしたもの、それは、「先生」というラベルをはがし取ることだったのです。そのことで、私は新たに今までとは違う視野を得ることができ、あらためて「学び」について考えることができたのです。

5. 学びの森の基本フレーム

自律的で能動的な学習者

ガソリンスタンドのアルバイトを終えた私は学びの森の構想を少しずつ練り上げ始めました。

最初に考えたのは、そのフレームです。場というものは、そこにフレームがないと成立しません。家屋にたとえると、基礎の部分です。「何をその基礎に置くのか」最初にやらないといけないうのは、それを決めておくことです。そこで私は、まず学びの森の学習者と教師との関係について考えてみました。

学びの森では、自律的に学ぶことが前提となります。それは教師の指示に従って学ぶ学習ではなく自分の意志に従って学ぶ能動的な学習です。ところが子どもたちの多くは、ほとんど自律的に学んだ経験がありません。何をどう学べばいいのか、その術がわからないばかりか、自分自身で学ぶことへの自信もあまりありません。そんな受動的な学習者を能動的な学習者へと変容させていくことが、すなわち学びの森の第一義的な役割と考えました。だから学びの森の教師たちは、従来の学校とは、その役割が必然的に違ってくるのです。

学びの森の教師たちに要求される最大の資質は、観察者としての能力です。教師は、学習者である生徒一人ひとりの理解の状況、行動の状況、心の状況、友達関係、家族関係等、可能な限りの情報を手に入れる努力をしなければなりません。そしてその生徒を取り巻く全体像を一旦理解した上で、彼らの学びをサポートしていくのです。具体的には、学習計画を立てたり、その目的を明確にしたり、理解の程度を確認したり、寄り添いながらその学びを応援していくのですが、それは単に学習内容の理解ということを超え、その学びを通して学習者自身の成長が促されていくことになるのです。つまり学びの森では、「学び」と「育ち」が同じ次元の活動として位置づけられているのです。

学習者の数だけカリキュラムがある

学校では様々な状況の生徒であっても学校の用意した一つのカリキュラムを学習しなければいけないわけですが、学びの森では、一人ひとりの状況に合わせてカリキュラムを立てていくので生徒の数だけカリキュラムがあります。ただそんな生徒が、バラバラに学んでいくのではなく、開放された場で共同的に学んでいきます。つまり、学びの森では、みんなが同じことを同じように学ぶといった均質的な学びではなく、それぞれがそれぞれのカリキュラムに基づいた学びを展開する多層的な学びの構造を持たせるように考えられています。

そんな自律的で多層的な学びの展開は、学校のような機能的にデザインされた学習空間ではなかなか実現できません。そこで、学びの森では、学校とは違った環境を想定する必要がありました。

「環境とは何か」、「学びと環境との関係とは」、「環境の中で構成される磁場とは何か」、様々な問いを立てながら、私たちは学びの森の環境作りに取り掛かり始めたのです。

環境とは何か

学校の教室は、あらかじめ用意された情報を多くの学習者に効率よく伝達することを目的に構成された環境です。そこには、唯一の正解を、無知であることを前提にした学習者に伝えるといった近代教育のモデルが想定されています。だから教室に入った生徒たちは、教師からの指示を待って行動するわけです。そこには受動的な学びの形がその環境に意味として埋め込まれてい

るわけです。そしてこの意味のことを、J. ギブソンは〈アフォーダンス〉と呼びました。

アフォーダンスは、環境を媒介としてそこに埋め込まれた意味を個人に伝えます。それは主に身体を介して、あるいは感覚を通して個人にその意味を伝えるわけです。だから学校の持つ従順で受身な生徒を期待するアフォーダンスは、自律的な学びの実現を目指そうとする学びの森のコンセプトには適さないというわけです。だから私たちは自律的な学びに適した環境を、一から作り出さないといけないということになったわけです。

学びの森は、読んで字のごとく「学習者のための森」です。そこにはたくさんの緑の植物が並べられ、大きな窓からは陽の光が差し込みます。大胆にデザインされた吹き抜けの空間は開放感を表現し、様々な形の机と長時間の学習にも疲れない快適な椅子が用意されています。教室には、ホワイトボードがありません。先生の怒鳴り声もありません。流れているのは静かなクラシック。窓辺には、大きな水槽に優雅な熱帯魚たちが泳いでいます。学びの森は、そんな環境を備えた場です。定員は、学校のクラスとほぼ同じ 30 名あまり、それはあえて学校でも再現できるサイズを想定してあります。

学びの森の環境は、モノだけで構成されているわけではありません。様々な学年の生徒たちが、それぞれのカリキュラムを静かに集中して学んでいく姿は、新しい生徒たちに大変新鮮な感覚をもたらします。集中した空間の中では、時間さえもが早く過ぎ去ってしまう感覚をたいていの生徒が経験するのです。

環境というものは、自分自身とその場

との関係であると言ってもいいと思います。ドイツの生物学者、J. ユクスキュルは、それぞれの動物が知覚し作用する世界の総体を、その動物にとっての環境であるとし、それを〈環世界〉と名づけました。そして動物主体と環世界との意味を持った相互交渉を大変重視したのです。

ギブソンの〈アフォーダンス〉、ユクスキュルの〈環世界〉、それらは共に学びの森の環境を語る上ではなくてはならない概念なのです。

学校でも学習塾でもコミュニケーションでもない 森という空間

学びの森は、受動的な学びを前提とする学校ではありません。受験に向けた機能的な学習だけを追求しようとする学習塾でもありません。かといって私たちの生活世界から隔離されたコミュニケーションでもありません。学びの森は、私たちのどこにでもある生活世界の中にあるのです。

学校に通っている子どもたちは、「学習塾」として学びの森に通い、学校に通っていない子どもたちは「フリースクール」として通ってくるのです。その動機は様々です。

「環境がよさそうだから」

「集中して学べるから」

「自分のペースで学べるから」

「知り合いがいいといっていたから」

「勉強以外の部分でもサポートしてもらえるから」

「子どもをととても良く見てもらえるから」

「学校の代わりに通うことができるから」

「もう一度、やり直せそうな場だから」

など…、

実に多岐にわたっているのです。

学びの森には、様々な入り口があるのかもしれませんが。ある特定の生徒しか受け入れられないのではなくて、勉強が得意な子もそうでない子も、意欲の高い子もそうでない子も、学校に通っている子も通っていない子も、小学生も中学生も高校生も大人までもが共に学び合うそんな空間なのです。

コミュニンは、私たちの生活世界と一線を引いたある閉鎖空間の中で、今までとは違った価値や型式、技術を習得していくことを目的としています。そこにはある一定の閉鎖性ということが重要な意味を作りだしています。

しかし学びの森には、この閉鎖性が存在しません。私たちの世俗的な生活世界とどこかで繋がりながら、新しい価値や新しい型式へも繋がっている、まさにそこは海水と淡水が混ざり合うような汽水領域なのです。様々な価値が混ざり合いながら、ある秩序を維持できる空間なのです。

本来、自然の森はそんな混在性を持っています。ある特定の木々を計画的に植林した人工林とは違う力強さを備えています。そんな森の世界、その豊かさを私は学びという領域の中で実現させたいと考えたのです。

6. 3つの理論を軸として

学びの森の構想を組み立てることにおいて、私は3つの学習理論を活用しました。M.ノールズによる〈自律学習理論〉、J.レイブとE.ウェンガーによる〈正統的周辺参加理論〉、そしてJ.ギブソンによる〈アフォーダンス理論〉です。ここでは、これら3つの理論について順に見ていくことにします。

自律学習理論

〈自律学習理論〉(Self-Directed Learning)は、M.ノールズによって1970年代に提唱された学習理論です。ノールズはもともと成人教育の実践家であり、成人教育を子どものための教育の延長上に捉えることに無理を感じていました。そこで子どもための教育であるペダゴジー

(Pedagogy)とは別に、大人が学習することを援助する技術と科学を新しい概念としてアンドラゴジー(Andragogy)と名付け、それを体系化していったのです。そしてこのアンドラゴジーの中心課題におかれていることこそが、学習者自身がいかにか自己主導的な学習者になれるかということであり、どのようにすればそれを援助できるかということでした。

ノールズの自律学習理論においては、まず学習者は〈学習契約〉という手続きを踏むことによって自らの学習に対して主体的に関わる取り決めをおこないます。

そしてその学習プロセスとしては、

1. 雰囲気創出
2. 参加的学習計画のための組織構造の確立
3. 学習ニーズ診断
4. 学習目標の方向性の設定
5. 学習活動計画の開発
6. 学習活動の実施
7. 学習ニーズの再評価

といったかなりシステマティックに順序立てられた流れに従うことになります。

以上がノールズの自律学習理論の概略ですが、学びの森の構想においては、それをそのまま採用したわけではありません。学習者が大人と子どもという違いもありますし、

ノールズの提案する学習プロセスがシステムティックにパターン化され過ぎているところも気になりました。しかし、学習者が学習課題を自分ごととして捉えられるようになること、一斉の授業形式ではなくそれぞれの学習者がそれぞれのペースで学び始めるようなスタイル（学習リテラシー）を作りだせること、教師がインストラクターという役割ではなく観察者となり支援者となっていくことが可能となること、これらの変化を私は自律学習理論に期待すると共にこの理論を学びの森の教育の柱の一つに据えることにしたのです。

正統的周辺参加論

多くの学校現場で採用されている〈習熟度別クラス〉、私はこれに対して批判的な立場をとっています。教育学者の佐藤学も『習熟度別指導の何が問題か』（2004）を発表し、習熟度別指導が競争原理に基づいたものであること、そしてそれが必ずしも学力向上に寄与しているという根拠がなくなっていること、さらにはそれに代わるものとして協同的な学びの必要性を主張しています。

佐藤はその著作の中で、〈競争〉よりも〈協力〉原理のほうがはるかに生産的であり有効性が高いことを立証していくのですが、彼の主張の根拠には、L.ヴィゴツキーの〈発達最近接領域〉の理論があり、共同的な学びの場における学習者同士あるいは教師と学習者との関係によって一人で学んだ時以上の能力を有効に引き出しうると考えていたわけです。ヴィゴツキーはこのような誰かとの関係によって引き出せる能力と個人が一人で引き出しう能力との差を〈発達最近接領域〉と呼び、共同的なやり取りの有用性を指摘したのです。

この佐藤の指摘は非常に重要です。近代からポスト近代へと社会が移行していく中で、個人はどうしてもその生活世界において孤立する傾向にあります。様々なコミュニティにおける有機的関係が失われていく中で、個人の孤立は進行していくのです。そしてそこには、消費化と情報化によって、個人が他者と繋がらないままにモノと情報を手に入れられるようになったことがあるということはすでに取り上げてきましたが、さらにはこのような個人の生活あるいは行動様式の変化が、学習の機能化と交差するといった背景があるのです。

唯一の正解にいかに効率よく到達するかをどこまでも追求しようとした学習の機能化は、どうしても理解に向かう文脈を軽視します。学習の機能化は、情報の分断化につながり、知の解体を意味しています。大事なことは、学習者の生活を支える社会そのものが、こういった傾向の中にあるということです。だからこそ、佐藤のいうようにあえて共同的な学びが必要となってくるというわけです。

学びの森の立ち上げに先立ち、私は思い切ったイメージを描き始めていました。それは習熟度別クラスを不採用にするどころか、学年の枠組み、あるいは教科の枠組みまでも取り払おうとする大胆なイメージでした。学年も能力も違う学習者たちが、めいめいに違った教科を学び合う。しかも彼らは自律的に学ぶのです。そんな状況は、自ずと私に従来の教室とは違った学びの場を想起させました。そうそれはまるで図書館のような空間。学習者が主体となり、それぞれの学びが層のように積み重なっていく空間なのです。そしてそんな私のイメージを実現に向かわせるための理論、それがJ. レイブと & E. ウェンガーによって提

唱された〈正統的周辺参加理論〉(Legitimate Peripheral Participation)でした。それは、徒弟的な関係性を根底に持つヨーロッパの伝統的な職人教育をヒントに構築された理論で、従来の伝統的な教育理論に対して、〈学び〉の過程を共同体への〈参加〉の過程と位置づけたものでした。

〈正統的周辺参加理論〉の重要なキーワードは、〈実践共同体〉〈徒弟的構造〉そして〈参加〉です。そしてある特定の意図で構成された実践共同体には、多層的で有機的な人間同士の繋がりがあり、新参者たちは、次第にこの繋がりの中に巻き込まれるような形で参加し、ある特定の知識や技術を獲得していくというのがこの理論の基本のスキームです。そして私はこの理論を学びの領域に活用してその現実化を試みたのです。

学びの森の究極の意図は、誰もが到達し得ない〈学びの本質体験〉にあります。この実践共同体に参加する生徒、教師、そして塾長である私の誰もが、学びの本質をめざしてここに集まっています。ところが、新参者である生徒たちの学びは極めて受動的で機能的なものです。そんな彼らが、いかに学びの本質の存在を感じとり、そこに価値を見出せるのか。そこが私たちの仕事なのです。そのためには、彼らの中にいくらかの変容が生じなければなりません。機能的な学習の世界から学びの本質を感じ取る世界への飛躍は、パースペクティブそのものが変化しないと不可能なのです。だから、共同体の内部の有機的な人間関係、その共同的なつながりが成員たちの変容を促すことになっていくのです。だから、そこには異質なものが層のように混在している必要があるのです。単層の中では変容が生じにくいからです。これが、私が学年も

能力も違う学習者たちが、それぞれに違った教科を学び合う状況を学びの森にイメージした理由なのです。

アフォーダンス理論

〈アフォーダンス理論〉(Affordance Theory)は、J.ギブソンによって提唱された理論です。ギブソンが長年かかって確立した理論は、まとめて〈生態学的認識論〉と呼ばれており、初期の認知科学理論である〈情報処理モデル〉と真っ向から対立するものでした。情報処理モデルでは、人間は環境から刺激を受け取り、その内部で意味を持った情報が作られると考えられていましたが、〈生態学認識論〉では意味を持った情報は環境の中に備わっており、私たちの認知とは、その情報を探索することであると考えたのです。

ギブソンによると、私たちを取り囲む環境には、すでに多くの情報が埋め込まれており、私たちにイメージを与えたり動作を促したりしていると考えられています。そしてギブソンは、この環境の中に埋め込まれている情報がその中にいる人間に与えている価値のことを〈アフォーダンス〉と呼んだのです。このアフォーダンスというコトバは、ギブソンによる造語であり、これはもともと英語のアフォード(afford)「～を与える」に由来しているものです。認知科学の専門家でありギブソンの研究者でもある佐々木正人は、その著書『アフォーダンスー新しい認知の理論』(1994)の中で次のように書いています。

アフォーダンスは事物の物理的な性質ではない。それは「動物にとっての環境の性質」である。アフォーダンスは、知覚者の主観が構成するものでもない。それは環境の中に実

在する、知覚者にとって価値のある情報である。（中略）アフォーダンスをピックアップすることは、ほとんど自覚なしに行われる。したがって、環境の中にあるものが無限のアフォーダンスを内包していることに普通は気づかない。しかし、環境は潜在的な可能性の「海」であり、私たちはそこに価値を発見し続ける。

佐々木は、ここで環境に埋め込まれている情報は無限であると言い切ります。そしてその情報を探索しそれにアクセスしようとする私たちの知覚システムも生涯変化し続けるものであり、その情報の数に対応するように無限に分化できる可能性を持っていると考えます。だから、知識を蓄えるのではなく身体のみをより複雑に洗練されたものにしていくことが発達することの意味であると述べているのです。

この佐々木の指摘は実に興味深いものです。環境の持つ無限の情報に自由にアクセスできるようになるためには、知識を蓄えるのではなく、身体のみを洗練させなさいと言っているのです。つまり環境に埋め込まれた無限の情報は、身体を媒介にして私たちの知覚システムと繋がり、そこにアフォーダンスという価値が生まれるということを主張しているのです。

私は学びの森を立ち上げるにおいて、このアフォーダンス理論を「子どもたちの主体性をいかに取り戻すか」というテーマに利用しようと考えました。主体性というのは、他人によって与えられるものではないからです。つまり私がいくら子どもたちに「主体的に取り組みなさい」といっても子どもたちは、ますます受身になるだけです。だから「主体的に学ぶ」という情報を、私は学びの森の環境の中に埋め込むことを考えたのです。そしてその情報に子ども

たちが身体を媒介にしてアクセスしていくというアフォーダンスモデルを想定したのです。

7. アウラ学びの森

W.ベンヤミンの〈アウラ〉

2000年4月、学びの森は、京都府亀岡市に設立されました。ガソリンスタンドのアルバイトから2年、私はその構想を温め、ようやく設立までこぎつけることができました。

学びの森はその頭に〈アウラ〉というコトバを採用し、「アウラ学びの森」という名称に決まりました。

「〈アウラ〉って、いったいどんな意味なんですか？」

私たちは、そんな質問をよく受けることがあります。そこで少しそのコトバについて触れてみたいと思います。

「アウラ学びの森」の〈アウラ〉というコトバは、20世紀初頭に活躍したドイツの哲学者、文化社会学者であったW.ベンヤミンの aura の定義からの引用です。

ベンヤミンは、『複製技術時代の芸術』の中で、今ここにしかないという〈唯一性〉、〈一回性〉によって芸術作品がまとう独特の価値、あるいは人間の経験における〈一回性〉、〈全体性〉の持つ意味を aura と表現し、その aura の喪失を持って複製文化=近代社会の始まりと考えたのです。

ベンヤミンが活躍した時代は、いよいよ近代化が本格的に私たちの生活世界に普及しようとする20世紀の初頭でした。彼はその大きな社会のパラダイムがシフトしているように感じる境界に立ち、近代化の拡大の陰

で確実に失われつつあるものを見出したのです。ベンヤミンがそこで見出したもの、それが芸術領域の中における aura だったのです。

ベンヤミンの時代の近代化は、大量生産のシステムを意味します。すなわちそれは、複製されたモノが機械化によって大量に生産され始める時代の幕開けでもありました。複製されるのはモノに限られません。芸術に代表される文化そのものが大量生産の対象になっていくのです。その過程の中で、aura がそぎ落とされようとしていくのです。

ではそこで言われている aura とは、何なのか？ それは、「一度しかないその瞬間における本質との出会い」なのです。〈本質との出会い〉それは、いつの時代も「物の哀れ」、つまり儚さを含んだものなのです。

私はこのベンヤミンの aura というコトバを学びの森の名称に採用するのですが、それは、学びの世界においても aura の喪失が、知の世界の断片化をもたらし、学習者自身の知の世界と壮大な知の歴史との相互的なやり取りを消滅させていると感じていたからです。だから私は、学びの世界において喪失した aura の再構築を願って、このコトバを学びの森の名称に引用したのです。

ベンヤミンが警鐘を鳴らしたのは、社会がいよいよ複製文化の時代へ突入し始めた 20 世紀初頭のことでした。そしてそれから 100 年たった今、まさに 21 世紀の初頭にベンヤミンの警鐘は再帰したのです。消費化と情報化が私たちの生活世界をどこまでも呑みこみ、その主体さえもが喪失されようとしているポスト近代と呼ばれる時代において、アウラ学びの森は、何かを主張し始めようとしたのかもしれない。



(きたむらしんや 2011/9/16 脱稿)

『幼稚園の現場から』

VII・園での怪我（事故）とその対応

原町幼稚園（静岡県沼津市） 園長 鶴谷主一

◆危ない遊具は撤去？

「最近の幼稚園からは、大型遊具が少しずつ姿を消している」という噂があります。噂とはいえ、幼稚園に体育講師を派遣している某会社の幹部から聞いたことなので、信憑性はあるでしょう。なぜか、「園児の怪我を防ぐため」だといいます。

私の幼稚園に常備してある「危機管理ブック」の中に弁護士さんのアドバイスが書いてありますが、『たとえば滑り台などの遊具で園児が怪我をした場合、園側にその怪我を予見出来たにも関わらず、その怪我を防止すべき義務を果たさなかったと認められる場合、義務違反により園児が怪我をしたら園側が賠償責任を負う可能性がある。』と書いてあります。

ここでいう義務とは、どんなことか。

①遊具本体の安全の確保

（設置の安全性、整備と点検）

②遊具の使いかたについて園児への指導と監視

を保育者がしっかりしていたか

おもに、この2つに集約されるようです。

どちらも大切なことなのですが・・・②において保育者が事故の瞬間を見ていなかった場合は、義務違反とされる可能性が大きいということになるようです。果たして保育者はケガの瞬間に100%立ち合うことができるのか？私の経験だと5割は立ち合えない場合が多いです。

園でいちばん怪我が起こりやすい時間帯は、朝の一斉活動（学校でいう授業）が始まるまでの登園時間（午前8時半～10時頃まで）と、降園時間（午後2時～4時頃まで）です。この時間はクラス単位ではなく全クラスがごちゃまぜで遊んでいます。幼稚園では一般的に「自由あそびの時間」と言います。



余談ですが、遊びは本来自由なものですから、それに自由を付け加えるというもおかしな単語ですが、幼稚園や保育園では一斉活動や課題活動のことを「設定遊び」と呼ぶこともあるので、その時間と区別するために「自由あそび」が生まれたのではないかと思います。だいたい「設定遊び」という単語もおかしいのですが、たとえ文字の勉強を

していたとしても、ほにしろ国の定めた幼稚園教育要領で「子どもの学習は、遊びを通しての指導を中心とすべき」と謳われていますので、「これはあそび！」と言わざるを得ない状況があるのでしょう。

◆自由遊びは忙しい時間

さて、この自由遊びの時間は、保育者はとても忙しい時間です。晴れた日、子どもたちは園庭で遊んでいます。朝は200人ぐらまでドンドン人数が増えていきます。9人の保育者は手分けして仕事をこなしています。送迎バスに3人添乗し、残り6人で朝の掃除をしつつ、徒歩通園の子どもたちを受け入れます。遊び始めた子どもと一緒に遊んだりもします。担任がバスに乗っているクラスのフォローもしなければなりません。時にはぐずる子どもを抱っこして、気持ちが落ち着くまで一定時間ケアすることも必要です。着替えができていないか部屋の様子も時々見に行かなくてはなりません。子どもたちだって、先生と話をしたくて機関銃のように話しかけてきます…。

徒歩通園のお母さん方からは「今日は薬を飲ませて下さい」とか、「預かり保育をお願いします」とか、「今日のお弁当にきれいな物を入れたので食べられるかしら？」とか、「昨日、お着替えを持って帰ってこなかったんですが…」とか、いろんな情報や会話が弾んだり、、、それを担任に的確に伝える処理もしなければなりません。

こんな状況で園庭に常時いられるのは2～3人に減ってしまいます。

こんな中で、どうやって怪我の瞬間を把握出来るのでしょうか？

怪我は一瞬です。

そう思うと、経営者はだんだん怖くなって、危険な物が無ければいいんだ。無くしてしまおう、という思考になっていくのも無理ないといえるかもしれません。だから危ない遊具は撤去されていくのでしょう。経営面から見れば理にかなっているでしょう。



《協力して、ヨイショ！さかあがり！》

◆育てるのが仕事なのです

私はこの姿勢に反対です。

怪我や事故という直近のリスクを取り除き、「子どもの発達」というすぐに結果の見えないことは責任をとらない。とらなくても見えてこないし、卒園したらあとは学校にお任せ。

小学校で子どもたちがよく転んだり人とぶつかったりするので、転ぶ練習をさせているというニュースを見たことがあります。これなどは、まさに幼児教育が義務を果たしていないせいではないでしょうか。

危ないぐらいが子どもたちには面白く、多少危険なことにチャレンジすると、すり傷や打撲ぐらいは経験することになります。もう痛い思いをしたくない、と思いつつ楽しいからまたチャレンジする…そんな経験から「自ら危険を回避する力」が育っていくのです。

そんな方針の園は探せばいくつかあります。子どもたちの外遊びを重視し、その環境を作っている園

です。私の園でも本格的に「外あそび」を重視している園にはまだまだ及びませんが、多少難易度の高い遊具を配置し、ルールを守れば冒険的な遊びもできるように見守っています。そのため入園の前から「多少の怪我は承知の上で入園させて欲しい」と保護者に事前通知し、折りに触れて子どもの身体の発達についても話をし、文書にも書いてきました。

◆日常の取り組み

「だから怪我したっていいんだ」という姿勢では決してありません。園児が怪我をした報告は、小さな怪我でも毎日のミーティングで共有し、次の手順で処理していきます。

まず①怪我の発生原因と

処置についての報告。

次に②保護者への謝罪や本人を含む

心情的ケアはきちんとできているか

③友だちとのトラブルでケガをした場合

は双方の保護者への連絡は

できているか

たいていの怪我はここまでの対応で解決します。

もう少し大きい怪我、すぐに医者に連れて行かなくてはならないような怪我也年に数件起こりますが、この場合は園長にも直ちに報告が入り、私が包帯を持って応急処置をすることも多いです。

通院した場合は、園内の怪我は全て園が治療費を負担することになっているので、

④医療費の支払の件が

保護者に伝わっているか

⑤怪我の原因は何か

⑥再発を防止するためにすべきこと

(整備や指導)

⑦治癒の経過を見て、

保護者へのことば掛けも忘れない

以上の対応を的確に行います。

このように遊具を撤去しなくても、小さな怪我の原因を検証して改善していくこと、そして子どもたちが発達していくことで原町幼稚園では大事故になるような怪我は起こったことはありませんでした。

ところが思いもよらないところに落とし穴があったのです。

その事故が起こったのは、今年の10月25日、午後3時59分。園庭を共有する原町保育園の先生が年長の男児を連れて幼稚園へ駆け込んできました。子どもの指を見て私も血の気が引きました。血だらけの中指がちぎれそうになってブラブラしていたからです。とにかく、包帯で応急処置をして救急車を呼びました。

この詳細は、次の報告文書（一部修正）をご覧ください。



《タイコ橋とお手製平均台・今回の事故を起こした物の
もう一台》

.....
原町保育園からのお知らせより（2011.10.31発行）

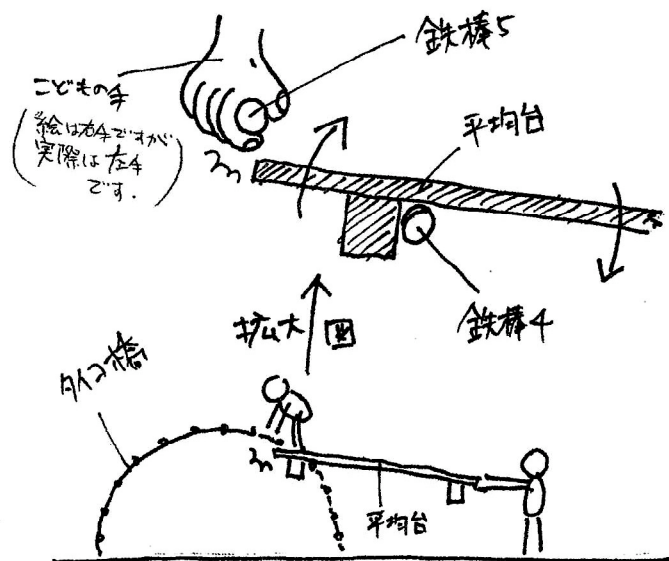
園庭で起こったケガの報告

先週25日、年長のいもほりが終わった日、保育園の園庭で午後3時59分、〇〇組の男の子があわや指を切断しそうになる事故が起きました。この事故のことを皆さんに報告するとともに、今後も園庭での活動を理解して頂き、安全を維持していくためにも、詳細をお知らせいたします。

事故直後は、左手中指の第一関節から指先にかけて斜めに裂けていて、出血もありましたが本人は落ち着いておりました。一刻も早く治療をということで、応急処置をしてすぐさま救急車を依頼し、担任が同行して市立病院に向かってもらいました。園に残った先生達は祈るような気持ちで長く感じられる時間を待っていましたが、〇〇先生からの電話で「指はつながる」と聞いてやっと安堵が広がりました。1時間ぐらいて、病院に駆けつけてくれたお母さんも一緒に保育園に戻ってきてくれたのですが、本人は包帯を巻いた手をかばうでもなく平気な顔をしていたので、またここでも、私達はホッと胸をなで下ろしました。事故から2日後には、もう普通に登園し包帯も小さくなってお家で消毒出来るくらいに回復してきました。

救急車が出発してから、事故現場のタイコ橋で原因となった平均台をもってきて検証を行いました、誰もその瞬間を見ている人がいなく、どう考えても、どこでどうやればあのケガになるのか、わかりませんでした。そのとき「あのカメラに映ってないかしら？」という声上がり、園庭を録画してあった監視カメラの映像を見たところ、しっかり映っておりました。そしていくつもの条件が重なり事故が起きたことがわかりました。

事故の経緯はこうです。タイコ橋の上っていた男の子は高いほうに向かって5番目の鉄棒にのぎっていました。4段目に掛かっていた平均台はそれまで子どもたちが滑り台のようにして遊んでいましたが、そのうち2人だけになりました。そのとき一緒にあそんでいた友だちが下から平均台を持ち上げ、そのまま手を離して平均台を地面に落しました。その瞬間でこの原理で力



が加わった平均台の端は、5番目の鉄棒と隙間なく下から上へ跳ね上がり子どもの指を直撃したのです。一緒にあそんでいた子も、本人も何が起こったかおそらくわからないでしょう。私達も何度も映像を見て、やっと原因が分かったのです。

カメラの画像を見ていると、子どもの動きも先生の動きもめまぐるしく、とてもひとところに留まっている状況はみられなかった。2人の先生が園庭におりましたが、チャレンジ砦（大型木製遊具）の手すり
で危ないことをしていた年少さんの対応と、園庭の他の場所を見回っていたため、ケガの瞬間タイコ橋のそばには先生はいませんでした。

原町保育園、幼稚園の園庭ではリスク（自分で回避出来る危険）は残しつつも、ハザード（回避不可能な危険）は取り除くことを行ってきました。しかし、今回は見つけられなかったハザードによる事故として重く受け止めています。問題の平均台をタイコ橋の4段目に掛けた時にだけその危険因子（ハザード）が顔を出します。それ以外の使いかたでは、ぶつかったり、挟まれたりというぐらいの通常のケガしか起こらない状況でした。それを事前に発見出来なかったことが最大の反省点であり、悔やまれるところです。ケガをした子どもには本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。こんな事故が起こると、危険に見えるものはすべて取っ払いたくなってしまう。しかし、子どもたちのほんとうの意味での発達を考えると、「危険なものを安全に使う術すべ」を身につけるのが教育です。平均台は危険なサイズを修理し、撤去しないことにいたしました。

事故の翌日、保育園、幼稚園の職員に事故の経緯と原因を説明し、園庭での遊びの中に危険因子が隠れていないか、いま一度想像力を働かせて見て欲しいと促しました。思いもしない事故やケガが起こる危険がどこかに潜んでいないか、園庭に出ている大人たちが想像力を使って見つけだし消去していくこと、もう一つは子どもたち自身が危険を回避できる力を身につけていくことで、「安全」というものが保たれると信じています。もう二度とこのような事故が起きないことを願って、報告させて頂きました。

.....

◆情報発信の意味

以上が、事故発生から6日後に原町保育園の保護者に向けて発行した文書です。原町幼稚園の保護者にも文面を変えて違う形式で報告をしています。これは、本人の傷の回復が思ったよりも順調だったこと、当事者の保護者の理解（園の対応にも理解を示し、文書の発行も承諾してくれた）があったこと、そして原因がはっきりと特定出来たことの条件が揃ったため、これだけ具体的にお知らせする

ことができたのだと思います。具体的に情報を発信することで、余計な憶測や噂が飛び交うことを防げます。大きな事故などが起こった時は、速やかに情報発信を行わなくてはなりません。時間が経ち過ぎたり、噂が流れ始めてからだと後手に回り、信用は下がります。

この文書を保育園で発行して、翌日2件の返事が来ました。一つは、恐いことだけど怪我の状況を詳しく報告してもらって良かった。という好意的な意見。もう一つは、自分の子

どもが怪我をした時にはこんな報告はなかった。その時はちゃんと見てもらえていたのだろうか。という以前から持っていた不満をぶつけてきた意見。どちらも、声をあげてはこないけれども、何人かの保護者の代弁として受け止めました。

大きな事故やトラブルが起こった時に、保護者は園の対応を注視します。その対応から園の姿勢を見ていると思います。今回は幸運でした。もし最悪の状況、指が切断されるような重大な事故だった場合や原因が特定出来ないままだったり、保護者の怒りが収まらないような状況では、なかなか園の主張を織り交ぜた文書など出せる状況にはならないでしょう。



◆監視カメラの有効性

今回は記録カメラの重要性を改めて認識しました。病院から帰ったお母さんにもすぐに映像を見てもらい、怪我の瞬間を理解してもらえました。一緒に遊んでいた子どもが振り上げた平均台を落としたことが怪我の直接の原因ですが、それが意図的ではないことが一目見てわかったからでしょう。これがなかつ

たら、モヤモヤした不満や疑心暗鬼は心の中に居座っただろうと想像するのです。



◆管理的でない管理

もう一つわかったことは、この園庭で保育者が園児の動きを全て把握するのは不可能に近い、ということです。子どもの動きはそれだけめまぐるしく、保育者も子どもに合わせてめまぐるしく動いています。「ケガをさせるな!」と管理者が指示をしたとしたら、保育者は監視に徹し、危険な動きはすべて制限し、危ない遊具は撤去しなければならないでしょう。

それは子どもにとって、実につまらない、魅力のない遊び場になってしまうでしょうね。そうならないために、日頃から保護者との関係を良好に作っておくことと、報告書にも書いたように、子ども自身の力と保育者の想像力によって危険を防いでいくことをこれからも一生懸命やっていこうと思っています。ちなみにカメラは増設することにしました。

原町幼稚園 園長 鶴谷主一（ツルヤシュイチ）

福祉系 対人援助職養成の 現場から⑦

西川 友理

「先生、結局“地域包括支援センター”って何なんですか。名前だけやったら何やってる所かも解らないですよ。僕、この社会福祉士の勉強してなかったら、自分の母親に必要なもって思ったとしても“地域包括”には行かなかったと思うんです。」

「うん、確かにそうですね。」

「どうしてもっと親しみやすい、何をやっているのか一発で解るような名前にしないんですかね。」

「うーん、そうですね…。」

と、会社勤めをしている受講生と話をして

いると、

「あっ、それなら私もある！」
と、隣で話を聞いていた専業主婦をしている受講生が声を上げました。

「私、社会福祉協議会が地元にもあるなんて知らなかったんです。地域の福祉について仕事をしている…って言われても、全然身近に感じたことない。」

「ああなるほど、そうかー、そうですね。」

「一応、教科書で読んで勉強したから、なんとなく解るようにはなったし、いっぺん

地元の社協に行ってみたら、と思うんですけど…特に福祉サービスが欲しいわけでもない、一般人が入っていい所なのかどうか、躊躇してしまいます。」

「そうですね…って、私、さっきからそうですねばかり言っていますね。でも本当に、社会福祉と普段関わりのない方にとってみたら“地域包括支援センター”“社会福祉協議会”なんて、得体の知れない名前に感じてしまいますよね。」

すると二人はこういいます。

「そうでしょう？もっと地域にアピールして欲しいです。」

「みんなにもっと活動の内容をわかってもらうようにしなきゃいけないですよ。」

「こんなのが一般企業なら、つぶれてますよ、とっくに！」

…うわ、キツイ言葉。

でも、何も言い返せません。

「二人とも、言っている事は間違えていないと思います。あの一、でも、実習に行った先では、もうちょっと、オブラートにくるんで意見して下さいね。」

養成校の種類と学生の特徴

現在、私は主に社会福祉士の養成に携わっています。

社会福祉士になるためには、国家試験を受験し、合格し、厚生労働省に登録されなければなりません。

社会福祉士国家試験の受験資格を取得するためには、11の経路があります^{注1)}。

4年以上の相談援助実務を経験している事、指定された学校で定められた科目を履修し卒業する事等の、いずれかの経路を選ばなければ受験資格は得られません。

社会福祉士養成に携わる学校は社会福祉士養成校と呼ばれ、規定の社会福祉士養成カリキュラムを実施している大学、短大、専門学校、短期養成施設、一般養成施設といった種別があります。

私が携わっている養成校は、卒業年度に受験が出来る4年制大学、卒業後1年間の実務経験を必要とする3年制の専門学校、年間数日の面接授業（スクーリング）と実習以外は自宅学習という通信制一般養成施設の3つです。それぞれの養成校はスタンスが違います。

大学は、基本的に“学問をする場所”です。学問する事と専門職養成をする事をどのように共存させるのか、各々の学校がそれぞれのスタンスを示しています。

専門学校は“専門職養成をする場所”です。専門職を養成するためだけにカリキュラムが組まれています。

社会福祉士の一般養成施設は“社会福祉士の受験資格を取得させる場所”です。養成校ではない大学や短大を卒業した方や、相談援助実務を経験している方が対象です。

一般養成施設として登録されているところは、ほとんどが夜間課程か、通信課程です^{注2)}。

学校のスタンスが違うのですから、それぞれの学生の質ももちろん違います。学生それぞれの背景や想いは様々で、一概にこうだとは言いきれませんが、それでもおおまかな傾向は見て取れます。

大学生は、福祉職に就きたい、福祉という学問をしたい、とりあえず学士の肩書きが欲しい等々と、それぞれの想いを持っています。

たとえ福祉系の学部・学科の課程に在籍しているからと言って、必ずしも将来福祉職を希望しているわけではありません。調査によれば、全国社会福祉士養成校協会に登録されている4年制大学において、2009年3月に卒業した学生のうち福祉職に就職した者の割合は、30%台となっています^{注3)}。社会福祉士などの福祉系の資格についても、その大学のスタンスとして資格取得に力を入れているか否かということに、大学生は流されがちです。

専門学校生は、卒業後の就職先を既に福祉系と定めて入学してきます。また、各種専門職資格の取得についても、就職のためのマストアイテムとして考えている専門学校生が多く、専門学校側もそれを奨励しています。

大学生と専門学校生、この二者に共通する点は、高校卒業後、または1～2年の浪人生活を経て入学する場合がほとんどであり、学校社会を中心とした社会環境で生きてきた方達であるということです。

これに対し一般養成施設の受講生は、そのほとんどが現在いずれかの業界に属する社会人です。現在の生活を営みつつも、受

験資格を取得し合格したいと考えている方達です。

いずれにしても、養成校として伝えるべき教育内容に変わりはありません。しかし、社会人経験を有する一般養成施設の受講生に対しては、大学生・専門学校生と比べて、その伝え方やプロセスがずいぶん違ってくるのです。

一般養成施設の受講生の背景

一般養成施設の受講生の職業で、最も多いものが福祉職です。社会福祉の現場で、介護福祉士、ケアマネジャー、保育士等として働いている方が、社会福祉士資格取得によるキャリアアップをめざして受講されています。

一方で、このような方達も増えてきました。

「定年退職後の社会貢献に生かそうと思って…。」

「自分が子育てに苦労したから、子育ての支援が出来る仕事がしたくて…。」

「職場に障害のある方が就職して来て、そこから興味がわいて…。」

「ホームレス特集のTV番組を見て、どうにかしたいと思って…。」

あるいは教育関係者、刑務官、企業の人事担当者といった方達もいます。

近年、年金や介護といった社会問題に、自ら直面したり、報道で知ったりと、身近に感じられるようになった事により、それまで社会福祉と無縁で生きてきた方達が、社会福祉に興味を持って勉強に来られるのです。

また、教育、司法、就労支援等々、社会福祉士の業務分野が広がるにつれて、各分

野に関わる方達の入学も増えてきました。

かくして、面接授業では、それはもう様々な背景を持った方達が、1つの教室で、1つの演習課題に取り組むことになります。様々な価値観がぶつかり合い、活発な演習になります。

特に、社会福祉分野以外の職場で働いている方達は、社会福祉分野の価値観に面食らうようです。

「え、権利には義務がつきものよね？権利の勉強ばかりして、義務の勉強はたったこれっぽち？」

「福祉って、こんなに理論や理念があいまいで、統一されてないの？」

「専門職なのに、これでバッチリ、っていう支援方法なんてのは無いんですか？」

「“地域に根ざした福祉活動”というけれど、地域住民である私は、こんな福祉活動があるなんて全然知らなかった。」

さらには、

「自立支援とか言って、結局ほんまに困らないと、何にもしてくれへんやないですか。」

“ふくし”って、福を止めるって書いて“福祉”と書いたほうがええくらいや。」

などと怒ってしまう方も出てきます。

福祉は特別な仕事？

単純に善いものだと思って勉強を始めたけれど、社会福祉って、何か変だ。ちょっと独特。どうやら善いものだけではないようだ。そう気づき始めた受講生に、

「いえいえ、社会福祉ではこのように考えるのです。」

と、教員である私の立場で、その場をおさめることは出来るでしょうし、この受講生達は“資格取得”のために来ているのだから

ら、そんなところで立ち止まらせず、受験合格を目指して勉強を頑張るように強引に指導するのが良いのかもしれませんが。

しかし、彼らの言葉は単純に受け流してよいものだとは思えないのです。

「社会福祉は、他の分野や一般企業とは違うからね…。」

そう口にする事によって、自ら他分野との間に壁を作り、さまざまなものの見方が、社会一般の見方とどんどん離れ、ひとことで言うと、社会福祉分野全体が、引きこもりがちなどころがあるように感じるからです。

果たして、社会福祉分野の仕事は、そんなに特別なものなのでしょうか。

「受験合格のためには、額面どおりに覚えておきましょう。けれども、もう一步踏み込んで考えなければいけない大切なところだと思っています。」

そう言って、受講生と思索を深めています。

他分野から来た方達が、大活躍

ここ数年、気になっている事があります。全くの主観ですが、社会福祉分野で注目される新しい事業を立ち上げている方達は、生粋の社会福祉分野の方達よりも、他分野の仕事を長年勤め、転進して来た方達のほうが、ずっと多いと感じるのです。

例えば、地域の保健センターが主催した男性料理教室で、たまたま出会った定年退職後の元サラリーマンの方達。「地域に根付いた活動をしたい」と意気投合し、地域貢献活動をするグループをつくり、高齢者施設などを訪れ、うどん打ち等のボランティア活動を行っていました。

その方々がその時に見たデイサービスの

内容が、唱歌を歌ったり、手芸をしたり、女性達がたくさんおしゃべりをしたり…いわば、奥様方のサロンのようなところが多かった。

「こんなデイサービス、僕ら行きたいかな。」

「行きたくないよな。」

「よし、それじゃあ自分たちが行きたくなるようなデイサービス、作ってやろうじゃないか。」

プログラムには、麻雀があり、ワインを飲む会があり、雑誌コーナーにはサラリーマン向けのグラビア雑誌もある。(ちなみに麻雀については、今でこそ、認知症予防として導入する高齢者施設が増えてきましたが、最初に始めたのはおそらくこの方達ではないかと思われます。) かくして、東京都杉並区に“松溪ふれあいの家”というデイサービスが誕生しました。

開所以来、利用者の7割が男性という“男が行きたいデイサービス”です。TVや雑誌等の様々なメディアでも紹介されました。2005年9月号の『月刊生活と自治』のインタビューに対しては「心を満足させるプログラムさえあれば経営は成り立つのです」と意気軒昂におっしゃっていました。

「社会福祉現場はこうあるべき」「デイサービスのプログラムといえばこれ」という固定観念がない方達が作ったデイサービスが、ユーザーフレンドリーに満ち溢れている。だから、経営が成り立っている。

社会福祉の現場職員がユーザーフレンドリーを考えていないわけではありませんが、しかし、社会福祉しか知らない方達には、往々にして、社会福祉の固定観念が邪魔をしがちである、と思うのです。

昔アパレル関係で働いていたAさん、建

築事務所を早期退職して福祉系NPO法人を立ち上げたBさん、一般企業の経理から、施設の事務長になったCさん、人材コンサルタント業から転身して福祉業界で働いているDさん。私の知り合いをざっと思い出しただけでも、社会福祉分野に他分野から来た方達は、本当に活発に働いておられます。そして皆さん、異口同音におっしゃいます。

「社会福祉の人は甘い。守られてきた体質から抜け出せていない。」

「自分たちで開拓して、今後に活かしていく力が足りないように思う。」

「マーケティングが下手。」

生粋の社会福祉分野の方達が 20 年かかっても成し遂げられないことを、他分野から来た方達は、10 年そこそこで新しいカタチで成し遂げてしまう。そんな印象すら持つことがあります。

仕事は誰がために

内田樹は、「人は贈与するために働く」と様々な所で書いています^{注4)}。自分のために働くのなら、自分が“もういいや”とやめてしまえば、自分が嫌な目に合うだけですむ。しかし、誰かのために、という理由で働く時、人は簡単に“もういいや”とはなりにくい。つまり、誰かのために働く時、人は最も高いパフォーマンスを示すと言えるでしょう。

そういえば…ラーメン屋、魚屋、銀行員、とび職、図書館司書、デザイナー、俳優も…どのような職業であっても“誰か”のために働いています。

まずは“自らとその家族のため”衣食住を満たす、生計を立てる手段として働きま

す。その働きの中で“お客様のため”、相手の満足や喜びは何かと考えて働きます。

これら 2 つはどのような職業であっても共通していると思います。

自分に関わる人達を意識し、仕事の対象である人達を意識し、その人達を幸せにしたいと思う時、素晴らしい働きがなされます。つまり自らの幸せだけではなく、関わる人達の幸せをも実現できる仕事は、社会的に大きな意味を持つものになるのです。

特に福祉の仕事をしてきたわけではない、専業主婦やサラリーマンなどの一般養成施設の受講生は、社会福祉の仕事は、単に“相手が幸せになるように”という目的がクローズアップされているだけであって、その他の仕事と同じく、社会にある仕事のひとつなのだと理解していると感じます。

社会福祉分野の仕事は、法律に基づいており、その対象は“幸せを得難い状況にある、今、ここにいる人(=利用者)”であることが多いです。

「制度や政策がもっと充実していれば、利用者にもっとよいケアが出来るのに」という言葉を、社会福祉分野の従事者からよく聞かれます。利用者の幸せを考え出る言葉です。この発言には、“社会福祉の仕事は、利用者のために”という考え方が表われています。

確かに、社会福祉の仕事は、“利用者のため”でもあるのですが、それだけには収まらず、その仕事は、利用者の家族のためでもあり、その地域全体のためでもあり、社会全体のためでもある。社会福祉の仕事は、それら全てが満ち足るようにする難しい仕事です。さらに言えば、自身と家族の生計を立てるため、つまり自身のためでもあります。

社会福祉制度・法律は未だに不完全ですが、社会の全体を見る視点から考えられているのだということを、社会福祉分野の従事者は忘れてしまいがちなのではないのでしょうか。

この忘れてしまいがちな状況に対し、社会福祉分野でよく言われる言葉は「社会を見る」ということです。

ところが、これに関しても疑問が生まれます。

一体“社会”って何なんでしょう。

社会福祉が見ている“社会”

現在のわが国の福祉の理論的な根本を作ったといわれている人物のひとり、岡村重夫は「社会関係の主体的側面への介入（個人が社会制度に働きかけるその時の不具合に対する介入）」が社会福祉の固有の対象領域だと提唱しました。

また、「人と環境の交互作用」という言葉があります、人は単体で存在しているのではなく、その環境、状況の中、様々な社会の在り様と関係してそこに存在している、という考え方で、近年の代表的な相談援助モデルの1つである生活モデルの中の重要な概念です。

これら2つは、福祉の専門教育を受けたことのある方なら絶対に聞いたことがあると断言出来るほど、社会福祉分野における重要なパラダイムです。

これらに代表されるように、社会や環境といった言葉は、社会福祉分野では多用されています。そもそも、社会福祉という言葉からして、単なる“福祉”ではなく“社会”という言葉がついてまわるのです。

「岡村重夫は“社会関係の主体的側面”っ

て言っていたし、“人と環境の交互作用”なんて言葉も、福祉分野ではよく使う。“社会”福祉なんだから、社会をしっかり見ているはず。…なんだけれど…何か違うんだよねあ…何だろう…」と、私はずっと違和感を持っていました。

個人だけではなく、社会も見えていないと、社会福祉の援助は出来ない。

では、社会福祉分野の人が言う社会とは、一体どんなものなのか。

最近、ひとつ気付いたことがあります。

社会福祉分野の従事者が、社会を見ていると主張する時の、その社会とは、利用者の目を通した社会なのではないか、ということです。ある利用者がいて、その方の関わる環境を見ることイコール社会を見る、と言っている。つまり、利用者と社会を同時に見ているようでありながら、その実、利用者側に寄り添い、偏った社会を見ている。結果、利用者が参画しようとしている、社会そのものを、客観的に見ていないことの方が多いのではないか、と思うのです。

これに関しては、一般企業の経営者の意見が参考になると思います。

「商売や生産はその商店や製作所を繁栄させることにあらず、その働き、活動によって社会を富ましめるところにその目的がある」と、松下電器（現パナソニック）初代社長、松下幸之助は残しています。

ユニクロで有名な柊ファーストリテイリングの会長兼社長である柳井正さんは、企業の社会貢献について「社会にとって意義がある、社会にとってその企業がいった方がいい、そういう企業じゃないと生き残れない」^{注5)}との考えを述べてらっしゃいます。

私は経済学については門外漢ですが、そ

の私から見ても、優れた創業者・企業人と
言われる方達の言葉には、自らが生き残る
ための利益を出しつつ、利益を生み出して
くださるこの社会を“どうやって良くして
いくか”という考えが必ず潜んでいるよう
に思います。

社会福祉分野にはこの10年の間に、契約
の概念が入り、経営の原則が規定され、業
務分野の拡大とともに他分野の方達との関
わりが盛んになってきました。また、景気
の悪化につれて、社会福祉制度をはじめ財
政の適切な運用について言及する特集を、
TVや雑誌で目にするようになってしまし
た。つまり、社会福祉分野以外の方達から、
「で、結局、福祉サービス（社会福祉）っ
て、何のためのものなの？」
と、問われてきているように感じます。

社会福祉分野の従事者は、この質問に対
する“答え”持たなければならないと思っ
ています。

ではその“答え”を導き出すため、客観
的な視点からこの社会を見る時、社会福祉
分野の従事者はどのような立場で考えれば
よいのでしょうか。

これは私の中でもまだ整理がついていま
せん。

ただ、現在、社会福祉分野の従事者が社
会を見る時、そこには往々にして客観的な
見方や冷静な判断力が不足しがちだとい
うことは強く感じます。いったんそこから離
れて、“別のどこか”から、社会を見ないと
いけないのではないのでしょうか。

・・・・・・・・・・・・・・・・

注1) 社会福祉振興・試験センター 資格
取得ルート図

<http://www.sssc.or.jp/shakai/shikaku/route.html>

[e.html](#)

注2) 2011年11月16日現在、全国に
54校64課程あります。このうち8課程を
除き、夜間課程か、通信課程となっています。

注3) 2010年度 全国社会福祉教育セ
ミナー シンポジウム「社会福祉分野にお
ける就職状況の分析と教育のあり方を探
る」において 日本社会福祉教育学校連
盟・社会福祉専門教育委員会報告より。

注4) どこから引用すればよいか迷うほ
ど、色んな所で書いていらっしやいます。
とりあえず、手近にアクセス可能なブログ
『内田樹の研究室』
(<http://blog.tatsuru.com/>)より。

…「「働く」というのは、本質的には「贈与
する」ということであり、それは人間の
人間性をかたちづくっている原基的な
ものなみである。」『人間はどうして労働するの
か(2009年12月16日)』

…「自分のために、自分ひとりの立身出世
や快楽のために生きている人間は自分の
社会的能力の開発をすぐに止めてしまう。
「まあ、こんなもんでいいよ」と思ったら、そ
こで止る。でも、他人の人生を背負って
いる人間はそうはゆかない。人間は自己利益
を排他的に追求できるときではなく、自分
が「ひとのために役立っている」と思えた
ときにその潜在能力を爆発的に開花させ
る。」『格差と若者の非活動性について(2011
年10月18日)』

…ところで今回この文章を書くために色々
調べてみましたが、こういった考え方を、
“贈与経済”というらしいです。

注5) 『知る楽 仕事学のすすめ』「わがドラ
ッカー流経営論 第4回 企業は社会の道
具」NHK教育 2009年6月25日放送

我流子育て支援論

(7)

～ 中学生 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

中学生は、小学生よりさらに扱いの難しい時期であり、実際にどう扱ってよいのか分からないという相談も多い。特に中学校2年生というのは、中だるみでもあり、且つ学校内でも上級生と下級生の間にあって、まるで中間子の様に、自分を主張したいのか、あれこれ問題行動を起こすこともある。

思春期の過ごし方としては、基本的には、親子の間に少しずつ距離ができるというのがベストなのだが、少子化と保護者自身の精神的自立の未熟さが影響して、距離感が上手くつかめないことから起こっていると思われる問題が多い。

一般的に、小学校までは、保護者の言いなりになって、お利口さんだった子どもたちも、小学校高学年くらいから、大人への反発を持ち始め、それが激しくなるのが中学である。「うざい」「くそばあ」などと言った、保護者としては聞き

たくない言葉を聞くようになる。

当然、保護者はムカッとして、「親に向かってなんだその口のきき方は！」とつい怒鳴ってしまうこともあるだろう。しかし、そういう言葉を吐ける子どもは、とても健常で力があると言える。翻訳すれば、「もう赤ちゃんじゃないんだから、うるさく言わないでくれ」「少しほっておいてくれ」ということなのだ。そうとわかれば、保護者も「はいはい」と受け流す事が出来る。「うざい」とか言いながらも、まだ揺れ動く思春期は、突っ張ったり、甘えたりを繰り返す。保護者は大きな生簀で放し飼いをするつもりで、子どもの揺らぎに寄り添っていればよい。

ところが、保護者の支配が強力だったり、子離れに対し余りにも不安が強い場合は、子どもの方が拒否のサインを出せないか、あるいは保護者が子どものサインを無視してしまう。結果として保護者に一切逆ら

わない子や、もう中学生なのに、保護者が、時間割を揃える、忘れ物を届けるなどから始まり、極端なケースでは着替えを手伝う、食事を食べさせる、頭を洗ってやる、一緒に寝るなど。「お殿様・お姫様か！」と突っ込みたくなるような状況の子どもを作る。

こういう状況が続くと、子どもは自分の考えを表出したり、自分なりの行動をしようという意欲が無くなってくる。無気力で大人しい子どもということで、不登校になっているケースに、このタイプが混ざっている。ただ、登校していると大した問題にならず、見過ごされるが、自立について考えたら大変大きな問題になるし、高校に行ってから不登校になる事も多い。

さて、中学生で相談にあがることは、不登校、非行（家出、深夜徘徊、万引き、不純異性交遊、援助交際などの虞犯行為から強盗、暴行傷害などの触法行為まで）、リストカットや摂食障害などの神経症圏の問題行動、親子関係、いじめ、友人関係、発達障がいや精神障害などが主だと思う。

ここで、個々の問題について考えてみたい。

<不登校>

不登校は小学生よりも中学生が圧倒的に多く、問題となる。これ程多くの子どもが不登校になるのには、幾つか要因があると思う。

第一に、「不登校」という言葉が大手を振って歩くようになったこと。つまり、「不登校」が世間一般に広まり、子どもたちが「不登校をしてもよい」という感覚を持っていることがある。中学校では、

クラスに一人や二人は不登校が居てもおかしくない時代なので、自分も学校が辛かったら休んでもよいと思っても不思議はない。「耐える」という言葉は殆ど死語に近いくらい、我慢しない、頑張れない子が増えた。

集団に居れば、嫌なことは日常茶飯事。それが当たり前だが、過保護に育った子どもたちは、嫌なことからは逃げる癖を付けている。

勉強が嫌、先生が嫌い、友達が嫌なことを言うから、ちょっとしたからかいやいじめがあるからと、当然のこのように不登校になる。極端な場合は、体育が嫌だからと体育のある日は休むとか、勉強は嫌だから普通の日休み、修学旅行などのイベントは平気で参加するなどといった、最近増えている「ニュータイプ」と呼ばれる選択的不登校もある。

こういうケースでは、父母の協力の下、適応指導教室もうまく活用しながら、ストレス耐性を付け、得意な科目からでも入れるようにして行く。支援者としては、甘くなりがちな父母への助言が第一になるだろう。「可哀そう」という気持ちを切り替え、「子どものために心を鬼に」してもらうしかない。

第二に、小学校と同様に、家族状況の不安定さを代弁する形での不登校がある。

離婚の危機、嫁姑問題、保護者や兄弟の病気（精神疾患や人格障害）、保護者の再婚の問題、保護者の恋人との関係性の問題、経済状況（リストラ）等々の家族の問題がある時に、安心して学校に通える子は学校での人間関係をしっかり築ける子に限られるだろう。

基本的には、保護者との関係より、同

年代の人間関係に移行するのがこの思春期の時期なので、上手く友人関係ができている子は強い。しかし、心の中に大きな波風が立っている状態で、尚且つ、学校にも居場所が無い子どもは、ひたすら引きこもるしかない。自分が問題行動を起こすことで家族の修復を無意識に試みている場合は、問題解決は中々難しい。

一つ事例をあげよう。A子は中学2年生だが、母親は再婚で、養父との関係が悪く、酷い喧嘩が続く中、母親も情緒不安定になり、A子に辛く当たるようになった。その結果、A子は不登校になっていった。相談を続けても、A子は中々登校できず、適応指導教室につないでも、母親の協力が少なく、安定しない。こういうケースでは、焦らず、一步一步、多少後退することがあっても、根気よく関係を繋いでいくことしかない。まだまだ時間がかかりそうである。

子どもが中学生になると、夫の悪口を言い続ける母親が増える。子どもにとっては、父親も母親も血の繋がった親であるということを、忘れてしまう。これは父母と子どもたちとの境界侵犯の問題である。支援者としては、子どもに夫婦の問題や嫁姑の問題をおろさない様にと伝えねばならない。

そして第三が、冒頭で触れたような内向的性格と言語表現の稚拙さの問題がある。

力の弱い、外に吐き出す事が出来ない子ども達は、ちょっとした人間関係の躓きをきっかけに、不登校を始める。理由のはっきりしない不登校では、このタイプが殆どではないかと思う。このタイプ

では、自分の気持ちを少しずつでも語れるようにすること、保護者に反発してはいけないと思っているようなら、親子関係を調整しつつ、反発することは悪いことではないと理解させることが必要だろう。

<非行>

中学生になると、喫煙、暴力行為、不純異性交遊、援助交際、万引き、窃盗、薬物使用、夜間徘徊や家出など、補導されたり、児童相談所のお世話になり、自立支援施設に入所するような子どもも出てくる。こういう子の殆どは家族の問題を抱えている。親子関係が悪い、家に自分の居場所がない、認められていない、貧困、保護者のアルコール問題や、DV、その他さまざまな家族葛藤を引き受けて、気持ちがすさみ、遊び仲間という方がよほど楽しいからと、家にいつかなくなる。仲間同士で夜間徘徊、家出、窃盗、喫煙、万引きなどをしながら、日々を刹那に生きている。時には喧嘩や、親父狩り、浮浪者への暴行なども起こす。

家族全体に問題行動という意識が無い家族にも出会った。「他人の家の物も自分のもの、欲しければ盗ってこい」という教育(?)を受けているのだ。自分の保護者に、覚せい剤を勧められたり、売春を強要されたりなどという例もある。このような場合に家出をするなら、むしろ、歓迎すべき行動と言える。そんな家にはいたくないと思うのは、とても健全だからだ。しかし、多くは、逃げることもなく、そこに居る。

こうした非行系の子どもたちにはどのような支援をしたら良いのだろうか？

家族の調整などは到底難しい場合が多

いが、まずは、家族の中のキーパーソンを探したり、家族間調整が可能かどうかのアセスメントを試みる。家族一人一人の話をじっくり聞いてあげることから始めるのも良いだろう。保護者自身の生い立ちにも、辛い日々があり、それを語ることで保護者が軟化する場合もある。そして、家族から子どもを離すべきかどうかの判断をしていかねばならないだろう。

どんな保護者でも、子どもにとっては血の繋がった親である。親子を切り離せばそれでよいということではない。虐待があれば当然児童相談所に通告し、子どもの保護が必要かどうかを共に検討することができるだろう。しかし、虐待がない場合は、保護者が困らなければ支援者としても中々支援に入りにくい。

非行系の場合は、大抵どこかで補導されることがきっかけになったり、保護者からの相談で介入できるが、学校だけが困っている場合は介入に至らない。それは結局、親子・家族の問題だからである。

ここで一つだけ述べておきたいことがある。

学校が、最初から「悪」というレッテルを貼って、こういう子を排斥しようとすればするほど、状況は悪化するということだけは気を付けておかねばならない。最近の子どもたちの様子からいえば、非行に走れる力を持っている方がむしろ健全と言えるかもしれない。

<家庭内暴力>

中学生ともなれば、体力もついてくるので、暴力が始まると、母親では太刀打ちできなくなることが多い。家庭内暴力の陰には、父親不在の問題が大きくある

と思う。単身赴任や、家を顧みない父親、或いは、存在感の薄い父親と、過保護、過干渉の母親の家庭に家庭内暴力は起きやすいと感じている。もちろんそれだけではなく、家庭内暴力の陰に精神疾患や発達障がいが見られることもある。従って我々支援者は、母親を支え、父親が力を持って子どもと対峙できる様に、何かしらの手立てを考えて行くこと、精神疾患や発達障がいとその陰にないかどうかを査定することが仕事になるだろう。家庭内暴力の子どもは、本人自身がとても苦しんでいるし、孤独であることを父母に理解して貰えないと解決は難しい。

こんな事例があった。息子の家庭内暴力を恐れた父母が家を出た。一人残された息子は、「助けて!」と窓に張り紙をし、犬と寂しく 過ごしていた。母親は時々食べ物を運んだが、父親は「折角建てた家を滅茶苦茶にした」と 腹を立てていた。そんな父母の面接で、こんな言葉が出た。「犬を救出しに行かなければならないんです!」と。息子の暴力から、犬を守らねばというのだ。筆者は「犬は息子さんにとって唯一の理解者であり支えです。息子さんが犬をどうにかすることはありません。『助けて』という言葉が一体誰に向けている言葉なのか、もう一度考えてみてください。」と伝えた。その後、母親は家に戻り、母親の話では少しずつ落ち着いてきたとのことであった。

<精神疾患や発達障がい>

我が子に精神疾患や、発達障がいがあるなどということは、どんな親でも受け入れがたいであろう。しかし、我々支援者は時により、保護者に理解させねばならない。暴力がある場合は、困っている

ことが多いので、比較的支援に入りやすい。病院受診などにつなげることも可能だ。しかし、暴力はなく、学校での集団不適応感、或いは人間関係や集団行動における問題行動については、家では限られた環境下であるため、問題行動は見られず、発達障がいや精神疾患の認識を保護者に持たせることは難しい。じっくり時間をかけて、保護者面接を繰り返し、学校での様子を見学してもらったりしながら、理解を促していく。

特に発達障がいの子どもにとって、中学卒業後の進路は大問題である。軽度の精神発達遅滞については、無理して普通高校や私立高校、或いは定時制高校などに入れる保護者も多い。しかし、何とか入った高校を中退してしまったり、普通高校を出ても、就職試験に受からなかったり、仕事が長続きしなかったり、要求される仕事が出来なかったりなど、職場不適応を起こすなどして結局働けないことも多い。また、広汎性発達障がいでは、知的には問題ないのだが、その知能構造のばらつき故に、職場不適応や人間関係の躓きで、やはり仕事が続き、引きこもりになる可能性も高い。

以前、こんな事例があった。重度の自閉症と思われる子どもが、普通学級にいた。この子には特殊な能力があり、母親の送るサインを受信できるため、定期試験なども母親がいると高得点を取れる。そのため、保護者は、子どもが実は能力があるのだが、一人では緊張して出せないだけなのだと勘違いしていた。子どもと関わってみると、言葉もオウム返ししかなく、数も一つは理解するが、二つ以上だと怪しい状況だった。板書を写すこ

とはできる。漢字や数字を書くことも出来た。しかし、理解しているとは思えなかった。そこで、保護者の前で、実験をして、子どもが、問題を理解して解いているのではないということを見せ、この能力があっても、結局は余り役に立たないことを理解して貰った。進路は特別支援学校になったが、一人しかいない我が子の障がいを受け入れるには大変な苦悩があったと思う。それでも、この子の将来を考えたら、福祉制度ののせて行かざるを得ないと考えての進路だった。

中学は3年間しかなく、子どもや保護者に変化を起こすには、時間が足りないかもしれない。それでも、義務教育の最後ということ意識し、子どもと保護者にとって最善の方向性を示していかなければならない。それが支援者の務めであろう。その後、保護者がどのような選択をするかについては、保護者に任せるしかない。

リストカットや摂食障害、自己臭などについても、問題化してくる時期でもある。漫画やドラマなどの影響もあるが、殆どが母子関係にその原因があり、母親との面談が必須になる。精神障がいも含め、必要に応じ、医療機関に繋いでいかねばならない。地域の医療機関についての情報、SST訓練の場等、様々な資源について情報を集めておくことも支援者の仕事となる。

<いじめ・人間関係>

いじめと人間関係の問題は、小中高あるいは大人の世界でも共通の問題であろう。全般的に幼く、人とのコミュニケーション能力が低く、一度崩れた人間関係は修復不可能とってしまう子どもたちに、人間関係というものはずっとしなや

かなものであると伝えたり、自分と他人との違いを理解し、受け入れることの大切さから伝えて行かねばならない。発達障がいがあるがなかろうが、人それぞれなのだということ、いじめることで自分のフラストレーションを解消するのは間違ったやり方であると理解させることが、我々支援者の仕事だろう。

いじめ被害で自殺は最も悲惨な例である。「いじめられて居る事を保護者に話せない」、「心配を掛けたくない」、「格好悪い」など、いじめを受けている子どもの多くがそんなことを言う。保護者に助けを求められないとしたら、誰にも相談できなくて孤立したら、「死」という、最悪の逃げを選択してしまう気持ちも分からなくはない。酷いいじめを受けたら、「不登校」を選択したって良いし、保護者に心配を掛けたって良いと伝えよう。しかし、一方でいじめに対する耐性も育てていかねばならない。何処に行っても、程度の差こそあれ、「いじめ」は存在するのだから。

耐性の基盤は、やはり親子関係だと思う。保護者から守られている、保護者が後ろ盾になってくれている、保護者に信頼されている、しかも、駄目な自分も受け入れてくれる、そういう基盤がしっかり子どもにあれば、頑張れるだろう。その基盤をどう作っていくか、中学生までに作られていないとしたら、どうすれば良いのか？そこが大きな問題となるだろう。修復できる状況であれば、修復に全力を尽くすが、不可能であれば、代理の人間関係を用意して、そこで強化していくしかないだろう。

<携帯電話やパソコンの問題>

中学生の生活は、小学校とは大きく異なる。都会では、小学校から塾に通っているだろうが、地方では、中学校から塾に通う方が多い。

塾だけではなく、部活動で、帰宅時間が遅くなることは、小学校と異なる点であろう。保護者が送り迎えすることもあるが、子どもだけで動いている家も多い。そういう家では、子どもに携帯電話を持たせている。

中学生の携帯電話所持については、賛否両論があるようだ。都会では持たせてもよいと思っている家庭が多いようだが、筆者としては賛成できない。持たせるのなら、パソコンも携帯電話も、その扱いについて、十分に家族で話し合いがなされ、「自室に置かない」、「夜は10時以降使用禁止」、「保護機能の活用」など、ルール設定をすべきだ。そして、ルールを破ったら、直ぐに保護者が契約を解除したり、取り上げたりという措置をとれなければならない。

問題のある家庭では、保護者にその力がない場合が多い。その結果、夜中にメールをしたり、PCゲームをして過ごし、昼夜逆転になっていくケースを多々見かける。支援者としては、ここでも保護者に「心を鬼にして」貰うよう説得する必要がある。

問題行動があっても、子どもが自分で考え、自律的に行動できるように、育てていくのが、学校や保護者の仕事であろう。そして、我々支援者は、そうした学校や保護者と協力して、保護者や子どもたちを支援していくべきであろう。中学生は、まだまだ未熟で、昔に比べれば幼

いということも、支援者は理解しておかねばならない。

人は信じられるとそれに応えようとする性質を持っていると思う。何度裏切られても、信じる姿勢を維持できれば、いずれ子どもは変わっていく。それは大人も同じだ。どうしようもない、酷い保護者でも、良いところ、頑張っているところを認め、信じていれば、きっと関係性を築く事が出来る。そして、「子どもの気持ちを考え、保護者が少し距離をとってあげることは、子どもの成長、自立のために必要である」と伝え、親子の間に境界がしっかり引かれるように支援を続けよう。そうすれば、思春期の子どもたちは、友人との関係を密にしていくようになるだろう。それが中学生のあるべき姿ではないだろうか。

次回は思春期後半、大人への過渡期について書こうと思う。

不妊治療現場の過去・現在・未来

連載 7

寸断された選択肢

荒木 晃子

＜2011 年秋のトピック＞

～養親希望者の約 9 割が不妊カップル～

これは、2011 年 9 月 3 日立命館大学（京都市）で開催されたシンポジウム「家族の創成と再統合～生殖医療と里親・養親～」パネルディスカッション（テーマ：生殖医療と子どもの福祉は、家族の「創成と再統合」に何ができるか～「第三者のかかわる生殖医療」の可能性と「里親・養親になる」選択肢を考える～）のなかで、社団法人家庭養護促進協会（大阪市）理事 岩崎美恵子氏より発表された報告である。

当日配布された資料によると、協会の調査では平成 10 年度から 15 年度の間に、協会から子どもを委託した養親の 97.5%に不妊治療の経験があったという。

発表者の一人、不妊治療後里親を経て特別養子縁組で迎えた子どもを養育中の吉田菜穂子氏（明石書店 2009「子供のいない夫婦のための里親ガイド」著者）は、シンポジウムのなかで「（前略）私は、社会福祉のために子どもを迎えたわけではない（後略）」と

その胸中を語った。吉田氏は自身の経験を踏まえ、著書に里親の申請、認定、委託に至るまでのおよその道のりを紹介し、その都度必要なアクセス情報や、子どもを迎えたあとの生活もイメージできるよう、里親支援に関連した情報を掲載している。中には、養子縁組里親に興味をもつ方が高齢になりすぎないうちに一步を踏み出すにはどうしたらよいかの具体的な解説もある。なぜ、「高齢になりすぎないうちに、養子縁組里親になるための一步を踏み出す」ための解説が必要なのか。この点は、シンポジウムの重要なテーマとなった。後半、約 3 時間に及ぶパネルディスカッションでは、司会を、子どもの虹情報センター研究部長 川崎二三彦氏がつとめ、子どもの福祉現場から岩崎氏（民間）と梶谷氏（行政）、生殖医療現場から生殖医療専門医の内田氏、不妊当事者を代表して松本氏、そして、前述した吉田氏を迎え、絶え間なくあつい議論を展開した。以下にその一部を要約し紹介する。

子どもの福祉現場からの意見

パネリストの一人、島根県職員（元島根県中央児童相談所里親担当）の梶谷美鈴氏は、行政からの情報として配布した当日資料を参考に、「最近の傾向として、里親養親に登録するご夫婦の年齢は、確実に高くなっている。児童養護を前提に『子どもの最善の利益を優先する』という視点では、ご夫婦（特に母親）の年齢が高ければ高いほど、委託する子どもの年齢も高くなる」と説明した。これには先の岩崎氏も賛同し、「現在、不妊は生殖医療施設で治療するものといった風潮が社会にある。さらに、生殖医療技術の普及で、精子・卵子の提供、代理出産といった“子どもを得るため”に最先端医療技術を次々に医療施設から患者に提供することで、不妊当事者の治療期間が長くなり、里親・養親を検討する時期が遅れるのではないかと。当協会でも、1990年代初期から2000年に入ってから約10年間に協会を訪れる養親希望者の平均年齢が5歳上がっている（以上要約）」と、ディスカッションのなかで指摘した。

確かに、生殖医療施設の現状を見ると、まるで少子化問題に歯止めをかけるかのように生殖医療技術が向上し、生殖医療専門施設以外にも、不妊治療を実施する一般の産科婦人科医療施設が増えつつある。出産を扱う産科婦人科領域から産科が消え、婦人科の単科診療に新たに不妊症外来を新設し、不妊症患者を対象にした検査や、生殖医療技術を提供する医療施設へと診療内容を変更する総合病院の話題も頻りに耳にする。生殖医療は、いま確実に普及しつつある。

生殖医療者のコメント

厚生労働省の報告では、1994年国内年間出生数約120万人のうち、体外受精など高度生殖医療技術による出生数は約4,000人前後だったが、2008年には国内年間出生数1,071,156人のうち、体外受精など高度生殖医療技術による出生数は21,701名。さらに翌年2009年になると年間1,070,035人が出生し、そのうち26,680人の子どもたちが高度生殖医療技術によって出生したとの報告がある。近年、子どもの出生に、生殖医療技術は不可欠な要素となっているのだろうか。うえの数値からは、そう考えざるを得ない現状を垣間見る。

一般に、「女性の妊娠率は35歳を過ぎると著しく低下する」といわれる中で、パネリストの生殖医療専門施設内田クリニック院長 内田昭弘医師は、「最近10年で、当院を受診する不妊患者さんの初診時平均年齢は確実に上昇傾向にある」と語った。この発表は、先の梶谷・岩崎両氏から提起された「里親養親を検討する年齢が上昇しているのは、長期に及ぶ生殖医療の治療期間が一因では」という問題提起に、生殖医療現場からも同様の調査結果があることを再提起するものであった。さらに、内田医師は「当クリニックを訪れた患者さんの初診時平均年齢は、この10年で確かに上昇している。同時に、初診時までの不妊期間（一例として、結婚してから受診するまでの期間）は、わずかながら低下している。これらを総合して考えると、結婚し医療施設を受診するまで、不妊に対処しない期間は短くなったが、初診時年齢は上がっていることがわかる。つまり、不妊治療以前に、結婚年齢が高くなることで、（当然）妊娠率が下が

り、治療が長期化しているともいえるのではないか（以上要約）」とコメントした。

当事者のわがい

不妊当事者で構成された自助団体 NPO 法人 Fine 理事長であり、現在夫と二人で生活する松本亜樹子氏は、「(前略) 当事者として、こういったことは、もっと早い時期に、教育レベルで指導してほしいと思う。不妊という、どうしても不妊治療が先にあって、そのあと里親養親というふうになるけれど、もっと最初から、すべての選択肢があっていいのではないか。不妊当事者だけではなく、みなさん、当たり前のように、望めば子どもができると思っている。不妊を知り、誰にでもその可能性があるんだということを、若い時期に知ること、いろいろ対応できるのではないか（以上要約）」と回答した。

続いて吉田氏は、不妊治療を体験し、その後里親から特別養子縁組で子どもを迎えた自身の経験から、以下のように語った。

「(前略) 養親希望のカップルには、年齢やほかにも制限があり、それは地方自治体ごとに違う。たとえば、ある県の児童相談所では、養親希望の女性の年齢は 35 歳までと決められ、それ以上だと登録もできない。しかし、他府県に行くと、35 歳を超えても手続きができるところもある。住んでいるところによって、養親になれる可能性が違うという不公平感はないだろうか。また、民間の（養子）斡旋業者などもたくさんあり、それぞれの手続きや、中には多額の料金を請求されるなど、一貫性がなく、社会制度が十分に整っているとは言えないのではないか。また、養子を迎えるにも年齢制

限があることなどは、不妊治療中にはわからない。治療をやめたのち、児童相談所に行ったら、年齢が高すぎるから駄目だと言われ、さらには、里親養親の制度は“子どもの福祉のためにある”のであって、子どもが欲しい人のためにあるのではない、と言われ、傷ついた人たちもたくさんいると聞いています（以上要約）」。

専門性の違う援助者たちが、それぞれの立場で、「子どもを迎えて家族をつくる」ためにできることへの忌憚ない意見を述べた。

シンポジウムは、開会の挨拶に始まり、立命館大学大学院教授村本邦子氏の基調講演「子どもをはぐくみ、家族は育つ」に引き続き、国内初となる不妊当事者たちのドキュメンタリー映画「幸せのカタチ」（2011 年茂木薫監督作品）の上映で前半を終えた。短時間の休憩中、ドキュメンタリー映画のテーマ曲が流れ、壇上の準備が進むなか、おそらく参加した当事者であろう、上映中から聞こえ始めた“女性が鼻をすする音”がかすかに響く。その後、壇上では後半のパネルディスカッションが始まり、時を忘れるほどの活発な議論を展開した。児童虐待の専門家として高名な司会の川崎氏も、自身の研究「望まない妊娠」の対極にある、不妊を扱うディスカッションには、当初困惑を隠せない様子だったが、見事なまでにファシリテートの手腕を発揮し、沸き立つ壇上を治めていただいた。

以上は、シンポジウムからほんの一部を紹介したに過ぎない。後半壇上では、不妊に悩む当事者カップルが問題解決を目指す際、各選択肢の援助者となる生殖医療従事者、子どもの福祉・行政の専門者たちが、

それぞれに抱える課題を協議し、当事者とともに協働を模索した。それはかつて、前例のない試みでもあった。「不妊カップルが多様な家族を形成することを支援する」援助者たちからの提言は、共通して、子どもを迎え家族をつくるために、何が必要なのか、また、我々はいま何をすべきなのか、を社会に向けた重要なメッセージとして発信していた。

本シンポジウムの詳細は、今後も折に触れて報告したい。

インターバル

朝からシンポジウムに参加した私は、終了直後、彼女と肩を並べて会場を後にした。前号で、親友から「かわりに産んであげる」という突然の申し出にとまどい、その胸の内をあらわに語ったB子さんだ。会場の外は、朝から吹き荒れる風雨のせいか、夕暮れ時にもかかわらず、行き交う人影もまばらな京の都を夜の闇がつつんでいた。

前回の面接後、彼女は多少話すことに疲れた様子で、肩を落としてうつむき加減で目を閉じた。同様に、聴き手自身の疲れも隠せなかったように思う。このまま話を続けるには、(相手にも自分にも)あまりにも過酷な作業を強いるかのように感じていた私は、互いの疲労感を暗黙のうちに確認し、しばらく次の対話まで時間を置くことを提案した。彼女はほっとしたように笑みを返し、同意を示した。その際、うへのシンポジウムの開催を伝え、Bさんも「ぜひ参加してみたい」と、当日会場で待ち合わせる約束を交わしたのだった。

無言で帰る道すがら、二つの傘が阻むその距離を、その日の話し手と聞き手は、具

合がいいと感じていた。別れ際、次の約束を申し出たのはB子さんであった。

「聴きすぎない」。これも聴き手がチェックすべき重要なポイントの一つである。話し手が聴いてほしい人に対して、「話したいことを、いま話せるだけ、話したいように話す」力量があるならば、聴き手はただ、そのまま聴き込めばいいのかもしれない。しかし、「誰かに聴いてほしくても、今まで誰にも話せなかったことを、(話せるかどうかかわからないけど)話してみよう」とするチャレンジには、聴き手に細心の注意が必要となる場合がある。

話すことは、時にたくさんの気づきを得る。しかし、話しすぎることにはリスクを伴う。このリスクは、話し手にだけあるとは限らない。聴き手にとっても、話しすぎる(もしくは、聴きすぎる)リスクがあるのだ。しかも、それは、カウンセリングの際、最初に構築したラポール関係に大きく影響する。一般に、一回の面接時間が長ければ長いほど、聴き手の疲労感は増幅するといわれる。また、時間に限らず、話の内容そのものがより核心に近づいたり、深く掘り下げていく作業にも聴き手の力量が必要となる。面接を通して、聴き手は常に話し手の伴走者であり続けることが求められるからだ。つかず離れず、面接の終結まで、クライアントを抱えすぎることなく、時に必要な距離と時間を取りつつ、話し手が向かおうとするその先へ矛先を向け、舵に手を添え続ける力を維持しなければならない。その過程にある、互いのリスクを回避しつつ静かに伴走することが、聴き手の大切な役割だと考える。

シンポジウムを語る

久しぶりに会う B 子さんに、先日のシンポジウムに参加した感想をたずねた。大きく一度深呼吸をし、残った息を吐きながら、「ああ、あれねえ～」と返答し語り始める。「あれから、ずっと考えてたの、昔の自分のことを。ああ、私にもあったんだなって。不妊治療だけではない解決法が。って、今頃気づいても遅いけどね！」茶目っ気たっぷりにおどけた表情をみせる。「でね、ついに、こんな時代がやってきたんだな、っていうのが正直な感想かな。だってそうでしょう？『私は不妊です。だから不妊治療をしました』って、あんな大きな会場で、たくさんの人たちの前で松本さんは宣言していた。吉田さんの方は、『不妊治療した後、養子を迎え育てています』って、みんなの前で整然と話をしていた。すごいっていうか、正直、尊敬のまなざしで見てたの。どちらも、あの頃の自分にはできなかったことだから。これまで、不妊って、どこにたどり着いても陽のあたらない、なんと不条理な現象なんだろうと思ってきた。そのひとことに尽きたし、それ以外に不妊を表現するすべを知らなかった。でも、シンポジウムに参加して、今まで知らなかった多くのことを知ることができた気がするの」

そう言い切った B 子さんから、すでに、先ほどの軽やかな笑みは消えている。B 子さんは、当事者の立場で発言した松本氏と吉田氏が印象に強いらしい。やはり、同じ当事者として共感する点があるのだろう。実際は、松本・吉田両氏は平然と壇上に上がったのではなかった。シンポジウム前のお二人は、「来場者は必ずしも不妊当事者に

対する理解がある方ばかりではない」ことを気にかけておられたように思う。せっかく流れ始めた会話の腰を折ってはいけないと、その話題は控えることにした。いま、目前には、先を急ごうとする B 子さんのまなざしが、私を捉えていた。私は短く一度だけうなずいてみせた。

「うん、そうなの。前半のドキュメンタリー映画にあったように、今も昔も、不妊を経験した人たちは皆同じように悩み、いかんともしがたい経験を生き抜いてきたんだということ。あの映画には、時代を超えたテーマが流れていたと思う。私の経験と違うのは、生殖医療の技術だけなんだと感じた。登場人物のなかには、“この世に生まれたのち育てる親を必要とする”子どもと出会い、新たな家族をつくった当事者仲間がいたように、私の時代にも、きっといたに違いないということ。あの会場の壇上にいた人たちも、ずっと以前から、私たちの選択肢にいて、私たちを待っていていたんだということ。そして、そして、その頃の私は“それを知らなかったんだ”ということ・・・」のみこんだ言葉にかわって、大粒の涙が流れ落ちた。次々と溢れる涙は、そのまま私に流れ込んでいるかのような感覚を覚える。直に、私のこころの壺がいっぱいになり溢れ出るに違いない、そう思った。

シンポジウムを振り返る

彼女の言うように、過去に、子どもを産み・育てたいと願い、不妊治療を経ても・経なくても、結果、産むことを断念した何組の不妊カップルが、養子を迎えることを希望して子どもの福祉現場を訪れたのか、いまとなってははかり知れない。当日発表

された調査結果は、最近 10 数年間のデータである。特に、“実子ではない子どもの親になろうとする”不妊当事者たちにスポットを当てた養親の調査は、先日の家庭養護促進協会の報告が初めてではないだろうか。過去に不妊当事者にスポットが当たることは、まずなかった。

実は当日、調査報告を耳にした瞬間、やはりそうだったのか、と気づいた。不妊当事者と施設で暮らす子どもの接点が以前からあった事実を思い出す。おそらく、行政の委託事業を展開している民間団体（協会は大阪府・大阪市・堺市の委託事業を展開）としては、初めて子どもの福祉現場を訪れた不妊当事者の実態を明らかにした報告だったと思う。しかし、なぜ、これまで、国内に 20 以上あるといわれる子どもの福祉関連の民間団体は、その実態を明らかにしてこなかったのだろう。また、行政もしかり。全国の児童相談所や乳児院、そして行政など、子どもの福祉の各担当者たちが、その実態を知らなかったはずはない。以前、実施したインタビュー調査でも、児童福祉の担当者たち全員が“不妊当事者を迎えたことがある”と発言したはずだ。

現実には、吉田氏が言うように、決して社会貢献のためではない「養子を迎えるための動機」のひとつに、「不妊だから」という動機があるのだ。それを今回浮き彫りにした岩崎氏の貢献は大きい。岩崎氏が、子どもを養護するだけではなく、長年にわたり、家庭を養護する活動をされてきたことを改めて知った。今回、協会は「養親希望のカップルが不妊であるか否か」のデータを集計し公表に至った。私自身も、実子をあきらめ、養親となり子どもを迎えることを選

択していない当事者のひとりとして、この報告をととても嬉しく思う。「不妊であって、養親になりたい」当事者たちに光を当て、それを「子どもを迎える」確かな動機付けとして受け止め、親になりたいと願う不妊当事者たちの実際を社会に発信してくれたのだと思うと、感慨深いおもいがする。

これまで社会には、「不妊かな？」とおもったら、「まずは不妊治療を」というスローガンのようなものが存在していた。しかし、このシンポジウムの参加者たちは、「不妊かな？」と思ったら、すべての選択肢を、まずはカップルで検討することを推進するに違いない。カップルで、治療、里親・養親、二人で生活するなど、「子どもをどうするか」を前提に、家族をつくる計画を対話することからスタートする。それが、不妊現象の問題解決の第一歩であることを多くの援助者が知ったことだろう。そう考えると、なぜかうれしくなった。

援助者はいづこ？

「ひとつだけ、どうしてもあなたに教えてほしいことがあるの」自身が選ばなかった選択肢（というより、選ぶことがかなわなかった選択肢）の先にも、援助者が待っていてくれたことを知り、大粒の涙を流した B 子さんだった。言い残したことがあるらしく、ひとしきり泣いた後にポツリポツリと語り始める。「むかし、不妊に悩み生殖医療施設に通院中だったころは、自宅と医療施設を往復する日々を繰り返すなかに、里親になるとか、養子をむかえるといった情報を得ることはなかったと思う。通院はひとりだったし、病院ではだれとも話すことはなかった。不妊のことや通院してるこ

とも、誰にも相談できる状態ではなかったし・・・ゆいいつ相談した親友には、代わりに産んであげるって言われたしね。あのころは、治療の失敗を繰り返すたびに、なんだか体中の力が抜けていくように元気を失っていたと思う。誰にも会わず、好きなことをする気力もなかった。でも、治療だけはやめられない状態だった」それこそ、まさに、不妊当事者女性が口をそろえて言う、先の見えない不妊トンネルに潜った状況だ。「一般常識としてなら、不妊治療以外の選択肢があることを知ってはいても、自分では子どもが産めない、不妊だから、といった個人的な事情は、養子を迎える理由にはならないと思っていたの。シンポジウムで島根県の梶谷さんが、里親養親制度は子どもの為にある、と説明しておられたように、子どもの福祉を前提とした社会制度には当てはまらない、と感じていたのかもしれない。制度があることは知っていたけど、それが自分の選択肢の一つだとは考えていなかった、ってことかもしれないわね。不妊だから、といった理由で自分を受け入れてくれるところは生殖医療施設だけ、そう思い込んでいたし、当時は実際にそうだったと思う。それに、どこにも不妊の悩みを相談するところがなかったの。もちろん、医療施設にもね。もし、いま不妊に悩み始めたら、まず、どこに相談すればいいのかしら？」

確かに、シンポ当日、壇上にいた援助者たちは、生殖医療施設の医療者、民間・行政の子どもの福祉の専門者、そして、当事者たちである。現在では、それぞれに所属する、行政や当事者団体、そして生殖医療施設のカウンセリング等の相談窓口はある

けれど、不妊（治療）の相談なのか、または、里親・養親になる手続きを相談するのか、別々の窓口当事者は自ら足を運び、いずれを選択するのかを先に決断しなければならない。相談する以前に、「どの選択肢について相談するか」を選ばなければならないのが現状だ。不妊って、本当に厄介で、次々と当事者カップルに負担を強いられる現象だと、つくづく思う。おそらくB子さんの疑問も、そこなのだと感じた。「調べてからお答えしたい」しばらく考えたのち、そう返事をし、B子さんには後日報告することとした。

次の日から、不妊を相談する窓口の確認作業が始まった。

生殖医療心理士の回答書

【拝啓、先日のご質問にお答えいたします。私が勤務する生殖医療施設には、年間平均約数百組の初診不妊カップルが検査や治療を目的に受診します。彼らのうち何割かは、個別の期間に治療を終結し、妊娠・治療中断・自らの意思で治療中止・転院（転居）・その他の理由で、施設を離れていくのですが、それ以外のカップルは、妊娠を目指し不妊を治療するため、通院を継続することとなる場合もあります。通院期間は様々で、数カ月から数年、中には、ごく稀に、治療中断を入れながら5年以上不妊治療を継続する方もおられます。しかし、それでもなお、不妊治療の手を尽くしても、結果、妊娠・出産に至らないカップルが存在することも事実なのです。

このような状況のなかで、不妊をめぐる多種多様なご相談やご質問、カップルが抱える問題などに個別に対応することが、生

殖医療現場の心理士に求められるのです。施設内に設けられているカウンセリングルームには、治療前中後と様々な状況にある当事者の方々が訪れます。実子を得たいと願うカップルが生殖医療施設を訪れ、タイミング法・人工授精・体外受精・顕微授精の段階を経ても、結果が出ないケースのカウンセリングには、その後のカップルの生活設計の立て直しが組み込まれることも稀ではありません。他にも、妊娠するために必要な絶対条件（子宮・卵子・精子）が、カップルに備わっておらず、初診時から「カップルの実子」を望めない患者さんもおられます。おそらく、彼らは、生殖医療現場を離れた後は、その後の人生を再構築するための支援者もしくは相談者を失う恐れを抱いておられるに違いありません。事実、治療を終結したのちも、当クリニックのカウンセリングルームへ通う方もおられるのです。不妊に悩み、不妊治療を経験した方たちは、その経験をなかったことにはできないのです。ですから、悩んだ時間が長い方ほど、治療期間が長かった方こそ、そして、流産や治療の不成功など、身体を通して不妊の痛みを体験した方こそ、その後のフォローが重要なのだと考えています。医療現場で明らかになった、実子を持たない致命的なからだの要因は、それを知っている医療者以外には話したくない、という理由も理解できるような気がするのです。

治療中のカップルの大半は、いつか子どもが生まれたら、といった人生計画を（少なくともイメージとしては）持っていてくようお願いします。みなさん、子どもを育てる夫婦になることを前提に施設を訪れているのですから。だから、治療して

も結果が出ない（＝妊娠・出産しない）ということは、治療を終結したカップルがその後の人生設計を再構築し、治療以外の選択肢への移行を余儀なくされることを意味するのではないのでしょうか。このことを、これまで生殖医療現場の心理士として、ときに不合理に感じることもありましたが、以上が、ご質問の回答になるかはわかりませんが、お答えできる範囲で回答させていただきました。敬具】

検証

「不妊の悩みは、まず初めに、生殖医療施設へ。そこで、もし、結果が出なければ（＝妊娠しなければ）、実子をあきらめ里親・養親になるのか、もしくは、夫婦二人で生活するのかを選ぶしかない」まさか、このような不妊の岐路が、現在まで、社会システムのなかに組み込まれてはいなかっただろうか。不妊カップルにあるすべての選択肢は、社会で寸断されていた。そして、そこには優先順位がついているかのような感がある。先に不妊治療ありきの選択を、その経路を経て、いまを生きるB子さんに問い、ともに検証しなければならない。まずは、生殖医療心理士から届いた回答書に意見をもらう、そこから始めようと考えた。（次号に続く）

対人援助学 & 心理学の縦横無尽 (4)

第8回 日本質的心理学会 参加雑感



サトウタツヤ@立命館大学

1 はじめに

2011 年 11 月 26,27 の両日、広島大学教授・岡本祐子大会委員長のもとで第 8 回・日本質的心理学会開催された。会場は安田女子大学教授・澤田英三事務局長の尽力で安田女子大学を提供していただいた。他学会のことを書くのはオカシナ感じもあるが、2013 年第 10 回大会を立命館大学で開催する予定なので、学会の雰囲気を知ってもらえればありがたいと思い書いてみたい。自分たちで褒めるのもおかしいが、大変充実した二日間であった（感想には個人差があります）。このエッセイを通じて、学会という祝祭空間が持つ学問的興奮が伝われば、とも思う。

私が参加させてもらったのは、26 日の委員会企画シンポジウム「実践としての身体」と 27 日の大会準備委員会企画シンポジウム「子ども理解のメソドロロジーとしての質的研究—実践者の研究方法としての可能性を探る」であり、いずれも指定討論としての参加であった。指定討論の指名が二つあるところに私の本学会での立ち位置が透けて見えてくるのだが、学会事務局長の立場からすると、総会の準備だけで手一杯なので、事前に丁寧な準備が必要な話題提供者よりはありがたいのであった。

2 身体というアポリア：あるいは実験装置による身体拘束

「実践としての身体」シンポジウムでは、心理と身体という古くて新しいアポリア（難問）について扱われた。様々な話題が提供されたが、私が討論として指摘したのは、なぜ心理学は身体を拘束しないと実験できないのか、ということであった。拘束された身体を対象とする心理学は、心身一元もしくは心身相関を前提にしているはずである。そうでなければ、どのような姿勢でどのようなことをしていようとも「心理」を取り

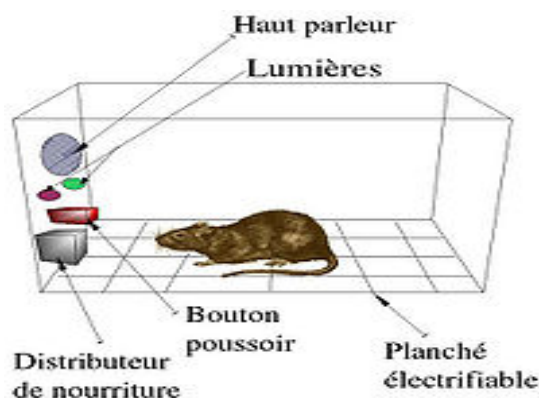
出せるはずだからである。

右図は竹井機器工業株式会社のカタログから引用掲載したものがある。カタログでは、顔面固定器となっているが、一般にはあご台と呼ばれている。知覚実験において、アゴとミミを固定することで顔が動かないようにするのである。これなど、心理学の実験をする人でなければ何であるか分からないだろうが、ここまでして固定しなければいけない身体、そうしなければ取り出せない「心理」とは何なのか、が問われなければならない。



お次はスキナー箱である。弁別刺激を提示したのちに、中に入っている有機体（この場合はネズミ）が何か行動をすると、報酬が与えられることがある。その場合、ネズミは同じような行動をするようになるという仕掛けになっている。理論的な意義はともかくとして、ネズミとその行動を環境ごと外から完全に見てしまおうという意図が丸わかりであり、ネズミの行動範囲は自ずと限られたものになる。

相手がネズミでなくても同じようなことは起きる。一昔前の発達心理学実験には必ずマジックミラーがつけられていて、外から実験者が中の様子をみることができるようになっていた。カウンセリングルームの写真は今ここで提示することを控えるが、警察の取調室と見まがうばかりのものもある。いずれにせよ、人間の行動範囲を限定したうえで対応するのが心理学という実践の本質なのだろう。



もちろん、身体拘束を前提とする心理学に反

対する動向はあり、有名なのは知覚心理学者・ギブソンによるアフォーダンスの概念である。動く身体による知覚の研究は、それまでの不動の身体を前提とする知覚心理学者たちとの折り合いが悪く、様々な軋轢が生まれていた。既に述べたことだが、身体を静止状態に制止できなければ取り出せない心理とは何なのか、一步踏み込んだ検討が必要となるだろう。蛇足ながら、質的心理学関連について考えるなら、近年のナラティブ心理学の動向も、場合によっては身体拘束の一種として捉えるべきか、物語のもつ広がりを見極めを最大限に生かそうとする別の意図があるのか、見極めが必要となるだろう。

3 畏怖という記号：そして記述による祝福は可能か

2日目の午後、公開講演があったのを忘れていた。神戸女学院大学名誉教授の内田樹先生

による講演であった。事務局長を務めた私は総会の仕切りを終えて出席した。小さな学会の場合、学会という場で参加者が同じ講演を聴くことには意味があると思うので ynabe39 の隣に座りながら聴いていた。さすがに色々と考えさせてくれるものであった。冒頭で、質的心理学会という名前にふれつつ、今の大学は数字で測定でき予測できるものによって評価がなされているのが問題だという指摘があった。研究は度量衡で測れないものを目指さねばならないにもかかわらず、数年先の結果まで分かるような研究計画を出さないと研究資金が獲得できないのでは、研究のスケールは小さくなっていくはずである。

内田氏の講演でほかに面白かったのが、福島第一の原発事故に絡んでの話題で、インドの原発の形状についての指摘である。私は知らなかったのだが、インドの原子力発電所の形はシヴァ神に由来するものだという。インド人は原発を神のごとく敬うとか非科学的な態度で接していると考えたと見誤る。むしろ、自分たちの手ではコントロールできないかもしれない畏怖の対象として見ている



のではないかとのことである。外から見てどのようなモノに見えるのか、ということはデザインと言うことができるが、デザインはサインの配置である。シヴァ神の如き外観をデザインするということは、人々にとって原子力発電所＝シヴァ神＝畏怖をもって見るもの、という記号を発生させることになり、その外見のあり方は、人々の原発に対する意識や行動をガイドするのである。何かあったら自分たちの手には負えないものとして、敬虔な気持ちで接することを可能にするのである。一方、我が福島の原子力発電所の外見は普通のビルであった。そこには何の畏怖もなくむしろ傲慢さの裏返しではないかとさえ思える。その結果、何が起きたのかは周知のことである。

さらに内田氏は、記述と祝福に話を進めた。何かを固有の名前で記述するということは何なのか。「固有名を固有名として記述せざるを得ないことがもつ固有性の祝福」であると私のメモにはあるが、何のことかわからない。氏があげた例はサザン・オールスターズのデビュー曲は「勝手にシンドバッド」という歌であった。その歌詞に「江ノ島が見えてきた。俺の家も近い。」というフレーズがある。ここに出てくる固有名は江ノ島である。東京方面から車で帰ってきたときに、江ノ島が見えた瞬間、その瞬間を描いている歌詞である。ここで、江ノ島としか表現できないのは、もちろん、江ノ島が固有名であるからだが、固有名を安易につかうのではなく、思考の格闘の末にギリギリの記述として用いることは、実は、その固有名を祝福していることにつながっているという。その固有名と自分の関係でしか伝えられない時空を切り取るとことのすごさである。松尾芭蕉の作であるとされる（今は疑われている）江戸時代の俳句、「松島や ああ松島や 松島や」を思い出すと、なるほどと思わされる。蛇足ながら、松田聖子の「青い珊瑚礁」の歌詞と比較する

とサザン・オールスターズの「江ノ島」への言及が祝福であることの意味はさらに明確になるように思われる。「あ～私の恋は 南の風に乗って走るわ～。あ～青い風 切って走れ、あの島へ」。この歌はギリギリの記述からも固有名の祝福からも遠いことが分かる。逆に言うとアイドルが創り出す空気の軽さ、あるいはユートピア（どこにもない場所）を創り出そうとする努力は尊敬に値するとも言える。

4 実践と研究は対立するか：あるいは質的研究の可能性

2日目(11/27)、講演の後、ynabe39（ああそういえば本名＝固有名は渡邊芳之だった、あえて敬称略）と感想を述べながら、途中でそれぞれの行き先に別れ、当方はシンポジウム「子ども理解のメソドロロジーとしての質的研究」に出席した。「実践者の研究方法としての可能性を探る」という副題がついており、ここでも「実践」がキーワードであった。先のシンポジウムの実践とここでの実践は微妙に意味が違うのであるが、それでも、同じ言葉で表現できる何かであるのだから共通性があるのだろう。

このシンポジウムは、大会の運営委員でもあった広島大学・中坪史典先生の企画によるものである。「実践者の子ども理解のメソドロロジーとしての質的研究の可能性を探ること」が目的であった。こう書くと堅苦しいが、「質的研究法を用いて、「無理なく」「楽しく」「継続的に」、実践研究を行い、子ども理解を深めようではありませんか!!」ということである。具体的には、柴山真琴先生がエスノグラフィについて説明し、得丸さと子先生がTAE（Thinking At the Edge）という方法について説明するというもので贅沢なものである。そして広島大学附属幼稚園の松本信吾先生が実践者の立場からコメントをつけ、私が理論家の立場からコメントするというものであった。柴山先生はエスノグラフィについて「ある集団の人々に共有された行動パターンを構造化する信念・価値観・態度、ないしは共有された信念と社会的相互作用のパターンとの連関（Merriam, 2004）」という紹介をしてくれた。得丸先生のTAEは（ロジャーズの同僚でもありフォーカシングの創始者として知られる）ジェンドリンが開発した理論構築法を質的研究法として開発したもので、自分の中に蓄えられている感情や体験を言語化するためのステップガイドのようなものである（と私は理解した）。私のコメントは以下のようなものになった。

実践とは、固有名と固有の身体をもった、人（たち）が個別具体的な時間と場所において行われるものである。そして「偶発的＝Contingent」な活動を「治める＝govern」のが実践である。実践は固有の活動であるから、その場での判断が重要であるが、その判断が、個人の気まぐれに基づいていてはならず、何らかの学問知に基づいていることが期待されているだろう。実践家は「いえいえ、そんなことはありませんよ」と謙遜するかもしれないが、専門家にわが子を預ける側からすれば、何の基礎もないのでは困惑してしまう。したがって、実践を研究としてまとめることの理由の一端は明らかである。実際に現場で起きていることを次代の専門家の知恵・知識・技術として伝達する、ということである。もちろん、研究は難しい。したがっ

て、全ての人が研究をすべきだ、ということにはならない。やろうとする人がいる時にガイドになるのが、方法論である。ただし、質的研究の方法論はそのようなものであり金科玉条のように扱うものでもないし、一つの方法に殉じて他のものは使わない、というような態度をとるべきではない。

討論の時にフロアから、実践活動を研究にするときに、個人情報を含むとそれが研究倫理に抵触する可能性がある、どうすべきか、という問いがあった。この問いに対する答えは単純で、「研究倫理」ではなく「実践倫理」を構築していくべきだ、というものである。言うは易く行うは難し、の代表的なものではあるが、「研究倫理」至上主義はよろしくない。だいたい、実践者が実践においてうまくいったことや失敗したことを他者に伝えないということがあり得るのか？それがなぜ研究になると個人情報保護などという問題にぶち当たるのか、その構造こそが問題なのである。情報は保存・公開・共有が前提となるべきであり、その前提が個人を不必要に傷つけたりしないようにするための「実践倫理」こそが、今、求められているのではないだろうか。質的研究の方法論についても言えることだが、細かい手順を理解した上で手順通りしようとする志向があることは大変気になる。そういう細かいことではなく、原理を理解した上で、その場に即した行動を取ればよいと思う。特に、研究倫理の手順に盲従するのは好ましくないことであり、これさえやっておけば倫理問題はクリア！というようなことは絶対にあり得ないと思うべきなのである。

5 本当の雑感

二つのシンポジウムに指定討論者と参加したことで、アタマをフル回転させて学会に参加することができました。私を指定した人の意図は理論的側面からの討論だろうから、なるべく極端なことを言うように心がけました。今やれるようなことをやれるように言うのは理論家の喋ることではないのです。方法論講習会ではないのだから、やれることをやれるように喋っても意味がない。5年後に可能になりそうなことを喋らなくてはいけないわけです。

学会全体としても方法論に関する講習会や企画が盛況なのはうれしいですが、私の視点からすると「方法論は自転車の補助輪」みたいなもので、無くても走れるようになるというのが良いなあと考えています。「方法論は自転車」という考え方もありますが、いずれにせよ、方法論に固執してその手順を遵守することが目的になってはいけないと思います。

さて、個人的には九州大学教授の南博文先生が九州から来て会場係を担当していたのが感慨深かったです。南さんがいると個人的には大変落ち着きます。南さんと今回事務局長をしてくれた澤田さんは広島大学の先輩後輩の関係で、私が東京都立大学助手をやめて福島大学行政社会学部に就職する時に、私の後輩の尾見康博（これまたあえて敬称略）と一緒に訪問したことがありました。もう17,8年くらい前のことになるでしょうか。その当時の心理学の閉鎖性に窒息しそうになりながら、しかし同好の士とつな

がっていた時代です。昨今は質的研究がブームだと言われることがあるけれど（実際、日本質的心理学会の会員は 1000 名ほどになっている）、こっちは 20 年以上前から地道にやってるんだから、と言いたくなる時もあります（言っても意味無いし、今日のようにするためにやってきたわけですが）。20 年以上前からといえば、二次会で指摘されたのだけれど、（裏コンの）席替えなんてのも、今の大学生が生まれる時からやっていたとのこと、「歴史は夜作られる」とは良く言ったものです。

Last but not least（最後だからといって重要じゃないというわけではないというクラーク大学の Valsiner 教授ことヤーンがよく使う慣用句）、にしき堂の生もみじまんじゅう、オミヤゲに買って帰りました。なぜなら、にしき堂のもみじまんじゅうが大会に際して 300 個！も寄付されていたからです。もとより、宣伝効果としてはカウントされない程度の数しか買ってないのが遺憾ではありますが。それにしても、前日の理事会から 3 日間、充実した会でした。来年は東京都市大学（横浜）、再来年（2013）は立命館大学で開催です。みなさん、よろしく！

引用サイト

竹井機器工業株式会社のカタログ

<http://www.takei-si.co.jp/productinfo/detail/95.html>

ウィキメディア（スキナー箱）

http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/2/2d/Boite_skinner.jpg/200px-Boite_skinner.jpg

India 's atomic plants remain on terror radar: Government

<http://liveindia.tv/india/indias-atomic-plants-remain-on-terror-radar-government/>

関連サイト

日本質的心理学会第 8 回大会

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/yasuda/index.html>

日本質的心理学会（2011 年 12 月からリニューアル）

<http://www.jaqp.jp/>

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

6. アンズちゃんの成長

尾上 明代

このマガジンでは、A 児童養護施設で継続的に行ったドラマセラピー治療の事例を連載してきた。ドラマセラピーには多くの手法があるが、ここでは、いくつかのドラマゲームや即興劇手法を使って実施した、小さな「怪獣たち」（イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん、マツオ君、スギオ君）とのプロセスを詳しく提示している。（各子どもの家庭状況と合わせて、その子どもの即興ドラマを考察すると、その意味がより良く理解できるのだが、それらの記述は割愛する。）

前号では、子どもたちとのプロセスがさらに進化する一方で浮上してきたセッション内での多くの「性的」な言動について記述した。その後も名残のように、同じような言動が散見されたものの、その頻度は予想をはるかに下回り、全体的に収束の方向へ向かっていったので、これはどういうことかと考えていた。その言動へのこだわりが最も強く感じられていたのが、アンズであったが、その収束傾向と、まるで反比例するかのように、ドラマをどんどん演じ始めたのも、またアンズであった。彼女は、当初もっともドラマを演じたがらない子どもだった。それでも少しずつ、仲間に紛れ

るようにして全員で演じるドラマには参加していた。その後、私と二人で創るドラマには、やっと参加してくれたものの、黙って寝ているだけの隣人の設定で、ドラマの中での関係性は作れていなかったのだ。

* * *

第10回セッション

アンズの変化

この日は、まずパントマイムでいくつかの状況を浩二さん（施設の職員）と私とで演じて見せ、誰がどんな気持ちで何をしている場面かを子どもたちに当ててもらった。このゲームは初めての試みである。

その後、それぞれ二人組でアイディアを出して場面を演じ、当てっこをした。内容は、吠えている犬と飼い主、町で痙攣を起こした人、などシンプルなものが多かったが、彼らは、内緒の打ち合わせ・演技・当てっこ、というプロセスすべてをととても楽しんでいた。特にアンズが私と二人組みで、まともに演じてくれたのは、このときが初めてだったと思う。コンビニで万引きする場面を本人が提案して上手に演じた。

その後、昔話の登場人物を組み合わせ使ったドラマでも、桃太郎になったアンズ

は、おばあさん（私）としっかりコミュニケーションをとることができた。まだまだ抵抗したい気持ちもあり、「うるせーなー！」などと表面では言いながらも、嬉しそうに「おばあさん」と会話をした。おばあさんを助けるような言動も見られ、初めて私たち二人のドラマが成立したように感じる。

家族ドラマの進化

そのまま、自然に5人きょうだいのドラマに入ってしまった。子どもたちが夜中まで寝ないで起きているので、母親（私）が怒るところから始まった。

翌朝、「起きなさい！」と母親がいうと、寝不足の子どもたちは「眠い、うるせー！」と反抗する。眠そうな演技が、みんなとても上手で、その上達ぶりに驚く。演じることに抵抗があるスギオも、全員一緒にドラマだと積極的に参加するようになったのも、良いことだ。

子どもたちは登校して学校の先生（私が兼役）に、母を悪い人に仕立てて言いつけ、家に帰ってまた母に反抗する。面白いのは、ドラマの最中、みんなが口々に「こう言うの！」というふうに、私のセリフや筋を命令するので、私は言われたとおりにドラマを創っていく形になっていることだ。「もっと怖くして！！！」とリングに怒鳴られ、私はもっと怖く怒る。

この連続セッションが始まる前に、お試しセッションをしたとき、子どもたちは「超怖いお母さん」とか、「世界一怖いお母さん」になってほしいと私にリクエストし、私が（様子を見ながら）言われたとおりの怖い母親を演じて、彼らは、それに対峙して

反抗することができなかった。しかし、このごろの彼らは、自分の身体と声を使ってしっかり感情を出して「母親」に対峙している。

アンズも母にいろいろ訴える。でも母への怒りではなくて、学校で怒られたことを私に言いつけたりして、結局は甘えているようだ。何も表現してくれなかった初期のころのアンズとは、まったく違う。他の子どもたちも、みんなで口々に私にいろいろな文句を言っているが、そのことで、母とコミュニケーションをとっている様子である。

結局浩二さんが父親になる。彼は穏やかで良い父親を演じてくれた。

「そうか、そうか、君たちは元気があり余ってるんだね。」

その後、母親の私一人をおいて、父親と子どもみんなが家出するという提案が出た。イチゴ：みんなで家出してハワイに行こう！！

スギオ：そんなお金ないでしょ。

（ドラマの中で、現実の枠を超えるという想像力がまだ不十分なため、彼はとても現実的な意見を出す）

イチゴ：知らない人の子どもになりすまして飛行機に乗っちゃえば！？

（イチゴらしいクリエイティブな発想である）

何だかんだと言いながらも、結局、飛行機には乗らずに全員で家に帰ってくる。

父：みんなで帰ってきたよ。

母：まあ一嬉しいわ、帰ってくれて。（優しく嬉しそうに）

ここで、「最後まで母親は、良いお母さんになっちゃいけない」と子どもたちに言わ

れたので、「もう、早く寝なさい！」と怒鳴ったが、最後は私の次のせりふで、ドラマを終えた。

母：これで一家7人が揃って、あー良かった、良かった。

第11回セッション

円になる意味

施設の都合などで、前回から間が空いてしまった。もうすぐ年末で、きょうは今年最後のセッションである。子どもたちは私に会って嬉しそうだったが、同時に不満を言う。特にアンズは、「何でもっと多く来てくれないの。」と、めずらしい態度とセリフであった。私に素（す）でも甘えることができるようになったようだ。正直な自分の感情を出してきたということは、良いことだ。

いつも通りのダンスのあと、「みんな丸くなってー！」と声をかける。この子どもたちが、ちゃんと一つの円になっていられる時間は、毎回1分ももたない。

ところで、この日リングが突然、「何で丸くなるのよ？三角でもいいじゃん」と言った。これは良いアイデアだと、すぐに採用する。全員で一つの三角形になるのは、円より難しい。いつになくみんなは集中して三角を創った！

リングの問いはユニークだ。何で円になるのか？ どんなセッションでも、誰からも聞かれたことはなかった。

円という形はセラピーでとても重要な要素である。円は大部分の古代儀式と初期ギリシャ演劇の形式である山羊の踊りで使われているが、これはドラマセラピーや一般

的な心理療法グループのドラマ的儀式で最もよく使う配置の形でもあるⁱ。円は強力な宗教的、精神的、心理的な象徴であり、プシュケーを反映しているⁱⁱ。さらにそれは、全体性を象徴している。つまり、時間と空間の全体性であり、出立と帰還、外に向かったの冒険と帰宅、誕生と死と復活を示しているⁱⁱⁱ。このように、円の形になることには、さまざまな象徴的な意味と意義がある。また別の象徴としては、メンバー全員の平等性や、ときには団結、結びつきもあると思う。例えば、傘連判状（一揆などで用いられた円環状の署名形式）のコンセプトは、誰が主役かを隠しつつ団結する様子を示していて、その良い例の一つだ。さらには、例えば「人格が丸くなる」というような表現に示されるように、角がない円というのは、平和な感覚、戦いやコンフリクトのない柔らかさや暖かさ、心の平静なども表現している。さきほどのリングのコメントを思い返すと、彼らがそのような「丸い」気分ではないことが理解できた。まさに「三角」の気分だったのだ。A施設以外のすべての場所で行うセッションでは、あまりに当たり前に感じていた「円になる」行為が、この子どもたちにとっては、疑問であったことを教えられた。そして、リングの提案を受け入れて楽しく三角を創って外在化できたことで、逆に彼らのその日の「角」をとることができたかもしれない。

自由な表現へ

そののち、(最近のワークの中で大ヒットの)「パントマイム当てっこ」をやったあと、子どもたちは、てんでバラバラではあるが、同時に何かをし始めた。ちょっと誰かと誰

かがドラマモードで対話になったり、勝手に叫んだり奇声を発したり。今年最後のセッションということも関係しているのかもしれないが、何かいつもと違う感じで活気づいている。

例えばイチゴは、テレビのアナウンサーになってマイクを持ち、「皆さん、イチゴニュースの時間です。明日の天気はー」などと1人でしゃべっている。するとアンズが、気持ち良さそうに歌い出す。マツオも何かわーわー言っている、というような状態だった。みんなが私に見ていてほしい様子だったので、楽しい気分ニコニコと全員を同時に見守った。

これほどまでにみんなが自発的に自由に気持ちよく、自分をそれぞれ表現しているのを見るのは初めての気がする。だから、このような時間があっても良いのだと思った。ただその状態がしばらく続いたので、少し枠組を作ろうと思い、「みんなのドラマを作ろうか、どうするか」と聞いてみた。イチゴのニュースと天気予報はまだ続いていたが、結局歌いたい女の子たちの意志が強かったので、私は紅白歌合戦を提案し、司会も私が買って出た。その部屋には三つのマイクがあったので、それを使うのも楽しかったようだ。それなりに紅組と白組の歌唱が終わると、後半は、お約束の動物園タイムとなる。

「動物園ドラマ」の意味

それぞれの「動物たち」は、椅子などを使って自分の檻を思い思いに組み立て、自分の居場所を創る。アンズは決して単体ではない。しかし、いつもは必ずリングと一緒に「夫婦」でいるのに、今回は初めて

「親子」だった。

朝ご飯の餌をもらったら、さっそくみんなが逃げ出す。とにかく檻から抜け出す。浩二さんと私が追いかける。みんなは追いかけるのが大好きなのだ。「麻醉銃で撃たれたら寝る」というルールは、特にマツオとスギオのお気に入りだ。でもすぐに「麻醉」は切れて、また奇声を発して暴れ、エネルギーを大いに発散する。浩二さんと私は疲れるだけなのだが……。一人ずつ、「ここが私たちのとこね」「じゃ、ここで逃げるの」などと主張する。結局、みんなでグランドピアノの下に入って「ここは安全地帯」とばかりに家族になって隠れて、寝たりしている。しばしの休息が得られると思い、私たちも静かにしていると、そのままではつまらない様子で、しばらくすると誰かがあえて逃亡する。イチゴやアンズは、「うー、ぎゃー！」と獰猛な動物役で私に牙を剥く。まさに「小さな怪獣たち」である。でも私が不快になるような、また悪意のあるようなネガティブな感情は感じられなかった。

浩二さんは、セッション後の私との振り返りのときに、「動物園の檻から逃げるといふドラマ」はみんなが現実（養護施設の生活）から逃げたいということではないかと言った。しかし私は、ただ逃げたいのとは違うと感じる。つまり逃げたら私と浩二さんに捕まえてほしい、つまりケアしてほしい、関心を向けてほしいということなのだ。どんなに唸っても、噛みついて、逃げても、やはり「飼育係」として自分たちをケアしてほしいのだ。もし単に現状から抜け出したいのであれば、ピアノの下に戻ってみんなで集まって寝たりしないのではないだろうか。養護施設の生活はつらいかもし

れないが、今は自宅に戻れないことを、彼らは知っている。仲間と一緒にいるピアノの下（養護施設）は、とりあえずの安心の場所で、そこで仮想の家族を味わっているのだろう。

お菓子を食べながらのシェアリング

セッションでエネルギーをたくさん発散したからだろう、子どもたちは落ち着いて話している。「今年11回やったよ」と言うに皆に「少ない!」と不満をぶつけられた。ドラマ外で私に気持ちを表現してくれるようになったことは、評価できる。

今日の空想の時間の中身を聞いてみると、なかなか良い返答であった。

リンゴ：えーと山を一人で散歩してる夢。

私：へー！山を一人で。（嬉しい）

マツオ：（性器にまつわるジョークを言う。）

私：ほんと。（さらっと流す）

イチゴ：南の島でイチゴ一人で昼寝してた。

私：南の島ね。

アンズ：何も見てない。

私：見てない。

スギオ：ない。

私：ない、OK！（大丈夫、という感じで）

アンズはこの日、性的な内容の発言をしなかった。（今日この話題に触れたのは、上記のマツオだけだった。）

全員、今日も動物園が面白かったと言う。よほどお気に入りのようだ。そして、今日が年内最後なので、「来年、またやる?」「いつまで?」という質問をみんながし始めた。やりたいか聞いてみると、皆は「やりたい」「やりたい」と口々に答える。アンズは、「再来年の12月まで!」と言ったが、そ

れはずっと長くやりたいという意味であると解釈した。初めのうち、ドラマを演じることに對して抵抗がかなりあり、私にもなかなか慣れなかったので、この発言は良い進歩である。

私：また来年も楽しくやろう！

イチゴ：泣いて。

スギオ：泣け！お別れなんだから。

彼も、このような表現で、自分が「今年のお別れ」を悲しいと思う気持ちを伝えようとしてくれたのではないだろうか。私は、彼のリクエスト（?）をまったく無視することはできないと思い、ちょっと泣くまねをしてから、「でもさ、今年は最後っていうだけじゃない。」と彼らに来年も必ず来ることを伝えた。このような会話を彼らとできるとは嬉しい。とても良い時間だった。

第12回セッション

ウンチが出ない「トマトちゃん」

年明け最初のこの日は、まず二人組であらかじめ打ち合わせして作ったミニドラマを発表することにした。私はアンズと組んだ。どんなことにしようかと聞くと、「何も考えてない・・・。ウンチのこと・・・」と言うので、私がアイディアを出して相談。そのときは、結構やる気で話し合っていたが、いざ実際に発表するときには、なぜか気分が退却してしまったようだ。

私：私はニンジンの神様です。あなたは誰？

アンズ：（私が励ましてやっと答える）トマトちゃん。ウンチが出なくなっちゃったんだ。

私：いつから？

アンズ：生まれてから。（アンズは打ち合わ

せ通りにはせず、即興で答える。)

私：今、何歳？

アンズ：一歳。

私：生まれたときからウンチが出ないというのは、大変じゃ。良い方法を教えてあげよう。私を食べなさい。出さないと身体に悪いぞ。

アンズ：イヤだ！

私は、この短いドラマにインパクトを受けた。生まれてから一度も排泄をしていないということの中に、何か大事なことがメタファーとして現れていると思う。アンズは実際は十歳なので、それが象徴している何か、一年ではなく、実は十年続いているのではないだろうか。一歳と答えたのは、そのような年齢に戻りたいのか、またはウンチが出ない期間の答えとして一年くらいが妥当と感じたからか。いずれにしても、「イヤだ！」と言ったとき、彼女の強い拒否の感情が表出されているのを感じた。ニンジンの神様が差しのべた助けを拒否したアンズ。ニンジンを食べるのがイヤなのではなく、ウンチを出すのがイヤなのだ。ドラマの中で解決策が出ることも、ドラマの中で癒されることも拒否している・・・という感じを受ける。しかし、このドラマでアンズの中の何かが揺さぶられたのではないかと思う。そしてそれは、(後日、気づいたことなのだが) このセッション後半の、初めての「アンズのドラマ」へとつながって行くことになった。

動物園

みんなが一番好きで一番やりたいのがこれなので、このところ絶対はずせない。彼らは一生懸命自分の檻を(椅子など使って)

時間をかけて作っても、すぐそれを壊し、檻から逃げる。壊すために、時間をかけてきちんと作っているのかもしれない。

今回は私の思いつきで、(サファリパークのような)動物園を見に来たお客になり、浩二さんが案内係として、私にいろんな動物を見せてくれる設定にした。たとえば、私が「この動物、檻から出てるけど、大丈夫ですか？噛みつかない？安全？」などと聞いて、彼が「大丈夫です。これはカラカルの親子で・・・」というふうに説明する。動物たちは、決してお客を歓迎しない。私に吠えたり、噛みつこうとしたり、突進したりして来た。年明け早々、またもやエネルギーがたくさん発散された。

アンズのドラマ

その後、皆で一緒に家族ドラマをやろうということになった。設定を打ち合わせるため、私が「子どもたちは私(母親)のことを好きなの？」と聞くと、アンズが首を横にふり、「ううん。私たちは、二人が仲良いところをじゃまするの。」というふうに答えた。今までも、浩二さんが父親役、私が母親役、みんなが五人きょうだいの家族のドラマを何回かやってきたが、アンズが中心になってアイディアを出したり、登場人物の設定や筋を創っていくのは初めてのことだ。

五人全員が父親の子どもで、私は最近、父親と結婚をした継母なのだそう。「どんなお母さん？」と聞くと、アンズとイチゴが私に指示をする。「きびしく、やさしい母親。子どもたちは母親のことは嫌い。」とのこと。そしてアンズは再び「仲良いところをじゃまするの」と言った。

私は、ご飯の場面から開始した。新しく来た母として、家族に宣言をする。

母：私は一生懸命、良いお母さんになるからね。(夫に) 私、あなたの子どもたちを、一生懸命愛していきます。

アンズ (以下「ア」)：お父さんだけ、愛していればいいんだよ。

(別に責めている感じでなく、淡々と語る。)

アンズが自ら主演を演じている事実には驚く。さらにはドラマの途中でどんどん指示を出してみんなを導いている。こんなことは今まで一度もなかった。間違いなくこれは、彼女のためのドラマだ。不思議なもので、いつもなら誰かが提案したことに、必ず反対意見が出るのだが、今は誰もほとんど自己主張しない。(特に男子2人は、まったく抵抗・提案しないでアンズに従っている。)彼女の不退転の気迫が、皆をそうさせているのが、わかる。重要な瞬間に立ち会っているという感覚だ！

今日は、アンズの十歳のお誕生日という設定で、二人が大きな誕生日ケーキのロウソクを吹き消す。私が切り分けてあげて、みんなで食べる。「プレゼントには何がほしい？」と聞くと、アンズは猫がほしいと言うので、ペットショップに行行って買う。

アンズ以外の4人は、途中で猫になったりもするので、子どもかペットかわからないくらいごちゃごちゃしていた。誰かがウンチしよう、ウンと書いていたり、ペットたちは奇声を発して大変な騒ぎだった。

母：お母さんと仲良く暮らそうね。

ア：イヤだー。(でも実際はそれほどイヤそ

うな雰囲気ではない。)

そして突然、

ア：離婚すれば！？ お父さんだけの方が全然いい！

と言い出す。このあたりでちょうどセッションの終了時間になったのだが、最後の最後で一生懸命アンズは部屋を作り直し始めた。「お父さんとお母さんの部屋は、ここ。ここ、子どもだけの部屋。」などと椅子を使って部屋をアレンジし直している。最も個人的なのは、椅子を沢山使って玄関からずーっとぐるっと遠回りしてやっと部屋に行き着くような造りの家だったことだ。

時間が来てしまったので、いつもの想像の時間にすることを告げ、いつものオルゴール音楽をBGMとしてかける。みんなは、少し落ち着いて横になる雰囲気なので、ドラマの中から自然に出てきて、収束のための感想を言う時間に入っていけるように、私は子どもたちに語りかけた。

私：良かったねー、お誕生日祝いで。ケーキ食べて、ペット買って。

ア：あーまずかったー！

(初めて、はっきりと冗談であると自他ともにわかる言い方で、みんなも私も笑う。彼女は、さらにいろいろわざとけなしている風なことを言ったが、本気の嫌悪感のようなものは感じられなかった。)

私：お父さんは良いお父さんだし、お母さんも一生懸命――

ア：(私のことばをさえぎって) お母さんは良いお母さんじゃないけど。

今日は、この先をアンズがどうしても続けたい勢いがあった。そして、一度は収束させようとした私も、再び自然にドラマの中

に戻るような体裁になって行った。

私：もしかしてお母さんは、離婚してくれるかもよ。

ア：早くしてよ。

母：じゃあ、お父さん、離婚しよう。ね？

そうしたら皆幸せになるみたいだから、私は身をひきます。

父：そうか、仕方ないかな。

母：じゃあ、みんな元気でね。短い間だったけど。

マツオ：超短い！

母：お父さんと仲良くね。バイバーイ！

みんなが、本気で出て行けっ！という母親を拒否するような感情ではなかったこともあり、深刻な雰囲気は全く造らず、少し笑いながらいかにもお話を創っています、という感じに演じた。

ア：バイバーーイ！！

（と母に言ってから、自分で「やったあ！」という感じで）イエーイ！

（つられてマツオたちも母親にバイバーイと手を振っている）

私は、これでドラマが終わったかと思い、「すごいハッピーエンドだね。」と言った。アンズは嫌いな人がいなくなって喜ぶ子どもの役を演じたのだが、この「イエーイ！」が、何かカラ元気で、母が出ていったことを実は喜んでいないのに、無理に喜んだ演技をしている気配が感じられた。するとアンズは、すかさず続けた。

「それでね。一年後にお母さんから電話が、お父さんのところにかかってくるの。トゥルルルーンって。それで私が電話に出るから。」

こんなに具体的にはっきり指示したのは

初めてだ。もうかなり時間オーバーだったが、今夜はやるしかないという状況である。どちらにしても、もうやっている！ 浩二さんも同じことを感じ、私たちはアンズのために劇を続けた。

母：トゥルルルーン。

ア：（受話器をとる動作）もしもし、佐藤（浩二さんの名字）ですけど。

母：もしもし。私、一年前に離婚したお母さんですけど。みんな元気にしてる？

ア：（それには答えず、すぐに皆に大声で）みんな一聞いて！ みんなちょっと聞いてー！ あのね、お母さんから電話なんだけど！ ねー、出ていいと思う？ 出ていいと思う？（こんなにドラマで生き生きとしたアンズは、初めて見た。）

リンゴ：思う！

ア：じゃあ、お父さん出て。（受話器を父に渡すしぐさ）

母：もしもし、あなた？ 元気にしてますか？ 離婚したけど、子どもたちのことが気になって電話しているんですけど。

（子どもたちが母親を本当に憎んでいるわけではなく、実際は未練があるのを感じて、子どもへの気持ちをセリフで表して伝えたいと思ったのだ。）

父：アンズが心配してたよ。

母：ほんと？

ア：（電話の横でお父さんに）してないよ、してない。

（直接話すところまで母を「許して」ないが、でも電話の向こうに母がいて、自分の好きな父が、今、母とコンタクトが取れている状態なのがすごく嬉しい感じだ。）

母：してないんだー。でも、もし皆がいいって言うてくれたら、別れてからも心配

だったから、皆に会いに行きたいと思って。(アンズは電話に耳をつけて聞いている)

ア：(きょうだいたちに) みんなー、お母さん、来ていい！？

(彼女は中立で聞いているのはでなく、自分自身は母親に帰ってほしい感じ。)

皆：いいよー。(そのアンズの勢いに押されて、みんな一緒に即同意！)

ア：ほんとに！？

父：(電話で妻に) いいって。アンズもいいって言ってる。

ア：お母さん、帰ってきたら意地悪しよう。(・・・などと大声で独り言を言っているが、嬉しい感じが伝わってくる。)

母：ピンポン。みんな久しぶり！(玄関で叫ぶ。)

父：(子どもたちに) 帰ってきたよ！

皆は、家の中で大騒ぎの様子。前述したようにアンズが、玄関からぐるっと長い廊下を遠回りしてやっと部屋に入れるような家に造ったので、私がみんなのいるところまで行くのに、みんなが玄関に出てくるのに、時間がかかった。玄関を開けたらすぐに対面できないところが、何とも心憎い。

家族は、ようやく一年ぶりに再会した。アンズが出迎えて私に言う。

ア：君がねえ、一年前いなくなったとき、皆すごく幸せだったの。

今も幸せ気分だね。

母親が帰ってきて嬉しい気持ちが伝わる。本当にハッピーエンドだった。一年かかって母親を許して再び迎え入れたアンズのドラマ。アンズのメタファーを使えば、ニンジンを食べ、生まれて初めてウンチがやっと出たのだという感じであっ

た。彼女の中にあってずっと表現できなかったものがここでひとつ大きく現れ出たのだろう。他の子どもも、そして浩二さん、私も、そのプロセスをともにした、という感覚を共有できた。

アンズの初めての「何が何でも、今日はやる！」という強いエネルギーと勢いだったので、時間オーバーであったが、最後までやって良かったと思う。

前号で、子どもたち、特にアンズの性的な言動について詳述したが、その収束傾向と反比例するように起きた、積極的なドラマ参加・感情表現の高まりが、非常に興味深く感じられた。

子どもたちの性的な言動は、生(ナマ)の、つまり本人の表層感情のままの発露であり、何かを創り上げるという感覚や意図は、当然なかったし感じられなかった。しかし、ドラマを創ることに入り込むことで、現実から想像の世界に入り始めた。想像とは、実は、今まで感じなかった、表現できなかったことを呼び起こし、感覚、感情の基盤が変化することでもあり、それが進行していたのだろう。表層の「性的」な言動より優勢な感情が出てきて、変容が進行したともいえる。

最後のお菓子タイム(シェアリング)のとき、たまたま私の分が足りないお菓子があったのだが、「明代さんのは?!」と言って、みんなが大変心配してくれた。自分の分があるかどうかだけに関心のある子どもたちだったはずなのだが・・・。アンズのドラマでみんなが感情を共有したことが、ここにつながったのではないだろうか。

(次号に続く)

-
- ⁱ Jennings, S. (Ed.).(1987).
Dramatherapy: Theory and
practice for teachers and clinicians.
Cambridge: Brookline Books.
- ⁱⁱ Jung, C. (1964). Man and his
symbols. New York: Doubleday.
- ⁱⁱⁱ Campbell, J. (1988). The power of
myth. New York: Doubleday.

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討 その7

早樫 一男

語り手：古川秀明さん（ふるかわ家族カウンセリング研究所長 臨床心理士）

〇はじめに

前回に引き続き、「家族造形法のおもしろさと難しさ」がテーマです。今回は一人語りです。語り手の古川さんは、ふるかわ家族カウンセリング研究所長として、対人援助領域、相談現場において活躍されています。

研究所の主催として、2002年から「家族援助を目指す人のための研修会」を京都キャンパスプラザで開講（5月～12月 月1回 19時30分～21時30分）。私が進行役をつとめてきました。今年で、10年目となる研修会には、福祉領域、看護領域を始め、さまざまな対人援助領域からの参加者が含まれています。内容は、もちろん、家族造形法を使った事例検討です。

〇それでは、古川さん、よろしく！

造形法のおもしろさと問われると、立体的に家族を理解できたり、家族の気持ちをその役割を演じるひとから直接聞けるということなどがあるが、私の場合は人間のつな

がりを感じることだ。その家族の中で、そういうポジションに置かれると、人というのはたいてい同じようなことを感じたり、考えてしまうということに驚きとつながりを感じてしまう。

家族造形法の研修会を10年続け、たくさんの方の実際のケースを研修会で検討したが、役割を演じる人からのコメントは驚くほど事実に近い。これを悪用すれば怪しい占いや宗教にも応用できそうだ。もちろんそんなことが目的ではない。あくまでもケースを考える上でのスキルなのだから…。

しかし、何ゆえ役割を演じる人はここまで事実に近いセリフを言ったり、感情を経験したり、行動を言い当てたりできるのか。演劇をする人がよく「役作りをする」とか「役に入り込む」とか言うがそれとはまた違うものなのだろうか…。

「共感力」なのか、あるいは何らかの無意識の誘導が造形を作る人から役割を演じる人に伝わるのか…。

これを「乗る」という表現を取ったらそれこそカルト宗教みたいになるので表現が難しい。勿論、役割を演じる人と、その役の実人物とはまったく接点はない。いや、逆に接点があったほうが事実とは離れて行くのかもしれない。

その人が持っているイメージとか、先入観が作用してそれらしい話にみんながまとめてしまうかもしれないからだ。

役割を演じる人はケースごとに毎回違う。当然個人の生育暦も違うし今現在さまざまな問題を抱えている人もいる。けれど、造形法で役割演技をすると、誰がどの演技をしてもその言動は事実になる。

相手の身になって物事を考えろとか、相手の気持ちになってみるとかよく言うけれど、造形法をやっているいつも思うのは、自己と他者を分けている境界は何だろうかということである。私のこのような造形法に感じているおもしろさやつながり感覚は、同時に私のこれからの研究対象でもある。

○ここで一言（早樫からのコメントです）

古川さんは「役割を演じる」という表現の中には次のような流れが含まれています。

事例提出者は「粘土のかたまり」と見立てて、家族役を置いていたり、作っていきます。そして、「静止」の中で、湧き上がってくる感情や身体感覚に注意を向けていきます。演じるという言葉からは、ロールプレイをイメージする人があるかもしれませんが。造形法の場合の「役割を演じる」というのは、徐々に浸み込んできた感情や気持ちに沿って、表現（言語化）する、時には動くといった意味が含まれています。

○さらに、おもしろいのは…。（引き続き、古川さん、よろしく！）

造形法では時間を自由に操作できる。現在、過去、未来とどんな時間でも作り出すことができる。場所も想像力さえあればどんな設定も可能である。これもおもしろさのひとつである。タイムマシンと、ドラえもののどこでもドアを手に入れたようなものだ。

○難しさをあげるとすれば…

まずは造形法を実施するのに、必要な場所の確保である。ある程度のフロア（ステージ）は必要。多くの会議室や研修室は当然のことながら机や椅子があり、それだけでスペースはいっぱいである。机、椅子を片付けて、尚且つ一定のスペースの確保ができないといけない。かといって、体育館では広すぎる。

会場準備に手間と人手が必要になる。

ある程度の人数の確保も必要である。できれば、最低、家族の人数分の参加者はいて欲しい。造形法は役割を演じる人と同じくらいそれを観察しているギャラリーの意見も重視する。なので、理想は家族の人数分の粘土とその数と同じ数のギャラリーがいればいいと思う。5人家族のケースなら、粘土5人、ギャラリー5人くらいがいて欲しい。

参加者には造形法の説明がいる。特に初めて参加する人には、なぜこういうことをやるのかの説明が必要であろう。よくある質問に「役割としてコメントするのですか？本当の自分としてコメントするのですか？」と聞かれる。「どれが本当の自分かわからない」「役割の人と自分とは別の人間なので、こんなことをしても意味がない

のでは？」これらの質問に答えられるようにしておく必要がある。

○これまでの経験から…

研修会等で造形法を実施するとかなり盛り上がる。まるで子どもの学芸会のような雰囲気になることもある。参加者のコミュニケーションを促進するのにはとても効果的に働く。しかし、ただおもしろいだけに終わらせてはいけない。

ファシリテーターの力量はかなり問われる

○その他…

最近では自分で家族造形法をアレンジして試している。相談者がひとりで来た時に、相談者と一緒に家族の問題を考えるのに何とか造形法を使えないか……。勿論急に人を呼んで造形法をするのは無理。そんな時間も場所もマンパワーもない。

そこで箱庭を使ってみた。これなら相談者が一人でも大丈夫。箱庭のグッズには、家族の人形は勿論、家具調度品、家（日本建築からログハウスまである）、庭、ペット、仏壇、幽霊まで揃っている。場面を設定したらそこに人形の家族を置いてもらう。誰から置くのか、どういう順番なのか、視線はどこか……。最近の人形は手足などが自由に動くので、かなりの表現が可能だ。勿論、生の人間が造形法をしているような温かみはないが、かなりの効果はある。純粋な箱庭療法でやるような分析的なことはできないが、セラピストに守られている感覚や、砂遊びによる開放感などは同じ効果が望める。

箱庭に置いた家族の人形をみて、「家族はどんな気持ちでしょうね？」と尋ねたり、「このお父さん人形をこう移動させたらこの子ども人形はどう感じるでしょうね？」というのを相談者と一緒に考えられる。「今のこの家族の形を理想の家族の形にするには誰がどのように動いたらいいですか？」

「そうなるためにはどの人形がどうすればいいですか？」応用範囲は広い。セラピストと相談者が家族の箱庭を一緒に俯瞰するのは、ジェノグラムの作成プロセスにも似ている。

これからも研究を重ねたい。

もうひとつ考えているのは、母親のための自分で作る家族造形法。造形法は、援助者が次の展開を考えるために行うことが多い。これを、母親が自分の家族を作って、粘土といろいろやりとりしたらどうなるだろうか……。

主観的で感情に流されない、何か新しいひらめきや発想、行動の指針などが生まれないだろうか。別に母親限定でなくても、父親や子どもでもいいのだが、まずは母親で試してみたい。

○おわりに…

古川さん、興味深い語り、ありがとうございました。これからも、家族造形法のよき理解者の一人として、活躍を期待しています。

なお、「家族援助を目指す人のための研修会」に興味のある方などの問い合わせは、ふるかわ家族カウンセリング研究所のHP「tantant.net」から連絡ください。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑦パワー、あるいは権力について

村本 邦子

パワー、あるいは権力は、自由を保証するものだろうか？それとも、自由を妨げるものだろうか？お金と責任についてはすでに書いたが、今回は、パワー、あるいは権力について書いてみたい。

パワーという言葉日本語に訳せば、「力」となる。それは物理的な力かもしれないし、もっと抽象的な力かもしれない。潜在的な力を表すこともあるだろう。そこに価値観は含まれないが、パワーを「権力」と訳す時、どちらかと言えば、否定的ニュアンスが浮上してくる。権力とは、一般に他人を強制し服従させる力だと考えられているからである。

女性ライフサイクル研究所を始めた頃、幼児期の虐待や性的虐待が中心的テーマだったことから、パワーはひとつの重要なキーワードだった。虐待とは構造的力関係を背景にした人権侵害であり、権力の濫用であり、パワーの使い方を間違えると大変なことになる。男が暴力をふるいやすいのは、相対的に女よりパワーを持ちやすいからで

あり、女もパワーを持たされれば、（たとえば子どもとの関係において）いとも容易く濫用してしまう。人は弱い存在であるのに、一人の人間に一人の命を預けてしまうような権力構造を作るから虐待が起こるのだ。

インターネットが未発達だった 90 年代初頭、唯一の情報源だったサンフランシスコから送られてくる「ヒーリング・ウーマン」というニューズレターには、「情報はパワーなり」というコーナーがあって、本や講演が紹介されていた。パワーという言葉が肯定的に使用されていることが新鮮だったし、情報や知識が力を支える一部であることに納得し、研究所の活動においても、情報発信を大きな柱のひとつにした。

女性運動のなかで使われてきた「エンパワメント」という概念がある。エンパワメントとは、パワーを与えること、持てるパワーを引き出すことであり、個人や集団が自らの生活への統御感を獲得し、社会的環境に影響を及ぼす力を獲得することを言う。これもパワーの肯定的な側面である。おそらく、パワーとは本来、中立的な言葉であ

り、その使用法によって、肯定的結果をもたらしたり、否定的結果をもたらしたりするのだろう。権力の方はどうだろう。

ずっと、権力から自由でありたいと思っていた。1994年に発行した研究所の年報4号では『表現と自由』の特集を編み、「表現と力」という原稿を書いている。今から二十歳ほども若かった自分の文章であるが、読み返してみれば、「なんだ、あの頃とあまり変わってないんだな」と思う。次のような内容だ。

誰かとの関係で非対称な「力」、一方的な「力」、責任を担いきれない「力」を持たされることは脅威である。「力」を持つと、その周りに虚構が多くなって、「本当のこと」が見えなくなったり、「大切なもの」を失ったりしやすい。「力」がその人から離れて存在するようになると、人々がその「人」ではなく「力」に群がってくるようになるからだ。そうすると、その人は否応なく、個人として存在するよりも、「力」の象徴として存在させられるようになる。虚構が大きくなればなるほど、つまり「人」と「力」のズレが大きくなればなるほど、「力」の責任は個人で担いきれないものとなる。「力」を持たされた者が、そのズレに気づき、それを修正していくことができるのかどうか、私は懐疑的である。

「力」に喜びが伴うことがある。それは、たとえば、私の知らないところで誰かが私の表現を受け取り、それを育ててくれたことを知った時。自分の思いを誰かが受けとめてくれて、まったく思いもよらない形で展開してくれるとすれば、自分の思いが自

分から離れて新しい生命を持ったことになる。一人でできることを越えて、思いが拡がりを持つのは心躍ることだ。

「力」にはたくさんの次元が交錯している。客観的に言って、社会的「力」を持つ者がその「力」を認識しない時、意図せぬ抑圧が起こる。たとえば若い頃には批判精神旺盛で権力に反発し続けてきた者が徐々に評価され、社会的「力」を持たされているのに、それに気づかず、相も変わらず自分は一匹狼だ、マイノリティだとしか認識できない時。筒井康隆の一件では、彼が自分を「ブラック・ユーモアの作家」と認識しながら、その作品が教科書に載るというギャップなどは、こういう例だろう（彼が差別表現をしたか否かということよりも、その後の姿勢を指す）。

ちょうど時は、筒井康隆の断筆宣言が話題になっていた頃だった。この時の学びは、私の心に深く刻まれている。いかにも同様のことが、将来、我が身にも起こりそうに思ったからだ。どんなに自分自身がパワーを拒否していても、外側からパワーを附与されることを免れない。この時点でしぶしぶ受け入れざるを得なかったことは、たとえば学歴や誰かの弟子など勝手にレッテルを貼られて賦与されるパワー、編集者であることのパワー（執筆料も払えないような自費出版の雑誌であっても、「雑誌を持っているということ自体が権力」なのだそう。そんなものか？）、そして「声大きい」というパワー（これは、自分への確信や説得力、自己主張の強さのようなもの）だったように記憶している。

とは言え、実際のところは、この時期、

社会的にも経済的にも強者と言うよりは弱者の立場であったから、権力者から搾取されそうになった体験が、そう多くはないが何度かある。「ああ、世の中の偉そうな人は、こんなふうに現場の人を利用するんだな」とその手口を知ったし、だからこそ、それだけは絶対にしたくないと今も心に誓っている。人を搾取するようなことは決してしたくないし、人から搾取されるようなことも決してしたくないと思う私は、そういう相手には情け容赦なく噛みついていたので、みな尻尾を巻いて逃げて行ったものである。そんな力が自分にはあった。

どんなに権力と無縁でいたいと思っても、自分の意志だけでコントロールできるものではない。私たちが他者とともに生きていくしかない以上、外側から賦与されるものから逃れようがないのだ。だとすれば、それに無自覚でいるより、自覚的に注意深く扱った方がいいに決まっている。こうして、パワーを持つことを少しずつ受け入れるようになった。すでに書いてきたように、研究所の基盤固めの時期、私は、じたばたしながらも、リーダーとしての責任を引き受け始めていた。とにかく気をつけてきたことは、研究所のメンバーたちがリーダーに盲目的に従うようなあり方を回避すること、自分たちの目的や活動にそれぞれが個人的な思いでもって責任を感じられるようにすること、自分を含め、スタッフ同士の関係性を権力関係ではなく、親密な関係として維持することだった。

1995年の阪神淡路大震災に関するシンポジウムで、中井久夫さんが、「私の持てるささやかな権力を使って」、世の中にとって良いだろうことをしたと話すのを聞いた。

具体的にそれが何だったのか内容は覚えていないのだが、そんな権力の使い方はさらに新鮮だった。権力者が持てるパワーを意図的、積極的に使うということである。「これは大人な発想だ」と思った。若者は批判し壊すのが仕事であるが、いくつになっても批判して壊すばかりの姿は醜い。不十分なものであれ、最善と思われるものを作っていくことが大人の仕事である。そして、それは後から来る人たちによって壊され、改善されていけばいいのだ。そう思って、仕事を続けてきた。仕事は人を大人にしてくれる。

当時と比べ、私も年を取り、経験を重ね、学び、たくさんものを身につけてきた。たとえば、「女性ライフサイクル研究所を立ち上げ、二十年維持してきました」と言うだけで、その内容如何に関わらず、発言にがぜん説得力が増す。本当のところ、これはインチキだと思うが、何かを長く続けてきたこと、もっと言えば、年を取って人生経験を増すということ自体が、良くも悪くもパワーを補強する。だからこそ、人は年輩者に敬意を表してきたのだろう。

知らず知らずに増すパワーには要注意である。たとえば、私の場合、人を判断するときに、時々見間違いが起こるようになった。若かった頃、権力者に媚びへつらう人が大嫌いだったから、パワーを持つ人に物事をはっきり言う私は、権力主義者からは嫌われていた。必然的に、そんな私を受け入れ、おもしろがってくれる人は、権力主義とは遠い人たちだった。だからある意味で私は安全だった。勝手に「私のことが好きな人は良い人だ」と思っていたのだが、

年を取った今となつては、そうはいかない。私のことが好きなわけではなく、私が持っているものが好きで近づいてくる人たちがいるからだ。これを見分けるのは難しい。それに、事態はもっと複雑で、どうやら、見る眼もないが悪意もないという人々が大半なのだ。

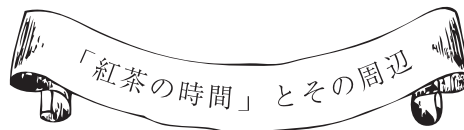
こうなってくると、あとはきわめて個人的な価値観の問題になってくるので、私の思考についてこれない人たちもいるだろうが、私は人として信頼できて、心を開いてつきあえる人とだけ一緒に仕事をするつもりだった。と言うか、連載の初めに書いたように、一人で仕事をするつもりだったところから、絆を結びつつ共に働くという形を身につけてきたところだった。私にとって仕事は神聖なものであり（仕事は個を越え出るスピリチュアルな行為であると思っている）、仕事は世俗のなかでやっていくものであるけれども、世俗にまみれさせてはいけないものなのだ。しかし、大きな組織で働くようになると、必ずしもそうはいかない。絆を結ばずとも、人として好きでなくとも、一緒に働かなければならないこともある。親密な関係になれない人と近い距離で一緒に働くということに私はまだ慣れない。

それに、大学の先生をやっているということは、それだけで十分に権力的である。権力を支える基盤として、しばしば、①報酬を与える力、②強制力（脅しや罰）、③法的力（警察など）、④参照にされる力（同一化、魅力、尊敬など）、⑤専門家の力（特別の能力や技術）、⑥情報の力（理性的な議論やデータなど情報に基づく力）という6つの要因が挙げられるが、大学に勤めて

いると、多くの要因を満たしてしまう。ハラスメントの温床になるゆえんだ。権力と追従に関する有名なミルグラムの実験者は、これらすべての要因を持っていた。イエール大学の研究者というだけで人々から信頼され尊敬されていたので、被験者となった一般の人々は、たとえ多少人に危害を与えようと、これは意味のある重要な実験で、従っておけば間違いはないはずだと考えたのである。ちなみに、大学で実験するのをやめ、民間の会社の実験ということにで、ショッピングセンターの一角でこの実験をしたところ、最後まで追従し続けた人は二割減少している。恐ろしい話だ。

正直に言えば、私がパワーや権力に対して極度に警戒してきた理由は、昔々から、下手すると自分はミニカルトの教祖くらいになるかもしれないと密かに恐れてきたからである。だから、自分で扱える以上のパワーは持たない、たとえ自分のパワーであっても、自分で扱える以上のパワーは使わないと決めてきた。パワーに翻弄されて、方向性を見失うのでは本末転倒である。年とともに人として成長することができれば、器が大きくなって扱えるパワーは大きくなるのかもしれない。詳しく知っているわけではないが、『ハリー・ポッター』は、自分のパワーを持て余す者が自分のパワーを扱えるようになっていく成長の物語であるような気がしている。パワー、あるいは権力が自由を妨げるのではなく、真の自由をもたらすためには、それを扱えるだけの器が必要で、人間を鍛えるしかない。大人であること、自由であることは疲れることだ。

きもちは、 言葉を さがしている



第6話

水野 スウ

「あかりプロジェクト」@とくべつ紅茶

週に一度のオープンハウス「紅茶の時間」は、2011年11月で29年目にはいった。水曜日の午後になんの決まりごとテーマもなく、誰でもどうぞ、とわが家をひらく「ふつう紅茶」と、たまにそれ以外の日、コンサートをしたりゲストのお話を聴いたりする「とくべつ紅茶の時間」との、二本立てで続けている。

その「とくべつ紅茶」で語ってくれた村田いづ実さんと妹のちひろさん。

お二人は、摂食障害からの回復に必要なサポートを当事者の視点で考え、実現しようと、「あかりプロジェクト」という自助グループを立ち上げて、金沢で具体的な活動を展開しているすてきな姉妹だ。その日の紅茶に集まった30人ほどの前で、自らの体験もまじえながら話ししてくださった。

二人ともなぜか子どものころから、自分を好き、とか、自分が大事、といった感覚がまるでわからなかったという。自分がひどく劣っていて、存在していること自体がはずかしい、申し訳ない、自分は間違っ

て自分を責め続けながら、それぞれが10数年もの間、摂食障害とたたかってきた。

中学生の時、急に食べることがとまらなくなったといういづ実さん。彼女の中にはずっと長いこと、まっ黒な丸い空洞があったそうだ。もしかその空洞を立派なもので埋めることができたなら、自分が存在することも許されるかもしれない、と信じて、たとえば、いい成績、いい学校、経済的な自立、スリムなからだや見た目の美しさ、世間一般でいう立派なこと、などなど、ひたすら追求めてきたという。そして実際、彼女はまわりから見れば優秀な女性だっただろう。

だけど、常に人からの評価を気にしておびえ、四六時中「いい子の仮面」をかぶり続けなければいけないと思いこんでいたいづ実さんにとって、人とかわるということそれ自体が大きな負担で、どの仕事も長続きせず、転職をくりかえし、29歳の時、もうどうにもこうにも出勤できなくなって、突然に会社をやめた。

友だちもいない、彼氏もいない、誰ともつながっていない、この先の予定が何一つない。文字通り何もない暮らしの中で、唯一自分の生をつな

ぎとめる行為が食べて吐くこと。まるで自分がぼろぞうきんになってしまったような感覚。そこまで来た時にはじめて、いづ実さんは、「もう、あきらめよう」と思ったそう。

内側にある満たされない空洞を、何か——自分に足りないもの——で無理やり埋めようとする、そんなふう生きるのはもう限界だということを、その時、自ら認めたんだと思う。

実家に戻ったいづ実さんは、しばらくの間は家にこもったまま、その時の自分にできることだけをしながら淡々と過ごした。そして、数ヶ月ほどたったある日、あっ！とまるで雷に打たれたみたいにして、それまでずっとわからないでいた真実のようなものに、突然気づいたのだという。

「そうか！ 私は、このままの私で存在していいんや。経済的に自立してなくても、社会とつながってなくても、今、息しているし、現に、私は毎日生きている。」他のすべての人と同じように、自分にだって存在する価値があるのだということを、頭でなく、からだで感じることでできた瞬間だった。

自分の中の真っ黒い空洞、と思っていたものは、幻に過ぎなかったのだとも気づいた。何かで埋めようとするのをあきらめて、ボールをはぎとてみたら、そこにはものすごいエネルギーが溢れていた。自分はこんなに強い生命力を持っていたんだ。自分が自分であるということを、世の中のものさしなんかにあてはめなくていい。そう思えた時から、ぴたりと、食べたい衝動がなくなったという。

そして、一番つらかったあの時期、自分は一体どうしてほしかっただろう、何を求めていたんだろうか、といづ実さんは考えた。あの時はとにかく、自分の話をひたすら聴いてもらいたかった。誰かにこの気持ちを、ただただわかってもらいたかった。もしも今、同じような想いをしてる人たちがいるなら、そんな話ができる場、聴ける場所を、自分が作りたい、とも思いはじめた。

いづ実さんに訪れたような雷体験は、そう誰にも起こるわけじゃない。妹のちひろさんは、そんな雷が自分にも来てほしいと願いつつ、それでもお姉さんとはちがう道をたどりながら、ゆっくり

と自分なりの回復のみちのりを見つけていった。彼女は結婚し、子育てしながら、いづ実さんがたちあげた「あかりプロジェクト」の活動に、今も現在進行形で深くかかわっている。

Wow-netのこと

いづ実さんの話の中に出てきた「あきらめる」という言葉に、私は思わず大きくうなずいていた。その単語は、私にとっても以前から大切なキーワードの一つだったからだ。

紅茶の時間とは別枠で、ちょうど10年間、ワークショップに関心のある仲間たちと月に一度集まって、ワークショップ自主勉強会をしていた時期がある。Workshop of workshopのネットワーク、略して「Wow-net(ワウ・ネット)」と呼んでいた会だ。

ワークショップってそもそも何だ？ というところからまったくの手探り状態ではじまったWowは、やがて、メンバーのそれぞれが、自分一人ではなく仲間と一緒に考えたい、と思うテーマを持ち寄り、それをワークショップ形式のオリジナルプログラムに組み立て、時にはメンバー以外の参加者もつものって、実際にワークショップを通していろいろな気づきを体験する、ちょっぴり刺激的な、おもしろい場に成長していった。

そのWowで4年前にしたワークショップの中で、やはり「あきらめる」が一つのキーワードになったことがある。それは、「期待すること、期待されること」からはじまったワークショップの延長線上にあるもうひとつのテーマだった。

その時の記録が残っているので、ここに誌上再録する。

期待すること、されること

自分が期待したこと・されたこと、その時にどう感じたか、どう行動したか、をめいめいが自分のワークシートに書きこむ。それをもとに、3、4人の小グループで話しあい、各グループでどんな

話が出たか発表して全体に返していく。

- ・ 「期待した」ことは、子どもに対するものばかりが出てきた。自分が「期待された」ことは、いやだったり、困ったり、ばかりだったなあ。
- ・ あなたには期待してない、と言われたら悲しい。でも、期待している、と言われたら言われたで、重荷に感じる。期待、って矛盾だらけの言葉かも。
- ・ まったく期待されないのも悲しい。ちょうどほどよい期待ならいいのだけど。
- ・ 何かの役につくと、それが自分に向いていようがいまいが、して当たり前／できて当たり前、で見られがち。
- ・ 自分のことをよくわかっていない人たちからの、あるべき／できて当然／やるのが当たり前、を要求されるのはとてもいやなきもち。
- ・ 自分をわかってくれてるだろう、と思う親からの過剰な期待は、愛がからむだけいけいに重たく感じる。勝手に期待されるのは、時に、相手の妄想じゃないかと思うことすらある。
- ・ 母親なんだから、長女／長男なんだから、を含めて、あるべき役割を期待されたら苦しい。
- ・ 「期待」を辞書でひいたら、「あてにして待ち受けること」とあったけど、そうあてにされても、なんだかなあ…。
- ・ 期待、は愛情とセットになってることが多い気がする。子どもに対して期待するのは当たり前かもしれないけど、どこかで修正がいるかも。
- ・ 自分にできたことはこの子にもできるはず／思い通りにきつと進んで行ってくれるはず、などの期待が一度裏切られることが、ある意味、必要なかもしれない。私と子どもとは違う、この子の人生はこの子のもの、と認めたあたりから、親は勝手な期待をしなくなるのではないか。

あきらめること、あきらめないこと

期待、に関しての話しあいがいよいよ進んだところで、今度は、「あきらめる」「あきらめない」という言葉で思い浮かんだことを次々だしてもらおうブレンストーミング。

〈あきらめる〉



見放す・手放す・無理だと思ひさとする
捨てる・楽になる・妥協する・失恋
受け入れる・負ける・弱い・断念する
自分を知る・方向転換・区切りすっきり・絶望
などなど。

〈あきらめない〉



執着する・強情・がんこ・24時間マラソン
悪あがき・突き進む・希望・夢をすてない
根性・気合いだ！・がんばる
死にものぐるい・強さ・わらにもすがる
気骨・いいこと・使命・疲れる・信じる
などなど。

ブレンストーミングをしてみて、ふだん何気なく、あきらめることはよくないこと、あきらめないのがよいこと、というニュアンスで使っていたが、自由にいろいろな言葉を出しあってみると、意外なほど、「あきらめる」の中にポジティブな意味あいが、「あきらめない」の中にネガティブなイメージが、多く含まれているんだと発見があった。どちらも単純に、いい・悪い、だけでは片づけることのできない言葉であり、概念であるようだ。

このあたりで、私の尊敬する、90歳を越えた方が言ってらした言葉、「人生を生きていくのに大切なことは、あきらめること」を紹介して、この言葉を、参加してるみなさんがどう感じるか、どういう意味にとるか、それぞれに出してもらった。

- ・ 今の自分を受け入れていく
- ・ いろんなものをあきらめて、逆に大切なことを得る
- ・ 手放してシンプルにしていく
- ・ 無理しなくなる
- ・ 自分のちからではどうしようもないことがあると知り、それにしがみつかない
- ・ 見極めること

- 今のすべてを、流れに任せる
- 何かをほしいと思うことをあきらめる
- 自分の思い通りにならないことを認める
- あるがまま
- 執着を捨てる
- 求めない

諦める、という言葉の意味

みなさんが、あきらめる、あきらめない、という言葉から感じとったものを出した後で、辞書で調べた言葉の意味を紹介する。

「あきらめる」を漢字で書くと、「諦める」。「諦」を辞書でひくと――

【音】 テイ、タイ 【訓】 あきら・める

1. あきらかにする、はっきりする、また、あきらめる【諦観、諦念】
2. まこと

「諦観」の意味は――

1. ものごとの本質を見極めること
2. あきらめ悟ってながめること

ここで辞書を引用したことで、「あきらめる」には、「あきらかにする」という意味もあったんだ！ と、ほぼ全員、ちょっと新鮮な驚き。

もう一つ、脚本家の山田太一さんがある雑誌に書いておられた言葉もあわせて紹介。

「あきらめるな、とよく言います。だから誰でもあきらめさえしなければ夢がかなうような気がしますが、そんなことはあまりない。がんばれば何でも出来ると思うのは、幻想だと僕は思う」「多くの人が前向きに生きるには、可能性のよき断念こそ必要」

ここで、私の個人的な経験についても話した。通常なら、とても期待されそうな家庭環境にあって、父は過剰な期待を、娘の私に対して押しつけてなかった。いっぱい愛しながら、でもむやみに期

待しない。私が世間の枠とはだいぶ外れた娘であることをわかって、いい意味で、私に期待することをあきらめてくれていたように思う。そのおかげで、今の自分がこうしていられるのだとも、思っている、と。

その後のフリートークで出てきたのは、

- 友人に、子どものことはもうあきらめた、といたら、ええ〜？と驚かれた。自分の思い描いていたのとは違う、この子の行く道がある、とわかった時点で、自分の夢や期待を子どもにおしつけるのをあきらめた、という意味あいと言ったのだったが、明らかに誤解してうけとられてしまった。
- 子どもの進路の方向転換に際して、せっかくいい学校に入ったのに、とか、これだけ学費をかけたのにもったいない、と思うのは親の勝手で、子どもにしたら、したいことが別に見えているにもかかわらず、自分に向かない場所（学校であれ、会社であれ）にとどまることのほうが、自分の時間、人生にとって、もっともったいないと思うのかもしれない。
- 80歳を過ぎても、夢を持って生きている人を知っている。死ぬまでにできるかどうかかわからないけど、夢をあきらめない生き方に、気骨を感じた。

ワークショップの最後は、ふりかえりの時間。

- 期待するもされるも、あきらめるもあきらめないも、肯定的と否定的と両面あるとわかって、すっきりした。
- 期待することが、時には妄想だったとは！ これまで、あきらめることは負のイメージしか持たなかったけど、そうともかぎらないんだね。
- 最期まで、あきらめない！ といのち燃やして生ききった40代の友人がいた。あきらめないことの大切さを、自分は彼女から学ばせてもらったと思う。
- 今日のテーマは全部、今の自分にあてはまる。家族の中で、何が大切か、何を守るべきか、聞

われてる気がした。

- ・ 自分なりの「ふつう」の枠をつくり、あきらめたくないものを決めて、そのことで逆に自分を苦しませていたなあ。
- ・ その子とその子なりのちからを出してがんばっていることが見えたら、それで十分、と子どもを認められる自分でいたい。
- ・ あきらめる、のあたらしい意味を知った。こんな視点をもって、ものごとを見極めていきたいな、と思う。

(この日のWowのやりとり再録、ここまで)

決してあきらめてはいけないこと

ワークショップが終わった後で、私は自分自身のふりかえりとして、この日のWowのレポートに、こんなふうに書いている。

あきらめる、って通常はよくない意味あいであられる。夢をあきらめるな、とか、簡単にあきらめちゃいけないよ、とか。そして本当にあきらめちゃいけないことがあるのも、確かだ。

だけどその一方で、親の側が世間体をあきらめたら＝手放したら、今よりずっと楽になれる子がたくさんいるだろうな、と紅茶の時間でいろいろな状況にある親ごさんの話を聴きながらたびたび感じてきたのもまた、本当のこと。その想いが、このワークショップをしてみたいと思ったきっかけの一つになった。

愛情と期待とあきらめは、リンクしているもののように思える。その子を大切に思う心があるから、その子にはちからがあると信じて、待つ。それが期待することの原点だと思う。

だけどそれが間違った信じ方で、親の側の期待の枠が勝手に肥大したり、妄想にまでなると、その枠にはめられる側の子も、枠が埋まらない場合は親も、苦しむ。

目で見えることや、これこれができる、といったこと、点数、などの評価を相手に期待すること

は、相手を変えたい、自分の思い通りにさせたい、という気持ちが底にあるからで、本音の部分では、その子／その人のそのもの、を認めていないことの裏返しでもある。

その子の実像に気づいた時点で、きっと見直しが必要なんだ。それは、見放すことでも見捨てることでもなく、もちろんそのニュアンスでの、あきらめることでもない。逆説的だけど、あきらめることは、あきらめないこと、だ。

子どもに抱く、過度にふくらんだ妄想的な期待をあきらめる／手放すことは、一番大切なもの——その子の存在そのもの、尊厳、いのち＝決してあきらめてはいけないもの——を、あきらめないこと。逆からいえば、存在そのものを守りたい、となった時には、ほかの何かをあきらめることが必然になるのではないか。

このワークショップのプログラムを作っていく中で、「あきらめる」は「あきらかにする」ことでもある、と気づいたことは私にとって大きな発見だった。私が漠然と感じていた、時にはあきらめることも必要、という予感の奥には、ものごとの本質、本当に大切なものとそうでないものを見極める、という意味も含まれていたんだ。意外だったけど、意外じゃなかった。そしてうれしくなった。

あの日のWowに参加していた人と数日後に会った時、「あの日は、あきらめる、ということを暗く受けとめていたから、終わったあとも心はなんとなく晴れなかった。それが、帰り道に寄った本屋で偶然、“明るくみきわめることが、あきらめること”というのを目にして、あ、そうか、あきらめることには前向きの意味もあったんだと、改めて思えてきて、気持ちが楽になった」という話を聞いた。

あのワークショップには、きっとまだまだいろんなおつりがそれぞれのひとにありそうだ。私もまた、そのおつりを考え続けていきたいと思う。

(2007年のWowレポート、ここまで)

娘にとっての、あきらめる、ということ

と、こんなふうに「あきらめる」について、仲間たちとしつこく考えあった経験があったものだから、その数年後のとくべつ紅茶の時間で、ゲストのいづ実さんが口にした、「あきらめる」の一言に、私は瞬時に反応したのだった。

それと同時に、Wowのテーマでそのことを取り上げようと思った、もう一つのきっかけも思い出していた。

4年前のそのころ、実はわが娘も必死にもがいていたのだ。関西の大学を卒業後、就職をしないで、でも実家にも戻らず、ささやかな手作り本工房をたった一人ではじめたものの、安定した収入があるわけでない、また、それを続けていったところで将来どうなるという保証もない。一方、同級生たちはみなそれなりの会社に勤め、嫌な仕事も我慢しつつ、社会人として立派に生きている。

それにひきかえ自分のしてることなんて。こんな仕事と言えないよ、全然、生産的じゃないし、社会の役にも立ってない、こんなじゃふつうの社会人なんてとても呼べない。ならばせめて、本づくりの合間にバイトすべきかとも思うけど、そんなかけもちできるほど器用じゃない自分も、いやというほどわかっている、こんな自分が生きていていいんだろうか・・・そんな堂々巡りで鬱うつ悶もんとしていた時期が、娘にはあったのだ。

その悶もんが、ついに底の底まで行きついた時、娘は「ああ、もう無理だ、ふつうになるのをあきらめよう」と思ったのだという。

親の私たちには、娘の苦しんでいることがある程度は見えていて、また、会社勤めに向くようなタイプでないことも早くからわかっていたので、いわゆる“ふつう”である必要なんかないよ、とずっと言い続けてきたけど、娘は娘なりに、今という時代の価値観をからだ全身で受け止め、それになんとか自分をあわせようと努力し、でもどんなにがんばってもそうなれない自分を責め、焦り、さらに落ち込み、という悪循環と一人でたたかっていたのだと思う。

なので娘から、「ふつうをあきらめた」と聞いた

時、やっとやっとそう思えたか、と正直、ほっとした。そして、これって大事なキーワードかもしれない、と感じ、いつかWowのワークショップでとりあげよう、と思ったのだった。

そして、今

あのワークショップから数年がたち、あの時、“ふつう”をあきらめた娘は、今も本工房と編集やデザインの仕事を続けながら、彼女なりのオリジナルな道を歩いている。

そして私は今も、亡き父の想いをくり返しくり返し、想像している。

私自身は、若い頃ちゃらんぽらんで、いわゆるシェウカツもせず、定職にもつかず、親元で好き勝手にしていた時期があった。今で言う、フリーターだ。服屋さんでバイトをしながら、詩集を作った。それを画材屋さんにおいてもらった。ビー玉でネックレスを作ってお店で売らせてもらった。ひょんなことから、ラジオのコマーシャルも書いていた。

そういう一つ一つは、私とは53も年齢差のある、父のまじめな価値観からすれば、とうてい理解しがたい、仕事と呼ぶにはほど遠いものだったはずだ。親戚や父につながる取り巻きの人たちは、私に期待することをはっきりと口に出して求めたけれど、父自身はただの一度も、そんなことしてどうなる、とか、早く就職しろ、などとは言わなかった。父からの愛情は十分に感じていたけれど、それを盾に、父が干渉したり、口出しをしたりして、私を縛ることはなかったのだ。

なぜ、父は私を自由にしてくれたのだろう。父からすれば、私はさながら宇宙人みたいで、理解などとうていできなかったから、仕方なく、ただそのまま受け入れるしかなかった、ということなのだろうか。もしくは、若い時に家出をしてまで自分の意志を通したある種の頑固さを持つ父からすると、もしかしたら私の中にも同じたぐいの頑固虫が住んでいることに、途中から気づいたのかもしれない。

でもきっとそれだけではなかったよね。何十年と考え続けて、行きついた先のヒントのひとつは、父が失った身近なのちの多さだった。先立たれる、という言葉があるけど、父は実に4人もの家族に先立たれたのだ。二人の妻と二人の息子と。

残った子どもがもう私しかいないとなったら、父の望むことは、とてもシンプルなものにならざるを得なかったのではないのか。他のこと——世間体のいい生き方、多数の人のような生き方——はあきらめて、あきらめてはいけないもの——私という存在そのもの——だけは、何があっても守らなければならないと心に決めたのではなかったのか。

どうやらこの娘は、世間の型にははまらない、変わった子らしいと気づいたその時から、父は“こうあってほしい”という自らの理想や期待を押し付けることをあきらめ、ただただ懸命に、私の在り方を、そのままを認めようと努力してくれていたのだと思う。

今となってはもう、父とその答え合わせをすることはできないけれど、父の謎は謎のまま、これからも考えつづけていきたい私の宿題だ。

ワークショップと「ともの時間」

私がワークショップに魅かれるのは、ワークショップには、これが正解、とか、これがただ一つの答え、といったものがないことだ。いや、むしろ求めてはならない。

複数の人間が集まり、いつもと違う枠組みの中に自らを置いて、ふだんは気にも止めないこと、見逃してしまいそうなことがら、思いがけない問いかけに、たちどまり、考え、多種多様な意見に耳を傾ける。時には、自分とは違う役割を演じてみる、といった体験もする。

そのプロセスの途中で、一人ひとりこんなにも違っているんだ、ということを実感しながら気づき、これはかくあるべき、と思いこんでいた自分の常識がほどけたり、揺さぶられたり、時には、おう、そんな考えもありか！ と、ものの見方の幅が一気にひろがることだってある。そのことがまた、自分の中の、他者を受け入れる許容量を拡

げていく手助けをしてくれる。

正解、と言ったものがないだけに、答えがないとおちつかない人／結論を求めたがる人には、もやもや感が残るだろうが、その日に全部わからなくたって、いっこうにかまわないと思っている。

ワークショップの自由な空気の中で誰かがぼろりと出した言葉が、記憶のどこかに残っていて、それが一週間後とかひと月後とかに、またはもっと後に、あっ、そうか、このことか、と具体的な何かとリンクする。そんな経験を私はこれまでいっぱいしてきたし、その点が、知識で学ぶのと違う、ワークショップのすてきなところだ。

コミュニケーションの練習の場である「ともの時間」でしていることは、厳密にはワークショップとはいえないと思うけど、この10年間のWowで気づかされたこと、つちかわれてきたものに、いつも助けられていると感じる。

何より、一人ひとりの存在や、その経験から出てきた言葉を大切にし、ともに、互いの違いをこそ認めあう場をつくろうとする姿勢が、ワークショップで大事にしてきたことと、見事に重なり合っている、と思うのだ。

2011.11.22

あかりプロジェクト・インフォメーション

<http://info.future-butterfly.net/>

あかりプロジェクトの運営する

摂食障害回復サポートサイト「未来蝶.net」

<http://future-butterfly.net/>

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 睦

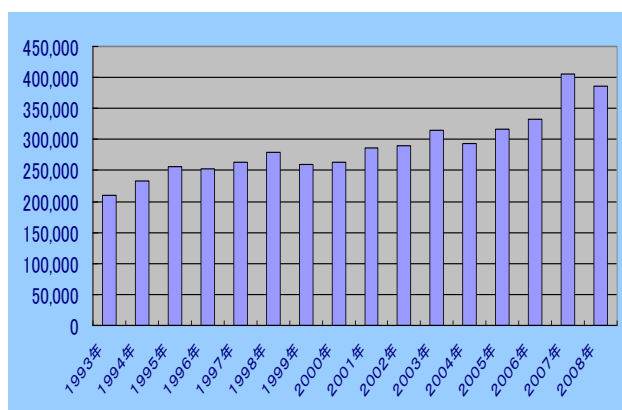
第六章 世界遺産登録後の歩み

■環境の変化



世界自然遺産登録の背景は第一章に述べているので、ここからは登録後の歩み、その背景について触れたい。

1993年に世界自然遺産に登録された屋久島の観光客数は緩やかに右肩上がり。離島であるが故のアクセスの不便さ、すぐには追いつかないインフラ整備。夏は台風銀座、冬は北西の季節風により天候不順が続き、交通便の欠航も珍しいことではない。



そんな背景の中、屋久島の観光客数は1993年からの15年間で約2倍となる。

しかしながらその交通便の不便さこそ屋久島を訪れる観光客数を緩やかに増加させた理由でもある。他の世界遺産登録地域でよく聞いたのが、登録直後に急増した観光客。しかしながら増加を続けるといったことはなかったと。もちろん、登録地のすべての地域において観光客が増加することを歓迎している訳でもなく、突然たくさんの人が訪れるようになり、大型バスの騒音や排気ガス、生活環境までも脅かすことになり困惑している事例も少なくない。

今年世界遺産登録地となった小笠原や平泉においては来年一年は大きな影響を受けることになるであろう。

屋久島では観光客が急増しなかった理由として交通アクセスや宿泊施設が急激に増えることなく物理的なハードルがあったことが最も明確な原因であるが、実際には島外からの大手資本によるホテル建設の話が出たりしながらも頑固として受け入れなかった動きもあり、ただただ大きな力に揺れ動かされないようとした背景がある。

また、屋久島の場合は日本で初めての登録地であり、世界遺産という言葉にも屋久

島という島の名前にも馴染みがなく、登録から数年後によりやく認知度も高くなり、モデルケースとして他の地域、とりわけ世界遺産登録地や世界遺産登録を目指している地域、観光地からは注目を浴びるようになる。また、米国同時多発テロなど、諸外国に起きる様々な事件などからも若年齢層の海外離れが目立ち、国内での旅行が伸びた時期もあり、屋久島においてはその影響を大きく受けた背景がある。

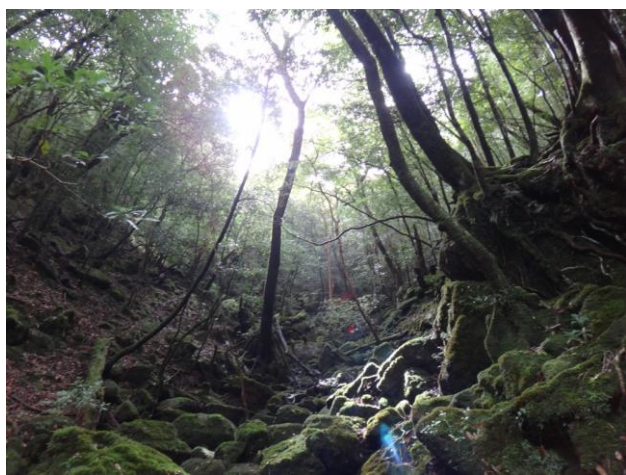
■現状と課題

他の地域からはとても理想的な増加傾向のある屋久島の観光。初めての登録地として無我夢中で歩んだのかもしれない。いや、突っ走ったのであろう。気が付けば設備や

施設の老朽化は進み、耐用年数を大きく超過していたり、現実の利用者数と利用許与量に大きな差が生じており、建設当時の現状や試算と現状の格差が浮き彫りになっている。特に山岳部におけるトイレについてはその問題が顕著であり、既設トイレの修繕や増築にも着手出来ず、また新設トイレについてもその環境からリスクの高さが目立ち、現状では携帯トイレの導入について環境省や観光協会で推進し、今すぐ出来ることとして観光客にも協力を要請、使用を促進しているが、同時に鹿児島県や屋久島町では既設トイレの汲み取りに掛かる経費を捻出するべく山岳部保全募金への協力も要請しており、その複雑な管理体制によりわかりにくい部分、重複している部分などを統一させるためにも一本化が望まれている。



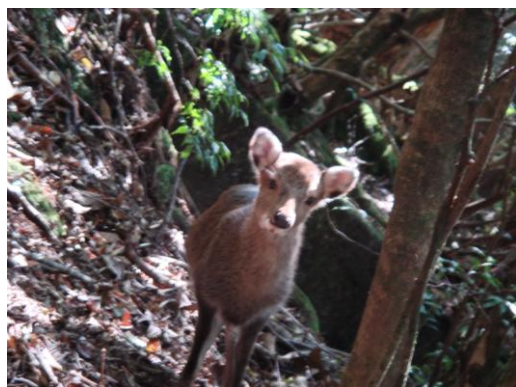
る。また、観光客のニーズの多様化により、特に宿泊業やガイド業ではそのニーズに応えるべく様々な受け入れ態勢があるのだがその違いが明確でないケースもあり、また、その年毎にめまぐるしく変わる時代背景は情報に溢れる時代だからこそ多種多様化し複雑にもなっているのかもしれない。



屋久島に限らず、世界遺産登録地いずれの地域でも抱える問題点として、環境省、都道府県、地域行政といった縦割りでありながら役割や責任を共有しないため、歩み寄りやすすり合わせ、つまりは同じ目標に向かい手を取り合うことが非常に難しいことが挙げられる。

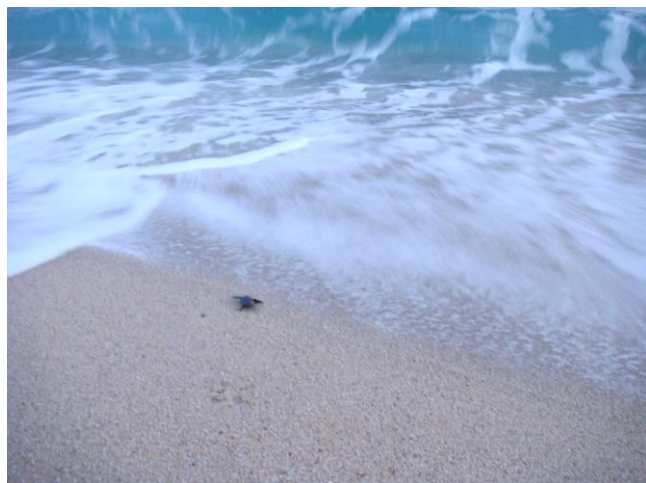
観光業が発展し観光客が増えたことで環境破壊が進んだが行政は何をしてきたのか、等と批判する人も多い。どうすれば良かった等、結果から評価することは容易いことである。どうであれ、今を生きる我々が見ている、今日の前にある事実を見据え、またしっかりと分析や検討を重ねなければ、ただ誰かに責任を押しつけているに過ぎない。

い。



屋久島では観光業が発展して民宿やガイドが増えたことに（特に移住者が参入していることも含め）異論を唱える人も多いが、それが今の屋久島が進んできた時代。屋久島が望んでそうやってきたのだと私は感じている。正しくないこと、間違っていること、望んでいないことであれば軌道修正をしていけば良い。

もし屋久島の殆どの住民が、世界遺産に登録されたときに今の屋久島を想像していたならば。もしそんな近い未来にしっかりとした目標が掲げられていたならば。あくまでも仮定の話であり、今から近い未来の目標を掲げれば良い。



まもなく屋久島は世界遺産登録から20周年を迎える。その時、それからの20年後の屋久島について行政も住民も同じ目標を掲げ、あるべき屋久島の道を共に歩いていくことが必至であり、問われるところになるのであろう。

お寺の社会性

— 生臭坊主のつぶやき —

五

竹中尚文

はじめに

三回続けてお葬式の話を書いた。「弔」は葬儀屋さんの立場から、「参」は人のつながりにのなかにある葬儀を、前回の「四」は僧侶の立場から書いた。ここは私が一番書き込みたいところであるが、宗派色が色濃く出る場所なので別の機会にしたい。

このまま葬儀の話しばかり書き続けば「葬式坊主のつぶやき」になってしまう。今回でお葬式の話を終えよう。併せて、初回に御布施の定額化という話題について私の思いを申し上げたい。

1. 葬式坊主

日本の中世仏教史の専門家である松尾剛次氏によると、中世日本では、僧侶を分類すると「官僧」と「遁世僧」に分かれる。官僧とは、国家に仕える官僚としての僧である。鎌倉時代にこの官僚の身分を離脱する僧が出てきた。この僧たちを「遁世僧」と呼んだ。鎌倉新仏教を興し担い手になっていったのも「遁世僧」である。また、葬儀を始めるようになったのも「遁世僧」である。それまで以前は、死んだ人や死にそうになった人は、道や溝に捨てられた。これは死を忌む（斎む）べき事だと考えた日本人の宗教観によるものである。

官僧は葬儀に関わらない。例えば、現代も法隆寺の僧は葬儀を執り行わない。彼らは、官僧の流れをくむ僧である。また、官僧でなくても祈祷を主な仏事とする僧も葬儀に関わらない。「遁世僧」の中でも「葬式坊主」と「祈祷坊主」に分かれた。

鎌倉時代以降、葬儀に関わるようになった僧は黒衣や墨袈裟を使うようになった。タイやスリランカの坊さんがオレンジ、台湾や韓国の坊さんがグレーの僧衣を身にまとう。日本の坊さんの僧衣が黒であるのは、その意味と歴史がある。最近、黒の僧衣が暗いイメージだから、他の色にしようと言う動きがある。愚かな考えである。

2.同じ葬式はない

これまで書いたお葬式の話について、これらは特殊なケースだと言う印象を持たれた方もいるかもしれない。特殊なお葬式と思う人は、普通のお葬式というものが頭にあるに違いない。ところが、普通のお葬式というよう

なものはない。同時に間違ったお葬式もない。間違った人生がないように。

前に登場した葬儀屋さんの藤原さんと「普通の葬式ってないよなあ。みんな違うよなあ」とよく話したものである。亡くなる人はみんな様々だ。また、人は同じ条件で亡くなるのではない。同じ葬式なんてあるはずがない。ところが、よく親戚とかで、「葬式というのは、こんなふうにしなくてはならない」と指南を始める人に出くわすことがある。たいていは迷惑な人である。最近の葬祭業者は、以前と比べてずっとシステム化されていて、何をどうするかを教えてくれる。但し、そこで喪主がどうしたいのかを言わないとすべてが業者のペースになってしまう。画一化した儀式になってしまう。

ここで、坊さんの御布施は画一化したものではないのか問いがある。この御布施の問題は、「生臭坊主のつぶやき」の第一回目に

ふれた話しである。御布施の金額を明示すべきか否かという話しである。私は明示して欲しくはないし、問われても答えないし、御布施の金額は定額ではないと思っている。その結果、私が葬儀でいただく御布施の金額は一定ではない。お互いによく知っている人だから、これだけの金額を渡せば充分だろうという表情で渡されることがないのありがたい。

3.葬儀の依頼

私は初対面の方のお葬式を、皆無とは言わないがほとんどしない。亡くなった方も遺族も、初対面のケースばかりであったなら、私は御布施の金額も明示すべきだと言うかもしれないが、今はその状況はない。

お葬式の依頼はいろいろである。もちろん誰かが亡くなって依頼の電話がかかってくるのだが、それがすべてではない。

夏の昼下がりに電話が鳴った。おばあちゃんが亡くなったと言う知らせだった。お孫さんからだ

った。私は、少したじろいだ。

なぜなら、かつてこんな話しがあったからだ。そのお宅の祥月命日にお参りをした。たまたま、その日はおばあちゃんが一人で居た。仏壇に向かってお経をあげて、少し世間話をして帰ろうと思っていた。少しの話が、おばあちゃんが淡々と語り出した。

新婚で旧満州に渡った。子供が生まれてすぐに終戦を迎えた。ご主人は彼女が子供を連れて先に帰国するようと、ご主人の実家の住所を渡してくれた。朝鮮半島を貨物列車で南下する間に、赤ちゃんが自分の腕の中で息絶えた。息絶えた赤ちゃんを数日間抱き続けた。帰国して自分の実家は空襲で焼けていた。渡された住所を頼りにご主人の実家に行くことにした。ローカル線の駅で降りて、人に道を尋ねながら数キロ先の村にたどり着いた。村の小さなお堂の縁に腰をかけて迷った。主人の消息どころか生死も不明である。赤ちゃんも死んでしまった。息子の安否すら分からないのに、

両親は自分を迎えてくれるだろうかと。通りかかった村人が声をかけてくれて、その家に連れて行ってくれた。両親は喜んで、よく帰ったと迎えてくれた。抑留されたご主人が帰国するまで、自分を大切にしてくれた。ご主人が帰国した時、自分は朝鮮半島で赤ちゃんを亡くしてからずっと生理が止まったままだった。子供ができないから同じ村から養子夫婦を迎えた。人のいい夫婦だった。暫くして、自分に生理が始まって、娘が生まれた。娘も嫁いで幸せに暮らしているようだ。連れ添ったご主人は少し前に亡くなった。

話を聞いていて、おばあちゃん
は自分の葬式を私に頼んでいる
のだと思った。人生は絶望の淵を
歩むこともある。たまたま行き交
う人の善意に救われることもある。
そんな人生を終えるときに、

いろいろあったね、ごくろうさま
言ってあげたい。私もそんな言葉
を掛けてもらえる人生を送りたい。
い。

私の髪を切ってくれる美容院
の店主は息子さんに「私が死んだ
ら、このお寺に電話して」と言っ
ているそうだ。彼女は私より若い。
でも、このような頼まれ方は嬉し
い。坊さんとは死んでからの付き
合いではなく、生きている内から
仲良く付き合ってもらいたい。

訂正

前号が発行されて直ぐに真宗
学の先生からメールをもらった。
(『対人援助学マガジン』 Vol.2
No.2)の P.139 右段の下から 6 行
目に「供会一処」と書いた。正し
くは「俱会一処」である。

こころ日記

「 ぼちぼち・ 」

(3) 思い出のお便り集

脇野 千恵

あと何年この仕事が続けられるのかなと思うと、過去の子どもたちとの生活がなんだかとても懐かしく感じられるこの頃です。思い出はだんだんと薄れていくものですが、子どもたちとの思い出をよみがえらせてくれるのが、毎日書いていた学級通信です。

担任としてできることのひとつとして、毎日学級通信を書くこと！と決めていました。一年間で200号近くまで発行しました。

タイトルは色々。

“ぼちぼち”は、実はある年の学級通信につけたものです。中身は毎日のことから、連絡事項、私のつぶやきなどです。書くことは苦痛ではなかったので、自己満足のように取り留めのない時事問題なども盛り込むこともありました。が、紙面のほとんどは、毎日の子どもたちの「三行日記」で占められていました。

ちょっと紹介します。

4月8日“入学式”のこと

・入学式はちょっと緊張した。すべてが初めてなのでどうすればいいかわからなかった。

・僕はどきどきしました。なかでも名前を呼ばれて返事をするときに不安でした。でも何とか返事ができました。長い話が続きやっと終わりました。すごく疲れました。

・名前を呼ばれるとき、とても緊張した。式のときに演奏があつてすごかった。悪い人ばかりいるんだと思っていたけど、けっこうみんな優しくてよかった。

・中学生になったっていう実感がなくて、なんだか不思議な感じでした。クラスに仲がよかった人がいてよかったです。

・はじめは緊張したけど、どんどん進むうちに緊張がなくなっていった。中学3年間、楽しいことがいっぱいあればいいと思った。

・始まる前すごく緊張していたけど、先生

や先輩たちに歓迎されてほぐされました。
もう中学生なんだなあと思いました。

授業が始まった4月半ばの三行日記

- ・今日は色々な勉強をした。小学校の時よりむずかしかった。とくに数学がむずかしかった。
- ・今日の授業は説明ばかりで、あまり進まなかった。生徒手帳をもらった。
- ・学校の中で鬼ごっこをしました。先生は、野球はどこファンですか？ぼくは阪神です。

5月、家庭訪問が終わると、子どもたちはもうすっかり学校生活に馴染み、休み時間の使い方もうまくなっていきます。自分らしさを出してくるのもこのころでしょうか。毎日ささいな喧嘩の対応に追われるのもこのころからでした。

ある日の学級活動で聞いてみました。

「このごろむかついたことって何？」

- ・友達としゃべってて、〇〇ちゃんが割り込んできた！
- ・自慢してくる友達。
- ・勉強しなさいといちいち言われること。
- ・お母さんにおこられるとき。
- ・勝手携帯みられるとき。
- ・兄貴にキレられること。
- ・約束守っているのに、親は時間にルーズなところ。
- ・先生に指図されること。
- ・弁当の中がぐちゃぐちゃになってる！
などなど。

みんなの「このごろむかついたこと！」

から思うこと

・みんなそれぞれだなあと。私はストレスがたまると猫とあそびます。すごくかわいくて、いやされます。

・みんな、けっこう思っていることが一緒だった。みんなのを聞いてもっとむかついてきました。みんなのむかつくことが色々わかりました。

・みんなも友達のこととかで悩んでる人がいるんだなと思った。でも友達にいじめられたり、さけられたりするのって、「ムカつく」っていうより、「さみしい」という気持ちの方が多いです。

・みんないっぱい不安なことやむかつくことがあるんだなと思いました。中には人物のイニシャルを書いている人も…。ちょっとかわいそうだなあ。

・ときどき、「何で自分だけ…」って思っていたけど、みんなも一緒やねんなと思った。ストレス発散させることないのかなあ。

・なっとくしたやつがたくさんあった。たとえば、ちくられるとか、自己中なやつがうざいとかです。

周りのことが気になって仕方がない子どもたちは、こんなことでちょっと安心した気持ちになったりします。みんな気を遣って生きているんだと思ったものです。

友だちの「ええとこさがし」をしました。

「毎日の君たちを見ていて、自分のことを

ほめてあげられない人がたくさんいますね。” どうせあほやし！ “とか、“何やってもあかんねん！” といった言葉をよく耳にします。班のみんなに自分のよいところを見つけてもらう活動はどうでしたか？」

・ 班の人にええとこさがしてもらって別にいやではなかった。かしこいとか、しきつてくれるとか書いてくれてうれしかった。

・ ちょっと意外なところがあったけど、うれしかった。自分が書いたこと、相手は喜んでくれたかなあ。

・ 自分が思っていたところと、友だちが見ていたところとは違った。自分で自分の良い所はなかなか見つからないが、友だちから聞いて「そうだったのかあー」と思った。

・ 自分は明るい人なんだ！ と思いました。自分のええとこより、悪いとこの方が多いと思っていたので、見つけてくれてうれしいです。

・ 楽しかった。ええとこびみょうやった。

・ みんなが書いてくれたこと、しっくりいかなかった。

・ けっこううれしかった。またこんな授業やってほしい。だって、自分のうれしいこと言われたら気持ちがいいから。

日頃悪態をついていた子も、この時ばかりは、少し緩んだ顔をしていたのを覚えています。「ええとこさがし」といったワーク

シヨップ形式の学習は毎回好評でした。

一学期を終えて！

・ 中学校は初めてのことばかりで、慣れないことが多かったけれど、教科の教室の場所を覚えたり、みんなで急いで時間に間に合うように席に着くようにしました。悪い所もいっぱいありました。友だちとしゃべったり、勉強に集中できなかったり。本当にもっとまじめに取り組めたらよかった。

・ 4、5月ごろ、まだ慣れずずっとだまっていたけど、6月後半から、めちゃしゃべるようになった。どの時間も一回はおこられたけど…。楽しいからいいかなと思ったけど、やっぱり授業に集中しようと思う。

・ 「友だちできるかな」「勉強ついていけるかな」とかで、不安でした。でも、友だちいっぱいつくて、他の人とも仲良くなりました。勉強もいいライバルができて熱が入りました。

・ やっぱり明るくて楽しいクラスだなあーって思った。だんだん慣れてきてうるさくなってきたから、2学期が少し心配。でもみんな反省しているから、最高のクラスになると思う。

・ 部活が続けられなかったのが残念に思う。まわりの人が応援してしてくれたのに、それにこたえることができなかった…。

・ テストの点が悪かったので、人に言えるくらいの点をとりたいです。あと忘れ物をなくしたいです。

・まだまだみんな子どもだから、うるさいけど、だんだん静かになっていくだろうと思う。先生に迷惑をかけてしまった。

(中学校教員 脇野千恵)

担任を持つと、一年間どんなクラスにしようかなと色々と思いめぐらします。しかし、その時々の子どもの集団によって、思うようにならないことがたくさん出てくるのが常です。(またそれが面白くもあるのですが)今年こそはと気合を入れても、やっぱり、私なりの学級作りしかできなかったということもありました。

学級作りの一つとしての学級便りは、子どもの気持ちの交流の場として大いに役に立ったと思っています。

担任の思いも一杯綴りました。直に話をしない子にもなんとなく伝わっていったのではないのでしょうか。重大なトラブルのあった日の帰りの会では、読んで聞かせたりしました。

毎日きちんとファイルに綴じていてくれた子どももいます。間違い探しの得意な子は、走ってきて指摘してくれたものです。一方で、道端に落として帰る子には、なんでや!と怒ったりもしました。

親の楽しみでもあったようで、私のプライベートなつぶやきに、いたく感動してくれたということもありました。きっと毎日、自分の子はどんなことを書いたんだろうと、読んでくれていたに違いありません。

その後の子どもたちに、どんなことを残すことができたのか、色々考えます。

これらを書いた子どもたちは、もうすっかり大人になりました。

これからの男性援助を考える

第五回 セックスレスの男性援助

松本 健輔 坊隆史

妻「セックスがなかったら友だちと同じだと思うんです。なら結婚している意味ないなと」

妻の期待に応えられないセックスレスの夫にとってそれに反論する言葉は難しい。結果沈黙が続く。カウンセリング場面で録画を再生するように何回も何回も見ている場面だ。

筆者の主催する夫婦関係の問題を対象としたカウンセリングルームに持ち込まれる主訴にはセックスレスの問題、特に男性が応じてくれないという相談がとても多い。つまり、カウンセリングで性というとてもデリケートな問題に取り組む必要があるのだ。そしてその問題への取り組みとは妻とセックスできない夫への男性援助の側面も存在する。なお、本稿では、女性が問題を持ち込むケースを中心に扱うため、女性の視点から男性援助を考えてみたい。

1、我が国のセックス事情

夫婦のカウンセリングではセックスレスの問題がたびたび登場する。海外の研究によると、夫婦関係が満足であることが、性的満足度を高めるのではなく、性的に満足していることが、夫婦関係の満足度を高めることが明らかにされている (Yet el al. 2006)。それだけ性生活の満足度は夫婦の大きな要因といえる。しかし、我が国でのセックスレスの現状は、2010 年の第五回男女の生活と意識に関する調査によると 40.8%の婚姻関係にあるカップルがセックスレス状態にあると示されている (北村 2011)。同調査では、2002 年に 31.9%から 8 年で 10%近く値が伸びており急激にセックスレス化が進んでいることが示されている。

他方で、世間で草食男子¹という言葉が生まれ、男性が草食化してきていると言われ

¹ そもそも草食系とは深澤真紀によって 2006 年に初めて使われた言葉で、現在では多様な使われ方が広がり定義は曖昧である。深澤によると草食男子は、恋愛に「縁がない」わけではない

ているが、実際の数字でもそれが示されている。たとえば、先ほどの男女の生活と意識に関する調査でも、20 歳から 24 歳の男性はセックスをすることに「関心がない」と「嫌悪している」の割合が、2008 年の時点で 11.8%であったが 2010 年には 21.5%と 2 倍近く伸びている。一方同年齢の女性も、2008 年で 25.0%が 2010 年には 35.0%とセックスへの拒否感が伸びている。他の世代をみても同様に増加がみられる。たとえば、35 歳から 39 歳に関しても、男性で 9.2%から 17.3%に、女性で 35.7%から 50.0%と確実に増加傾向がみられる。これら調査からも若年層だけでなく、全体としてセックスへの関心の低下、セックスレス化傾向が顕著にみることができる。

2、セックスレスは問題なのか。

筆者はセックスレスを主訴としたカウンセリングの中でよく「セックスレスは悪いことですか」という質問に出会う。その時『悪い』という基準をどこに設定するのかでこの解答は異なってくる。つまり、裁判などの離婚を争う場で、法的にどちらが正しいのかを争うことと、夫婦関係の継続を前提とした日常のなかで悪いのか悪くないのかを論じることとは大きく異なる。そして、夫婦関係を継続することを視野にいった夫婦カウンセリング場合、「夫婦一方が不満だと感じていたら問題」ということになる。夫婦カウンセリングの場合では、『セックスレスという問題』を抱えたクライアントが来所する。そして、セックスレスに問題とラベルをつけて来所するのは筆者のカウンセリングルームの場合圧倒的に女性が多い。

3、カウンセリングの場で問題とされるセックスレス

前述したように、筆者が行っている夫婦カウンセリングの場合では、セックスレスを問題と考えるのは圧倒的に女性が多い。「一生セックスがないなら別れようと思います」、「セックス以外は問題はないんです。でもそれがいいのは夫婦として致命的だと思います」、「女であるということをまだまだ感じていたいんです」

人は何かを語ろうと思った時に、差異を語るのが一番安易である。つまり、妻が極端に性欲が強いわけではなくても、夫が弱かったら妻はその差を語る。その差が不満となり表出される。

一方男性はセックスできない事実を認めることがなかなか難しい。妻にセックスを求められ応えられない夫は、「今日はつかれている」、「次は頑張るから」など安易な逃げ道を選び、セックスができないと言うことを避ける。そして、妻はその夫の態度を見てさらに「私のことを愛していないんでしょ」、「私の何が悪いのよ」と夫への攻撃を強める。そして夫はまた「今日はたまたま調子が悪いんだ」などと逃げる。そして妻のプレッシャーによってさらにセックスへの自信がなくなる。絵に描いたような負の悪循環がそこで完成する。

4、そもそもセックスレスとは何なのか

セックスレスは、日本性学会が 1994 年に「特別な事情がないにもかかわらず、カップルの合意した性交あるいはセクシュアル・コンタクトが 1 ヶ月以上ないこと」と定義されている。しかし、セックスレスという名の問題の定義は男女、また人によって大き

のに「積極的」ではない、「肉」欲に淡々とした男子と定義している。

く異なる。プレジデントの調査（2009）では、「あなたにとって、セックスとは？」という問いに対して、夫の 22.4% 快楽と回答したのに対し、妻は 6.6%。逆に、スキンシップと回答した夫は 42.0%、妻は 53.9% と異なった。つまり、セックスの意味は男女によって異なる。臨床の場合において、それはさらに大切なことになる。つまりセックスレスという名の問題は、いったい何が問題なのかということだ。スキンシップ、愛情の確認、性欲、そして生殖。もちろん単純に分けることができないがどれが大きなファクターになるかによって問題解決のプロセスも異なる。しかし、当事者である男性からしてみるとそれを女性がセックスレスの何を問題にしているのかを理解することはとても困難である。

5、セックスレスのシステム

しかし、お互いが何を思っているのかなど関係なく、セックスレスという問題は夫婦間の強い悪循環のシステムを作り上げる。求めても逃げる夫にさらに怒りや悲しみを感ずる妻。その怒りや悲しみをぶつけられ、さらにセックスをすることへのプレッシャーを感じ、できなくなる夫。それをみてさらに悲しみ、怒る妻。このループは本人達意思を超えて妻が諦めるまで永遠と続く。そして妻が我慢するという形で表面上解決したかに見える場合ですら、妻からの無言の圧力というプレッシャー（妻が自覚がなくても夫は感じやすい状態にある）により悪循環のシステムは実質まったく変化が起こらない。そしてこの問題はセックスレスだけに留まらない。妻が何かを求めて、夫がそれから逃げ出す。生活のあらゆるところでそれが波及する夫婦までいる。もちろん卵が先か鶏が先かで、セックスレス以前からその関係があった可能性もある。ただ、どちらにせよセックスレスという妻側の問題提起によりその悪循環システムは強固なものになる。

6、男性のセックスレス

多少過度の一般化にはなるが、男性がセックスレスで陥る典型的なタイプをここで紹介したい。

妻のニーズの誤解

前述したように、男性にとって、セックスイコール性欲と言う要素は女性に比べて大きい。昔から「相手の立場にたって物事を考えるように」と我々は小さい頃から教えられる機会が多い。そのルールにのっとると、「妻は性欲を満たして欲しいと思っているのだ」という結論に安易にたどり着く。もちろん純粋に性欲を満たして欲しいと望まれている場合もあるだろうが、「愛情を感じたい」、「女性として扱われたい」という精神的な繋がりを求めていることが女性には多く、そこに大きな溝が生じる。たとえばその溝はセックスという行為すべてを行わないといけないと思ってしまう男性と、セクシャルなスキンシップのみでも満たされると思う女性という本人たちは言語化しないため気づかないすれ違いとして生じる。

完璧傾向

筆者の相談の中には結婚前から一度もセックスできていないというケースも沢山存在する。彼らの多くは今まで恋愛経験もなく、あったとしても性交渉の経験がない。「失敗することが、夫として不適格と言われているような気がした」、「できないことで、妻

から嫌われるのがすごく怖かった」など失敗への恐怖が常につきまとう。そして、実際にそのプレッシャーの中で失敗を経験し、男性としての自信を失う。その背景には、男性として妻を完璧に満足させなければならないという信念があるように思われる。そのある種の責任感ともいえる完璧思考が妨げになって、まったくできないという事態に陥るのではないだろうか。

7、セックスレスの男性の援助とは

この強固なセックスレスの悪循環システムから抜け出すための男性援助とは何か。その一つは自信を失った男性へのエンパワーメントである。筆者が出会った男性は的確に現状をこう表現した。「日頃毎日怒られているのに、ベッド上だけリードしろと言われるのは無理だ」と。もちろん、男性がリードすべきかという議論があるだろうが、現実多くの女性はリードを望む。そしてこの男性の妻もまたリードされることを強く望んでいた。知り合いの保育士がこんなことを言っていた。「幼稚園でも女の子が男の子の世話をする場面がよくみられる。ほんとその頃から女の子は世話好きなんだと思う」。

もちろん、それはジェンダーの影響なのかもしれない。ただ、ここで大切なのは世話をするという行為は女性に多くみられることが多いようだ。世話をする行為は、相手がなにかしら自分よりできないことが必要とされる。その関係性は、過度になると母子関係のようになり、男女を性から離す結果になる可能性がある。そして、その関係を変化させるために、男性が自信を取り戻し、対等な関係を築き上げることが何よりも大切になる。さらに、それは理屈の上では妻にとっても手間が減るため、夫婦共に共通の目標²になりやすい。

加えて、カウンセラーがいる場面で、妻のニーズを知るように訊ねるという作業が重要な意味がある。性の話はまだまだタブーという意識がある。そのため誤解が多く、妻の本当の気持ち、望みを知ることは少ない。また、言葉を選びすぎるあまり、二人ではどうしても誤解が生まれ、話が噛み合わないということもまた多い。さらに、どうしても女性のほうが感情面を言語化することが上手く、逆に男性は不得手である場合が多い。そこを第三者であるカウンセラーが男性の思いが上手く表現して伝えられるようなサポートを行う。そして、そのコミュニケーションがカウンセリングルームから日常生活に般化して行くなんかで男性は自信を取り戻す。

結果、それによって女性の満足度もまた増すことになる。ある女性はセックスレス解消に伴ってこんなことを語った。

「夫が正直こんなに物事を考えているとは思わなかった。ずっとただただ辛いことから逃げて能力のない人だと思っていた。でも、ここにきて、夫の話を聞いていると自分が思っていた夫像がいかに間違っていたのかを知ることができた。正直セックスレスが解消されたことよりも、夫と対等に会話ができるようになったことが一番うれしいのかもしれない」

原稿を書き終えて

原稿を書き終えていて感じるのだが、どうしても現実を知ってもらうために実際に語ら

² 無意識的に問題がある状態を維持しようとすることも考えられるが、この場合合理的に夫婦双方が納得でき、共有できる目的が大切だと考える。

れた言葉を探す。そうすると結果として女性の語りばかりが集められてしまう。それだけ男性の語りは一般論が多く、示すことである種のリアリティを伝えられない（男性にとってはまさにそれがリアリティなのだが）。男は黙して語らずというというポジティブな表現もできるかもしれない。しかし、時代の変化の中で、女性からコミュニケーションを求められている今日、変わらないといけない時がきている気がする。

ただ、確実に変化もある。あるカウンセリングで20代の男性が、妻への要望に「親の悪口は正直聞きたくない。でも、自分はこう感じるといってくれれば愚痴だと思えるから受け取れる」と語った。アイメッセージ³を彼は誰に教わる訳でもなく自らの生活の中で学んでいたのだ。

「最近の若者は～」というフレーズの紀元をたどると紀元前1680年にも既に使われていたことが発見されているという。草食男子というバッシングなど今も若者への批判は常にある。男性の変化は確かに存在する。それは、悪い側面がピックアップされがちであるが、もしかしたらそれ以上に良い側面もあるのかもしれない。そして、今後社会はその良い面にライトを当てて、若者から学んでいこうという視線が必要なのではないだろうか。

（文責：松本健輔）

文献

北村邦夫(2011)。「第5回男女の生活と意識に関する調査」. 社団法人日本家族計画協会 家族計画研究センター.

プレジデント フィフティ・プラス(2009), 夫と妻のかたち 衝撃白書. プレジデント 社. 8-37

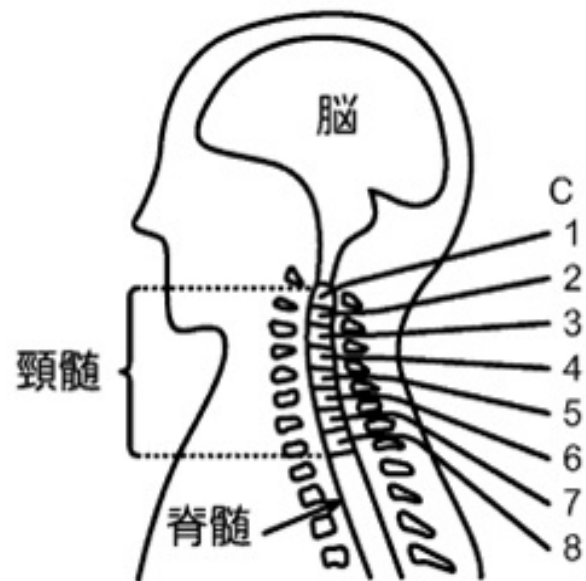
Yeh, H., Lorenz, F.O., Wickrama, K.A.S., Conger, R.D., & Elder, G.H., Jr. (2006). Relationships among sexual satisfaction, marital quality, and marital instability at midlife. *J Fam Psychol*, 20, 339-3

³ アイメッセージとはアドラー心理学の用語で、他者と円滑な交流を図るときに効果的な表現方法とされている。「あなたは～だ」という表現だと非難的な言い方になるが、「私は～思う」と主語を一人称にすることで相手が受け取りやすいように表現する方法を言う。

ノースайд

禍害と被害を超えた論理の構築

(3)



〈参考資料〉大阪頸髄損傷者連絡会

<http://okeison.com/keison/keizui.gif>

中村周平

事故当日

今回は、事故当日の様子について触れていきたいと思います。いつもの日曜日に起きた突然の出来事。事故直後は私も家族も、そして高校の監督やコーチも現実をしっかりと捉えることができませんでした。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、そして、今回から両親と事故からの経緯について話し合った「両親へのインタビュー」も書き出していきたいと思います。事故直後の学校やラグビー部とのやり取りや入院中の出来事など、私が把握できていないことがたくさんありました。何より、事故直後の私の様子を一番知っているのは

両親で、二人の意見を聞く必要があることに気付きました。方法は、「私へのインタビュー」を両親に目を通してもらった後、事故直後に遡り、その当時の心境を語ってもらいました。そのとき交わされた会話の内容を手がかりに、当時の両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=H とする。

1 「2002 年 11 月 17 日」

やっとのことで自分のペースを掴めるようになった高校 2 年の 11 月、それは本当に突然の出来事でした。練習に出かける前に「あんた、これからもっとラグビー忙しくなるけど、進路どうすんの」「いくつか福祉が勉強できる大学があって、どこを目指そか考えてる」と、母親とこれからの進路について話をしていたのが、なぜが強く印象に残っています。その日はいつもと変わらない日曜日でした。前日の全国大会予選準決勝が先輩方の引退試合になり、その日は新チーム立ち上げの日。11 月にもかかわらず、汗ばむような暑さの中、チーム内での紅白戦がおこなわれていました。

I: 「まず、事故が起こったのは練習中に起こったん？試合じゃなくて？」

S: 「練習中、紅白戦やったんですね。(中略)実は前日が先輩らが京都の全国大会予選の準決勝で、あの伏見工業高校に負けてしまって、新チームスタートの日やったんですね。だから、事故が起こる前は今年このチームでやっていくからってという話から始まって。で先輩の全国大会予選頃から、みんなちょっとずつ思った直接コンタクト(ぶつかること)のプレーの練習。普通は怪我しにくいように、タックルバック(相手のタックルを受けるクッション材)を手を持ったりとか、コンタクトスーツ(着るタイプのクッション材)を体に身に

つけて痛みを軽減する、クッション性のあるものを身につけて受けてたんですけど(中略)でもそれやと実践的なものをやったりイメージできへんかったり、できへんというのが言われ出してて…」

I: 「試合にはそれ(コンタクトスーツ)使わへんのか？」

S: 「絶対に使わないです。(中略)コンタクトのところで課題があるんじゃないかって言われて。先輩らが最後の大会のあたりから、ぶつかるプレーが実践形式やなかったと。僕らの中にもそういう気持ちがあったので、監督からしょっぱなの試合やし気合い入れるわけじゃないんですけど、今回課題に挙げてたことを一回目からやってみようということで、紅白戦をやったんです。新チームスタートの日に紅白戦するなんて、今までなかったことなんですけど」

前チームの敗因は、「日々の練習において実戦的なコンタクトプレーの不足だったのでは」という考えに、私も共感してはいたのですが、初日の練習から試合形式をおこなうことは全く想像していませんでした。

20 分 3 本の試合、両チームの攻防が続きながら時間が経過していきました。「ここで少しでも得点に絡んで、新チームのレギュラー組に入りたい」、そんなことを頭の隅で考えていました。私のラグビー生活での最後の 1 年になるであろう、この年の最初の練習に、全力を注ぎたかったんだと思います。そして、試合終了 5 分前に事故は起きました。

I: 「なるほど。状況は練習試合した 3 回したやつが一番最後のところで？タックルにいったんかな？コンタクトになったん？」

S: 「まず僕らのチームがトライを取って、そこで一回プレーが止まって。トライ(得点)とったら、サッカーと同じでセンター(グランドの中心)からやり直すんですよ。その蹴りだしたボールをとったやつが僕にパスをして…僕ボールを持って攻め込んでいって、相手の

チームのプレイヤー~タックルを受けて、そのまもうつ伏せに倒れこんだんですよ」

I:「タックルを受けて、ボールを抱えたまま倒れこんだんや？」

S:「そうなる前にボールを活かしたいなと思ったんで、当たった拍子にポイって隣のプレイヤーにボールをパスしたんですよ」

I:「だからボールを持ってへんかったんや？」

S:「はい。試合自体は続いてて、バタっとうつ伏せに倒れこんで。試合が続いてたから立とうと思って、ふっと立った時に上からドーンと重たいものが倒れこんできて、その衝撃で首の骨がボキって。(中略)それで、めちゃくちゃ痛かったんで、とりあえず状況を確認したくて、周りに人がいなくなったんで、がばって上向いたらひゅっと体から感覚がなくなってって、地面に仰向けに空見上げたまま、全く体が動かない」

I:「動かへんかったん？」

S:「初めての感覚じゃないですか、首から上しか全く感覚がなくて。しかも、体を動かそうと思っても動かないんですよ。動くっていうのがわからないんですよ、なんかどこに手、足があるのか分からなくて、半生首状態ですかね」

今まで経験したことのない感覚に襲われ、自分の体に一体何が起きたのか全く見当がつきませんでした。

監督やコーチ、チームメイトが「大丈夫、大丈夫」と声を掛けてくれたんですが、そうは思えない周囲の顔を見て、より不安を覚えました。首の痛みは時間の経過に比例して増していき、全く動くことができないことに恐怖を感じていました。

S:「その状態でグラウンドに転がされてて、もうなんか痛みを通り越して怖かったというか、わけがわからないんですよ。確かに首の骨が折れたのは分かったんですが、そこからなんで手が動かへんのかなとか、普段やったら

ふっと体を起こせたのにそれが全く動なくて。でもそうなった瞬間、試合はずっと続いてたんですけど、あいつ立ってこうへんと、おかしいぞってことになって、試合が止まって。ほんでいろんな人がバーって集まってきて、大丈夫かってなって「体が全く動かないです」って話になって。多分コーチや監督もそんな状況になったら今までの経験の中で、いろんな話を聞いてきた中で、これはやばいことになってるんじゃないかってことでそこで、練習ストップで。すぐ 119 番しはったんかな、親にも連絡をしてはったような。その時はパニックってたので周りで何が起きているのかあまり分からなかった。でしばらくしてグラウンドに救急車が来て、担架に運び込まれたんですけど、担架で地面からふっと浮いた時自分の体が見えたんですけど、自分の体こうなっているんや、自分の体なのに変ですけど。今ちょっと感覚が戻ってきてて右腕とか左腕とか、わかるんですけど、その時は見てる手とか足が誰の手なのか、誰の足なのか、分からなかった」

「いつまでこの状態が続くんだ」、救急車が到着するまでの時間がとても長く感じました。ようやく救急車が到着して担架に乗せられた際に見た私の腕や脚は、それはあたかも他人の腕や脚のように思えたほど感覚が乖離していました。

そして、コーチから連絡を受けたとき、母親は昼食の準備をしていて、父親は床屋で散髪してもらっている最中でした。本来なら高校近辺で首の手術ができる医師のいる病院に運ばれる予定だったんですが、日曜ということで不在、次の搬送先が見つからずなかなか救急車が出発することができませんでした。連絡の末、京都市の伏見区にある第一赤十字病院で首の手術をおこなえることがわかり、ようやく高校のグラウンドを出ることができました。

S:「僕がグラントで事故に遭ってコーチから母の携帯に電話があったと思うねんけど」

H:「お昼すぎに電話があって、コーチから練習中に『周平が首を負傷しました、意識はあるけど、手足にしびれがある状態です。救急車を呼んだんですけど、搬送先がまだ決まらないので、決まり次第連絡します』っていう内容やって。『おそらく洛西シミズ（成章高校の近く）だと思う』ということやったので、その日は大阪に住んでいる祖父のところで生活していた長男が帰ってきていて、こういうことやからということで、私は洛西シミズに向けて走りだしたんやけど。駐車場に着くときにまた携帯が鳴って、まだ運転してる途中で出られなくて。留守録に『今、周平の救急車を追っかけてるんですけど、洛西シミズの前を通過した。行き先が決まり次第また連絡します』っていう連絡が入って。でしばらく待ってたら、部長さんから電話掛かってきて『行き先が第一日赤に決まった。書類上の処理が必要なので周平の生年月日を教えて欲しい』っていう…救急車の中から付き添いながら連絡してくださって」

S:「その時、父はどうしてたん？」

T:「ちょうど散髪屋に行行って、家に帰ろうと思ったら、母から電話があった今言ってたみたいなことが…あっその前にメールが入ってて。『周平が首をやったらしい。意識はあるけれども手足に麻痺がある。今後、後遺症のことが心配』っていうメールと思うわ」

H:「とりあえず、第一日赤にいらっしゃるってことをメールしたと思うわ。いくら電話しても出られへんかったんで。父が『第一日赤』っていうのを見たときに『周平は死んだな』って思った。すごい重症、日赤に運ばれるっていうのは父の中では重症やというっていうのがあって。これはもしかしたら、命に関わるんかもしれんって思ったんやっていうのは、あとで言ってたね」

T:「言ってた」

この事故があった「2002年11月17日」は、私もそうであったように、両親にとっても普段と何も変わらない、いつもの日曜日でした。

2 主治医からの宣告、手術を経て

病院に運ばれた当初、私の記憶は大きく錯綜していました。

I:「病院に着いてすぐ手術？」

S:「それがまた、偶然なんですけど、その日たまたま京都でもうひとり首やった人がいて、僕よりちょっと早くその人が運びこまれたんで」

I:「待たなあかんかったん？」

S:「8時間くらい首固定されたまま寝かされました。MRI撮ったり、担架で運ばれたり、あと着てたジャージをハサミで切られたような、救急車で運ばれた時は断片的な記憶しかなくて。目が覚めたら、MRI室に運び込まれてたり、また目が覚めたら寝かされてるベットの横にその日一緒に練習していたメンバーが心配して見舞いに来てくれたり。『大丈夫か?』みたいな。ちょっと話をしただけでまた寝てしまって。気が付いたら、そこから完全に記憶が飛んでて、何日かあとの事しか憶えていないですね」

I:「なるほど、手術室を出てICUとかに入ってたかの記憶はもうないわけや？」

S:「親とかは喋ってたとか言うてたんですけど。喋ってた記憶が全くなくて」

それは現在でも、ここに書き出したこと以上のことはほとんど思い出すことはできません。

また、手術後の集中治療室での記憶も断片的なものしか残っていませんでした。中学の同期が見舞いに来てくれたことも、私は事故の翌日だと認識していたんですが、既に数週間も経っていたことを後に両親から聞くこととなりました。はっきりと覚えている「病院での記憶」の

最初の部分は、集中治療室を出る前日でした。

そして、両親がともに病院に到着した後、手術を担当する医師から「息子の障害」について話がありました。数枚のMRIの写真を見ながら、淡々と「息子の障害」の状態を説明していく医師。しかし、その話の内容がもつ重大性や、今後、障害を持ちながら生きていく上での「社会的な」困難について触れられることはありませんでした。

S:「その主治医からの話って後からどんなやっていたかって聞いたけど、その話を聞いたときってどうやった？」

H:「とりあえずね、『第四頸椎脱臼、第五頸椎骨折、首から下は完全麻痺』『緊急で首の固定手術をするけれども、回復の可能性は<文献上7%>、手術をしたらできるだけ早くリハビリを始めて、3ヶ月以内にリハビリ専門病院に転院して、そこで社会復帰に向けてのリハビリを』って言う話がたんたんと…ホンマにたんたんと。今から思えば、そうするしかなかったんやろうと思うねんけど、当時は『あなた（主治医）が私ら親に伝えてることは、この子（周平）の一生にとって重大なことなんやけど、重大性を帯びてない話し方をしはるから、理解できない。この人の人生には取り返しの付かないことなんやけど』って」

S:「一つ一つ重く受け止めてたら、これから手術する精神力とかがなくなって」

H:「常にそういう人を担当してる脊髄専門の先生やから、こういう怪我をしたらこうなるのは周知の事実やったりするんやろうけど、やっぱり家族にとったらそんなこと2回もあることではないので、あまりにもたんたんとしてる感じがしんどかった。運動神経も、知覚神経も、自律神経もみんな傷ついてるからって。母の記憶では、父が途中で気分悪くなって『うっ』ってならはって。ほな『大丈夫ですか？気持ち悪かったら他の人に聞いてもらいますからいいですよ』って言われて、そ

れもそれで。事が大きすぎて受け止められてなかったって、後から思うとね。それが事実として重みを帯びて、客観的にもものすごいと言われてるってわかってても、その重大性をホンマにはわかりきらんまま、話を聞いたような気がする。監督らは泣き出すし、逆に私らがなだめてた。『先生らの責任ちゃうし』」

NPO 法人日本せきずい基金理事長大濱眞氏は、第2回日本再生医療学会総会特別シンポジウムにて「人生の途上の一瞬の事故がもたらしたものの、それは人間の『社会的な死』に等しいのが現実である」と述べています。

ある日の突然の事故によって、食事や着替えなど、それまで自分一人でおこなっていたことを誰かに頼まなければならない現実には「社会的な死」を与えられたことと等しいことで、それは家族までも介護の生活に取り込まれてしまう現実でもあるのです。医師は家族に「事実」を伝えるという医師として当然の役割を果たしましたが、そのことを家族やラグビー部の監督、コーチは正面から受け止めることができませんでした。それは、その場にいる誰にとっても、受け入れ難い事実でした。

それでも「遍照金剛言う」 ことにします

第2回

福祉の概念・言葉の解釈について②

「自立を支援する-1-」

三野 宏治

はじめに

精神（保健）福祉現場で支援者として働き疑問を持った概念や研究を行う中で気になった言葉を取り上げ書いている。前回は「居場所」という言葉とその使われ方について述べた。今回は「自立を支援する」というフレーズについて論考する。

「その人の自立を支援する」というフレーズがある。支援や援助あるいは支援者に依存するのではなく、当事者が自らの力で生活できるように関わるというのが趣旨であろう。その考え方は理解できるし方向性も間違っただけのものでは無いと思う。ただ、支実際の支援場面を例にとって「自立」と「支援」の関係を考えると、未だ整理できていないことが多いことに気づく。それゆえ「自立」と「支援」という概念がなじまないと感じる。筆者の感覚では「自立」とは「支援」のない状況であり結果の状態である。ただ社会福祉、とりわけ障害者福祉の枠組みでは「自立」を目指すためになんらかの「支援」が継続していることは多い。また、現状では「自立」できていないが条件さえ満たせば「自立」が可能なので継続的支援が必要であり、その条件を満たすために「支援」が必要であるという。

そこで本稿は社会福祉のフレームにおいて使われる「自立支援」がどのようなものであるかについて述べる。論を進めるにあたって「IL 運動（自立生活運動）」と「自立」の関係を、立岩真也の記述を援用しながら述べ、その後脱施設の文脈から「自立」と支援の関係を論考する。まず、知的障害者の入所施設の設立から地域生活移行という流れを政策的な面から概観する。そして知的障害者の親たちが考える入所施設と支援についてその言説を紹介し意味を分析する。同時に、知的障害者の当事者団体である「ピープルファースト」の主張を紹介することで、「自立」と「支援」の関係を考察したい。

自立とは何か

障害者を取り巻く「自立」と「支援」の関係を考える上で、まず「自立」概念とは如何なるものかについて歴史的変遷と共に紹介する。社会福祉学において「自立」概念は障害者運動の影響を受け展開・整理されている。この障害者運動と「自立」概念について立岩真也は『応用倫理学事典』の中で次のように述べている。

障害者運動の展開を受けて社会福祉学が整理したところでは、自立に少なくとも3つの意味があるとき

れる。複数の意味をもつこの言葉が、そのいずれを意味するのかがよくわからないように、あるいは複数の意味を同時にもち曖昧な語として使われていることの意味が重要である。」(立岩 2008)

立岩は三つの自立を①「経済的自立」・「職業自立」②「身辺自立」・「日常生活動作」の自立(「ADL自立」)、③「①、②のいずれでもない自立」であるとしている。「経済的自立」・「職業自立」とは経済的に他人に依存せずに暮らすこと・職業に就くことである。立岩は前掲した著作の中で「経済的自立」、「職業自立」と支援の関係について以下のように述べている。

公的扶助 や福祉サービスの目標は、この意味での自立が達成され、社会的支援自体が不要になることと

される。例えば生活保護の目的は「自立助長」にあると言われる。この時、この語は古典的な意味での「自助」(self-help) と互換的である。この意味の自立・自助自体に第一次的な価値を付

与し、他をそれに従属させることがなされてきた。近代とその時代の社会事業の底流にそれは存在し続けてきた。

(立岩 2008)

立岩の指摘の通り、福祉サービスの目標の一つは「経済的自立」を支援することである。

そして、そのための方法として公的扶助等の仕組みがあるのだが、公的扶助等の仕組みから外れる人はいる。また仕組みそのものに問題がないわけでもない。公的扶助他の制度上の理由や本人・支援者の志向などから、「経済的・職業的自立」概念だけでは自立できない/しない人がいた。そこで、二つ目に挙げた「身辺自立」、「日常生活動作」の自立(「ADL自立」)が登場する。「身辺自立」はリハビリテーションで目指されることが多い。これらの自立の概念と支援の接点は、例えば、それぞれ「公的扶助」や「リハビリテーション」であるのだがそれでもなお多くの「自立」できない/しない人たちがいる。そこで提唱されたのが第三の自立である。さて、ここまででいえることは、その人の様子や状況は何も変わっていないにもかかわらず、新たな「自立」概念が出来ることによって「自立」できる／可能な人になってしまうことである。この規定されてしまった「自立」については後述する。次に第三の自立とはどういったものか。これは一般に「自己決定的自立」と表現される。ただ前掲の著作において立岩は「自己決定的自立」という表現を採用しなかった。その理由として、「自立生活運動」の目指したものが「自立」概念形成のためではなかったからだ。

(立岩 2009)

これらのいずれでもない自立が、1970 年代に始まる障害者の「自立生活運動」で主張される。それは自己決定権の行使として一般に捉えられる。すなわち、介助など 種々の手助けが必要であればそれを利用しながら、自らの人生や生活のあり方を自らによって決定し、自らが望む生活目標や生活様式を選択して生きることを自立とする。

ただ、事実に即するなら、「自立生活」とは、親元や施設から離れ、ひとまずは一人で暮らすこと自体を指した。そのために「自立生活センター」を設立し、「自立生活プログラム」を提供し、生活を実際に可能にする介助・介護システムの確立を目指した。それを自己決定する生活への移行と言うことはできる。しかし、彼らが具体的な生活の仕方をもって自立（生活）と呼び、自己決定、自律(autonomy)、(としての自立)を最初の唯一の原則とすることに必ずしも同意しなかったことは示唆的である。従属と保護から逃れて暮らすことと、自己決定を達成すべき目標とする生活を送ること、この微妙な差異は重要である。彼らはその意義を積極的に規定せず、「正しい」生活を示そうとはしない。普通の状態を普通に実現することをあくまで要求し、同時に、普通が普通とされないことの意味を問うた。たいていの生活に確たる目標などないことを脇におき、ことが「福祉」となると、好ましく正しい状態として例えば「自立」を語ってしまうことの奇妙さの自覚がここにはある。その運動は、施設を増やすのが福祉であり、家族による保護を基本的に望ましいものとする社会にあって、それと異なることを実現しようとした点で画期的だったが、もう一つ受け取るべきは、自立だの自己決定だのをなにかたいそうなものにまつりあげないその姿勢の意味である。

「自立」と「支援」の関係を考えるとき、これらの立岩の指摘は重要である。福祉の文脈において普通の生活という時、障害者の普通は健常者のそれと違うことがある。支援を受けること自体が健常者の生活では稀であることに加えて、その人が望む支援を受けるまでの手続きの中に普通ではないことが数多くある。健常者が生活を営むなかで「自己決定」を殊更意識することはないし、ましてや誰かに迫られることはない。生活をする中で何かを選ぶことはあるが、そのことだけを殊更取り出して意味を付与することはしないし、ましてや「自立」という概念規定の道具にはされない。しかし、障害者の「自立」をいうときは「自己決定」が持ち出され、規定され要求される。それはなぜか。「自立生活運動」では入所施設を出て地域で暮らすことを目指した。では「自立」を考えると、地域で暮らすことにどのような意味があるのか。

現在、知的障害者の地域生活移行を支援するという名目で、入所施設から地域へ住処を移す試みが政策レベルで進められている。次に知的障害者の地域生活移行を例にあげ、入所施設から地域生活移行に至った過程から「自立」と「支援」の関係について考える。

入所施設における支援から地域生活支援へ

日本における知的障害者大規模入所施設建設の始まりは、1965 年に「社会開発懇談会」の中間報告が大規模コロニーの設置推進策を打ち出したことによる。「社会開発懇談会」は首相の諮問機関であり、同じ年に

厚生省コロニー座談会が「国、自治体に一ブロック程度コロニーを設立する」という意見書を示し国立コロニーや各都道府県単位の大規模入所施設建設が始まった。ただ、入所施設設置が突然始まったのではなく、障害を持つその人の親たちの要望や運動が背景にあった。

まず入所施設設置に先立ち、精神薄弱児愛護協会が1949年に再建（55年精神薄弱者愛護協会と改称）され、1949年に特殊教育連盟（53年全日本特殊教育連盟と改称）が発足している。1952年に現在の「手をつなぐ育成会」の前身である精神薄弱児育成会が結成されている。精神薄弱児育成会の結成の目的は「わが子を保護し、養育する場としての施設の設立」を国に対して要望するためであった。1953年には精神薄弱児育成会の要望に答える形で精神薄弱児対策基本要綱（次官会議決定）が成立している¹⁾。

1960年には精神薄弱者福祉法が制定され、成人した知的障害者福祉施策が始まる。1970年に心身障害者対策基本法ができ、翌年に「社会福祉施設整備緊急5ヵ年計画」が策定され入所施設の量的な拡大が図られる。1977年には共同作業所全国連絡会発足が発足し、1981年の国際障害者年以降ノーマライゼーションという言葉が知られるようになり、知的障害者の権利意識が高まっていく。このような経緯を経て大規模入所施設（コロニー）建設が始まった。入所施設の量的拡大は1977年に厚生省が「精神薄弱者通所援護事業補助要綱」を策定し地域生活支援の方向性を打ち出すまで続く。

1987年には国民年金法改正され障害基礎年金が新設された²⁾。地域移行と障害基礎年

金の創設に関する経緯については田島良昭（1999）が言及している。田島良昭は2000年代に宮城県の福祉事業団理事長を務めているが、それ以前には長崎県内で障害者を支える地域ネットワークを作った人物でもある。田島は「年金プラスいくばくかの賃金が地域の最低賃金を超える収入になればそれで生活ができるようになる。そういった考えで障害年金についての法改正を厚生省に働きかけた。そして実現したが施設政策が大きく変化することはなかった」と述べている。（田島1999）

1996年にはグループホームの公営住宅開設が可能となり、2000年にはグループホームの就労要件が撤廃され、ホームヘルプサービス事業の対象を重度者から中軽度者に拡充されなどの支援策がとられた。2002年12月生活支援分野施策の施設サービスの再構築を行い、施設等から地域生活への移行推進として入所者の地域生活移行の促進と「入所施設は、真に必要なものに限定する」という閣議決定がなされた。この「脱施設化」という方向性には、多くのメディアや福祉実践者、研究者がノーマライゼーションの具現化であると好意的な反応を示した。

2003年の「障害者基本計画」では入所施設の建設抑制を明言し入所施設整備の数値目標設定を取りやめた。また同年3月、厚生労働省の「国立コロニー独立行政法人化検討委員会」は、国が管理する唯一の重度知的障害者入所施設「国立コロニーのぞみの園」（群馬県高崎市）の511人の入所者を段階的に地域のグループホームなどへ移すべきだとの中間意見をまとめ、大規模入所施設から地域生活へ生活の場を移す政策動向が具体的な動きとして現れる。

2006年6月施行の障害者自立支援法を受け地域移行がすすむと、地域での生活＝グループホーム・ケアホーム入居という方策が強調される。もちろんホームヘルプなどを利用して一人暮らしをするという方法もあり得る筈だが、都道府県の障害担当課は「グループホーム設置が急務である」とした。また新聞などのメディアも地域での生活＝グループホームという前提のもと報道を行った。このような潮流は現在でも変わっておらず、筆者が2011年3月まで所属した社会福祉法人においても、2年の間でおよそ20人分グループホーム・ケアホームが開設されている³。入所施設を出た人たちが暮らす場所として、グループホーム・ケアホームが想定されているが、グループホーム・ケアホームは入所施設ではないのだろうか。国はそう判断していない。また入所施設での生活について否定的な親たちがグループホーム・ケアホームを望むことも少なくない。次にグループホーム・ケアホームをめぐる親・家族の主張と当事者の考えを紹介する。

「手厚い支援が必要だ」という主張と「必要なものは手伝いだ」という主張

2000年以降の「脱施設化」という政策転換のなか、2002年に宮城県船形コロニー解体が宣言された。その際、多くの家族・親が不安や反対を表明したと新聞が伝えている。「いいことだと思うが、今まで施設に頼ってきているので不安だ」「いつ実現できるかわからない目標で、入所希望の子供が入れなくなる」「受け皿となるグループホームが少ないのに大丈夫か」「地域生活になじめない人もいる。そういう人のために施設を

続けてほしい」⁴。これら親たちの不安通りに、地域移行に反対する親の説得に苦労する施設も多いとの報道もある。

他方、2003年5月に「全日本手をつなぐ育成会」と関係福祉施設で作る「日本知的障害者福祉協会」が「戻っておいで」と呼びかけるメッセージを表明した際、育成会の室崎富恵副理事長は「30年以上にわたって施設で生活せざるを得なかった入所者に謝罪したい。ユートピアのようなものができることを期待していたが、障害者の意思は無視され、親の気持ちで入所させただけだった。地域移行によって家族に負担をかけてはいけませんが、本人が生き方を選択できるような場所を与えてあげることが大切」との見解を示した⁵。ただ、室崎富恵副理事長も「脱施設」という方向性については認めているが、支援が少なくなることに賛成とまでは言っていない。また多くの親たちは、地域で生活するためには手厚い支援が必要だという考えを持っている。親多くは「親亡き後」のことを考え入所施設建設を要望し子どもを入所させた。家族・親にとってこれらの主張は真っ当なものであろう。松本は、子どもを入所施設に入れるに至った家族の手紙を次のように紹介している。

2011年頂いた年賀状に10年ぐらい前、娘を三重県の入所施設に入れた母親からのものがある。その年賀

状には『『地域の中へ』と国のスローガンは若かりし頃追い求めたものに表向き舵をとりつつありますが、

受け皿のおぼつかないまま、そう言われても...という思いです。(原文のまま)」とその思いが書かれて

いた。このお母さんは特に熱心に「地域で生きる」ことを自閉症で知的障がいの娘さんと一生懸命運動されていた。体力に自信がなくなったことと自身の親の介護もあり実家のある三重の入所施設に娘さんを入れられた方だ。(松本 2010)

知的障害のある当事者達の組織「ピープルファースト」の参加者たちは、手厚い支援が必要という考えから「入所施設は良いとは思わないが、支援は必要」「自立生活できないだろうがグループホーム・ケアホームなら良い」という家族・親は多いと言う。グループホーム・ケアホームの生活を支持する理由は、自立生活に比べ手厚い支援が期待できるからであろう。ただ、国はグループホーム・ケアホームは施設ではなく住処であるとしている。その根拠の一つとして平成 17 年に行われた「知的障害児（者）基礎調査結果の概要」を紹介する。この調査の目的は「在宅知的障害児（者）の生活の実状とニーズを正しく把握し、今後における知的障害児（者）福祉行政の企画・推進の基礎資料を得ることを目的とした」とある。調査対象者はグループホーム、通勤寮、福祉ホーム利用者を対象としている。また社会福祉施設入所者（知的障害児施設、自閉症児施設、重症心身障害児施設、知的障害者更生施設（入所）、知的障害者授産施設（入所）は対象とされていない。つまり、グループホーム、通勤寮、福祉ホーム利用者は在宅の障害者であるという認識である。この調査での「将来の生活の場の希望」の項目では、「親と暮らしたい」「施設」等が減少しているのに対し、「ひとりで」「グループホーム」が増えている。」と明言してい

ることから、国はグループホームが入所施設ではないという認識を持っているといえる。

国は施設が強制的な支援でありノーマライゼーション志向とその考えを一つにしない点で「真に必要なもの以外は支援策としない」とした。そして、グループホーム・ケアホームについては地域での住処であり、本人たちが選んで生活することが可能な支援を提供できるものであると考えている。また、親たちも支援が必要であるという点でグループホーム・ケアホームに利用に賛成する。自ら選べる住処やそこに付随する「支援」は良いということだろう。

しかし、ピープルファーストはグループホームやケアホームを施設ではなく住処であるとは考えていないようだ。ピープルファースト東京の佐々木信行は「親と暮らしている知的しょうがいのある仲間の自立生活についてその家族や親に話をすると「施設のほうが安心だ」と言われることが少ない」と次のように述べている。

自立生活は、ヘルパーなどの適切な支援を利用すれば、誰でも出来るんです。自分自身の経験からそう思います。自分自身も自立生活なんか出来るとは思いませんでした。親にずっと反対されていました。「自立をするなら親子の縁を切るぞ」とまで言われました。PF（ピープルファースト＊筆者注）の仲間は、どんどん自立をしているのに、なんで自分は自立ができないんだろうと悩んでしまうときもありました。何とか自立をしたいと、親に頼んでもダメでした。自立する前は、PF の仲間からは「おまえは自立なんかできない」とまで言われたり、自分もあきらめていたところもありました。(佐々木 2009)

同じような経験をピープルファースト東久留米の小田島栄一も持つ。

グループホームは、地域で 1 人暮らしから始めるのに不安な仲間が利用しています。

〔……〕

しかし、共同生活もあるので、決りもあり、1 人暮らしにくらべると他の人にあわせて生活しなければ

ならない部分もあります。

〔……〕

世話人やヘルパーに聞いてみるといいですよ。「あなたはここ（グループホーム）に一生住みたいす

か」と。グループホームでも、1 人ひとりにヘルパーを入れて生活している地域もありますが、グループ

ホームで自身がついた仲間や、共同生活が難しい仲間は、ヘルパーを入れて 1 人暮らしをしていきま

しょう。（小田島 2007）

小田島は、「入所経験は小学 6 年生から。人生の多くを施設で過ごした。アパートでの自立生活開始は 6 年前、50 歳を超えていた。入りたくなかった。もっと若いときに出ていけば——。その怒りや悲しみが原点だ。」「施設ではまわりが見えていない。だから社会に出て、自分で決めて自分でやってみたかった。入所施設はいらない。本当は地域で楽しく自立していくことがよい。」と記している。（小田島 2003）彼らは自立生活について説得する相手は家族・親であるとしている。ただ、家族・親と話す「自立生活はダメだがグループホーム・ケアホ

ームであればよい」との反応が少なからずあることも、グループホーム・ケアホームという選択肢の必要性を示すものだという

6。

しかし問題なのはグループホーム・ケアホームが施設か否かではない。グループホーム・ケアホームでなされる支援の何が親たちを安心させ、ピープルファーストを始めとする当事者を困惑させるのかである。換言すると「施設から脱すること」は施設の何から脱することか問いであり、この問いは「自立」と「支援」の関係を考える上で重要だ。ピープルファーストが目指すのは、単に暮らす場所を施設から地域移すことではない。ピープルファースト他の当事者たちが保護や庇護、従属から逃れ生活することを希望している。対して親たちが願っていた/願っているのは手厚い支援である。親たちが入所施設に対して求めたものはまさにこの手厚い支援であった。入所施設では虐待や処遇の悪さに加えて、本人たちの意向があまりにも無視されていたことが問題視された。それは「正しく選べないから、支援者が選ぶ」ということであり、親たちはその強制的な部分を含めた支援を求めたとも言えなくない。入所施設では支援者のやり方と当事者の希望する方法や結論には隔たりがあり、支援者の理屈だけで決定され行われることが問題であった。そこで施設入所での支援方法から地域生活支援へと支援のやり方が変わった。しかし、支援の方法や手続きが変わってもその性質が変化したわけではない。

福祉や支援が保護や庇護や管理といった性質を持つことを障害者の親は知っている。だからグループホームやケアホームの利用

を一人暮らしよりも支持する。福祉や支援が管理を生むことをピープルファーストに関わる人たちは知っている。だから、グループホームやケアホームの利用を勧めない。¹⁾「自立生活運動」での当事者たちの主張や行動と知的障害者の地域生活のやり方をめぐるポリティクスには違いがある。それは「できること・できないこと」から「決められること・決められないこと」へ論点が変わっていることでもある。「自己決定的自立」に関する問題でもある。次にこの論点の違いについて述べる。

「できること・できないこと」から「決められること・決められないこと」

「自立生活運動」で障害のあるその人たちは介助者の手を借りて生活をした。それはまさしく「手を借りて」であったから上手くいったといえる。様々な問題はあった／あるとはいえ、概ね障害のあるその人達が判断し決めたことを介助者たちは代行した。だから「自己決定的」が「自立」を成立させる要件となった。身体障害者が地域で暮らす場合、衝突は起り時にその衝突は介助者・支援者との場合もある。ただ、それらについては障害のある本人たちではなく社会の側が悪いと言い張ることはできる。そして、たいがいそれは正しいともいえる。他方、知的障害者の場合はどうか。知的障害の人の場合、衝突が「社会のルール」との接触の問題として出現することがある。知的障害者の行動を起因とした衝突が「社会のルール」との接触の問題となった場合、それが社会の側が悪いといえるだろうか。また、その行動を指導し矯正しようとする行為（支援）が「自己決定」を阻害したも

のといえるだろうか。

例えば、知的障害者のある人が道の真ん中で寝そべっていたり、横断歩道でしゃがみこみ動かなかったらどうか。ある行動にその人なりの理由があったとしても、「社会のルール」と衝突してしまう時、その人の行動は正しくないとされる。介助者や支援者が何度言ってもその行動が変容しない場合、支援者は「出来ない」人という判断を下すことがある。そして支援が始まる。

ただ、その「出来ない」とされた人の支援の依頼内容が支援者にとって理解しにくいものであった場合、単に「出来ない」人だけではなく（部分的であれ）「決められない」人になることがありえる。例えば「出来ない」人が買い物を頼む。その依頼内容が「有り金全部で馬券を買ってきてくれ」というものであったらどうか。同様の依頼が続くことで「出来ない」人から正しく「決められない」人になってしまうおそれはあるだろう。

介助者・支援者に者を依頼する場合、一度「決められない」人とされた人は「決められる」人と比べて自らの要求を通すことは難しいだろう。支援は「決められない」人の要望どおりに動くのではなく、正しく「決められる」様に支援する方向に向かう。ただここで注意しなければいけないのは「決められない」と判断した者は支援者であることと、正しさを規定するのも支援者である点だ。支援者支援観や倫理観が支援に入り込むことはありえる。障害のあるその人の依頼をそのまま受け入れることが困難である場合はあるだろう。また、それは「決めることの出来ない」人への支援の場合に限らない。ただ当事者が納得しない「社

会のルール」に添った形の「自己決定」や支援者の援助観や倫理観が反映された「自己決定」を繰り返すことは、当人にとって望ましいものであろうか⁸⁾。「社会のルール」を守ることは必要であるとしても、規範に添った行動を取らすために「自己決定」という方法が手続きとして利用されてはいないだろうか。

支援はその人の手になりえるか？

前章で支援や福祉は専門家の理屈で成り立っている部分がある述べた。たとえ当事者の希望を反映させた支援を作り・展開を目指し実践した場合でもそうだ。支援が当事者の手足の様に働くことは難しい。寺本晃久は次のように述べる。

たとえば、コーヒーをとにかくたくさん作って飲むことがあるとする。問題解決型の観点からすると「こ

だわりでコーヒーばかり飲んでいる。たくさん飲むと健康に悪いから、止めさせるべきだ」となり、行為を制限・禁止するか、様々な方法でこだわりを無くすような取り組みをするだろう。

「手足」の見方では、「それは本人が好きでやっているから、介助者は何もしない。むしろコーヒー作りを手伝う。それで健康を損なっても本人のせいだ」ということになる。ある人は、コーヒーや佐藤の取りすぎたときの害についてていねいに話を使用とするかもしれない。けれども言葉で説明したとしても、それは将来起こりうる結果についてのもので、現在の状態についてのものでないから、それを理解することは難しいだろう。また「説明」という中立な印象ではあるが、その説明は何を目的になされるのだろうか。説明しても行為をやめないとすれば、

そのことをどう考えるのだろうか。(寺本 2008)

寺本が述べるようなことは少なくないだろう。このよくある出来事とそこで立ち止まり考える支援者の姿勢は「自立」と「支援」の関係を考える場合に重要だ。支援者は支援できない希望や要望もあり得ると考えるからだ。要望・依頼を受けないことを否定しているのではない。注目すべきことは依頼を受けるか否かを判断する際、支援者の専門性や福祉的配慮が入り込むことであり、その点に自覚的であるか否かが問題なのだ。福祉の枠組みにおいて、当事者に代わって誰かが何かを行う場合（誰かが専門家の場合特に）、代行者の倫理や行動規範によって当事者の思い通りにならないことはある。

「自立生活運動」では「自己決定」する生活を目的としなかったのは、「自己決定」が出来る/出来ないという区分けを生み出すことを知っていたからだ。その区別は正しい状態を規定することであり正しくない状態には支援がなされる。その区別や支援は入所を脱することで逃れようとしたものであった。仮に自分で決めても実行できないければ「自己決定」を行ったとはいえないのだが、福祉の枠組においてはそれらも「自己決定」である言われることがあり「自立」としてとされる。また、支援者の判断や価値観が「決められる・決められない」に深く関係していることと、その支援者の判断は親の望みや心配や「社会のルール」などによって影響され時には強化される。「自立」を「支援」にはこれらの事柄が含まれておりこれまで上手く説明がなされていない。

次回も「自立支援」「自己決定を支援する」ことについて述べる。具体的には知的障害のある人、精神障害のある人と支援者の関係性構築からみた「自己決定支援」の落とし穴について考察したい。

注

- 1 要綱の項目には、知的障害者を「収容している少年院の拡充強化」、不良行為を伴う知的障害児を「国立救護員に収容設備を整備充実」、知的障害児の「医療のための精神病院の増床」、遺伝性の知的障害者に対する「優生手術の実施促進」という差別的な内容も含まれていた。(井上・岡田 2007)
- 2 「新しい障害者基本計画に関する懇談会（第3回）」議事録 平成14年8月6日（火）
参考人として出席した、東京都さくら会の知的障害当事者阿部氏は「年金をもらっていない人はどうしたらいいんでしょうか。そこをひとつなるべく多くもらえるようにみなさんのためにきょうはしゃべりに来たのですけれども、年金をもらっていない人は何とかしてやりたいのだけれども、一人住まいしたくてもできません。やっと生活寮に入るのかつかつかないというぐらいの感じです。だから、そういう人たちは貯金もできません。」と自立生活するための年金の重要性を訴えている。
- 3 グループホームとケアホームの違い:同じ居住支援であるが、グループホームが自立支援法の訓練給付であるのに対し、ケアホームは介護給付である。具体的な支援内容は、グループホームが地域で共同生活を営む障害者に、住居において共同生活を営むための相談や日常生活上の援助を行うのに対し、ケアホームは、障害者が共同生活している住居において、主に夜間の入

浴・排泄・食事の介護を行う。一般的に、ケアホームでのサービス提供がこれに当たり、グループホームとは異なる。

- 4 2002年12月16日付けの毎日新聞の記事より。
この他にも同様の訴えが報道されている。(2002年11月25日朝日新聞「「親なき後」に、やはり施設を(声)」。2002年12月14日毎日新聞「[みんなの広場] 障害者入所施設の充実も願う」
- 5 室崎富恵副理事長はかつて国立コロニー設立の運動にかかわり入所施設の量的拡大を進めた立場であった。
- 6 2002年12月16日付けの毎日新聞の記事より。
この他にも同様の訴えが報道されている。(2002年11月25日朝日新聞「「親なき後」に、やはり施設を(声)」。2002年12月14日毎日新聞「[みんなの広場] 障害者入所施設の充実も願う」
- 7 同じように支援者も福祉や支援の持つ性質について感じている。入所施設の職員である藤内昌信は、「支援者も見守りが本人にとって「監視」となっていることを意識する必要がある」(藤内 2009)といい、尾中文哉は「「施設を出た」にも拘らず、施設にいたときと類似した生活になってしまう危険である。この可能性は、「ケア付き住宅」に住む場合でも、介助者を自ら集めて一般住宅に住む場合ですら(例えば、福祉の配慮を行き渡らせるヘルパーに頼ってしまうようになれば、定員一名の施設となりかねない)、存在する」(尾中 1995)と述べている。
- 8 支援関係と自己決定の関係については次回も少し述べる。

引用参考文献

- 安積 純子・尾中 文哉・岡原 正幸・立岩 真也 1995 『生の技法—家と施設を出て暮らす障害者の社会学 増補・改訂版』, 藤原書店
- 井上 照美 岡田 進一 2007 「知的障害者入所更生施設の歴史的課題の検討—知的障害者の「地域移行」に焦点を当てて—」『生活科学研究雑誌』vol6:pp.209-223 大阪市立大学大学院生活科学研究科・生活科学部『生活科学研究誌』編集委員会 厚生省 「第 18 回社会保障審議会障害部会議事録」(2004 年 10 月 12 日開催) <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/10/txt/s1012-1.txt> (2011 年 11 月 1 日アクセス)
- 厚生省障害保健福祉部 「平成 12 年全国厚生関係部局長会議資料(障害保健福祉部)」 厚生労働省 HP より http://www1.mhlw.go.jp/topics/h12-kyoku_2/index.html#syogai-h (2011 年 11 月 1 日アクセス)
- 厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部 企画課 HP 「平成 17 年度知的障害児(者)基礎調査結果の概要」 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/titek1/index.html> (2011 年 11 月 1 日アクセス)
- 厚生労働省 「新しい障害者基本計画に関する懇談会 議事録」
- 松本 和子 2010 「地域移行は良い支援か」『平成 22 年度財団法人日本科学協会笹川研究助成 障害者の地域生活移行に関する問題点の整理および支援方法についての研究』社会福祉法人心生会 障害者地域生活移行研究チーム pp12-16
- 大塚 晃 「施設から地域へ—社会福祉基礎構造改革、障害者プラン、支援費制度にみる国の動き」『季刊 福祉労働』99,pp31-38, 現代書館
- 定藤 邦子 「障害者自立生活運動—大阪を事例として—」第 1 回 Body and Society 発表 レジュメ <http://www.livingroom.ne.jp/e/0403sk.htm> (2011 年 11 月 1 日アクセス)
- 佐々木 信行 2009 「知的しょうがい者の立場と介護派遣事業所の代表者の立場とは」『季刊 福祉労働』124,pp66-73, 現代書館
- 立岩 真也 2008 「自立支援」『応用倫理事典』丸善 <http://www.arsvi.com/ts2000/2007046.htm> (2011 年 11 月 1 日アクセス)
- 田島 良昭 編 1999 『普通の場所でふつうの暮らしを—コロニー雲仙の挑戦①くらす篇』 ぶどう社
- 寺本 晃久 岡部 耕典 末永 弘 岩橋 誠治 2008 『良い支援?—知的障害/自閉の人たちの自立生活と支援』生活書院
- 特定非営利活動法法人 ピープルファースト東久留米 2007 『知的障害者が入所施設ではなく地域で暮らすための本』生活書院
- 東京都社会福祉協議会 2004 『障害をもつ人の地域生活移行支援事例集—身体・知的障害者福祉と精神保健福祉における実践と提言』東京都社会福祉協議会
- 藤内 昌信 2009 「知的障害者の地域支援の立場から」『季刊 福祉労働』124 pp60-65, 現代書館
- Ratzka, Adolf D. 1991 *Independent Living and Attendant Care in Sweden*=1991 河東田博・小関 ダール 瑞穂訳, 『スウェーデンにおける自立生活とパーソナル・アシスタンス—当事者管理の論理』, 現代書館
- Worrell, Bill 1988 *Advice for Advisers, People First of Canada*=1996 河東田博訳, 『ピープル・ファースト: 支援者のための手引き—当事者活動の支援と当事者参加・参画推進のために』, 現代書館

「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い ～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～



(2)

山本菜穂子

今回は、「青い森のほほえみプロデュース」の中身ができるまで、その産みの苦しみの話からしようと思います。前回、事業提案した話をしました。ベンチャーという仕組みで、知事がOKしたら提案した職員が自らその事業を実施すると。大きな流れはそうなのですが、でも、事はそこまで単純ではなく。実は最初の知事プレゼンで認められると、そこから次は財政課による細かい予算のチェックが入ります。当然、事業の詳細が固まっていなければ予算は組めないですよ。でも、この取組、前例がなくて何かを真似して作るというわけにいかないし。予算がつくかどうか全くわからないうちに講師の依頼もちょっと気が引けるし。……ブツブツ……そう、この事業の詳細が確定したのは実は知事プレゼンが終わって、その後数ヶ月かけて、財政課と予算を詰めながらの同時進行だったのです。3歩進んで2歩下がりながら……

＜私の虐待対応原体験 私の持っていた危機感＞

「ほほえみ」などというなんとなくつかみ所のない、甘いイメージの

ことばを使っているの、何だか気楽な思いつきを気楽にやっていたように思われるかもしれません。でも私、結構危機感を持ってこの取組をやりたいと思っていたのです。

児童虐待の防止等に関する法律が施行される何年も前、アセスメントの整備などなかったまだ手探りの頃。当時児童福祉司だった私が、通告により虐待を受けた子どもの保護に向かったとき（当時はまだ複数体制で面接するという仕組みもなく）、学校で面接した小学校中学年の少女は「今自分が児童相談所に行けば、両親を裏切ることになるから行かない」と言いました。でも体には新旧入り交じった傷や痣とタバコを押しつけられた火傷の跡。どうしてもこの子を今は家に帰せないと思いました。彼女は「もういい子になると約束したから大丈夫」と執拗に繰り返します。

その場の1対1は、大人と子どもではなく、児童相談所職員と小学生でもなく、そんな社会的な立場や肩書きなど吹き飛ばした人間対人間の対峙だったと今もそんな感覚で思い出されます。「私ね、お父さんとお母

さんもあなたを傷つけないんだと思うの、本当は。あなたが児童相談所に来てくれたら、お父さんとお母さんにも児童相談所に来てもらってお話をする事ができる。お父さんとお母さんを助けるためにもあなたに児童相談所に来て欲しい。」と伝えました。それは、その場で私が彼女の話の聞きながら本気で切実に思ったことでした。彼女はそのことばに飛びつくように「じゃあ、一緒に行く」と言いました。

私は、約束を守りたいと思いました。人間対人間としての想いを感じていましたから。両親との面接で、あなた達の行いは虐待であると伝えた後は、困惑し怒りもあらわにする両親に「やり方を変えてほしい。そのために協力したい。敵じゃない、味方になりたい。」と伝え続けました。両親も苦しい生育歴を背負っていました。数週、数ヶ月かけて徐々にそんな話を聞かせてもらえようになりました。

児童養護施設に入所することになった彼女は、両親から捨てられてしまう恐怖にとまどい、両親の下へ戻せと激しくぶつかってくることを繰り返しながら徐々に自分に向き合えるようになりました。

そして、面会、外出、外泊を体験しながら数年後、彼女を両親のもとに戻すことにしました。すぐに虐待関係が再燃するとは考えなかったものの、完全に安心だったから戻したわけではありませんでした。母は彼女の理解者になりましたが、父との

関係は難しいものでした。でも、ずっと彼女と寄り添ってきた児童心理司も私も、彼女を一度家に戻すことが必要だと感じていました。児相に無理矢理変えられた人生を彼女は受け入れることができずにいました。何度も彼女と両親と話し合いを繰り返し、児童相談所は彼女を家に戻す決定をしました。そこからさらに数年後、彼女はもう一度父とトラブルになり、今度は自ら児童相談所に保護を求め、もう両親と一緒に生活には自ら見切りをつけて自立していくこととなります。戻したことが失敗だったとは思っていません。(彼女自身も後にそう話してくれました。)彼女が自分の人生を自分のものとして自らの意志で決定して生きていく、そのための過程だったと思っています。そして当時、まだ虐待件数が少なく、数年をかけ丁寧に寄り添うことができていた私たちには、どこかで、きっと彼女は危なくなれば児童相談所に来てくれるという確信めいた感覚があった気がします。そして実際その時、彼女の中に、支えてくれる人、場所として「児童相談所」があったことがせめても幸せだと思いました。

荒っぽいおおざっぱな紹介ですが、私の虐待対応の原体験はそこにあります。

だから、失敗をさせないことが最も重要なのではなく、保護者にも児童にも、できればもっともっと傷の浅いうちにやり直しをさせてあげられたり、安心して失敗させてあげられ

る環境が欲しいと思うのです。そのためには気軽にSOSを出させてあげられる地域がほしい。それは「責める」という基本姿勢からは始まらないという気がするのです。

そうそう、当時団さんに「虐待という嵐がいつまで続くのかわからないけれど、児童相談所がそれに流されて、これまで培ってきた本来の姿を見失ったら、嵐が去ったとき、児童相談所には何も残らなくなる」というようなことを言われた記憶があります。本当に私は素直なので、虐待だって支援姿勢で何が悪い！って意固地なくらい思っていました。チェックを甘くするということではなく、姿勢として子どもをとりまく家族の支援をしたいのだとそれを貫くことがとても大事だと思っていました。その姿勢で、上述したお父さんお母さんも、別な家族もつながってくれたじゃない、と。今もそう思っています。もちろん、今はアセスメントをちゃんとしますけどね。

<どんな地域に住みたいか>

虐待の早期発見のために、通告義務を周知し、地域でチェックする機能を持たせることに反対するつもりは毛頭ありません。それによって重大な結果を防げることは多々あると思います。でも、“それだけ”を強めていった時、それによって創られる地域に、「私は住みたくない」と思う気持ちが私の中には確かにあります。

実は、既に大学生となった我が家の長男は夜泣きが激しくて、0才から2才まで1年以上に渡り、夜中に泣き出せば2時間は泣きやまないという“毎日”を送っていました。（だから当時、私はスマートだった！！？誰も知らないから書ける？）集合住宅に住んでいた頃は近所に迷惑で、泣き出せば車に乗せて夜中にドライブを繰り返しました。家を建て、夫の両親と同居して、周囲は畑だし（家もあるけど！）やれやれと思ったのもつかの間、今度は新しい家族が音を上げ、叩けば静かになるんじゃないと言われる始末。無理ありません。本当に激しかったので。息子は、環境が変わったことによる私の緊張を感じていたのかもしれない。あれが今だったら、完全に通告されていたでしょう。「安心して子どもを泣かせられる幸せ。」そんな言い方変だけど、でも、当時私はそれが欲しいと思っていました。だって、この子は泣くことで私に不安を訴えている。だったら、私はそこから逃げないよ。いくらでも泣いていいよ、付き合うから。そんなことをこの子に伝えたいと思っていました。それが正しかったかどうかわかりません。でも、それを「虐待だ」と近所から通告されて、もし、決めつけられたら、苦しいな～本当にこの子を嫌いになってしまうかもって思う気持ちがあるのです。それよりだったら、話を聞いてくれて、頑張っているんだね、と言ってくれる人がご近所さんの方がずっと気持ちが

いいな、当時の私が楽になれるなど思えるのです。

地域からの通告をお願いする一方で“チェックでない地域”づくりを進めることでバランスをとりたい。そうじゃないと、住みたくない地域ができあがってからは遅いんじゃないか。もしかしたら、もう間に合わないかもしれないけれど。始めてみなければ。今、児童相談所に身を置いていない自分だからこそできることかもしれない。当時そんな風に思っていました。

<高柳先生との出会い>

実はこの取組、最初は団さんとやろうと思っていたのですよ。でも、断られました。当時丁寧なお手紙をくださって、自分には今、別なことがある。これ以上手を広げることは今はしたくないからと。これも神が仕組んだことかもしれません。こうやって相談していたので、ここから先、この取組を創り上げていく過程の中で、私は何度も団さんに相談し助言をもらうことができました。

そして、団さんとは別の、この取組の成功には欠かせない方と会うことになります。

それが、当時、日本医科大学の准教授だった、現在「笑医塾」塾長の高柳和江先生です。

私が高柳先生のことを初めて知ったのは、事業提案からさかのぼること約1年、「笑い療法士」という資格認定について書かれた新聞記事でし



三村申吾知事と高柳和江先生 (H19. 3. 23)

た。病気を抱えた患者さんの自己免疫力を高めると同時に、自分らしく笑顔でいられるように働きかけをしてくれる医師や看護師などの医療従事者、患者さんの家族などを「笑い療法士」として資格認定するという取り組みが始まっているという記事でした。誰かの失敗をあげつらい、さげすむことによって笑うのではなく、辛い人が笑顔になれる、そんな取り組みに興味を覚えました。

そして、「青い森のほほえみプロデュース事業」を提案することになったとき、この記事のことを思い出したのです。県民に「ほほえむこと、笑うことの効果」や、「ほほえみや笑いを引き出す方法」を伝えるためには、まず、私たちがそのことをしっかりと学ぶ必要があります。誰かをバカにしたり叩いたり落としめたりする笑いではなく、「心が温かくなる笑い」です。元気な人が楽しめる、俗に言う“お笑い”ではなく、しんどうい人が笑顔になれる「心からのほほえみ・笑い」です。是非、「笑い療法士」の資格認定を手がけていらっ

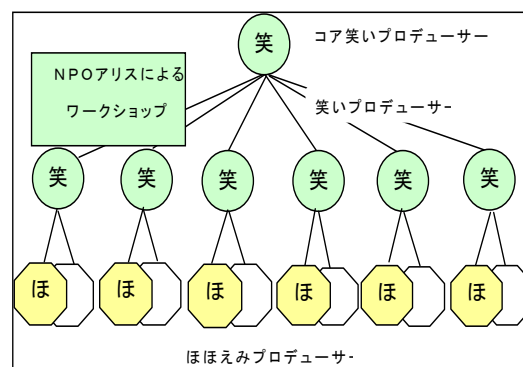
しゃる高柳和江先生に、指導をお願いしたいと思ったのです。

知事プレゼン後の平成18年11月、私は、先生が実施していた「笑い療法士」の資格認定講習に参加し、同時に先生に事業に込めた想いを聞いていただくことから始めました。そして、数回のアプローチの末、もともと、子どもの虐待防止にも深い想いを持っていた高柳先生から、当事業に御協力いただけるとの、嬉しい返事をいただくことができました。そして、そこからやっと、平成19年4月の本格始動に向けて、事業内容の検討を進めていくことになったのです。先生は、言われるまま単純に講師を引き受けるというような関わり方でなく、この事業のコーディネーターの感覚で深く関わってくださいました。そこで私たちはもともとの想いを丁寧に伝え、その後は、先生が具体的にどんな方法で「ほほえみの地域づくり」を進めるかの組み立てをしてくださいました。先生から多くの御提案をいただき、実行可能な方法を検討し、まさに二人三脚で、人材養成の仕組みや方法など、この事業の基本の形を作り上げていきました。

初めて先生からプログラムの内容を説明していただいたとき、シンプルでありながらとても練り込まれたものが展開していることに、感動したのを覚えています。これなら、本当に地域が動くのかもしれないと思えました。私たちさえ必死で頑張れば、ですが。

<人材養成のしくみ>

さて、下記が高柳先生考案のほほえみの人材養成システムです。誰ですか、「ネズミ講！」と言うのは(^_^;)

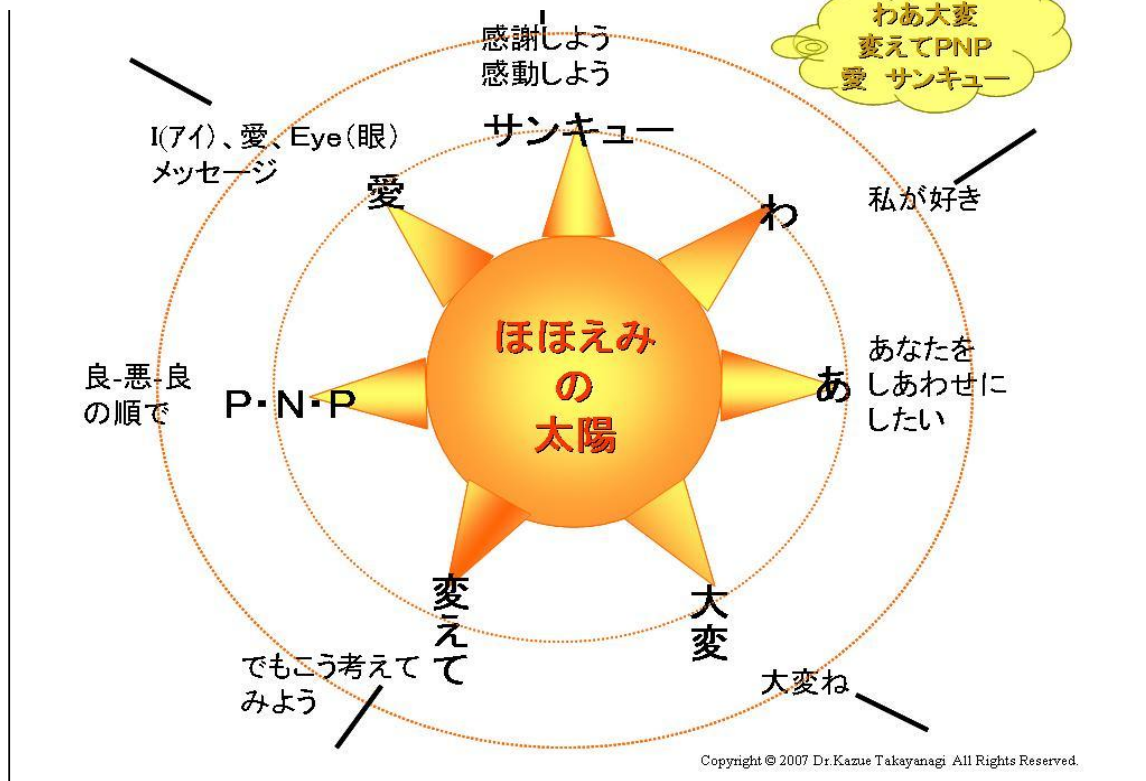


三層構造により、県民の中に、自らがほほえみ、周囲の人からほほえみを引き出せる知識と技術を習得した人材を養成していきます。三層目の「ほほえみプロデューサー」(日常生活の中で、周囲の人からほほえみを引き出してくださる方)を数多く養成することが、最終の目的です。そして、そのほほえみプロデューサーの養成講習の講師として、まず、コア笑いプロデューサーと、笑いプロデューサーを事業推進役として養成していくという仕組みです。

<ほほえみの7か条>

講習で伝える内容は、自らがほほえみ、周囲からほほえみを引き出すための7つのポイント。これが高柳先生が考案してくださった「ほほえみ太陽メッセージ7か条(通称:ほほえみの7か条)」です。

この「ほほえみの7か条」を、コア笑いプロデューサーと笑いプロデューサーがチームを組んで、約1時



間の講習会で伝えます。

講習はワークショップ形式で、参加者の体験コーナーがあったり、講師の体験談で伝えたり、寸劇で紹介したり。

そして、このほほえみの7か条を日常生活の中で実践して下さるよう、お願いしています。

「ほほえみの7か条」の概要は以下のとおりです。

- 第1条 私が好き
- 第2条 あなたを幸せにしたい

自らはほほえみ、そして周囲からはほほえみを引き出すための基本の姿勢についてお伝えします。自分自身のことを「好きだな」「まんざら悪くないぞ」と思える状態であることが、

自らあたたかいほほえみを発信していくために、とても大切なことです。そんな自分自身でいたいですし、周囲の方にもそんな状態になってもらうために、お互いのよいところを認め合いましょう。まず、そこから始めてみませんか。それがどんなに人を笑顔にするか、体験していただきます。

- 第3条 大変
- 第4条 変えて

苦しい状況にあるから笑顔になれない、という話はよく聞きます。では、つらい状況にある人がほほえむためには、何が必要なのでしょう。自らが苦しい状況にあるとき、それは抱え込まずに、聞いてくれる人のそばに行って出しましょう。あなた

に、つらさを話してくれる人がいたら、相手のつらさを否定せずに、まずはしっかり受けとめましょう。そして物事を前向きにとらえられるように、こう考えてみたら、と発想を転換できたら、もっと素敵ですね。講師の体験談や寸劇を使って伝えます。

第5条 P・N・P

第6条 I(アイ)・愛・Eye(眼)メッセージ

相手に伝えたい苦言、それを伝えた途端、けんかになってしまうということはありませんか。相手への苦言をきちんと伝えて、それでもけんかにならず、相手が笑顔でいられる会話法についてお伝えします。相手への苦言（ネガティブな表現：N）は相手が嬉しくなるようなことば（ポジティブな表現：P）でサンドイッチしてみませんか。そしてもう一つ「おまえは」「おまえは」と指示するよりは、「私」を主語にして自分の気持ちを伝えてみませんか。言われたときの気持ちの違いを体験してもらいます。

第7条 サンキュー

自らほほえみ、周囲にほほえみを感染させる「ありがとう」の威力についてあらためて考えましょう。

ほほえみの7か条と、人材養成の仕組みがこの形だったからこの事業はうまくいくことになったのだと思うのです。それはまた、講習活動が続ける中での感想等を通じてお伝えできるかと思います。

<天才との付き合い方>

私は最初、高柳先生とどのように関係を持っていたらいいのかとまどっていました。

とにかく、様々なアイデアが浮かぶのです。次々と。先生は、この事業を成功させたいと思っていましたし、どれもそのために必要なこととして考えられたことでした。しかし、県事業として予算の採れるものも採れないものもあり、また、県民性を考えた時に先生のアイデアが目指す効果を生み出すかどうか危惧されるものもあり、そのアイデアを全て採用することはなかなか難しいという状況がここから4年間に渡りたびたび出てくることになります。それは難しいと話しても、必要です、とされる押しの強さ、でも・・・という中で、不必要に競合して、擦り減っていくような感覚。どこまで一緒にやれるのだろうかと前途に不安を覚えることもありました。

そんなとき、団さんに話をしたことがあります。団さんは、高柳先生について私から聞きながら、「一流の女優さんとして処すること」とヒントをくれました。私の中では、それですいぶんと腑に落ちました。そうなのです。つまり、先生は天才なのです。天才と一緒に進むのは難しいのですよね。率直な要求が、単に妥協を許さない強引さに思えたり。でも、今考えると、そんな人が主導しない限りこの仕組みはできあがらな

かったのです。その天才の確信に満ちた強引なくらいの計画がなければ、私ひとりでは県民3万人を巻き込むようなムーブはつくれなかった。私がもっと自信家で、天才の意見を真っ向から否定してかかれる人間だったらこれもうまくいかなかった。この方が天才だと気付かせてもらえたので、私の中では、先生との距離感がつかめてきました。きっと先生の言う通りに実践できたらうまくいく。競合するのではなく、先生への尊敬と信頼を基礎として、まずは先生に私たちを信用してもらえるよう努力しよう。そして先生のアイデアを全て実現することは難しくても、私が、青森県で受け入れられやすいように環境を整えながら実現していく。そうやって一緒に進んでいくことを先生にわかってもらおう、そんな感覚が私の中にすっとと落ち着きました。

例えば、コア笑いプロデューサーの4泊5日の講習会、笑いプロデューサーの3日間日帰りの講習会。青森県民を知っている私には、本当にそんな日程的に過酷な講習会に人が集まると思えず。何とかもっと楽な形にできないかと思ったのですが、先生は内容重視です。そこは譲ってくれません。無理だと言ってしまうこともできたかもしれませんが、でも、きっとこれが必要不可欠なのだろう、信じてついて行ってみよう、やれるだけのことをやってみよう。では、人が来てくれるように広報の方法を工夫してみるか、そうだ、事前に講

演会を開催して機運の醸成を図ってみるか、と。

そして、その分を含め、予算組みを行っていくわけです。

さあ、先生のアイデアは次々とふくらみ、検討を繰り返し、財政課に謝りながらいろいろと変更しながら事業を形にしていきました。結局、形があらかた落ち着いたと思えたのは、年が改まる頃でした。

<そして予算獲得へ>

さあ、今度は財政課で予算の精査を受けながら事業をシェイプアップしていきます。時に事業の必要性などの「そもそも論」も繰り返されながら、財政主幹査定、財政課長査定、総務部長査定を経て、2月には再度知事に判断を仰ぐ機会が訪れるのです。事業として認めがたいと判断されれば途中でおしまいです。日々新たな宿題を出され、新たな説明文書を作り、議論を重ねていきます。

途中で落とされず、何とか知事査定まで残り、知事が私の顔を見て、「お、これだよこれ、『ほほえみ』。ちゃんとここまで残ってきたな。」と笑顔になったとき、これまで四苦八苦しなから一緒にこの事業のシェイプアップをしてくれた財政課の担当がやっと笑顔になってくれました。それが私にはとても嬉しいことでした。

<初代ほほえみ隊の完成>

こうして予算がつけました。

ここまで進んできましたが、この

過程で、部内での青い森のほほえみプロデュースの事業の前評判は決して良かったわけではありません。何だか、奇をてらったプレゼンが評価されて事業化はされるらしいけど、何だかお笑いの人材を創るのだそう。それが県でやるべき事なんだろう。そんなことで虐待が減ると言うのか？虐待加害者がお笑いの勉強に来るのか？突拍子もない事業だ、効果はない。という感じでしょうか。

面と向かって「なんだか変なことを始めるんだって」と声をかけられたり。ちゃんとしたことを何も知らないくせに、聞きもしないくせに、なぜそんなことを、と悔しい思いをしたり、でも、もともとそんな風に声をかけてくる人は、真剣に関心を持っている人ではなく。そう、こちらがそんな一言一言に傷ついているとも知らずに軽く挨拶程度に声をかけているだけなのです。もともと初めての取組で先行きに何の自信もない私たちですから、毎日のように聞かされるその声には結構ダメージを受けていました。そんなとき、ここまで一緒に進めてきてくれたSさんは必ず味方になってくれました。Sさんは、ベンチャーを本格的に組み立てるとなったときに、課長が課内から異動させてくれた助っ人です。児童相談所経験もあり、頭の切れる才媛です。でも、彼女もこの作業に急に駆り出され嫌な思いもしたと思うのに、私には一切そんなそぶりを見せないでくれました。そして、菜穂子さんはすごいよ、と言い続けて

くれました。そんな人が身近にいてくれることがどれだけ力になったか。

それは、この事業が本格的にスタートしたあともずっと続きます。

さあ、では次の試練を御紹介しましょう。

事業組み立てに半年近く一緒に駆け回ってくれた課長代理もグループリーダーも、事業開始となる4月に全員異動になりました。行政ですものね、まあ、そういう巡り合わせもあるでしょうが・・・当然、見捨てられた気分で、とても心細く。

実は、ベンチャーでは人もそのために手当てしてくれる約束です。私とSさんは、もう1人人員を要求。3名のほほえみプロデュース事業担当が誕生することになりました。もう一人も児童相談所経験者、私ともSさんとも昔一緒に仕事をしたことがある気心の知れた男性、Oさんでした。私たちは、こどもみらい課子育て支援グループの中に青い森のほほえみプロデュース担当として3名で配属になりました。そしてそこに新たにやってきたグループリーダーは、健康福祉政策課から来た、行政マンを絵にかいたような、笑顔をほとんど見たことのない、ほほえみとは最も遠い所にいるようにみえる人でした。

私とSさんはその人事にたいへんなショックを受けました。でも、ここで私がショックを受けたと言っているのは前に進めなくなる。私はSさ

んに「私たちが進めようとしているのはほほえみづくり。事業の成功を占う一番適切なバロメーターが近くに来てくれたということだよ。Kリーダーを笑顔にできないくらいならこの事業が成功するはずもないということだよ。チャレンジだね。♪」と。自分たちを奮い立たせるように、そんな密約が交わされていたことをリーダーは知らない。今、これをみて始めて知るのかもしれない。（まずい。予め言っておこうか？ま、いいか。）

でも、そんな心配をよそに、実のところ、Kリーダーは私たちがずっと苦しめられてきたような事業への揶揄を一切口にしないどころか、この事業に対して、外側にいるという態度ではなく、まったく一緒に歩む立場として内側にいてくれました。心細かった私たちにとってそれがどれだけ大きな支えだったか。数ヶ月後、私たちのリーダーは、（時折）素敵に笑顔を見せる最も強力な味方になってくれていました。

（私たちがやったこと？それはもちろんほほえみの7か条の実践でしょう。。。ホホホ）

まず、身近なチームを固めること、それが風当たりも強い新規の事業を進めていくときの最重要ポイントと言っても過言でないと私は思っています。

そこがうまくいったことも、奇跡かもしれない。ううん、奇跡だけでなく、実は努力や工夫もあったと思っています。そこはまたいつか改

めて。



男は 痛い !

國友万裕

第1回

悪人

今号から連載に参加させていただくことになった。簡単に自己紹介をしておくと、ぼくはもうすぐ48歳。独身。職業は大学の非常勤講師。専門はアメリカ文学・映画・ジェンダー。ぼくは少年時代に重いトラウマを負い、いまだにそこから立ち直ってはいない。あえて、定職を見つける努力もせず、結婚もせず、女っけのない生活をしてきたのも、少年時代のトラウマを乗り越えることができないことが、ひとつの原因だった。自分を変えようと努力しなかったわけじゃない。ぼくは30過ぎてからの18年間で、10人以上のカウンセラーにつき、心療内科で薬ももらい、男性運動にも参加し、念願になって、本も出した。人づきあいもたくさんしてきた。ぼくを可愛がってくれる先生も何人もいるし、一緒に飯や風呂に行く、友達も何人もいる。

とりわけ、大親友とは10年以上のつきあいだ。でも、その彼にさえ、ぼくはまだ少年期のトラウマを具体的には話していない。彼は援助職ではないし、一流の高校から一流大学に入り、エリートコースを生きてきた人だ。ぼくの過去を知ったら、もう友達ではいてくれないのではないかな？ という心配がよぎる。ぼくは、少年時代に重い十字架を背負わされた。それが原因で、ぼくは、自分は半端者だという低い自尊感情から抜け出すことができないのだ。

今更、新たなカウンセラーを見つけても、もう得られるものはないだろう。心療内科の先生からも、「あなたはもうクライアント経験のプロだし、カウンセリングの限界だよ」と言われている。これからは自分に頼るしかない。援助に関連しているものだったら、条件は問わないとのことだったので、ぼくは、この連載を続けていくことで、自分を援助していきたいと思っている。

自己援助の方法として映画を使おうと思う。気

に入った映画、とりわけ男性主人公に同一化できた映画を主として使っていきたいと考えている。男性主人公に同一化できる映画は、ぼくの抱えてきた問題を、その主人公も共有しているということで、「つらいのは、俺だけじゃないんだ」という気持ちにさせてくれるからである。

さて、第一回は『悪人』(李相日監督 2010)を見て思ったことである。

ぼくが生まれたのは九州の熊本市。ぼくは京都の大学に入るまでの19年間、この土地で過ごした。『悪人』を見て、何よりも思ったのは九州の風土だった。これは僕が九州を背負っているから感じるのだろうか。ここには確実に九州の匂いがある。とはいっても、この映画の舞台となるのは、佐賀と長崎で、同じ九州でも、熊本や鹿児島ほど九州的な土地柄ではないと聞いている。佐賀は都会である博多に近いし、長崎は港町でバタ臭いイメージだ。

でも、これは九州らしい話なのである。原作・脚本の吉田修一も長崎の出身だし、製作者側も、九州の風土を描くことを意識していたのではないかと思われる。主役の妻夫木聡(福岡出身)、深津絵里(大分出身)を始め、三石研(福岡出身)、宮崎美子(熊本出身)など、脇役も九州出身の俳優が多く出演している。

1. 男尊女卑という名の男性差別

ぼくが九州の出身だというと、たいていの人は、「じゃあ、九州男児なんですね。そうは見えないけど(笑)」と反応する。実際には、九州の人は、自分のことを九州男児なんて言わない。他の地方の人たちが勝手にイメージしているだけのことだ。男尊女卑的で、日本男児的で、寡黙な男というイ

メージがまず頭に浮かぶのだろうか？ 九州が男尊女卑であることは、ぼくも認めるのだが、しかし、ぼくが問いかけたいのは、「男尊女卑が、男にとって、良いことなの？」ということだ。

ぼくは、自分が男だってことを受け入れるのに膨大な時間がかかった。

普通の人は、そんなことは意識しないで生きている。人間の人生には、その人の素因と環境、それから運命が影響するとぼくは思っている。ぼくの場合は、たまたまジェンダー・センサティブな素因をもち、たまたま生まれ育った環境が超ジェンダー主義的な環境で、さらに悪い時には悪いことが重なるという運命で、ジェンダーにもがき苦しみ、結局、まだ引きこもりや不登校という言葉もない頃、自分の殻に引きこもってしまった。

ぼくは物心つく頃から、スポーツや喧嘩ができず、女の腐ったような子だと言われ続けた。しかし、小学校3年までは曲りなりに普通の男の子だったと思う。仲良し4人組で遊びまわり、仮面ライダーやウルトラマンに夢中になっていた。

そのぼくが、自分が男だということを理不尽に感じ始めたのは、小学校の4年生ころからだった。4年生になって組替えがあり、担任の先生が変わった。30代半ばの女の先生で、「男の子は将来、一家の大黒柱にならなきゃいけないのよ」が口癖。当然のように女子よりも男子に厳しくする。男子にのみあたえられる厳しい体罰の日々。顔が腫れあがるまで殴られた子もいた。一方で、女子はどれだけ反抗しても、殴られない。男はわずかなことでも、彼女の気分次第で殴られる。しかし、彼女に悪気はない。彼女は、「女よりも男のほうが大事、だから男子には厳しくしてあげているのだ」と思っている。「女はどっちみち、男にのっかっていればいいんだから、適当に甘やかしていればいい

のだ」と……。

運が悪いことにこの先生の担任は6年生まで3年も続いた。5年生の頃からだろうか。ぼくは次第に男子の仲間から外れ始めた。男子と遊んでいると殴られる危険性が出てくる。いつしか僕は女子たちと遊び始めた。女子と一緒にいたら、ちょっとくらい悪いことをしても殴られる危険性はなかった。まさか同じことをしているのに、男のぼくだけ殴って、他の女子たちは殴らないなんて、そこまで不平等なことは、さすがのこの女の先生でもできなかった。あの当時のぼくには、女の子たちがシェルターだったのだ。しかし、女子とばかり遊んでいるぼくを、他の女子たちは「おかま」とからかい始めた。確かに、あの当時のぼくは、半分は女子に同一化していた。

そして中学へ。中学になると、一気に雰囲気は変わる。女の世界から男の世界への移行。女性の先生が過半数の小学校から、男の先生が支配する教育へと変わっていく。男子生徒たちも、一気に男になっていく。そのなかで、女子に同一化していたぼくは、もはや女子の仲間にも入れない。他の男子とも同一化できない。自分の夢の世界の中で遊ぶしかなかった。

ここで、また不幸な出会いがぼくを待っていた。中学2年の時にやってきた体育教師だ。大学を卒業して、教員採用試験に落ち続け、5年くらい浪人したらしい。まだ20代後半で、この時が初めての正式な教員としての就任だった。この人を始業式で見たときから、何らかのトラブルが起きそうだと予感していた。見ただけで怖いような番長のような風貌。人の気持ちを理解する気はない。俺が一番なんだ。俺のルールはお前のルールなんだという態度。

この教師が、男子全員上半身裸で体育の授業

をすと言いだしたのは、受験を間近にひかえた中学3年の秋のことだった。ぼくは、女子に同一化していたので、元々、肌を見られるのは恥ずかしかった。プールの時間は仕方がないけども、普通の体育の授業まで上半身裸でするなんて、何の必然性があるのか。この先生曰く、「受験にそなえて、身体を鍛錬するため」とのことだが、これは何の根拠もない言い訳に過ぎないことは、中学生のぼくにもわかっていて。この先生はマッチョ・フリーク、男子全員を裸にして自分のマッチョ大好き欲望を満たそうとしていたのだ。

九州でも冬は厳寒だ。寒いつらさもあるが、何よりも、全員裸なんて言う状況は、恥ずかしいを通り越していた。男子校ならまだしも、女子たちの目がある。極めつけは、学校のグラウンドではなく、学校の外を裸で走らされたことだ。「いくらなんでも、行き過ぎだよ」と他の男子たちもぼやいていた。でも、彼らは恥ずかしいという感情よりも、男の一員でいたいという思いのほうが勝っている。それでやむなく教師に従い、上半身裸のまま外を走らされることになった。通りかかったおばさんたちがあきれ顔で見ていた。ぼくはというと、断固として裸になることを拒否し、必死の思いで教師に嘆願し、シャツ一枚を着用させてもらった。男であることを拒否したのだ。あの時のぼくを嘲笑う教師の顔。あれは教育者の顔でも、人間の顔でもなかった。男性的な支配力で周囲を威圧できる男は、どれだけ非人間的なことをしても、許されてしまうのだ……そのことをあの教師から教えられた。

ぼくは一気に自分の心のバランスを崩していった。受験前だというのに成績は一気に下降し、何度も職員室に呼び出される日々。母には悲しい顔をされる。クラスメートたちはますます遠い存在となった。志望ランクを落として、高校には合格し

たものの、ぼくは学校に行くことができなくなった。当時はまだ不登校なんて言う言葉はない。近所の人たちからは白眼視された。精神科に行っても話にはならず、地元の公立の相談所に通った。

ここでまたも不幸な出会いが起きる。担当のカウンセラーである。当時、30過ぎの男性。地元の高校から熊大を出て、そして、公務員になったみたいだ。おそらく、最初からカウンセラーになりたいなんていう気持ちはなかったに違いない。配属されてから、心理の勉強を始めたのだろう。頭もよくて、スポーツマンで、鈍感で、間違っても不登校になるような性格の人ではなかった。

ある時、ぼくはこのカウンセラーに、「ぼくは映画が好きだから、脚本家になりたいんです」と話した。もちろん、脚本家なんて誰でもなれる仕事ではないことは、ぼくだってわかっている、ただ夢として言ったことだった。ところが、思わぬ反応が返ってきた。このカウンセラーは、真っ青になって、「大人になったら、女房子供を食わせなきゃいけないのに、そんなバカなことを考えて」と必死になって、ぼくの夢を壊そうとするのだ。夢を持つこと自体が罪悪だとこの人は思っているみたいだった。ぼくは、この先生にスリッパを投げつけた。この先生は夢を見ることの価値をまったくわかっていない。そんなものは時間の浪費だと思っている。そして、「食わせんといかん」という言葉。この人は、「男子、扶養者たるべし」という考えを、何の疑問も感じずに受け入れていた。こんな人にぼくが心を開けるわけがなかったが、当時は熊本で他に少年のカウンセリングをやってくれる場所はなく、仕方がないから、2年ほど、ぼくはこのカウンセラーのところに通うことを余儀なくされた。

体罰に耐えろ！上半身裸になれ！！ 家族を食わせんといかん！！ こんなことを女子が言

われるだろうか。男であることは理不尽だ。九州が、男尊女卑であることは事実だと思うが、男尊女卑であることはむしろ男にとって悲劇だ。男は家畜のような扱いを受けるのに、一方で、男は女よりも偉いんだという価値観を内面化していなくてはならない。なんという矛盾。

ぼくの九州での体験を話すと、「やはり九州は保守的だねー」「一体、いつの時代のことなの？」「ぼくたちの頃は体罰なんてなかったよ」「皆の前で、裸になれってー。熊本ってそんなとこなの？」「そのカウンセラー、ちょっと変だよ。カウンセラーとしては下の下だよ」と驚きの言葉を漏らす人は少なくない。

もちろん、ぼくの経験は個人的な経験だ。九州に育った人が必ずしも同じ目にあってきたわけじゃない。他の地方であっても、同じような体験をした人はいるに違いない。また人間の心というものは変わるもので、出会う時期が違っていたら、ぼくは、九州の人たちを受け入れることができたのかもしれない。そのことがわかっていながら、九州を未だに蔑視しているぼくは大人げないのかもしれない。自分の世界を狭くしているのかもしれない。しかし、ぼくの九州に対する憎しみは今も消えてはいない。ぼくの九州での少年時代は、不幸な出会いにばかり満ちていて、幸せな出会いは思いつけないくらいに少ないのだ。

2. 怒ることしか許されない男たち

ぼくは、子供の頃、「男は三年に三口」という言葉を教えられた。これは全国的な言葉なのかと思っていたら、そうではないらしく、関西の人たちは、そんな格言聞いたこともないという人もいます。

九州では、男は寡黙でなくてはならない。一般

に九州の男は、感情表現が下手だし、それを禁じられる。「男は泣いちゃいけない」「へらへら笑っちゃいけない」……『悪人』で、まず九州らしさを感じたのは、主役から脇役の人物にいたるまで、男たちはほとんど泣かない・笑わないということである。

娘の佳乃（満島ひかり）が殺された後、父親の石橋佳男（柄本明）は、いつまでも取り調べられない警察を激しく怒った後で、男泣きにむせぶ。また、1シーンだけ登場するバスの運転手は、殺人者・清水祐一（妻夫木聡）の家族としてマスコミに追いかけられる祖母房枝（樹木希林）に、「あんたが悪いわけじゃなかったけん。しっかりせないかんよ」と言葉をかけ、思いやりを示しながら、顔は彼女のほうを見ようともせず、厳しく叱ったような言い方をする。男たちは、泣きたくても、やさしい感情をもっている、表向きは怒るという表現しかできないのだ。もっとも、普段は怒ったような顔の男たちだからこそ、男泣きや思いやりのある言葉が、よりいっそうに真実味を帯びて感じられることは確かだ。九州男児が、男性からも女性からもかっこ良いと見られてきたのは、そういう部分なのだろう。運転手の横顔に既視感があって、「九州は相変わらずだなあ」と苦笑いしてしまった。

映画の男性登場人物のなかで、わずかに泣いたり、笑ったりの場面が出てくるのは、佳乃が好きになる、金持ちの大学生・増尾圭吾（岡田将生）だが、彼が泣くのは、警察に佳乃殺しの容疑者として捕まる場面であり、「男のくせにみっともなく泣きやがって」というセリフが出てくる。一方で、彼が楽しそうに笑うのは、容疑がはれて、死んだ佳乃を「あんな女……」と嘯きながら、仲間と盛り上がっている場面である。死人に平気で鞭を打つ、彼の無神経さに思わず激しい反発を示す同級生が

描かれる。すなわち、彼の泣く・笑うという行為は、むしろ軽薄な泣き笑いとして描かれているのだ。

主役の祐一の台詞もきわめて少ない。妻夫木聡といえば、息子にしたいような、可愛らしい好青年というイメージがあって、『ウォーター・ボーイズ』（矢口史靖監督 2001）『ジョゼと虎と魚たち』（犬童一心 2003）など、他の映画では、むしろ饒舌で表情豊かな役が多いのだが、この映画に限っては、例外的に無口で無表情である。彼にとってはイメージチェンジの役であり、この話自体も、彼の他の映画でのキャラクターがその背後に見えるからこそ成り立つ。妻夫木は悪人には見えないし、怒ったような顔を男の美学とする男にも見えない。彼をこういう表情にしてしまったのは、やはり、九州なのではないかと、アンチ九州のぼくは、考えてしまうのである。

3. 遠い東京

主役の祐一と光代（深津絵里）を結びつけるものは、出会い系サイトである。しかし、2人とも出会い系サイトで出会った相手と遊ぶような性格の人物じゃない。男のほうは仕事が終わると、風呂と飯と病気の祖父のために病院通いするしかない土木作業員。女のほうは、同居している妹は彼氏がいるのに、自分はひとりでケーキをかじるしかない紳士服店勤務の女性。いまだき珍しい大和撫子風のしとやかな女性として登場する。この2人がなぜ出会い系に頼るかというと、2人とも自分から積極的に異性と付き合えるような性格ではないからである。

映像的に印象的なのは、1人でケーキをかじっている光代の表情が、アップで丁寧に撮られ、ふと妹の部屋をみると布団がよじれている。すなわ

ち、彼女の留守中に妹が彼氏とセックスをしていたことがわかる。パンッと障子をしめる彼女。この一場面で彼女が性体験が少なく、古風な女性であることが示される。

祐一を描く場面で印象的なのは、祐一の大叔父である憲夫（三石研）とのやりとりの場面だ。パンツ一枚の祐一が外風呂へ向かおうとしていると、憲夫から声をかけられる。恥ずかしそうに身体を隠しながら、祐一は俯きがちに風呂へと向かう。頭はヤンキーふうに金髪に染めておきながら、自分の貧弱な身体を隠す祐一は、シャイな大人しい青年であることが示唆される。また外付けの風呂がついているところも、九州らしいのではないかな。

光代は妹を世話する立場にいる、祐一は祖父を世話する立場にいる、すなわち、家族の犠牲になっているような存在だ。この2人が恋に落ちるのは、何よりも同じような境遇であるがゆえにシンパシーを感じるからだろう。

2人が駅で初めて会う場面では、いきなり、祐二から「ホテルへ行こう」と誘われ、光代は戸惑いながらもそれに応じてしまう。この時、祐一は、佳乃を殺した後なので、どうすることもできない思いをセックスで紛らわしたいという気持ちもあったに違いないが、それと同時に、九州男児らしく口下手な彼は、光代のお喋りに上手く付き合っていく自信がないように見える。出会い系サイトに頼るのも、出会い系に登録するような女性だったら、セックスを求めても、文句は言わないだろうという思いもあるからだろう。また一方の光代も、これまでの大人しい生活からどこかで抜け出したいという願望をもっていたがために、受け入れてしまう。彼女自身も述懐するように、真面目な交際相手を求めて、出会い系サイトに頼るなんて、「ダサイ」のだ

が、そうでもしなければ、友達も見つからないのが彼女の現実なのである。

車のなかでの2人の会話は2人を心情を見事に表現している。

光代：私、金髪の人と付き合うなんて思わなかった。

祐一：いや、鏡見たら、急に変えたくなくて。

光代：その気持ちわかる気がする。

2人とも閉塞的な生活から抜け出せない自分から脱皮したい。その思いが胸に鬱積しているため、突然、火種に火がついたように柄にもないことをしてしまうのである。出会い系サイトや金髪は、逆説的に彼らの抑圧された生活を物語ることになる。

この映画では、祐一が佳乃の下着姿の動画を見つめている場面や、光代からのメールを受け取る場面などに携帯もひとつの重要な小道具として使われている。今は以前にも増して、コミュニケーションや情報が伝わるのは速くなっていて、地方にいてもすぐに情報が得られることは事実だ。しかし、その一方で、地方には文化イベントや娯楽施設が少ないため、文化を十分にエンジョイすることもできない。また九州の場合は、中央から離れているため、東京の情報は知っていても、東京まで頻繁に行くことはきわめて難しい。

ラブホテルでセックスをした後、ふたりはこういう会話を交わす。

光代：ねえ、ここに来る途中、安売りの靴屋があったやろ。あそこを右に回ってまっすぐ田んぼの中を進んだところが私の高校だったとよ。そのちょっと手前に小学校と中学校……今の

職場もあの国道沿い……………なんか考えてみたら、私って、あの国道から全然離れんやったとねえ。あの国道を行ったり来たりしよっただけで……………。

祐一：俺も似たようなもん

光代：でも、海の近くに住んどっとやろ？ 海の近くとか羨ましかあ。

祐一：目の前に海のあったら、もうそん先どこも行かれんような気になるよ。

光代が勤務先のウインドウから、ふと雨のなかに放置されている一台の自転車を見つめる場面が挿入されるが、この自転車は光代や祐一の状況を物語る指標である。人通りもないところにポツンと置かれて、雨に濡れながらも、動くことはできない自転車……………それは2人に似ているのである。

もう20年以上前に、根岸吉太郎監督の『永遠の1/2』（1987）という映画があった。これも九州の話だが、今でも覚えているのは、大竹しのぶが津田塾大学卒業後、九州に戻ったという設定になっていて、そのことを彼女が恋人の時任三郎に話すと、「すごいなあ」と彼が言う。「東京出るなんて」……………。「大学のことじゃなくて……………」と大竹。

彼女は、おそらく優等生で、東京の大学に出してもらえたのだろう。しかし、それほどの優等生でもなかった彼のほうは、東京なんて夢の夢なのである。

思えば、地方分権は、ぼくが学生の頃から訴えられていた。なのに、東京一極集中は緩和されるどころか、拍車がかかるばかりだ。埼玉や千葉、栃木や茨城は東京のサテライト。さらにサテライトは広がっていて、今となっては、山梨や長野から

東京に仕事で通っている人も少なくない。しかし、九州は東京のサテライトにはなり得ないだろう。

『悪人』では、都会と地方の対比は描かれてはいるが、東京ではなく、博多との対比ということになっていることに注目してほしい。東京や大阪は距離的に遠いため、九州人には博多が東京に代わる華の都会である。

そうそう、ぼくが大学に入るときのことだ。予備校の先生は、保護者も一緒に進路指導面談で、母に言ったものだ。「博多の西南学院大学でもいいんじゃないんですか？ 東京や関西に出るよりも、博多くらいのほうが安心ですたいね」

4. 男性被害！？

『悪人』というタイトルがついたこの映画だが、主役の殺人者・祐一は、同情的に描かれる。彼が「悪人」でないことは言うまでもない。それでは、一体、誰が悪人なのか？ 誰とも言えないだろう。おそらく原作者も監督も、誰を悪人だとも思っていない。人間は誰しもある面で加害者（悪人）であり、ある面で被害者でありうるということが、『悪人』の描きたいところではないかと思われる。

この映画の優れたところは、脇役にいたるまで、ひとりひとりの登場人物を存在感たっぷりに描きこんでいて、それぞれの人物の生活感が垣間見えるような演出と演技がされるため、誰が悪人とも断言できないようなニュアンスを残しているところである。

強いて言えば、おそらく多くの観客たちは、殺された（ということは、もっとも被害者であるはずの）佳乃が一番悪いと感じるだろう。あるいは、彼女を夜道に放り出してしまった圭吾に批判の目を向けるかもしれない。

事件の起きた夜。祐一と会う約束をしていた佳乃は、偶然、圭吾と会って、祐一はほったらかしにして、圭吾の車に乗ってしまう。佳乃は圭吾が好きなので、助手席から運転している圭吾にあれこれ話しかけるのだが、圭吾は彼女の態度がなんとなく気に入らない。「にんにくの匂いがする」と餃子を食べてきたばかりの佳乃を咎め始め、「アンタなんか安っぽか。アンタ、なんでよう知りもせん男の車に、こうやってひょこひょこ乗ってくるわけ？ 女なら、普通断るやろ。アンタみたいな女、正直、俺タイプじゃないったいね。降りてくれん？ 自分で降りんなら、俺が蹴り出しちゃろうか？ その変にたっとれば、誰か乗せてくれるさ。アンタ、誰の車にでも乗るんちゃろ」と、彼女が女性でありながら、性的に放逸で、男への警戒心などが全然ない女性であることに嫌悪感を催し、強引に彼女を車から降ろしてしまう。

夜道でひとりしゃがんでいる佳乃を車で追ってきた祐一が、「大丈夫？」と自分の車で送ろうとするのだが、佳乃は、「人殺し！ 警察に言ってやるけん！ 襲われたって言ってやる！ 拉致されて、レイプされそうになったって！ 私の親戚に弁護士おるっちゃけん。馬鹿にせんでよ！ 私、あんたみたいな男と付き合うような女じゃないっちゃけん！！あんたなんか誰が信じるもんか」と冷淡に突き放す。その後、怒りにかられた祐一は、佳乃ともみ合いになった末、心ならずも彼女を殺してしまう。

佳乃はセックスを楽しむことに対しての罪悪感がまったくない女性で、祐一は、佳乃に言わせればセックスが上手いことだけが取り柄なので、セックスフレンドと割り切って付き合っていたのだ。かつては、男は愛がなくてもセックスができるが、女はセックスだけを切り離すことはできないのだと言

われたものだ。しかし、『婚前特急』（前田弘二 2011）など、最近の映画では、心と身体を切り離して考える若い女性は、むしろ現代的に肯定的にとらえられたりもする。フェミニスト的に考えるならば、男は複数の女性とセックスを楽しむことが許容されるのに、女には許されないというのは、男女不平等である。佳乃は性に対する考え方が自由奔放なだけのことで、何も悪いことはしていない。むしろ、上にあげた圭吾の台詞には、彼の男尊女卑的な古い女性観がくみ取れて、彼が事件の原因をつくった人物であると思う人もいるだろう。

しかし、祐一は、どうだろうか。彼は佳乃の奔放さを咎めてはいない。彼は、むしろ、彼女が安易に約束をやぶったことに傷ついてしまったのだ。

祐一は、子供の頃に、両親が離婚し、母からはほったらかしにされ、祖母に育てられたという設定になっている。幼い祐一は、母親との約束通り、灯台を見ながら、母が戻ってくるのをひとりぼっちで待ち続けた。しかし、母は結局、彼を迎えにはこなかった。祐一は、「お母さんは戻ってくる！」と大人たちに訴えたのだけど、誰も信じてくれなかった。そのトラウマがいまだに彼を苦しめている。一番、自分を愛してくれるはずの母から捨てられる、さらに誰からも信じてもらえない、俺は誰からも愛されない人間なのか……その孤独感は長い間、彼のなかに亡霊のように住みついていたに違いない。そのため、祐一との約束を平気で破り、さらに「あんたなんか誰が信じるもんか！」と叫ぶ佳乃に、祐一は母に捨てられた記憶をオーバーラップさせてしまい、激しいフラッシュバックの末に彼女を殺してしまうのである。言いかえれば、祐一は、女性から2度の精神的なレイプを受けてしまったのである。

ぼくは、以前、あるフェミニストから、「被害者の

権力」という言葉を教わったことがある。「私たち(女)は、被害者なのよ。あんたたち(男)は加害者なんだから、文句を言っても信じてもらえないのよ」という理論だ。上にあげた佳乃の台詞は、まさしく被害者の権力の濫用の一例である。もっとも、九州の女性の場合は、被害者の権力というよりも、「弱者の権力」を悪用するケースが多いように思える。なるほど、確か長崎出身の村上龍も言っていたと思うけど、九州の女は「男でしょ!」「男のくせに…」という言葉が頻繁に口にするし、男にプレッシャーをかけようとする傾向が強い。九州は、表向きは男が威張っているように見えて、実は女も男尊女卑を利用しているというのが実情なのだ。

フェミニズムを批判するわけではないが、フェミニストが「男・加害者 女・被害者」という図式を広めてしまったため、「女・加害者 男・被害者」というケースはなかなか認めてもらえない。それを真正面から描いている映画は『それでもボクはやってない』(周防正行監督 2007)だが、『悪人』にも、女性に対する批判が垣間見えてくる。日本は欧米に比べれば、ジェンダー意識が遅れていると言われるが、日本でも徐々に男性被害は映画に描かれるようになってきているのである。

祐一の母親・依子は、映画では1シーンしか出てこないが、余貴美子が存在感たっぷりに演じている。祐一は、房江たちの目をしのいで、時々、彼女と会っていた。「私だって、祐一には悪かことしたと思っている。だけん今でも会うたびに、涙流して謝っとるよ。あん子はお金せびるとやけんね。ぎりぎり生活しよる私から1000円でも、2000円でも!!」と久々に房江の前に現れた彼女は、自分もつらい思いをしているのだと訴えるのだが、実は、原作には、さらに説明が加えられていて、

祐一が母にたまに会って1000円、2000円せびるのは、母を被害者に見せるための彼なりの思いやりであることが語られている。「どっちも被害者になれんですから」と……。祐一は自分から加害者の役を買って出てしまっていたのだ。

映画の終盤、警察に追われる祐一と光代だが、ここで、祐一はなぜ、衝動的に光代を殺そうとするのか? それは彼女を共犯者にしたくないからである。ここでも、祐一は、自分が加害者になろうとするのだが、それは何故なのか? 深読みをするならば、九州の男尊女卑的な教育のせいで、無意識のうちにそういう選択をしてしまうのではないか。九州は、男が被害者になることは許されない。そうであるのならば、光代には迷惑をかけたくないと……。

祐一は、光代と初めてホテルで過ごした後で、「これしかないんだ」とすまなさそうに彼女にお金を渡す。この場面でのセックスは、彼女の合意のうえでのことであり、お金を払わなくてはならないということはない。むしろお金を払うと、彼女を娼婦扱いしたことになり、彼女の自尊心を傷つけてしまう。しかし、祐一が律義にお金を払ってしまうのは、自分に自信がないからだ。俺みたいな男は、お金を払わなければセックスはさせてもらえないのだ……。

要するに祐一は、自尊感情が低いのである。そして、祐一の自尊感情の低さは、母に捨てられたトラウマが根源的な原因であると思われる。そうであるのならば、この映画の悪人は依子とすることもできるかもしれない。「早くに、光代と出会っていたら……」というセリフを祐一は口にするが、男に自己肯定感をつけさせるのは女性(光代)であり、またその肯定感を潰してしまうのも女性(依子・佳乃)なのである。そのことを女性たちに考え

て欲しいなあ。

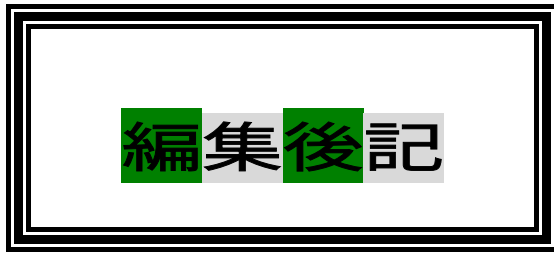
男性ジェンダーの被害者であるぼくは、基本的に女性に対して厳しい。したがって、すぐそういう解釈をしてしまいたくなる。でも、それを言うとフェミニストから、「あなたが女性を下位の者であるべきと考えているから、そう感じるんだ」と怒られてしまう。「別に下位の者とは思っていないよ」と訴えても、納得してもらえない。フェミニストを怒らせずに、ぼくの気持ちを訴えていくには、「男は痛い！」ということを、映画という多くの人が共有する媒体を通して、あの手この手で語っていくことだろう。

次号でも、そういう作品をとりあげてみたいと思っている。本当に男は痛い！！

(この文を書くにあたって、映画の他に『悪人(上下)』『悪人 シナリオ版』(朝日文庫)を参照した)

。





編集長 (ダン シロウ)

■

第七号です。執筆者の皆さん、それぞれに趣向を凝らしてくださって、複雑な挿入資料や、イラスト、写真などの組み合わせが増えてきました。編集者としては、手に負えなくなっているものもあります。(技術未熟のせいです)

そのため、ご自分のレイアウトでPDF作成もされている方の原稿は、そのまま使わせていただきたいと思います。

乗り合いバスのようなマガジンなので、全体を通したデザインやレイアウトは、あまり強くこだわっていません。ご自分でページ構成も楽しめる方は、最初のタイトルやロゴは大きめに作成していただくと良いと思います。

ページナンバーは全原稿が出そろってから、改めてお知らせし、ナンバーを入れたものを再送していただく手間になります。どうぞよろしく。

■ ■

今号の発行準備は、個人的にぎりぎりのことが重なった巡り合わせになりました。講談社α文庫で出すことになった「家族の練習問題1」文庫版の追加原稿締め切りが12月15日だったので、2012年2月20日発行のために、是が非でも締め切りと言われたのが12月のアタマでしたから時間がない。そんな中で並行作業をしていました。この間にも週末は、福島と東京で予定の仕事でした。

そのためマガジン発行は、おおかた何とかなりそうなのですが、少し遅れるかな・・・と思います。なにしろ現在、12月14日の午後16時。

可能ならば、ここで一気に川原事務局長に全PDFを送信してしまいたいのですが、まだ準備

が全部は整いません。そして今から、出かけなければなりません。

■ ■ ■

また、新しい連載が一本始まりました。國友万裕さんの「男は痛い！」です。なかなか個性的なタイトルでしょう。お楽しみに。

編集員 (チバ アキオ)

◆かなうことがないと思っていた願いが、ひとつかなった。随分恵まれている経験だと心から、感謝をしている。そして、このために数人の人が協力をしてくれた。こんなこともあるのだから、人生はおもしろいし、有り難いし、こうした人もまわりにいてくれるので、これからもがんばらなくては！と強く感じる。

◆あるお話を思い出した。社会福祉士事務所(独立型社会福祉士事務所) たかしまや便利堂の高嶋政伸氏の話である。高嶋氏は社会福祉士の事務所として、福祉に関するいろいろなお困りごとを扱っている。様々な福祉課題に取り組まれている。時には、高齢者の方が自分の親の生まれ故郷を死ぬまでに一度見てみたいという依頼を受けて、サポート体制を組んで一緒に旅をするという援助もある。そのお話は、とても感動的で、依頼者の願いがかなうことで、生きてきた喜び、生きている喜び、生きていく喜びを新たに。そこに関わる支援者の思いは忘れられない。

◆今回、自分自身「願い」がかなうということを経験し、その体験が、こんなにも支えになったり、意欲になるんだと感じました。また、そこに協力してくれた人もいて、その思い出も共有してこれからも時は流れていきます。援助とは、こういう仕事なんだなと思いました。

◆そんな願いの多くがこの対人援助学マガジンにもあふれています。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想

danufufu@osk.3web.ne.jp

学会時にも販売しましたが印刷版対人援助学マガジン（1号～6号各1000円・全巻統一価格にしました）が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン 通巻7号

第二巻 第三号

2011年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第8号は2012年3月15日

発刊の予定です。

原稿締め切りは2月25日！

執筆の方はスケジュール表に

記入を！

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

私にとって音楽は必需品ではありません。聞いていれば楽しいですし、好きな歌や曲もたくさんあるのですが、やはり比重は大きくはないようで、音楽がなければ夜も日も明けないなんて事はまったくありません。ウォークマンを買っても、Ipod シャッフルを買っても、その内、壊れたり、使わなくなってしまって平気です。音楽そのものへの感受性が乏しいのでしょうか。

このイラストは映画「Ray レイ」についての文章の挿絵として描いたものです。レイ・チャールズはご存じの方も多い、盲目のシンガーです。[what 'd I say]のフレーズが自動的に浮かびます。

私の年代の黒人シンガーとしては、ハリー・ベラフォンテ、ルイ・アームストロング、そしてレイ・チャールズと並びます。

女性ではロバータ・フラック。大ヒット曲 *kill me softly with his song* 「やさしく歌って」(最近、ネスカフェのCM曲になった)が好きで、大阪・フェスティバルホール公演に出かけました。

どんな経緯だったのか忘れましたが、最前列中央のチケットが手に入り、張り切っていたのですが、知った曲が他になく、歌手の目前で寝てしまいました。この原稿のためにamazonで映画のDVDを検索してみると、3枚組みの「Ray」追悼記念BOXが85%OFFで800円でした。あんまりなので購入しました。いつ観られるか分かりませんが、特典映像満載だそうです。

2011/12/15 団士郎